ジャイロボールに夢見て

神田瑞樹

中学で怪物とまで呼ばれた少年は、数多の強豪からの誘いを蹴って青道に行くことを決意する。全てはたった一つ。憧れの先輩を甲子園に連れて行くために。

※ダイヤのエースにオリ主を加えた再構成作品です。そのため、この作品には原作との相違点が数多くあります（例：クリスの怪我が原作よりも若干軽い、降谷が青道にいないなど）。また、とんでも野球理論も数多く登場すると思います。それらを了解したうえで読んでください。

※自分のブログと同時掲載です。

目次

プロローグ……1
第1章　青道高校入学編……13
1話……13
2話……26
3話……38
4話……59
5話……76
6話……88
7話……102
8話……125
9話……146

10話 166
11話 186
12話 205
13話 230
14話 248
15話 269
16話 295
第2章 夏大会編 319
17話 319
18話 341
19話 354
20話 380
21話 400

22話……429
23話……446
24話……466
25話……486
エイプリルフールネタ（IF話　藤原貴子編）……504
26話……519
27話……549
28話……571
29話……597
30話……615
31話……636
32話……656
33話……677

34話……703
最終話……723
主要キャラの簡易プロフィール……744

プロローグ

とんでも野球理論やとんでも設定がこれからどんどん出てくるけど、許してね。

I

8月某日。東京ドーム。

連日最高気温を更新し続けるその日、ドームには数多くの観客が詰めかけていた。

夏休みの間東京ドームでは数多くのアイドルやアーティストによるライブが行われるが、彼らの目的は別にあった。

目的はグラウンドで行われる野球の試合。

元より東京ドームはとあるプロ球団のホーム球場であり、プロの試合を見ようと連日多くの人がドームへと足を運ぶ。

しかしこの日、彼らが見に来たのはプロの試合ではなかった。

アマチュア――それもまだ高校生にすら満たない少年達の試合。

第７回全日本中学公式野球選手権大会決勝戦。
それがその試合の名だった。
数多の予選を勝ち抜いてきた二つのシニアチームによる、中学最強を決める闘い。
勿論、いくら中学生で最高の試合であろうとも中学生は中学生。
完成された才能同士がぶつかり合うプロの試合に比べれば、児戯にも劣る。
しかし完成されていないからこそ、その身に秘めた原石の姿がはっきりと見えもする。
この先の磨き方次第でいかようにも変化する、荒削りの原石たち。
そんな数多の原石の中において、一際大きな輝きを放つ選手が〝二人〟いた。

Ⅱ

『……誰がこのような展開を予想したでしょうか』
ごく一部の限られた人間しか入ることのできない、グラウンドを一望できる実況用の放送室。関係者の証である腕章をスーツにまき着けた男性は、半ば呆然としな

がらもアナウンサーとしての職務を果たすために必死に言葉を紡いでいた。

『東京都丸亀シニア対なんば南海パークスシニアによる全日本中学硬式野球選手権決勝。くしくもチームを支える絶対的エースと４番を有する両チームの戦い。誰もが接戦を予想していました』

そこで言葉を区切ると、アナウンサーは手元のモニターへと目を落とす。

そこに映っているのは、この試合の立役者の一人。

丁寧に整備されたマウンドの上に佇む少年は、初回となんら変わらぬ表情でキャッチャーのサインを待っていた。

『６対０……南海パークス打線は結局７回２アウトまでこの山城君を捉えることは出来ず、逆に守ってはエース鶏塚君が丸亀シニア打線に捕まるという予想外の展開になりました』

そういっている間にサインの交換が終わったのか、山城と呼ばれた少年が大きく腕を振りかぶる。独特かつ豪快なフォームから放たれたボールは打ち返さんと振り下ろされたバットの上を通過し、キャッチャーミットへと収まった。

一拍の静寂。

そしてマウンドにいる少年が大きく腕を突き上げると同時、歓喜の声が爆発した。

『試合終了!!　6対0!!　第7回全日本中学公式野球選手権大会優勝チームは、東京都丸亀シニアに決まりました！』

モニターには明暗がくっきりと分かれた両チームの姿が映っていた。

片や歓喜の声をあげながら勝利の余韻を噛みしめ、片や目元を伏せながら静かに涙をこぼす。勝負である以上そこには勝者と敗者が生まれる。

中立な立場であるアナウンサーとしては片方のチームに感情移入してはいけないのだが、それでも手も足も出ずに敗れ去った少年達の胸の内を思うと心が痛んだ。

しかしそんな内心の気持ちをおくびにも出さず、アナウンサーはこれまで一緒に試合を観戦してきた解説へと話を振った。

『解説の氷野さん。この結果は氷野さんとしてもいささか予想外ではありませんでしたか？』

『そうですね～。学生野球、それも中学野球は何が起きるかわからないとは言え、ここまで点差がつくとは正直思っていませんでしたね』

『やはりそうですか。今回点差がついた要因を上げるとしたらどこになるでしょう

か？』

『それはもう、４番とエースでしょう』

そういって、解説者席に座る背広の男性は持っていたペンをくるりと回し手元のスコアブックをコンコンと叩いた。

『南海の鶏塚君と浅田君も素晴らしい将来性のある選手ではありましたが、丸亀の怪物二人にはどうしても一歩及びませんでしたね』

『丸亀シニアのエース山城君はこの試合７回無失点で被安打２、四死球０、三振14。４番に座る広橋君は３打数３安打、ＨＲ２本で打点は４、四死球２つという素晴らしい成績でしたからね』

『これでまだ中学生なんですから。いやはや恐ろしい限りです』

『山城君と広橋君は共に三年生。来年どの高校に進学するかに注目が集まっていますが……』

『二人ともどの高校に行っても即戦力間違いないでしょう。来年からの活躍に期待ですね』

『はい。ではそろそろこの辺りで失礼します』

Ⅲ

例年以上に暑かった猛暑の夏が終わりを迎え、ツクツクボーシの声さえも聞こえなくなった頃。時折吹き抜ける冷たい風が秋の訪れを強く感じさせ、少しばかり気が早い紅葉達が薄らとその葉を紅く染め上げていた。

西の彼方に沈みつつある陽の光を浴びながら、紅葉で囲まれた並木道を二人の少年が歩いていた。同じ黒い学生服に、同じロゴの入ったエナメルカバン。

それらは二人が同じ立場にあることを示していたが、その着こなし方は対照的だった。

片や学生服の第一ボタンまできっちりと閉めて服装に一片の乱れもないのに対し、片や胸元までボタンを開け学ランの裾からは白いカッターがはみ出している。

堅物とぐうたら。

学校ではそのように称される二人の性格を服装が如実に表していた。

そしてそんな堅物男、広橋大地は隣を歩くぐうたらへと声をかけた。

「それで。やはり青道に行くのか？」
疑問形でありながらも、そこには半ば確信染みたものが含まれていた。
聞かれた方もそれがわかったのだろう。
あぁと小さく頷いた。
「クリス先輩と約束したからな。それだけで理由としては十分だろ？」
そういって、山城空はパンと胸元で右拳を左手へと打ちつけた。
その乾いた音はピッチャーが投げたボールがミットに収まる時の音にも似ていて。
やれやれと、大地は首を横に振った。
「お前のクリス先輩好きは筋金入りだな。しかし本当にいいのか？　お前が高校に上がれば先輩は三年。一緒にプレイできるのは長くても半年。いや、そもそもプレイできるかどうかさえ。なんせ先輩は……」
「わかってる」
大地の言葉を遮ると、空はアスファルトに転がる小石を蹴っ飛ばした。
「クリス先輩の肩は全治十か月の重傷。完治するのは早くても来年の四月。それま

では試合どころか、本格的な練習さえできない」

「――そうだ。高校スポーツにおいて一年近い長期の離脱は事実上の戦力外通知を表す。体が動きを忘れ、試合勘はじわじわと鈍っていく。自分を置いて周囲が成長していくことに焦りは募り、段々と復帰への情熱を失っていく。そしてそれらを乗り越えてようやく怪我が治っても元の動きを取り戻すまでに更に長い時間がかかる。それくらい成長期における長期の怪我というのは致命的なハンデだ」

「……」

「仮に予定通り完治したとしても、その時にはすでに夏予選前。いくらクリス先輩と言えど、そんな時期からブランクを取り戻すなど至難。もしかしたら公式試合は愚か、練習試合でさえボールを受けてもらえずに終わるかもしれない」

それでも行くのか。

言葉にこそしなかったものの、眼鏡の奥に秘めた鋭い瞳が雄弁に語っていた。

随分と辛い言葉だが、それが親友なりの気遣いだということを空は知っていた。

だからこそ、どこまでも不器用なチームの主砲に苦笑するしかない。

「行くさ。例え試合で受けてもらえなくても、それこそ練習で受けてもらえなくも

俺はクリス先輩のいる青道高校に行く」
「……そうか」
「そんな心配すんなよ。普通なら難しくても、あのクリス先輩だぜ？　きっと当たり前の顔して怪我治してレギュラーを勝ち取るに決まってる」
「別に心配などしていないが……まぁ、確かに先輩のことを俺がとやかく言っても仕方ないか」
大地が静かに息を吐くと、空はにやりと笑い相方の肩に腕をかけた。
「そうそう。お前はいつも深く考えすぎなんだよ」
「お前は脳天気すぎるがな」
ため息と笑い声。
いつもと変わらぬ光景を演じると、空はそれでと問いかけた。
「ウチの４番さんは結局どの高校に行くんだ？　お前もそこら中から推薦きてるんだろ？　何だったら俺と一緒に青道に行かねぇか？　そしたらまた俺とお前、クリス先輩の三人で全国目指せる」
「いや、俺は南苫小牧に行く」

「南苫小牧？　そりゃまた遠い所に」
南苫小牧高校と言えば、南北海道の雄にして甲子園常連の強豪校。
昨年夏の甲子園ベスト４、今年の春の選抜準優勝という輝かしい成績を残している。
「夏前から猛烈なスカウトを受けていてな。この前見に行ってみたが、設備も整っていたし強豪だけあって練習もしっかりしていた。あそこなら入ってすぐにでも頂点を目指せる」
「まぁ、あのチームにお前のバットが加われば鬼に金棒だわな」
「それにどうやらあっちで逸材を見つけたらしくてな。もしそいつも入って来るなら面白いことになる」
いつになく、その声には力が籠っていた。
恐らく大地には既に全国を制覇するための明確なビジョンが見えているのだろう。
へ～と空は面白そうに笑う。
「じゃあ、これから俺達は敵同士ってことか」

「そういうことだな。これで脳天気なお前の相手をせずに済むのかと思うと、幾分か気が楽になる」
「三年間一緒にやってきたチームメイトに向かってすげぇ言い草」
「事実を述べたまでだ。お前のせいで俺がいったい何度監督や教師に怒られたと思っている」
じろりと鋭い眼光で睨まれると、空としてははははと笑うしかない。
そんな最後までお気楽なチームメイトの姿に、だがと大地は言葉をつづけた。
「お前がいたからこそこの三年間退屈することなく野球を続けられ、全国を制することができた。それもまた事実だ。感謝している」
「大地……」
「次会う時は甲子園だ。その時は容赦はしない」
「あぁ！　俺も打たせる気はねぇ」
互いに顔を見合わせ、ふっと笑みを浮かべる。
そしてどちらともなく拳を突き合わせた。
――――甲子園で

一つの約束を胸に抱いて。

第１章　青道高校入学編

１話

主人公の口調や性格がイマイチ固まらない……違和感だらけならごめんなさい。

Ⅰ

４月初旬。

東京にも春の風が吹き起こり、あちこちで満開の桜が新たな門出を祝福するニューシーズン。大きなバッグを抱えた山城空が青道高校に着いたのは陽が沈みかかった頃だった。

よいしょと校門から入ってすぐのとこに設置された案内板の前でバッグを下ろし、空は目的の場所を探す。

……寮は第二校舎をまっすぐ抜けて右側。グラウンドは左ね。

道は覚えたと、下ろしたバッグを左肩にぶら下げて舗装された道を案内板通りに進んでいく。綺麗かつ現代的な作りをした校舎を抜け、しばらく歩き続けると〝青心寮〟の文字がレリーフとして刻まれたアーチが空を出迎えた。

……ここが寮か。

二階建てになる鉄筋コンクリートの建物。

傍から見ている分には特に罅割れなどもなく、少し大きめのアパートという言葉が良く似合った。これから三年間余りお世話になる新たな住家を前にして空は「ふ～ん」と鼻を鳴らすと、左手首に巻いた腕時計へと目をやった。

……5時ちょっと前。確か七時までには必ず寮に入れだったか？

およそ午後7時ごろにちゃんと入寮しているかのチェックがあるから、それまでに寮の部屋に入っておくように。少し前、入学のために色々と手続きをしていた際に強く言われた言葉をぼんやりと思いだす。

7時まではおよそ二時間あまり。

まだ時間はあるなと、空は寮に背を向けた。

寮からまっすぐ伸びた道を道なりに少し歩くと、それまでアスファルトだった道

が土のそれへと変わりお目当てのものが姿を現す。
私立ならではの広大な敷地に隣接された二つのグラウンド。
その内の一つへと近づき、空は息を漏らした。
「……随分と広いな」
視界一杯に広がるのはシニアで使っていたものよりも一回りは大きいグラウンド。
ネットに張り付けられた札を見れば、青道高校野球部Ａグラウンドと書かれていた。
……流石は名門。広い上にちゃんと整備も行き届いている。
巨大なグラウンド看板の下からだと、丁寧に時間をかけて整備されたグラウンドの様子が良く見えた。ライトからレフト、バックスクリーンのある外野から内野に至るまでぐるりと見回し最後にマウンドを見つめる。
一目見ただけでもわかるぐらい、投げやすそうなマウンドだった。
早くあそこで――――
「投げたいか？」

「っつ！」

内心を見抜かれたことにも突然の背後からの声にも驚いたが、それ以上に空が驚いたのはそれが〝知っている〟声であったから。

「荷物を置く前にグラウンドの確認か……まったく、中学から変わらないなお前は」

昔となんら変わらぬ穏やかな声。

――――この学校で会うことはわかっていた。

――――そのために空は青道を選んだのだから。

――――しかしそれでも、これほど早くとは思っていなかった。

予想外の事態。

しかし嬉しいことに違いはなかった。

ゆっくりと振り向くと、そこには思った通りの人がいた。

「クリス……先輩」

「待っていたぞ。山城」

滝川・クリス・優。
白いユニフォームに身を包んだ空の憧れが、そこにいた。

Ⅱ

話したいことは色々あった。
クリス先輩の肩の調子、大地が北海道に行ったこと、現在習得中の球種。
どれもこれも、クリスと会ったら話そうと空が思っていたことだ。
しかしいざこうして対峙してみると、空は言葉に詰まった。
話したいことは山ほどあるのに、言葉にならない。
そんなもどかしい気持ちに葛藤していると、柔らかくクリスが頬を緩めた。
「山城」
「えっ？　はい！」
「グラブとユニフォーム、それにスパイクは持っているな？」
言われて、空は無意識にぶら下げたバッグを見た。
確認するまでもなく、そこには今朝方詰め込んだ野球道具一式が入っている筈

だった。
「ありますけど……」
「なら着替えてこい」
「えっ？」
「言葉よりも、お前にはこっちの方がわかりやすいだろ？」
そういって、クリスは左手にはめたキャッチャーミットと逆の手で持ったボールを空に見せた。空の顔が子供の様に輝く。
「うっす！」
気合と共に、空はクリスに教えられた更衣室へと駆け込む。
そして高速で着替え終えた空を出迎えたクリスは、空を連れて歩き出した。
向かったのは、先程まで空が見ていたAグラウンドの中へと通じる金属の扉。
「ここって……」
「入るぞ」
甲高い独特の金属音を上げて開いた扉をクリスがくぐると、空もそれに続いた。
初めて踏み締める高校のグラウンドの土の感触を確かめながらも、空は一抹の不

安を覚えていた。

「……グラウンドに入って大丈夫なんですか？」

「あぁ。問題ない」

「ならいいんですけど……」

「それより急いで体を暖めるぞ。まだ幾分かあるとは言え、ぐずぐずしていては陽が完全に落ちる」

「はいっ！」

空の胸の中に浮かんだ違和感は、クリスの言葉でまた深く沈んだ。

軽いランニングに柔軟、キャッチボールをある程度の時間をかけて行う。

およそ二年ぶりとなるクリスとのキャッチボール。

胸元に構えたグラブにしっかりと力のあるボールが返ってくるのがこの上なく嬉しくて、空は素直に笑みを零した。

「クリス先輩。大分肩良くなったみたいですね」

「あぁ。順調に回復している。まだ完全にとはいかないが、それでもこうしてキャッチボールぐらいは問題ない」

「……夏までには間に合いそうですか？」
「間に合わせるさ。約束だからな」
そんな会話をする頃には、空の肩はだいぶあったまっていた。
それを見て取ったのだろう。
クリスはキャッチボールを切り上げると、用具倉庫から引っ張り出したプロテクターを手早く身に着けてホームベースへと向かった。
「よし。山城、マウンドに上がれ」
「えっ？　投げるって、マウンドでいいんですか？」
「あぁ。許可は得ている」
……許可？
クリスの言葉に空は再度違和感を覚えるも、すぐにそれを捨て去る。
久方ぶりにクリス先輩にボールを受けてもらえるのだから、今はそれ以上余計なことを考える必要はない。
そのような思いで、空はゆっくりとマウンドに上がりスパイクの爪先で土の感触を確かめる。

……ドームよりちょっと硬いけど、思った通り悪くない。
これなら何ら問題ないと、空は視線を足元からホームへと移す。
ホームベースの後方、どっしりと腰を下ろしキャッチャーミットを構えるマスクを被ったクリスの姿がそこにはあった。
懐かしい、二年前の記憶が空の脳裏を過っていく。
「……はっ」
駄目だとわかっていても、空は自然に湧き出てくる笑みを抑えることが出来なかった。
これは試合ではない。
マウンドに立っているとは言え、あくまでも打者のいないただの投げ込み。
ブルペンピッチングと何ら変わらない。
それでもクリス先輩が自分の球をまた受けているという事実が、どうしようもなく嬉しかった。
……この人の前で無様な投球は出来ない。
大きく腕を振りかぶり、それに連動させて左足を高く上げる。

中学時代、クリスの指導によって身に着けた投球フォーム。
何度となく投げ込み、空想でしかなかった理論を現実と化した魔球を生み出す源泉。
練り上げられた腰（下半身）の回転が腕（上半身）の回転を生み出し、極限まで高まった二つの回転が単なる四シームを魔球へと変貌させる！

ゴウッ！

右腕から放たれた白球が唸りを上げてキャッチャーミットに突き刺さり、乾いた音が広いグラウンドに響きわたる。
キャッチャーマスクの下で、クリスの顔が緩んだのがマウンドからでもわかった。
「ナイスボールだ」
投げ返されたボールを受け取る。
そして最早隠そうともせず、空は目を爛々と輝かせ口元を大きく歪めた。
「どんどんいきますよ？」

「あぁ。投げ込んで来い」

言われなくてもと、空は次々とボールを投げ込んでいく。

右打者のインロー、アウトロー、インハイ、アウトハイ。

クリスが構えた場所に勢いのある〝伸びた〟球が次々とミットに突き刺さる。

シニア時代、中学二年から卒業までの間バッテリーを組み空の球筋を見慣れた筈の後輩でさえ、油断すれば取り損ねる球を悠々とキャッチするクリスの姿に空は笑みをさらに深め、ボールを投げるペースを上げていく。

それはまるで長年欲しかったおもちゃを手に入れた子供のよう。

およそ三十球を超えた辺りでストレート（４シーム）以外の球種も混ざり始め、そのピッチングはより幅広く実践的なものへと変貌していく。

そして丁度八十球目。

鋭く変化したボールがアウトロー（右打者にとっての）に突き刺さると、クリスはマスクを外して立ち上がった。

「……今日はこの辺りにしておこう」

「えっ。まだまだ投げれますよ？」

「もうじき日が暮れる。それに七時には入寮チェックがあるだろ？」
「あっ」
忘れていたとばかりに、空は間抜けに口を開けた。
やはり忘れていたかとクリスが呆れた顔で指摘すれば、空は困ったように笑った。
「ふぅ。ダウンしてあがるぞ」
「……はい」
アップの時とは逆にキャッチボール、柔軟、ランニングを行った後、二人は来た時同様鉄の扉をくぐりグラウンドを後にする。
グラウンド看板の下に置いておいたバッグを背負った空に、クリスが声をかけた。
「山城。お前は先に戻っていろ」
「あれ？　一緒に寮に行かないんですか？」
「……あぁ。この後少し用事がある」
部屋の場所はわかるな、部屋に戻ったらアイシングを忘れるな、荷物は今晩の内に片づけておけなどと、まるで子供に言い聞かせる母親のような口ぶりに、「わかっ

てますよ」と空は口を尖らせて青心寮へと歩き始めた。

2話

口調が難しい……

I

……行ったか。

遠ざかっていく後輩の後ろ姿を見送り、クリスはミットを外した左手に目を落とす。

未だ手の平に残る熱い熱。

それを逃がさないとばかりに、ぎゅっと拳を握りしめた。

……成長したな、山城。

最後に空のボールを受けたのは一年前、本格的に受けたとなるとクリスが未だシニアに在籍していた頃にまで遡る。

クリスがシニアに在籍していた頃とは比べ物にならないほど安定し、完成された

フォーム。そしてそこから生み出される球の球威と伸び、制球力が二年という時の流れを実感させた。

……俺が教えられることも余り多くないかもしれんな。

かつての雛鳥はこの二年間で大きく成長し、既に自分の力で大空に飛び立とうとしている。クリスにとってはそれが嬉しくもあり、またどこか寂しくもある。

大空を自由に飛び回るのもそう遠くない。

そのことを確信しつつも、だがせめてそれまではとクリスもまた歩き出す。

ただし向かう先は寮ではなく、バックネット裏。

そこに設置された簡素なプレハブ小屋の取っ手に手をかけ、ゆっくりと扉を開く。

入った室内は薄暗く、天井に設置された三本の蛍光灯はその役目を果たしていなかった。沈みかけた夕日の紅い光だけが室内に差しこむ中に、その人はいた。

「……あれが山城空か」

暗い室内の中でもサングラスを付けた強面の男性――青道高校野球部監督――片岡鉄心がプレハブ小屋の窓から見えるマウンドを見つめながら、声だけをクリスに投げかけた。はいとクリスは返事を返し、鉄心と同じく先程まで空のいたマウ

ンドへと視線を注いだ。
「あいつが俺の〝希望〟です」
「希望……か。ボールを受けてどう思った？」
「球速、コントロール、球威……それら全てが投手として非常に高いレベルで纏まっています。克服するべき課題はありますが、それでもボールの特異性を考えればあいつを打てる打者は全国でもそうはいないかと」
「お前がそれほどの評価を下すか……」
「はい。少なくとも一度や二度の打席で攻略できるような球ではありません」
確信を持ったクリスの言葉に鉄心は何も言わなかった。
二分ほどの沈黙。
そしてクリスがプレハブに入ってから初めて、鉄心はマウンドから視線を外しクリスへと向き直った。気配でそれを察し、クリスもまた鉄心へと体を向けた。
「……それはつまり、夏の大会で使えるということか？」
サングラスの奥に潜む鋭い眼光がきらりと光った。
堅気とは思えない、普通ならばまず萎縮してしまうであろう圧力を受けてもクリ

スの顔色には小揺らぎほどの変化もなかった。
「はい。間違いなく」
「そうか……ご苦労だったなクリス。もう戻っていい」
そう言って、ぐるりと片岡が再びマウンドへと椅子の方向を戻す。
それは「もう戻っていい」ということのサインであったが、いつまで経ってもクリスは動かなかった。
「どうした？　何かあるのか？」
「……一つ聞いてもいいでしょうか？」
「何だ？」
「どうしてあいつを投げさせたんですか？」
そう。今回、本来使用禁止になっている筈のＡグラウンドを開放し、整備されたマウンドで投げさせるよう指示を出したのは誰でもない、片岡鉄心その人だった。

Ⅱ

およそ一時間半ほど前。

日が段々と落ち始め空が薄らと暗がりを帯び始めたころ。
二階へと続く階段の傍で、自販機で買ったコーヒー片手にクリスは一人静かに物思いにふけっていた。
頭に浮かぶのは自身の肩の状態。
去年の夏前、無理が祟って右肩を壊してから十か月余り。
一時期は選手生命すらも危ぶまれた大怪我は順調な回復を見せ、今や完治まで後一歩という所にまで迫っていた。
……完治まで後三週間弱。四月の終わりには治る。問題はその後か……。
肩を壊していた間もトレーニングを続けていたとはいえ、それはあくまでも怪我の再発を防ぐ筋力トレーニングが中心。インナーマッスルと体幹を鍛え、強靭な筋肉の鎧を身に纏うことで怪我のしにくい肉体を構築する。
父親の指導の下行われたそれは見事実を結び、クリスは結果として一年前よりも強靭な肉体を手に入れることができた。
しかしその一方で、クリスはこの十か月ボールを用いた本格的な練習は殆どしてこなかった。勿論そのことが怪我の早期回復に繋がっているのだから、その判断は

決して間違いではない。

だがやはり、どうしても不安という悪魔が少年の心に付きまとう。

……怪我が治ってから夏の大会まではおよそ二か月。

例年通りであれば、夏大会に参加する（背番号を貰う）二十人が正式に決定するのは大会の一月ほど前。

つまりは怪我が治ってから一月の間にブランクを取り戻して結果を出し、監督に認められなければ高校生活最後となる夏の大会に出ることは叶わないということになる。

クリスの中にあるキャッチャーとしての合理的な思考が不可能だと囁く。

そう普通ならば不可能。

実際、これまで何度も諦めかけた時はあった。

けれど。

――――「先輩は俺の憧れなんです」

――――「絶対中学でＮＯ１のピッチャーになって青道に入ります。そして俺が

クリス先輩を甲子園に連れて行きます」

――――「だから諦めないでください。俺から憧れを奪わないでください!!」

そんな時、決まって一年前の公園での記憶が蘇る。

絶望し諦めかけていた自分を立ち直らせた、後輩との約束。

……不安がっている暇はないか。

クリスはふっと小さく口元に笑みを浮かべ、冷めたコーヒーを飲み干す。

空になった空き缶をゴミ箱に放り入れ、そろそろ自室に戻ろうかと階段の手すりに手を伸ばした時。

……あれは。

青心寮の入り口にそびえるアーチの奥。

重そうな荷物を持ったままグラウンドへと続く道を歩いていく一つの人影がクリスの目に入った。遠巻きながらも見覚えのあるシルエット。

噂をすれば影かなどと思いつつ、クリスはおよそ一年ぶりとなる後輩――――山城空の姿に目を細めた。

……荷物も置かずにグラウンドを見に行くか。相変わらずだな。
中学の時と変わらぬ行動がクリスに懐かしさの念を抱かせた。
だが懐かしがってばかりもいられない。
普段ならばともかく、今日は新たに入寮する新入生を歓迎する日。
荷物の整理や同室となる先輩達と交流を深める意味でも、出来る限り部屋にいた方が何かと都合がいい。
呼び戻しに行くかと、クリスが足を踏み出しかけた時だった。
「今グラウンドに向かうやつが見えたが、誰だ？」
「監督……」
カンカンと音を鳴らしながら、青道高校野球部監督片岡鉄心が金属の階段を下りてくる。
既に練習は終わっているため、その恰好はユニフォームではなく黒のポロシャツに灰色のパンツというラフな格好。
薄暗くなっているにもかかわらず、サングラスをかけたままの目がクリスへと向いた。

「今日は新入生歓迎のために寮にいろと2、3年には通達した筈だが？」
「……新入生です。今から連れ戻しに行こうと思っていました」
「ふん。今日来たばかりのやつが寮に入る前にグラウンドに向かうか」
「これから練習するグラウンドの様子を早く見たかったのでしょう。あいつ――山城は昔からそうでした」
「山城？　例のお前の後輩か？」
「はい」
クリスの返事に片岡はぴくりと眉を動かし、考える様に右手を髭の生えた顎へとあてる。
これは山城を迎えに行った方がいいのかそれとも監督の言葉を待つべきなのか。
クリスが判断しかねていると、片岡の目がクリスの右肩へと向いた。
「……肩の調子はどうだ？」
「肩……ですか？　順調に回復しています。医師からももう九割方治っていると」
「……それはつまり、キャッチボールぐらいなら問題ないということか？」
「はい。遠投はともかく、近い距離であれば」

しかしなぜ今そんなことを聞くのだろう。
純粋な疑問をクリスが浮かべていると、考えが纏まったのか片岡が「よし」と呟く。
「クリス。今すぐ練習着に着替え、ミットを持って山城を追え」
「練習着にミットですか？」
「そうだ。Ａグラウンドの使用を許可する。山城をマウンドに上げてボールを受けろ」
「マウンドに……」
「噂される実力を見ておきたい。頼めるな？」
監督の言葉を断れるはずもなければまた断る理由もなかった。
こくりと頷き、クリスは準備を整えるために自室へと急いだ。
一つの疑問を胸に抱きながら。

Ⅲ

「いくら中学で実績があるとはいえ、まだ正式に入部も終わっていない新入生一人

のためにわざわざグラウンドを開放するとは……」
「意外か？」
「……正直に言えば」
片岡鉄心の育成方針は良くも悪くも全体主義。
部員一人一人を大事にし真摯に向き合うが、それは言い換えれば誰も特別扱いしないということ。勿論、実力のある選手に対しては学年を問わずチャンスを与え、結果を出せば当然それに見合うだけの待遇が与えられる。
だがまだ練習にも参加していない新入生に対してここまで露骨にというのをクリスは見たことがなかった。
「丹波が故障中の今、戦力なり得る投手の確認は急務だ。正式な入部がまだであろうと、使えそうならば早急に確認しておく必要がある」
確かに現在青道のエースたる丹波光一郎は肩を痛めてチームから離脱中。
幸い大きな怪我ではないために復帰は早いが、夏の本番までにどこまで調子を上げれるかは不明瞭。
また二番手候補筆頭の川上に関しても、ある程度安定こそしているもののエース

としてチームを引っ張っていけるかと言われれば正直疑問符が付く。
チームの投手事情を考えれば、中学ＮＯ１投手と称された空を片岡が早く見たいと思うのは至極妥当。
しかしそれでもどこか違和感が残るクリスに、片岡は「それにだ」と言葉を続けた。
「なによりもクリス。お前が見出した投手の球をこの目で見ておきたかった」
「っつ！」
驚きで目を見張るクリスに、片岡は口元に小さな弧を浮かべた。
「昨年。肩を壊したお前を立ち直らせた小僧の球だ。それを早く見ておきたいと思うのはおかしいか？」
「……いいえ。何もおかしくありません」
「そうか」
クリスは無言で一礼し、プレハブ小屋を後にした。
心の中の違和感は既に消えていた。

3話

I

4月4日。青道高校野球部に入部する新入生にとって練習初日となるこの日。まだ陽も登りきらない時刻にA グラウンドの中央に集められた新入生は二列に並ばされ、監督と上級生を前にして自己紹介を行っていた。

名前、出身、希望ポジション、意気込み。

一人三十秒ほどの短い時間の中で、新入生達は緊張に顔を強張らせながらも精一杯声を張り上げる。

「宮川シニア出身。大島広！　守備には自信があります!!　頑張りますのでよろしくお願いします！」

前列から聞こえて来るそんな活力に満ちた声を聴きながら、同じ新入生である山城空は後列の端で一人溢れそうになる欠伸をかみ殺していた。

……ねむ。

もともと余り朝が強くない空にとって、朝七時前からの練習など苦痛以外の何物

でもなかった。もしも同室の先輩達が起こしてくれなければ、今でも空は自室のベッドで夢の中にいただろう。

……もしかしてこれから毎日この時間から？

だとしたらまさしく拷問。

待ち構えているであろう苦痛の日々にうげっと顔を顰めていると、前列の自己紹介が終わった。

「よし、では後列。前列と同じく右端から」

強面の監督が低い声でそういうと、上級生の視線が空へと集まった。

あぁきたかと空が口を開きかけたその時だった。

「あ～!!　練習に遅刻したのに列に紛れ込もうとしているやつがいるぞ!!」

グラウンドの端から大きな声が響き、空も含めた全員の視線が声の聞こえてきた用具倉庫へと向く。用具倉庫から新入生が並ぶグラウンド中央までの丁度中間付近。

数多の視線を浴びて妙な体勢で固まる少年の姿がそこにはあった。
……何だあれ？
どうやらその少年は空達と同じ一年らしく、ぎぎぎと擬音が付きそうなほど固い動作で少年の顔が監督へと向けられる。
ぴくりと監督の額に青筋が浮かび上がるのが空には見えた。
「……練習初日から遅刻の上、ばれない様に忍び込もうとするとはいい度胸だな小僧。練習が終わるまで走っとれぇい！」
「ひぃぃぃい！　全てが裏目に！」
「それからこいつと同室の上級生二人！　そしてどさくさに紛れて上級生の列に並んでいる大バカ者！　お前らもだ」
上級生の中から悲鳴が飛ぶ。
先輩、後輩合わせた計四人がぶつくさと言いあいながら走っていくのを誰もが唖然とて見送っていると、パンと監督が手を叩き視線を集めた。
「馬鹿共は放っておいて続けるぞ……後列右端から」
その一言で新入生は再度前を向いて列を正し、それに向かい合う上級生は視線を

後列の端へと向けた。
　Ｔａｋｅ2と内心で空は呟き、今度こそ口を開いた。
「東京都丸亀シニア出身。山城空。希望ポジションはピッチャー。クリス先輩を甲子園に連れて行くために青道に来ました」
　よろしくお願いしますと軽く頭を下げると、ざわりと空気が震えた。

『山城……あいつが噂の中学ＮＯ１投手か』
『あぁ、魔球を投げるっていう中学生だろ？　少し前に雑誌で特集組まれていたのを見たことあるぜ』
『クリス先輩って……あのクリス先輩か？』
『いくらシニアで活躍したからって高校でも通用するのか？』
『丸亀シニアって確かクリスと同じシニアチームだったよな？』
『甲子園に連れて行くか……随分と大きく出たな』
『哲、そのオーラしまえ!!』

ざわざわと様々な声が上級生を中心にして飛び交い、新入生も言葉にこそしないものの気になっていますと言わんばかりにちらちらと横目で空を伺う。
数多の視線が全身に突き刺さるが、空は言うことは言ったとばかりに澄まし顔。
そして予期せぬ形で名前を出されたクリスは、上級生の列の後方で静かに溜息を吐いた。
まぁ、そんなこんなで、空の青道高校での野球人生が幕を開けた。

Ⅱ

新入生が加わり総勢百人近いメンバーで新たなスタートを切った青道高校野球部。
多少のイレギュラーこそあったものの初日の練習が概ねつつがなく終わり、午後から行われた春の都大会三回戦も順当に勝ち上がったその日の夜。
青心寮二階に設けられたスタッフルームには、野球部の首脳陣二人の姿があった。
「これが本日行った新入生の能力テストの結果です」

スーツ越しでもわかるグラマラスな肢体に飾り気のない切れ長の眼鏡。
凛とした端正な顔立ちと合わさって、仕事ができるキャリアウーマンにも見える女性――青道高校野球部副部長――高島礼は、机の上におよそ三〇枚程からなる紙束を置いた。ああと片岡はその紙束を手に取ると、ぱらぱらと上から順に目を通していく。
「……やはり、新入生の中では山城が飛びぬけているか」
「はい。新入生で唯一の遠投１１０Ｍ（仮）を初めとして、持久力、守備などほぼ全ての項目において高い成績を残しています。特にピッチングテストでは新入生の歴代記録を大幅に更新し、すでに上級生の間でも噂になっています」
「ふむ」
「他にも能力テストで良好な記録を残した子が何人か……それにテストを受けられませんでしたが、面白い子も」
「……あの小僧か」
「はい、沢村君です」
沢村栄純。高島礼の強い推薦によってこの青道にやってきた新入生。

遅刻のため（またそれを誤魔化そうとしたため）に監督の怒りを買い、その後の対応の不味さから能力テストに参加させてもらえず、更には練習参加と投手生命を天秤にかけた遠投に失敗したため投手を諦めるよう監督から申し付けられた空とはまた別の意味で有名なルーキー。

「正直、まだ実力が未知数なこの時期に彼に投手を諦めさせるのは尚早かと。それに監督には黙っていたのですが、あの東君を三振にとった中学生というのは……」

高島礼がそこまで言いかけた所で、片岡はふんと鼻を鳴らした。

「……あんなクセのある球を90メートル近くまで投げることは普通できん。恐らくは誰に習ったわけでもない独自の投げ方と、強烈なスピンをボールにかけることができる指先の感覚があってのものだろう」

「えっ？」

「極めれば投手として使い物になるかもしれんが約束は約束。今はまだ練習に投手として参加させることは出来ん。しばらくは日が暮れるまでみっちりと走らせておく」

「わかりました」

……今はまだ……か。

片岡の言葉の意味を理解し、高島は小さく笑みを浮かべた。

「一年は山城も含め暫くは例年通り体力作りを中心としたメニューで行う。そして四月後半に一度一年と二軍で試合を行うつもりだ」

「四月の後半に試合ですか？」

通常、青道における新入生は夏までの間は走り込みを中心とした基礎的なトレーニングを行い、徹底的に体を鍛え上げる。これは夏に大会が迫った上級生を集中的に鍛える為コーチ陣が新入生の練習を見ることが難しいというのも理由の一つだが、もっとも大きな理由としては入部したばかりの新入生では練習についていけないというものがある。

中学よりも密度、練習量が格段に多い高校の練習に下手に新入生を混ぜれば怪我のもとにもなりかねない。そのために新入生は、余程有望だとみなされた極一部を除き夏の大会が終わるまでは試合は愚か、まともにボールに触れることさえできないのが普通。

四月の終わりという早い時期に一年が二軍とは言え上級生相手に試合を行うな

ど、異例極まりない。少なくとも、高島礼が副部長という役職に就いてからはなかったことだ。

そしてその異例を行う理由。

「……戦力の見極めでしょうか？」

「あぁ。結城、伊佐敷、小湊を初めとしたウチのレギュラー陣が全国でも通用するのは間違いない。だが西東京は全国でも屈指の激戦区。それだけで勝ち上がれるほど甘いものではない」

高島の脳裏に浮かんだのは、今年の選抜ベスト八の市大三高と昨年青道を破り甲子園に出場した稲城実業。両校とも毎年青道と甲子園を争う強豪校であり、今年も甲子園を目指す上において決して避けて通れない相手だ。

「甲子園に行くために必要なのはレギュラー、控えを合わせたチームとしての総合力。そのためにも学年や紙面のデータにとらわれず、実践の中でどれだけ使える者がいるかを今の内に見ておきたい」

「わかりました。スケジュールを調整しておきます」

「たのむ」

高島が頷くと、片岡は椅子の向きを背後の窓へと向けた。
日の当たりが悪い北側からでも陽の光が入るよう設計された大きなガラス窓の向こうには、爛々と夜空に輝く少し欠けた月があった。
「出来ることは何でもするつもりだ。今年こそ、俺はあいつらを甲子園に連れて行ってやりたい……」
「片岡監督……」
過去六年間甲子園に出場できなかった責任を感じているのだろう。
呟くような片岡の言葉が、静かに室内に溶けていった。

Ⅲ

四月中旬。青道高校の入学式からおよそ一週間。
新入生にとってはまだまだ分からないことだらけながらも、何とか無事に乗り切って迎えた最初の土曜日。青道高校野球部はその日大事な試合を迎えていた。
春の都大会準々決勝。

夏の本戦や春の選抜がかかる秋大会と比べて一般的に重要度が劣るとされる春の大会。

されど、本日戦うことになる青道の相手は昨年の秋大会で苦汁をのまされた市大三高。

借りは返すとばかりに気合に満ちた一軍の選手、そしていずれは自分もあの中にと一軍に憧れる部員達が揃って球場に向かい、使用者のいない青道高校野球部Bグラウンドはしばしの沈黙に包まれていた。

そしてそんな無人となったグラウンドに一人佇み、空はたらりと冷や汗を流した。

「……まずった」

どうしたもんかと、寝癖が付いたままの頭をかいてみるが妙案は浮かばない。

はぁと一度息を吐き、もう一度グラウンドを再確認。

相変わらず広がっているのは、誰もいない練習場。

……置いていかれた。

部員を乗せて球場へと向かうマイクロバスは、空が試合を見に行く前の腹ごなしにと食堂に寄っていた間に出てしまっていた。

完全なる自業自得。
とは言え一応試合の見学は義務ではなく、個人の希望によるもの。
別に見に行かなかったとて罰を受けることはない。
が、
……クリス先輩に怒られる。
同じ地区の強豪校だけにしっかりと見ておけと、昨夜釘を刺されていた。
それがこの体たらくでは一体何を言われるかわかったものではない。
今晩待ち受けているであろう小言の嵐に空が身を震わせていると、

――――はっはっは～!!　自ら投げて自ら捕～る!!

……何だ？
隣のＡグラウンドから聞こえて来る叫び声。
自分の他にもまだ誰かいたのかと、空は声のする隣のグラウンドへと向かう。
……何だあれ？

グラウンドに続く扉をくぐった空の目に入ったのは、自分でボールを高く投げ上げそれをキャッチしている少年の姿。

一人キャッチボールとでも呼べばいいのだろうか？

ハハハと半ば壊れた様に笑いながらボールを空高く投げ上げる少年の顔に空は見覚えがあった。

……たしか沢村……だったよな？

練習初日に遅刻、監督にたてついて行った遠投試験ではカーブを放るなど話題に事欠かない新入生。練習中常にグラウンドを走らされていることから、同じ一年の間では『部員見習い』と揶揄されていた。

空としては変わったバカがいるな～程度にしか思っていなかったのだが、用具倉庫の前に置かれた二つのタイヤとグラウンドに何重にも刻まれたその跡を見る限り少し認識を改める必要がありそうだった。

……試合も見ずに残って練習か。単なる馬鹿かと思ってたけど……

――おらぁ！　って、遠くに投げ過ぎた!?

……やっぱり単なる馬鹿かも。
ただ、そんな馬鹿が空は嫌いじゃなかった。
口元に弧を描き、空は一人延々と一人キャッチボールを続ける沢村へと近づいた。
「なぁ。それやってて楽しいか？」
「ぬっ!?」
声をかけられて初めて空の存在に気が付いたのか、沢村は上空から落ちてきたボールをダイビングキャッチした体勢のまま顔だけを空へと向けた。
そして見られていたとわかると、顔を紅く染め上げた。
「……見てた。今の？」
「うん、まぁ」
「ぬぉおおおおおお!!」
自分でも奇妙なことをしているという自覚はあったのだろう。
沢村は両手で頭を押さえ、ごろごろとグラウンドを転がった。
それはそれで見ている分には面白かったが、空の本題は別にある。

なぁと空は悶えながら転がる沢村へと声をかけた。
「俺、山城空っていうんだけどよかったら俺とキャッチボールしねぇ？」

Ⅳ

「ははは。やっぱ人とキャッチボールをするのは楽しいな！」
気持ちぃ～と顔いっぱいに喜色の色を浮かべ、沢村栄純はボールを投げた。
あの後、空の提案にすぐさま沢村が満面の笑みで飛び付いたため二人はグラウンドの端を使ってキャッチボールを行っていた。
沢村が投げたボールが僅かばかりの放物線を描いて空のグローブの先端に収まる。
空はふむと言葉を漏らしつつボールを投げ返す。
そして「おりゃあ！」と沢村から再び投げられたボールは、またしても捕球の正位置であるグローブポケットから少しずれた位置へと収まった。
……遠投見た時から変わってるなとは思ってたけど……なるほど。こりゃ捕り辛

いわ。

沢村が投げる球はまるで変化球の様にぐにゃりと曲がり、正位置での捕球を難しくさせていた。投げた球が無意識の内にシュート回転するというのは割かしよくある話だが、沢村の場合は投げた球が不規則な方向にぐにゃぐにゃと曲がるため非常に捕り辛い。

いわゆる癖球。

……これが投手として推薦を受けた理由か。

本来野球に置いて相手が取り辛い球というのは余り歓迎されるものではない。

もしも野手がこんなボールを投げていたら、すぐにでも矯正されるだろう。

だが投手の場合、その事情は少々異なる。

捕り辛い球というのは、言い換えれば〝打ち辛い〟球と同義でもあるからだ。

……不規則にボールの軌道が変わるムービングボーラー。

ストレートと言えば動く二シームを指すメジャーのピッチャーに多いが、癖のない球を良しとする日本では中々お目にかかることができない。

特にサウスポーのムービング使いとなれば、その希少性は更に上がる。

「……成長したら面白いピッチャーになるかもな」
「うん？　何か言ったか？」
「んにゃ。案外すごい奴かもなって思っただけだ」
「え、そうか？」
あまり褒められ慣れていないのか、それとも調子に乗りやすいのか。
照れるな～と頭を掻きながら、沢村はハハハと笑った。
そしてしばらく二人でキャッチボールを続けていると、段々と肩が温まって来たのか沢村が利き手となる左腕を大きく回した。
「しかしボール握ったのが久し振りだから肩が軽い軽い！　今ならあのフェンスにまで届きそうな気がするぜっ！」
「まともに真っ直ぐ投げられないのにか？」
「うっ。あの時は少し調子が悪かっただけで……今なら、そう今ならきっとできる！」
「へー」
「なっ!?　その顔は信じてねぇな！」

見てろと、沢村はキャッチボールを中断しレフト方向へと体を向けた。
二人が今いる一塁側ベンチ前からレフトフェンスまではおよそ９０ｍ弱。
多少差異はあろうが、１週間前に沢村が挑戦した距離と同じ。
大して期待の籠ってない同級生の視線が見守る中、助走を取った沢村は勢いよく前方へと走り出した。
「おおおぉおらぁあああああ!!」
雄叫びと共に上空へと放たれたボールがぐんぐんと伸び上り、フェンスに向かって飛んでいく。
「今度こそいけぇ～!!」
沢村の気合に後押しされたのか、ボールは勢いそのままに突き進んでいく。
今度こそ行ったと、沢村は思った。
そして「見たか！」と後ろにいる空に振り返ろうとしたところで、突如としてボールが左方向へと曲がった。
「んなっ!?」
一週間前とは逆の方向。

フェンスから二〇mほど手前で曲がり始めたボールは徐々にそのカーブを大きくし、最後にはフェンスに届くことなくレフトライン際に突き刺さった。

バウンドを繰り返しながらボールは勢いを殺し転々とファールゾーンに転がっていく。

目を点にしながら呆然とそれを見ている沢村に、空が「そらそうだ」と肩をすくめた。

「技術的な指導を受けたわけじゃねぇんだ。ちょっと走り込みをしたぐらいで、一週間前にできなかったことが急にできるわけないだろうに」

「うぐっ!?」

空の正論過ぎる言葉が突き刺さり、がくりと膝をついて落ち込む沢村。

「やっぱ俺って真っ直ぐな球すら投げれねぇのか」と嘆いているのを耳に入れながら、空はさっきのボールの軌道を思い返していた。

……ここ最近ボールに触れてなかった筈なのに、一週間前よりもフェンスまでの距離が近かった。

恐らくは毎日走り込みを行うことで自然と下半身の使い方を覚え、投球フォーム

が多少なりとも安定したためだろう。もっともまだまだ不安定であることに違いはなく、これからの努力が要必須だが。

「うん？」

目の前で落ち込まれるのも何か面倒くさいのでとりあえず沢村を起こそうとした所、沢村のズボンの後ろポケットからボールが零れ落ちた。

恐らくは暴投した時などのために備えて予備を練習着に入れておいたのだろう。

空は地面に転がったボールを拾い上げると、先程沢村がボールを投げたレフト方向に視線を向けた。

「ふむ」

そして体をレフトへと向けると、その場でゆっくりと両腕を振りかぶり左足を引く。

空のモーションに気付いた沢村は、えっと疑問の声を上げた。

「ちょっ、フェンスまで投げるなら助走がなきゃ――――」

「せーの！」

無理だぞと紡ぐよりも早く、右腕が振り下ろされた。

感想、評価をいただけると励みになります。

4話

感想でヒロインについてのコメントがありましたが、基本的にはこの作品に恋愛要素を入れる気はありません（もしかしら書いている内に気が変わったり、短編で書くいたりする可能性はありますが）。なので、期待している人はごめんなさい。

Ⅰ

四月二十日。市大戦を終えてからおよそ一週間の時が過ぎた。

絶対的エースの不在という問題点を晒しつつも、強力な打線により乱打戦を制し秋大会の雪辱を晴らした青道高校野球部。あともう一つ。次の準決勝を勝ち上がれば関東大会の出場が確実となるため、その練習にはいつも以上に熱が籠る。

――――センター行ったぞ!!

――――ショート、反応が遅い！　それじゃ間に合わないぞ!!

――――おらどうしたっ!?　もうそれで終わりかっ!!

グラウンドに響き渡る甲高い金属音とそれに負けないぐらいの選手達の肉声。

試合を控えた主力陣は勿論のこと、次の試合に出ることのない二軍の選手達もまたレギュラーに負けじと声をだし、何とか夏の大会では背番号を貰おうと懸命にアピールする。

いかにも強豪校らしい活気に満ち溢れた練習風景に野球部部長太田一義は頬をだらしなく緩め、「うんうん」と恰幅の良い体を揺らした。

「いや〜。毎年のことですが、今年もよく声が出ていますな〜」

「まだ春先とは言え、夏の大会まで三ヶ月を切っていますからね。選手達――特に去年後一歩の所で悔しい思いをした三年生達は今年こそという思いが強いのでしょう」

くいっと眼鏡を上げながら、冷静に選手たちの心情を分析する高島礼の言葉に太田は「確かに」と深く頷いた。

片やユニフォーム、片やスーツと異なった服装、異なった性別ながらも共に野球部のことを想う気持ちは変わらない。今年こそは甲子園にと部長・副部長コンビが思いを一つにして練習を眺めていると、太田は本来この光景を最も見るべき人物が

見当たらないことに気が付いた。
「そういえば片岡監督はどちらに？　先程から姿が見えませんが……」
「監督なら恐らく第二ブルペンかと」
「第二ブルペン？　川上と丹波が投げているのは第一では――あぁ、確か今日第二ブルペンで投げるのは……」
「はい。山城君です」
山城空。シニア野球に携わっていた者なら知らない者などいない、中学野球の二大怪物の一人。現在三年の滝川・クリス・優がかつて所属していた東京都丸亀シニアに所属し、〝打〟の怪物広橋大地と共に中学野球界に旋風を巻き起こした〝投〟の怪物。
数多の強豪からの誘いを蹴ってまで青道に入学した怪物ルーキーに期待を寄せている者は多く、まだ練習試合にすら出ていないこの時期から休日には多くのOBや記者達が山城を一目見ようと集まってくる。
「まだ入部から二週間ほどだというのにブルペンに入っての投球。それも片岡監督直々に見学とは、余程山城に期待しているんですな」

「中学で実績を残した選手ですし、また能力テストでも非常に高い記録を残しています。もしかしたら片岡監督は、夏の本戦では彼を投手陣の主軸にしようと考えられているのかもしれません」

「えぇっ!?　夏の大会にですか？　いくら何でもそれは……」

入って来たばかりのルーキーをいきなり主軸にする。

これまで、シニアで活躍していた選手が高校の壁にぶつかり挫折していった様を何度も見てきた太田にとって、高島の言うことは無茶を通り越して無謀にさえ思えた。

高島はあらと意外そうな顔をして、驚く太田を見た。

「そういえば、太田部長は実際に彼の球をご覧になったことは――」

「えっ、えぇ。噂は色々聞いていますが、中学の試合は映像も殆どないので実際には……」

「でしたら一度ご覧になってみますか？　中学ＮＯ１と謳われた彼の球を」

Ⅱ

青道高校野球部Ａグラウンドには二つのブルペンがある。
一つは三塁側ファールグラウンドに作られた第一ブルペン。
もう一つは一塁側ファールグラウンドに作られた第二ブルペン。
二つの間に設備的な優劣はないが、入り口から近い第一ブルペンで主力陣の投手が投げることが多いためＯＢや記者達は自然とそちらに集まることが多い。
しかしこの日に限っては、主力陣が投げ込みを行う第一ブルペンではなく第二ブルペンに人だかりができていた。
「いや～。土曜とはいえ、すごい人ですな～」
「はい。それだけみな山城君の投球に期待しているのでしょう」
腕組みをしながら真剣な表情で佇む歴戦のＯＢに、カメラを構えるスポーツ記者。
ネット越しながらも熱い視線を注ぐそのギャラリーの姿に山城への期待感を感じつつ、高島と太田が第二ブルペンに足を踏み入れるとそこには真剣な眼差しで山城を見つめる片岡鉄心の姿があった。
「片岡監督」

太田が呼びかけると、ちらりとサングラス越しの視線を入ってきた二人へと向けた。

いつになく力の籠った目に思わず太田が怯むと、代わりに高島が口を開いた。

「山城君はどうでしょうか？」

問いかけに片岡は答えず、無言で視線を前方へと促した。

二人が揃って片岡が促す方へと目を向けると、そこでは山城が既に左足を高く上げて投球モーションに入っていた。

数多くのシャッター音が降り注ぐ中、流麗かつ豪快なフォームからボールが放たれる。

優に１４０キロは出ているであろう剛速球。

決して大柄とは言えない山城の体格からは想像し辛いスピードボールが唸りを上げ、空気の壁を切り裂いて突き進む。

まるで浮き上がると錯覚するほどに急激に伸びるその球は、フル装備で待ち構えていたキャッチャーを嘲笑うかのようにアウトロー（右打者の）に構えていたミットの上辺を掠めて軌道を変えると、そのまま後方のネットへと突き刺さった。

おぉとギャラリーの間から感嘆の声が漏れた。

――今の何キロ出てたんだ？

――１５０は言い過ぎにしても、１４０半ばはあったんじゃないか!?

――いやいや。速さもそうだが、何よりも注目するべきはあの伸びだろ！

――あぁ、噂以上の伸びだ。

――これで捕れなかったのは三人目か。小野が捕れないとなると捕れるのは御幸か宮内だけってことになるな。

――だがこれで青道の投手事情にも希望が見えたんじゃないか？　あの速さであそこまで伸びる球を打てるバッターはそうはいないだろ。

――いやぁ。稲実の成宮との投げ合いが楽しみだ。

ざわざわと熱の帯びた言葉がネットを介した反対側で飛び交う。

あんぐりと口を大きく開けて目を見張る太田に、高島はくすりと綺麗な笑みを見せた。

「いかがです、太田部長？　山城君は今見せたストレートの他にも二つの球種を持っていますし、それらをコーナーに決めるだけの制球力もあります。スタミナについては実戦で投げてみなければわかりませんが、少なくともシニア時代は登板したほぼ全ての試合を最後まで投げ切っています」

「……いや、驚きましたなぁ。片岡監督、これは行けるんじゃないですか!?」

興奮気味に鼻息を荒げ、太田は目を輝かせた。

相変わらずのお調子者ぶりに苦笑しつつ、しかしと高島は目を細めた。

「山城君は明日の試合には使えないかもしれませんね」

「あぁ」

追い込まれた状態での力を見たいという理由から選手たちにはまだ通達していないが、明日はかねてより予定してあった一年生VS二、三年生の練習試合。

一年生の中でも即戦力として最も期待できるであろう山城が試合に使えないと言う言葉に、太田は驚きの声を上げた。

「えぇっ!?　なぜです？　これほどの球なら、ぜひとも試合で……」

「だからです、太田部長。彼の球を捕れる捕手が一年生のなかにいるとお思いです

か？」
「あっ」
そう。例えどれだけ凄いボールをピッチャーが投げようと、それを捕れるキャッチャーがいなければ試合は成り立たない。
二年生において御幸に次ぐ捕手である小野が捕れないとなれば、まだまだ未熟な一年生が捕れないのは明白。
一昨年のクリスや昨年の御幸の様な存在がいれば話は別だが、今年の一年に二人の様な天才がいない以上下手に山城を試合で投げさせれば怪我のもとにしかならないのは明白だった。
「もったいないですな……しかしそうなると山城はどうしますか？　明日の試合投手以外で出場させることも出来ますが。それでしたらやはりここはまた来週にでも試合を行い、御幸か宮内とバッテリーを組ませて実力を見た方が……」
「……御幸をブルペンに呼べ」
「御幸君をですか？」
「あぁ。それと守備についている結城、小湊（兄）、伊佐敷の三人に打席に入る準

備をさせておけ。今から山城の一軍昇格テストを行う」
「えぇっ!?」
「っつ!!」
「わざわざ来週を待つ必要はない。うちの主軸相手にどこまで出来るか……それで山城の実力を測る」
ギラリと、サングラスが怪しく光った。

Ⅲ

「――――はぁはぁはぁ」
もう何時間走っただろう。
酸素を求める息遣いは荒く、その額からは滝の様に汗が流れ落ちる。
疲労の溜まった足腰は少し気を抜けば崩れ落ちそうなほど柔く脆く、腰紐で繋がれた二つのタイヤがまるで鉛の様に重く感じられた。
入部からおよそ三週間。

Ｂグラウンドの外周を、沢村栄純は今日も今日とて一人走っていた。

……タイヤ引いて三週間。これまで何も言ってこねぇけど、あのグラサンまじで俺のこと忘れてんじゃねぇんだろうな。

――ヒヒヒ。お前この先一年間はチャンスもらえないかもなっ。

同室の先輩の言葉が頭を過る。

いかんいかんと嫌な想像をかき消すように栄純は首を振り、残った力でタイヤを引く。

そして何度目になるかわからない一塁側ベンチ前を通過しようとしたところで、どよめきと歓声が栄純の耳に飛び込んできだ。

……な、何だ？

音の方角は隣のＡグラウンド。

バットがボールを捉える金属音や守備に就く上級生達の声は走っている間よく耳にしていたが、さっきのような歓声が聞こえて来るというのは初めてのことだった。

……まさかあのグラサン、遂に誰か殺しちまったのか？

本人に知られれば激怒間違いなしのことを栄純が考えていたが、他の部員達も気になっているのだろう。ノックの手を一時休め、みな一様にAグラウンドの方へと目を向けていた。誰か確認に行くか？　そんな空気がグラウンドに流れかけた時、息を弾ませた部員が興奮した面持ちでBグラウンドに駆け込んできた。

――おい！　Aグラウンドで山城が三年のレギュラーと勝負してるぞ!?

――はっ？　どういうことだよっ!?

――何でも山城の一軍をかけた昇格試験らしいぜ。亮介、純、哲の三人を抑えられたら一軍らしい!!

――そんなの無理だろっ!?

――それが既に亮介を三振に仕留めてるんだよっ！

――まじかよっ!?

――いいからお前たちも一旦休憩にしてこっちに来いよっ！　Aグラウンドじゃあ、OBとか記者とかも集まってすげぇ盛り上がりだぞ!?

好奇心を抑えきれなかったのだろう。
それまで練習を仕切っていた三年生はいったん練習を止め、他の部員達に休憩を告げるとメッセンジャーとしてやって来た部員と一緒にＡグラウンドへと走っていく。
――山城とレギュラーの対決だってよ！
――俺らも見に行こうぜっ！
そして先の二人につられる様に、他の部員達も続々とＡグラウンドへと向かって走っていく。まるでヌーの群れの様に塊で走っていく上級生や同級生達を見送る栄純の頭には、先程先輩が言った名前が残っていた。
……山城ってたしか。
一週間前の記憶が蘇る。
無意識の内に拳を握りしめ、栄純もまたＡグラウンドへと向かった。

Ⅳ

……うわ。すげぇ人。

栄純がAグラウンドに着くと、そこには既に数多くの人が詰めかけていた。

OBに記者、部員に一般生徒。

野球とは実際にプレイするものであって見るものではないという認識の栄純にとって、観戦のためにグラウンドを囲む人の姿というのは非常に新鮮だった。

しかし余り驚いてばかりもいられない。栄純は何とか人の壁をかき分け、関係者しか入れない鉄の扉を潜ってグラウンドの中へと足を踏み入れる。

三塁側ベンチ前に陣取る上級生たちの列の端にひっそりと加わった栄純がそこで見たのは、上級生を空ぶりに取る同じ一年生の姿だった。

――ストライク！　バッターアウト!!

審判のコールに顎髭の生えた打者は大きく吠えると、マウンドでキャッチャーからボールを受け取る山城を睨み付けながらバッターボックスを後にした。

ざわざわと、栄純の隣が騒がしくなる。

――おい、まじかよ。純さんまで三振かよ。

――これで二者連続三振……。
――うちの二、三番が連続三振って、試合でも殆ど見たことねぇぞ!?
――あぁ、それも二人にほとんど自分のスイングをさせてなかった。
――特別体格がいいわけでもねぇのに、何であんなボールが投げれるんだ!?

……二者連続三振。あいつが……
どくんと、栄純の中で何かが強く鼓動を打った。
蘇るは一週間前の記憶。
キャッチボールの最中に行ったおよそ９０ｍの遠投。
栄純が助走をつけて投じた球はフェンスまで届かなかった。
しかし、
……あいつは、『助走なし』で届かせた。
それも栄純や三週間前の片岡が投げた様な山なりのボールではなく、低く真っ直ぐの軌道で。胸元辺りの高さで投げられた剛速球がどんどん伸びていき、途中で落ちることなくそのままフェンスにぶつかった様はまるで何かの手品のよう。

栄純はぎりっと歯を食いしばり、今の自分と山城を比べた。
片や一年生でありながらマウンドに上がってレギュラー相手に三振に取り、片や練習に参加することすら認められず毎日グラウンドの周りを走り込む。
遠い。
同じ一年生でありながら、とてつもなくその姿が遠い。
……でも、絶対に諦めねぇ。
例え今は敵わなくとも、いずれ絶対に追い越してエースになる。
沢村栄純は、そのために青道に来たのだから。
決意を胸に、栄純は練習に戻るためＡグラウンドを後にする。

――でも次はこれまでみたいにはいかねぇよな。
――あぁ。何たって次は。
――哲さんだからな。

そんな声を背後から聴きながら。

感想、評価待ってます

5話

今回の話と次の話ではジャイロボールについて様々な解説（一部捏造あり）を行っています。ジャイロボールを知らない方にもわかるよう書いているつもりですが、恐らく理解し辛い部分が多々あるかと思います。とりあえず、あぁ何かすごいボールなんだな～程度の感覚で読んでいただけるありがたいです。どうしてもジャイロボールについて詳しく知りたい方は、ジャイロボールで検索してみましょう。

I

――ストライク！　バッターアウト!!

頭上から三振を告げる監督の声を聞きながら、御幸一也はマスクの下でにやける顔を抑えることが出来なかった。

……なるほど。こりゃクリス先輩と監督が入れ込むわけだわ。

御幸はちらりと自身の背後に目をやり、球審を行う監督を見た。

マスクに遮られてはっきりとはわからないが、その顔はどことなくこの結果をわかっていたようにも見えた。

「くそがっ」とマウンドを睨み付けて伊佐敷純がバッターボックスを後にすると、御幸はナイスボールという言葉と共にボールをマウンドのルーキーへと投げた。

青道の主軸相手に連続三振。

普通のルーキーなら狂喜乱舞するか逆に緊張の一つでもしそうなものであるが、ボールを受け取る山城空は特に表情を変えないまま軽く帽子のツバに手をかけただけだった。

……これぐらい大したことねぇってか？

どんなルーキーだよと、御幸はくつくつとマスクの下で笑った。

この昇格試験の始まる前、ブルペンで監督から山城のボールを受けるよう言われた御幸は山城と簡単なサインの交換を行い、実際にそのボールを受けていた。

およそ二〇球ほどの少ない球数を受けてわかったのは、シニア時代に対決した怪物はこの一年間で更なる進化を遂げていたということ。

これまでの二人との対戦において、御幸は特別なリードは一切していない、

速球投手によくあるインハイを中心に組み立てて、決め球はアウトロー。
遊び玉なくどんどんストライクゾーンに投げ込んでいくそのリードは、メジャーにも通じる部分があった。
……これだけの球なら初対決で凝ったリードは必要ない。
威力のある球とそれをコーナーに決めるだけのコントロールがあるのだ。
ならば下手にボール球を投げて情報を与えるよりも、少ない球数で仕留めた方が次の打者との対決で有利になる。
今のところは御幸の計算通りに進んでいる。
問題は――――
「よろしく頼む」
……この人だよな。
低い挨拶と共に右打席に入ったのは、青道高校の主将にして不動の四番結城哲也。
ふぅと息を吐き、鋭い眼差しでバットを構えるその姿はまるで一本の日本刀のよう。
味方なら頼もしいが、敵になるとこうも恐ろしい。

……さてどうするか。

プレイの声がかかると、御幸はまずは様子見にとサインを出す。

構えるのはインコース高目。

マウンドの空がコクリと頷き、投球フォームへと入った。

ゆったりとした大きなフォームから勢いよく右腕が振り下ろされ、その指先からボールが放たれる。１４０キロ中盤にもなるボールが唸りを上げ、そのままストライクゾーン一杯に構えられたミットへと突き刺さる。

ストライクのコールがグラウンドに響く中、バットを振ることなくボールを見送った哲はほぉと感嘆の声を漏らした。

「なるほど、これが噂に聞く山城のジャイロボールか」

「はい、まぁ俺も受けたのは初めてですけど」

Ⅱ

ジャイロボールという球がある。

１９９０年代中盤、とあるスポーツ科学者によってその存在を指摘されたボールである。

まるでライフル弾のよう螺旋回転を行うこのボールは回転軸がボールの進行方向と一致するために空気抵抗が少なく、通常のバックスピンストレートよりも初速と終速の差が少ないことがその特徴にある。

ストレートよりも〝ノビ〟る球として注目を集めたこのボールは、今後バックスピンストレートに取って代わる新たなストレートとして一時期注目を集めた。

とは言え、その注目もあくまで一過性のものにすぎなかった。

というのも、

……本来、ジャイロボールは落ちる軌道を描く。

そう。漫画やゲームなどにおいては、ジャイロボールはホップするストレート――すなわち、ストレートの上位互換として捉えられることが多いが実の所それは大きな間違い。

そもそも、地球に重力が存在する以上投げたボールは必ず下へと落ちていく。

ストレートが直線の軌道を描く（ように見える）のは、ボールにかけられたバッ

クスピンの回転が揚力（上向きの力）を生み出し重力に逆らうからである（それでもボールは落ちているが）。一方、回転軸が進行方向と同じ向きにあるジャイロボールはこの上向きの力が働かないためフォークや縦スライダーのような落ちる軌道を描く。

つまるところジャイロボールとは、落ちる軌道にもかかわらず真っ直ぐな軌道のストレートと同じかそれ以上に早くミットに到達する（初速が同じ場合）摩訶不思議なボールなのである（言い換えればそれだけ空気抵抗が少ない）。

……けど、それはあくまでも変化球。ストレートの代わりにはならない。

変化球を活かすのはストレートという格言がある様に、落ちる変化球が有効なのは直線軌道を描くストレートがあってこそ。

どれだけボールが伸びようと、落ちるのであればストレートとしては使えない。とは言え例えストレートの代わりにはならなくても、新たな変化球としてならば十分に使える可能性はある。だが実際、プロ・アマを通してこれまでたった一人の例外を除いて本当の意味でのジャイロボーラーは現れていない。

その理由は至ってシンプル。

単純に、投げられる投手がいないのである。

キャッチボール程度の球速ならば比較的簡単にジャイロ回転をかけられるのだが、試合に通用する球速でそれを行おうとするとその難易度は飛躍的に跳ね上がる（特にオーバースローでは）。

ゆえにこの二十年間、ジャイロボールは理論こそ提唱されつつもあくまでも空想の産物として扱われていた――――山城空が現れるまでは。

二球目。

空が再びゆっくりとした動作で大きく腕を振りかぶり、高く左足を上げる。

投手の数だけフォームがある中でも特に豪快なフォーム。

全身をフルに使ったそのフォームのことを御幸は知っていた。

下半身と上半身の二つの回転を用い、指先のボールに螺旋の回転を与えるダブルスピン投法。一般的なオーバースローの様にボールを投げ下ろすのではなく、〝投げ上げ〟られたボールがミット目がけて突き進む。

コースは初球と同じインハイ。

ある程度コースを読んでいたのか、それとも天性の勘がそうさせたのか、バッ

ターボックスに入っていた哲はタイミングを取るために上げた左足をレフト側へと大きく開いた。

十分に空いたスペースの中からバッドが風切り音を上げ、迫りくるボールを跳ね返さんとばかりに力強く振るわれる。

しかし、結果としてバットがボールを捉えることはなかった。

打者の手元で急激に伸び〝上がった〟ボールはバットの上を通過し、そのままミットを鳴らした。

――――ストライク！

「……まだ下か」

ふむとボールが通った軌道を確認し、青道最強打者はバットのグリップを握り直した。

怖気が走るほどのスイング音にこえぇこぇと内心で呟きつつも、御幸は改めて空の異常性を感じていた。

本来球速が出にくい筈のジャイロで１４０キロを超える豪速球を生み出す驚異の身体能力、強力な螺旋スピンをボールに加えることのできる天性の指先感覚。

ボールを投げ上げるという特異なリリースにも関わらず、きっちりとコースに決められるだけの制球力。そして何よりもおかしいのは、

……こいつのジャイロは落ちない！

空のジャイロボールは通常のバックスピンストレートよりも伸びるにもかかわらず、その軌道は並のストレートよりもストレートらしい直線を描く。

ジャイロボールは落ちる球であるという根底を覆す、落ちないジャイロボール。

それはまるで漫画に登場する魔球。

……恐らく回転軸がいくらか三塁側に傾いていることでジャイロボールの中にバックスピンの成分が生まれ、それがボールに揚力を与えている。

言葉にしてみると簡単だが、それがいかに難しいことか。

回転軸が三塁側に寄り過ぎれば（バックスピンの成分が多くなれば）、ボールの軌道は直線になりやすいがジャイロボールの最大の魅力である伸びが失われる。

かと言って逆に回転軸がボールの進行方向に寄り過ぎれば、ジャイロの回転はかけやすいが揚力を得られず真っ直ぐの軌道を描かない。

ジャイロとしての伸びを失わず、かつ直線軌道になるだけの揚力を得られる回転

軸の傾き。一体どんな感覚を持っていれば、毎回そんな傾きでボールを投げることができるのか御幸には想像も出来なかった。

……多分バッターにとっては、ボール２、３個はホップしている様に見えている筈。

ジャイロ特有の伸びに限りなく直線に近い軌道、そして打者の感覚を狂わすボールを投げ上げるという特異なリリース。

捕球する御幸ですら、ボールが伸び上っている様に見えるのだ。

対峙する打者にしてみたら、ただでさえ１４５キロ近い速球が１５０キロ以上にも感じられることだろう。

三球目。

サインを出した御幸が構えたのはアウトロー。少しボール気味ながらもキャッチャーの捕り方次第ではストライクにもなるグレーゾーン。

空の右腕から三度ボールが投げられる。

球種は先の二球と同じ四シーム。

低くコントロールされた伸びのあるボールがミット目がけて驀進する。

注文通りと御幸が手応えを感じたその瞬間、鉛色の一閃が振りぬかれた。
キーンと金属バット特有の甲高い金属音と共に、力強い球が一塁ファールグラウンドへと転がった。
――――ファールボール
ふぅと振りぬいたバットを構え直す哲の姿に、御幸は内心で舌を巻いた。
……流石は哲さん。三球目でもう対応して来たか。
インハイを二球続けてからのコース一杯のアウトロー。
空のボールであれば、胸元からの外角低めという対角線にボールを決めれば例え読まれていてもまず打てないだろうという判断からのリードだったが、流石はプロが注目する打者だけあって芯で捉えてこそいなかったがしっかりと当ててきた。
とは言え、カウントは0―2でまだまだピッチャー有利。
次に対戦するバッターがいない以上、ここはセオリー通り一球外すのも手ではある。
とは言え、
……情報を与えればそれだけ打者が有利になる。

せっかくの初対決なのだから、それを活用しない手はない。
空もまた御幸と同じことを思っていたのか、御幸の出した勝負球のサインに躊躇なく頷いた。

感想・評価待ってます。

6話

ジャイロボールの説明第二弾。
今回の話は前話よりもわかりにくい……かもです。

I

……凄まじいな。
一塁ファールゾーンへと転がった打球を見送り、ゆっくりとバットをいつものトップエンドの位置へと持っていく。グリップを強く握ることで手の平に残る僅かな痺れを誤魔化しながら、結城哲也は素直にマウンドに立つルーキーを賞賛した。
先程の三球目。
狙いを真っ直ぐ一本に絞り、ボールの伸びに負けぬようかなりコンパクトなスイングでボールを上から叩きに行ったつもりだったがそれでも尚振り遅れた。
普段の練習ではマシンの投げる１５０キロをフルスイングで軽々と捉える結城を

持ってしても捉えきれぬボールの伸び。
僅かでも隙、油断があれば打てる球ではない。
結城は小さく息を吐き、試合さながらに集中力を高め己の世界に埋没していく。
四球目。
それまでと何ら変わらぬ豪快なフォームからボールが放たれた。
……ストレート！
球速は先の三球とほとんど変わらぬ１４０キロ前半から中盤なれど、そのコースは甘い。
これまでの丁寧にコーナーを突いていたのとは異なる、少しインコース気味ながらもほぼど真ん中。
ぎらりと、哲の目が鋭く光った。
今度こそ伸びる球に振り遅れまいと、力強く振り下ろされるバット。
タイミング、軌道共に完璧。
捉えたと思った瞬間、結城は目を見開いた。
……ボールが…こない。

これまでの三球と同じフォーム、同じスピードで投げられたボール。
だというのに、どういうわけかこれまでの三球よりもボールが最後に〝伸びて〟こない！
いや、それどころかホームベースの手前で鋭く落ちていくではないか!!
ここに来てタイミング、軌道共に完璧であったはずのスイングは最悪のそれへと変貌する。しかし一度振るわれたバットは最早止めることが出来ない。
「っつ！」
考えての行動ではなかった。
これまで積み重ねてきた試合での経験が、毎日の素振りが、四番としてのプライドが、天性の勘が結城の体を動かした。
軸足に残っていた体重を踏み出した左足へと集め、前のめりになりがらバットを握る右手を離し強引にその軌道を捻じ曲げる。
片手一本。
左手のみで振るわれたバットの先をボールが霞め、キャッチャーの右側を転々と転がって行った。

――――ファールボール！

球審となった監督の言葉が静まり返ったグラウンドに響いた。

そしてそれを合図にするかのように、それまで息を呑んでこの対決を見守っていたギャラリーがにわかにざわめく。

――――すげぇ。あの哲さんを翻弄してやがる!!

――――いや、バットに当てた哲さんも凄いだろ！　あんな崩された体勢から片手一本でカットしたぜ!?

――――今の球、亮介さんの時も確か一球投げてたよな？　落ち方は縦のスライダーやフォークに近いけど、変化球の割には伸びてたし速度もあったよな？

――――中学ＮＯ１投手と称された新入生と、名門青道の四番の対決……面白い、これは面白い！　新たなる波と三年生の意地のぶつかり合い！　次の特集はこれで決まりだな!!

――――片岡監督は一体どんな気持ちでこの対決を見ているんだろうな……

グラウンドの中、外構わず飛び交うざわめきと興奮。
無数のシャッター音とフラッシュの光がたき付ける中、結城はそれらを意に介すことなく後ろの人物へと疑問を投げかけた。
「スライダー……いや、今のは……」
「はい。二シームです」
二シーム。別名ムービングファーストボール。訳すと動く速球。
ストレートの一種で、空気抵抗の関係から直線の四シームよりも若干打者の手元で小さく沈むような軌道を取る。メジャーで良く使われているストレートであり、打者の手元で変化するという性質からバットの芯を外すことを目的として使われるが、それはあくまでも通常のバックスピンストレートの場合。
ジャイロ回転をかけた場合、その軌道はいささか異なるものとなる。
……ジャイロボールはボールの握り方で大きく球種が変わると聞く。
結城は昔、とある野球雑誌に載っていた記事を思い出した。
ジャイロボールの特徴の一つとして縫い目の位置によって空気抵抗が大きく変わるというものがあり、大別すると二つに分類されるという。

一つが、対称ジャイロと呼ばれる四シームジャイロ（以後４ＳＧ）。通常の四シームと同じ握りから投げられるこのボールはあらゆる球種の中で理論上最も空気抵抗が少なく（バックスピンストレートの半分以下！）、最も伸びる球とされる。

一般的にジャイロボールと言えばこちらを指すことが多く（先述のジャイロボールの説明も４ＳＧに基づいている）、空が結城に対して投じた最初の三球も分類としてはこの４ＳＧになる。

そして４ＳＧに対するのが、非対称ジャイロと呼ばれる二シームジャイロ（以後２ＳＧ）である。４ＳＧがジャイロボールの〝伸びる〟側面をクローズアップしたボールだとすれば、この２ＳＧはジャイロボールの〝落ちる〟側面をクローズアップしたボールだということができる。２ＳＧは縫い目位置の関係から４ＳＧよりも空気抵抗が大きく（それでも四シームストレートより小さい）、４ＳＧと同じ速度で投げても打者の手元でブレーキがかかり４ＳＧよりも大きく沈む軌道を取る（回転軸の向きが同じ場合）。

……恐らく山城は２ＳＧにトップスピンの成分を加えることでその落ち幅をより大きなものにし、伸び上るように見える４ＳＧとの差を大きなものとしている。

〝伸び上がる〟４ＳＧと、〝伸びずに落ちる〟２ＳＧ。
フォームは変わらず、球速（ここでは初速を指す）もほとんど変わらない。
ただ握り方を少し変えただけの同じジャイロボール。
にもかかわらず、その球種は全くと言っていいほど別物。
「……なるほど。これは思った以上に攻略が難しいな」
「いや、俺としては初対決で二シームに反応できた哲さんにびっくりなんですけど……」
呆れたと言わんばかりの御幸の声を黙殺し、結城はマウンドへと視線を向けた。
バットに当てられるとは予想外だったのか。
そこには驚いた顔でボールの転がった先を追う山城空の姿があった。
結城はすっと気を引き締め直し、バットを構える。
……次は打つ！
ゴゴゴとでも効果音が付きそうなほどの威圧感。
三年間毎日の様にバットを振り続け、キャプテンとして、そして４番としてチームを引っ張り続けた男、結城哲也。

そのただならぬオーラと迫力に、それまでざわついていた観客達が一斉に口をつぐんだ。
まるで伸ばし切った糸の様に極限まで張りつめられたグラウンドの空気。
誰もが自然と緊張で顔を強張らす中で、ゆっくりと空がホームへと顔を向けた。
……笑っている？
すぐにグローブで口元を覆ったものの、結城にははっきりと見えた。
山城空は確かに笑った。
この状況、この場面で！
何かが違う。
これまでの山城空とは決定的に何かが異なっていると、結城の勘が警報を鳴らす。
結城はバットを短く握り直し、グリップを一つ余らせた。
どこかで驚きの声が上がったが、最早結城の耳には届かなかった。
五球目。
マウンドの空が投球フォームへと入る。
これまでと同じ足の上げ方、同じテイクバック、同じ腕の振り。

だというのに、その同じ投球フォームから投げられたボールはそれまでの四球と全てが違った。

〝ゴウッ〟

そんな唸りが結城の耳に届いた。

強烈な何かがホームベースの上を駆け上がっていったと思った瞬間、乾いた音が右耳から聞こえた。

それだけ。

わかったのはそれだけで、できたことは何一つない。

山城空VS結城哲也。

勝負の最後の一球は、非常に呆気なく終わった。

Ⅱ

――――ストライクっ！　バッターアウト!!

審判のコールにマウンドの空がボールを投げた右腕を上空へと突き上げた。

その瞬間、グラウンドが爆発した。

――――おおっ!?　三振!!　三者連続三振！

――――最後の球一体何キロ出てたんだよ！　コースはそんなに厳しくなかったのにあの哲が手も足も出なかったぞ!?

――――スピードガンだと……１５１キロ!?

――――最後の最後でこれまでより7キロ近く速い球とか、まじで化け物かよ……

――――つーか、スピードガンの表示よりずっと速く見えたぞ！

――――あぁ。正直、１６０キロって言われても何ら違和感ない球だったぜありゃあ……

興奮収まりやまぬグラウンド。

ざわざわと未だ高まる熱気の中、結城は構えていたバットを静かに下ろした。

「どうでした、哲さん?」

マスクを外して立ち上がった御幸に、青道最強のバッターは悔しさを滲ませながらもどこか満ち足りたような表情で笑った。

「完敗……だな。正直手も足も出なかった」
「中学最強は伊達じゃないってことですか」
「あぁ。特に最後のボール……あれは予め配球として決まっていたのか？」
「いえ。四シームのサインは出しましたが、もう少し高めで一球外すつもりでした。正直言って、山城のギアにもう一つ上があるとは俺も知りませんでした」
「そうか……」
普段は八割の力で投げ、勝負所ではギアを一つ上げて相手を捻じ伏せる。
先発投手としての基本だが、その基本を出来るピッチャーが一体どれほどいるか。
プロですら難しいそれをたかだか一年のルーキーがやってのける。
「クリスが入れ込む理由がわかるな……」
「そうっすね」
御幸と結城の目には、一塁ベンチ前で談笑を交わすクリスと空の姿があった。
身振り手振りを添えて興奮気味に話す空に、クリスは苦笑しながらもしっかりと頷いている。いいコンビなのは一目瞭然だった。
「……ご苦労だったな、結城」

「監督……」
目を細める二人の下に、プロテクターを全て外した片岡鉄心が歩いてくる。
片岡が二言目を告げるよりも早く、結城は頭を深々と下げた。
「一年相手にふがいない姿を見せてしまい申し訳ありませんでした」
「……他に何か言うことは？」
「ありません。山城がどれだけ良いピッチャーであろうと、打てなかったのは自分の実力不足です。しばらくグラウンドを走ってきます」
「……小湊、伊佐敷もお前と同じことを言ってきた。今日は三人で日が暮れるまで走っていろ」
「はい!!」
返事と共に結城は走り出した。
その後ろ姿を見送り、片岡は一塁ベンチ方向へと体を向けた。
「山城空！」
片岡の声に、空はクリスとの談笑を止め返事と共に体の向きを入れ替えた。
主軸のレギュラー三人との対決だったにもかかわらず、疲れの色一つ見えないそ

の顔に片岡はふっと笑みを見せると、試験の結果を伝えた。
「合格だ。明日から一軍の練習に入れ」
こうして、空の一軍昇格をかけたテストは終わった。
ざわめきを残し、見た者の胸に様々な感情を刻みながら。
入部からわずか二週間。
歴代最速記録を大幅に更新し、
――山城空。一軍昇格

あまりメジャーの吾郎とは被らせないつもりだったのに、気が付けばこうなってました。（まぁ、ジャイロボールの特徴を考えれば当然なんですが）

感想・評価待ってます

次の更新予定は１週間後です。

7話

既存キャラの口調って難しいですね。違和感があったら訂正するので、報告お願いします。

I

空を見上げれば、ほとんど雲一つない快晴。
ここ最近では見たことないほどご機嫌な青空からはポカポカと気持ちのいい日差しが笑顔の如く降り注ぎ、爽やかな風が優しく頬を撫でていく。
4月21日。
日曜日のこの日はまさに春の休日をキャンバスに描いたかのようなピクニック日和。
こんな日に公園のハンモックとかで寝たら気持ちいいんだろうな～などと、昔絵本で読んで憧れた男子の理想に思いを馳せてみるが所詮理想は理想。

現実はそう甘くない。

空はちらりと左右に顔を動かす。

左手には子供達に明るい笑顔をもたらす遊具の代わりに部員達の汗と涙を吸った野球道具が仕舞われた倉庫が見え、右手には子供達の憧れハンモックの代わりに二軍投手の憧れ第一ブルペンが見えた。

……んで座った地面に広がっているのは緑の柔らかな芝生じゃなくて、固い茶色のグラウンド。

まぁ、所詮そんなものだよなと一人で勝手に納得しながら空は顔を元の位置へと戻した。

昨日の昇格試験で有無を言わせぬ結果を示し、本日付けで一軍に昇格を果たしたスーパールーキー山城空。部の内外問わず注目を集めるルーキーはグラウンドの端で練習着に身を包んだまま、ポツンと一人寂しく寮の自販機で買った飲み物に口をつけていた。

ぼんやりと前を眺めるその表情は誰から見ても退屈そうで、ともすれば夢の世界に旅立つ前にも見えた。

ふわぁと大きく欠伸を行う空の耳に、じゃりっとスパイクが土を踏む音が聞こえた。

「――なんだなんだ？　こんな昼間に欠伸なんかしやがって」

「あっ。御幸……さん」

「てめぇ。今呼び捨てにしかけただろ？」

あんま上級生を舐めてんじゃねぇぞと、額に青筋を浮かべたのは二年の御幸一也。普段練習中にかけているスポーツサングラスではなく、普通の黒縁眼鏡にフォルムチェンジした青道の正捕手は左手にはめていたミットを外すと空の隣に腰を下ろした。

「沢村のアップは終わったんすか？」

「あぁ。ギラギラした目でさっき一年のベンチに走っていった。この試合展開でやる気を失わないのはある意味才能だな」

「ふーん。じゃあ、この試合も少しは面白くなるか……」

むしろそうなってくれないと困るとばかりに、空は僅かばかりの期待を込めて呟く。

御幸はそんな後輩の姿にやれやれと肩をすくめた。
「随分と退屈そうだな。人の試合を見るのもまた勉強だってクリス先輩から習わなかったのか？」
「シニアの時、耳たこになるぐらい言われましたよ。今日もこの試合をよく見とけって強く言われましたし……でも、退屈なものは退屈でしょ？　特にこんな試合は……」
空は眼前に広がる光景に目を細める。
そこで行われているのは試合。
いな、これを試合と呼んでもいいのだろうか。
一年VS二、三年。
昨日急遽として組まれた練習試合は、最早一方的と呼ぶことすら生易しかった。
初回の表、一年生チームの攻撃の前に立ちはだかったのは三年、丹波光一郎。
最近の不調によりエースの座を下ろされたとはいえ、それでもこれまで青道を支えてきた大黒柱。エースの座を取り戻そうと気合の入ったピッチングの前に一年生はボールをバットに当てることすらできず、ただただ三つの三振を献上しただけ

だった。

逆に守ってはその裏。一年生側の投手東条が投げたボールは軽々と弾き返された。

一軍主力陣を欠いているとは思えない強力打線が火を噴き、次々と鋭い打球が外野の間を抜けていく。

気が付けば一回終了時にして既に0―14。

勝ち目などない、余りにも絶望的な力の差をまざまざと見せつけられ、攻撃時だというのに一回生のベンチはまるで通夜のような静けさだった。

「実力差があるから点差が開くのは仕方ないにしても、こんな序盤から逆転を諦めた試合を見て何が面白いんすか？　俺、やる気のない相手を一方的に嬲るのってあんま好きじゃないんですけど」

「んなもん、別に上級生達だって好きなわけねぇだろ……ただ、必死なんだよ」

「必死？」

「まぁ、お前――いや、俺達には理解し辛い感覚かもしれねぇがな。山城、お前レギュラーになるのに苦労した経験ってこれまであるか？」

御幸の問いかけに空は自分の記憶を探った。
探って、首を横に振った。
「……いや、特には」
「だろうな。俺もほとんどねぇ。シニアじゃ割かし楽にレギュラーとれたし、青道に来てからも正捕手争いをする前にクリス先輩が怪我しちまったから殆ど自動的に俺が試合のマスクを被ってた。だからレギュラーになることの重みって口では言えても、その本当の重さまでは理解してねぇ。ただ自由に野球を楽しんでいたら自然とレギュラーに選ばれていた……お前もそんな感じだったろ？」
それはかなり極端な話ではあったが、おおむね間違いでもなかった。
空もまた御幸と同じくシニア時代はレギュラーを取ることに苦労したことはなく、この青道でも昇格試験こそあったが他の部員に比べれば非常にすんなりと一軍に昇格した。
無言を肯定ととったのか、御幸は話を続けた。
「けどな。あそこにいるやつらは俺達とは違う。2、3年のチームにいるのはウチの1軍半から2軍。丹波さんとか川上とかの一部を除けば、その殆どがこれま

でレギュラー所か控えにすら入れず試合を観客席から見ているしかなかった部員達だ。そんなやつら――特に後のない三年生にしてみれば、今日の練習試合は監督にアピールする絶好の機会。野球を楽しもうとか、実力の差があるから少し手を抜こうかとか、そんなことを思ってる余裕は欠片もねぇんだよ」

「余裕がない……」

「そうだ。特に昨日、ぽっと出の新入生にあっさりと一軍の枠を一つ奪われたからな。そりゃあ気合も入るだろ」

試合に〝勝つ〟ことではなく、そもそもその試合に〝出る〟こと自体に必死になる。

それは百名近い部員を抱える名門だからこそ生まれる、熾烈な競争。

空は改めて目の前の試合を見た。

試合内容自体は余りにも一方的で、やはり面白いとは言えない。やる気のない一年生を全身全霊で叩きのめす上級生の姿はそれこそ大人げないようにさえ見える。

試合に出るために必死になるという気持ちも、御幸の言うとおり正直言って空にはあまりわからなかった。

……でも。

何となく、そう何となくこの試合は例え退屈であっても最後まで見届けなければならない。そんな気がした。

「もしかしてクリス先輩がこの試合をしっかり見てろっていたのは……」

「一軍の投手ともなれば試合に出られない選手の想いを背負ってマウンドに上がることになる。そんな上級生達の気持ちを知っとけって意味合いもあったんだろ。お前、クリス先輩のことしか考えてなさそうだし」

「うっ」

図星を突かれて言葉に詰まる空に、御幸はけたけたと笑った。

「最初は別にそれでもかまわねぇよ。俺も青道に来た理由の一つはクリス先輩と正捕手争いがしたいって思ったからだしな。でも、少しずつ視野を広げてみろ。シニアじゃあ単純に実力のあるやつがエースだったが、高校ではチームを背負えなきゃエースにはなれねぇぜ」

「……それ、入部して１か月の新入生にいうことっすか？」

「普通は言わねぇよ。けど、お前にはそれだけの力があるだろ？　まぁもっとも、

そう簡単にはなれねぇだろうがな」

ほれと御幸の促しに従い、空は視線をマウンドへと向けた。

そこにはバッターを三振に仕留め、気合に満ちた叫びを上げる丹波光一郎がいた。

練習中では比較的物静かなイメージがあるだけに、空が少々意外そうな顔をしてその姿を眺めているとふと、丹波と空の視線が交差した。

ギロリ。

そんな擬音が付きそうなほど鋭い眼差しが、空の全身へと突き刺さる。

「おぉ……」

「丹波さんも今年が最後。エースナンバーを渡す気はさらさらないようだぜ？まぁ、あの目には何か別の意味合いも含まれているような気がしなくもねぇが……さて、どうするルーキー？」

「……正直、クリス先輩と甲子園に行くことしか考えてなかったから余りエースとかには興味がなかったんですけど……少し興味がわきました」

そういって、空は楽しそうに笑った。

Ⅱ

日曜日の昼間に行われた一年生VS二、三年生の練習試合。
天と地ほども実力の差があるこの試合は、概ねの予想通り上級生の圧倒的優位で進んでいた。
五回表終了時にして1対38。
仮にこれが公式戦であれば裏の上級生の攻撃を待たずに試合は終了しているほどの点数差だが、劣勢というのもおこがましい立場にある筈の一年生チームには絶望の色はなかった。むしろ、これから逆転してやるぞとばかりに声がグラウンドに響き、闘志が前面に押し出されている。
初回の時とはまるで異なるその姿に傍から観戦していた空は「へー」と声を漏らした。
「随分と声が出てきたっすね」
「まぁ、部員見習いって見下してた沢村が形はどうあれ一点もぎ取ったわけだからな。そんなあいつにあそこまで言われて何も思わないようじゃ、ウチではやっていけねぇよ」

一度は監督によって打ち切られそうになった試合。
それを覆したのは、チームに初の得点をもたらした沢村だった。
――――こんな結果で終わっていいのかよ！
――――次にいつチャンスがくるかわからねぇ、それなのにいいのかよ！
――――自分の力を出し切ったって本当に言えるのかよ!?
見下していた沢村に言われたのが悔しかったのか、守備で迷惑をかけまくったお前が言うなよという怒りなのか。
何にせよそれまで諦めていた一年生はやる気を取り戻し、試合は続行となった。
それも投手沢村栄純という形で。
面白くなってきたと、空は目をセカンドへと向けた。
そこには先の得点の立役者の一人が淀みない動作でファーストから投げられたボールをさばいていた。簡単なゴロとは言え捕球から送球までの動きには一切の無駄がなく、まるで一連の動作として組み込まれているかのような流麗さがそこにはある。
えてしてああいう動きができる選手は厄介だということを、空は経験から知って

いた。

……小湊春市か。

一年生チームの中で唯一の打点をあげた一年生。

特徴的な髪色をしているだけに空もその名前を憶えていたが、金属バットが主体の高校野球で木製バットを使ったことといい、アウトコースの球をライト方向へと綺麗に運ぶそのバッティング技術といい、特徴的なのはどうやら髪の色だけではなかったらしいと空は小湊への評価を改めた。

同じ一年にこんな選手がいることに驚きつつ、けどやっぱりと空は視線をセカンドからマウンドへと変えた。

……一番注目するのはあいつだよな、やっぱ。

マウンドで子供の様に笑って投球練習を行う部員見習い、沢村栄純。

マウンドに上がるまでついていた外野の守備は他の一年生からも言われた様にザルの一言だし、バッティングも小湊のようなセンスは感じられない。先の回の立役者の一人とは言え、塁に出られたのも振り逃げであって決して沢村が打ったからではない。

けれど形はどうあれチームに得点をもたらし、更には既に諦めていた一年チームのやる気を引き出したのは間違いなく沢村だった。

……俺にはあんな風にはできねぇな。

投手として自分のピッチングを見せることでチームメイトを鼓舞することは出来ても、それ以外の方法でチームの雰囲気を明るくさせる方法を空は知らない。

また知らなくても問題なかった。

中学時代空が所属していた丸亀シニアは全国でも有数の強豪シニアチームであり、所属する選手全員が広橋大地という絶対的なキャプテンの下でチームとして統一された高い意識を持ってプレイしていた。

そんな恵まれた環境ゆえに空に求められたのは純粋な投手としての能力であり、それ以外のことについては考える必要すらなかった。

……もしかしたらムービングじゃなくて、沢村が本当にすごい所はその辺なのかもな。

そんなことをぼんやり思っている時だった。

ザッと、スパイクが土を踏む音が聞こえ、続いて複数の声が空の耳に届いた。

――――オラ、何じゃこの試合は～!?

――――うおっ!?　一年相手に点数とられてるっすよ。

――――まったく恥ずかしい試合してるな～。上級生として情けない。

空と御幸がそろって首を回せばそこにはぐっしょりとアンダーシャツが濡らした一軍レギュラー陣、一番から四番までの四人の姿があった。

あちら側も空と御幸に気付いたようで、「あっ」とその内の一人が声を上げた。

その学生の身分で髭を生やした三年生、吠えるセンター――――伊佐敷純は目尻を釣り上げると、どすどすと大股で空達の元へ歩いてきた。

「おら山城!!　いいとこであったなコぅるアぁ！　昨日ちょっと抑えたからって調子に乗ってんじゃねぇぞ、今度こそテメェのボールをバックボードに叩き込んでやるから今すぐマウンドに上がれやコラぁ！」

「ちょっ!?　純さん無茶っすよ！　身体苛め切った後だし、そもそも俺らは出るなって……」

「るせぇ！　無茶でもなんでも出る！」

俺が代打で出ると、全身からやる気を溢れさせ打席に向かおうとする伊佐敷に慌

てて後輩の倉持が待ったをかけた。
　しかしそれでも尚打席に向かおうとする伊佐敷を制止したのは、それまで沈黙を保っていた男の言葉だった。
「監督が俺達に出るなと言ったんだ……黙って見ていろ純」
　青道高校主将にして四番、結城哲也に鋭い眼差しを向けられた伊佐敷は舌打ちしながらもそれに従った。見事にチームメイトを抑えたその手腕は流石。
　しかし、伊佐敷をなだめたチームのドンは、どういうわけかその鋭い目を空へと向けた。
「山城」
「えっ？　はい」
「昨日は完敗を喫したが、次はそうはいかない。今度打席で対峙したならば必ず打つ！」
　ごぉっと結城から炎の様な何かが吹き上がっているのが空には見えた。
　一体何だと空が目を点にしていると、二塁手小湊亮介がニコニコといつもの笑顔でポンと空の肩に手を置いた。

「ははは。先輩らがこんな感じでごめんね。でも、俺も次やる時はそのすかした顔を叩き潰すからそのつもりでいてね」

優しそうな顔からは想像もつかない毒舌をまき散らすだけまき散らして、小湊はレギュラー陣の輪の中に戻っていった。

次から次へと迫りくる怒涛の展開。

半ば呆然とする空に、御幸がこそっと小声で耳打ちした。

「昨日お前に三振食らったのがよっぽど堪えたらしくてな、明日試合だっての三人とも調整メニューガン無視して朝からずっと練習してたんだよ」

何だそりゃと空は言いたかった。

ギラギラと空に降り注ぐレギュラー陣からの視線。

沢村と言い、丹波光一郎と言い、

「……青道って面白いとこっすね」

「だろ？」

少しだけ、空は青道のことを知った気がした。

Ⅲ

一年生VS二、三年生。

その試合は結局のところ一対42という圧倒的な大差で終了した。

まるで大人VS子供。

得点結果だけみれば草野球も霞むような大差だったものの、まったく見所がないわけではなかった。青道のエース候補筆頭丹波光一郎の復活を初めとして、かつてのクリーンナップ増子透のホームラン、味方のミスから一点は失ったもののきっちりと一年生打線を封じ込めた川上憲史のピッチング。

その他にも試合の随所において上級生チームから素晴らしいプレーが飛び出し、見ている者達にあらためて青道の強さを知らしめる結果となった。

またそれにともない、本日の試合により何人もの選手が上への切符を勝ち取った。

そしてまたそれは上級生だけではなく、一年生にも同じことが言えて――――

「ほぉ。この時期に一年が二人も昇格したのか」

「はい。まぁ二人とも二軍ですけど」

クリスの少し驚きの混じった言葉を肯定し、空はボールを投げた。
様々な思惑が交錯し、熱気を帯びた部内同士での練習試合からおよそ数時間。
明日の練習に備えて生徒達がそろそろ就寝に就こうかという頃、青心寮の隣にある室内練習場には未だ灯りが灯っていた。
山城空と滝川・クリス・優。
投げ込み前のキャッチボールを行う中で空が話題にあげたのは、クリスから見ておけと言われた昼間の試合。昼間とある理由からその試合を見ることができなかったクリスは、興味深そうに空の話に耳を傾けていた。
「それでお前はその二人についてどう思った？」
「小湊はとりあえず上手かったです。守備もよかったし、バッティングセンスも一年の中じゃ飛びぬけてました。カットとか小技もできそうだし、タイプ的には白河さんに近い感じっすね」
「小湊春市……なるほど、中学から定評があったそのセンスは兄譲りと言うわけか。それでもう一人の方はどうだ？」
ふむと頷き、クリスはボールを投げ返した。

空はボールを受け取ると、「沢村ですか？」と頭を悩ませた。
「沢村はえーと、何て言えばいいのか……」
良い表現が見つからないのか空は言葉に詰まった。
そして考えること十秒弱。
ぽんと、空はグローブを叩いた。
「とりあえずバカです」
「……それをお前が言うのか？」
「いやいや。俺はあそこまでじゃないっよ」
「そうか？　シニアでは野球の知識が足りないお前に随分と苦労させられたがな」
くすりと、かつての空を知る先輩は柔らかな笑みを浮かべた。
まるでからかうような口調に、空はばつが悪くなって頬をかいた。
「まぁとにかく、中々ひどいもんでしたよ。まともに外野フライはとれないし、バットはボールに当たらない。マウンドに上がってもフォームはばらばらだしボールは全部真ん中、その上変化球は投げられない……正直、あれでまともに打たれたのがホームラン一発とヒット一本ってのが信じられないです」

「ナチュラルなムービングボーラーのボールはそれこそナックルにも近い不規則な変化をするからな。打者にとっては対戦経験が殆どない上に、変則サウスポーとなれば打ちにくさは更に増すだろう」

「傍から見てたら簡単に打てそうなんすけどね……」

「打ち辛い球というのは所詮バッターの主観によるものだからな。お前の投げるボールの様に客観的に見ても打ち辛い球もあれば、またその逆もある」

「そういうものっすか……まぁ、ともかく良いものは持ってますけど今の時点じゃ投手として抜けてることが多すぎてあんまり使い物にはならないと思いますよ――――ただ」

「ただ、何だ？」

「誰よりもミスが多くて誰よりも下手でしたけど、今日の試合の中で最も印象に残ったのもあいつでした」

それは嘘偽りのない、空の心からの言葉だった。

クリスは無言で続きを促した。

「周りが諦めてるのに一人声を出して、点差が開いてるのに一点取るために必死で

プレイして、やる気のない一年チームを立ち直らせて……ムービングなんかよりもそっちの方がよっぽどすげぇと俺は思いました」

「……何か思う所でもあったのか？」

「思う所というか……まぁ俺にはないものですからね。チームを背負うならそう言うのもいるのかなって何となく思っただけです」

チームを背負うという言葉が空の口から飛び出たことにクリスは目を丸くし、その目尻を柔らかく緩めた。

「その口ぶりだと俺が試合を見ておけと言った意味がわかったようだな」

「御幸さんに聞いて少しは。けどやっぱ、チームを背負うってよくわからないですけどね。三年生達の気持ちとかも正直あんまりピンときませんでしたし」

「今はそれでいい。これから青道の一員として練習を共にする中で知ることも多くある。そして時が来た時にお前なりの答えを出せばいい」

「はい」

まるで母親が子供を諭すかのような優しいクリスの言葉を空はしっかりと胸に刻んだ。

しばしの間静かな閉じられた空間には、ボールが行き来する音だけが響いた。
そして肩が徐々に温まってきた頃、「そういえば」と空は昼間クリスが試合を見れなかった原因について尋ねた。
「そういやクリス先輩。まだ聞いてませんでしたけど昼間の検査はどうでした？確か今日が一応最後の検査でしたよね？」
「あぁ。今日、ようやく医師からOKが出た」
「それって……」
「あぁ。明日から本格的に練習に参加していいとのことだ」
クリスの話によれば、まだしばらくはこれまで通りリハビリトレーニングを続ける必要があるもののとりあえず肩の怪我自体は完治したとのこと。
目下は錆びついた感覚を取り戻すことに重点を置き、ある程度感覚が戻り次第試合の中でブランクを取り戻していくつもりらしい。
長い長い治療生活が終わったためか、そう語るクリスの顔はいつもよりもどことなく明るく見えた。
「ではそろそろ始めるか……山城、マウンドに立て」

「はい」
「一昨日も言ったが、今のお前の課題は……」
こうしてまた一つ、夜が過ぎていった。

感想、評価待ってます。次の更新予定は未定です。でもできるだけ早く……

8話

気が付けばメインである筈の咲よりも長くなってると言う……

I

5月の初め。あの一年生VS上級生の練習試合からおよそ1週間の時が流れた。まだ新年度が始まって一月しか経っていないにもかかわらず、二軍に二人、一軍に一人と例年にないほど一年の台頭が著しい今年。

しかしそんな期待のルーキー達とて基礎的なメニューは他の一年生と変わりはなく、ランニングやサーキットトレーニングを中心とした徹底した身体づくりメニューが中心。

今日も今日とてグラウンドの周りを走る一年生の集団の後方で、沢村栄純はムスッとした顔を隠しもしなかった。

「ぬぬぬ。毎日毎日走り込み走り込み走り込み……二軍に上がったのにこれじゃあ

これまでと何も変わらねぇじゃねぇか！」

　俺は一軍のマウンドで投げたいんだよと、二軍に昇格して早々不満をぶちまける栄純に共に昇格を果たした小湊春市は苦笑するしかなかった。

「でたね大物発言。でも一軍でベンチを温めるぐらいなら二軍で試合に出た方がまだいいと思うけどなぁ」

「試合？」

「ほら、昨日監督が言ってたじゃん。関東大会が終わったら週末にはダブルヘッダーで試合を組んでいくって」

「そういやそんなこと言ってたような……ところで、ダブルヘッダーってなに？」

「えっ、そこから？　ええっと、ダブルヘッダーっていうのは同じ日に二試合行うことだよ。でも時間とか疲労とかを考えれば流石に一軍が二試合とも行うことはないだろうから、二軍の俺達にも試合に出れるチャンスは十分あると思うよ」

「おぉ！　それってすげぇじゃん！」

「うん。でもまぁ、確かに栄純君の言うとおり一軍で試合に出れたらそれに勝るものはないんだけどね」

そう言って、春市は意味ありげな視線を自身の左側に滑らせた。
そのことに気付いた栄純はぬっと小さく声を上げ、春市を挟んで並走していた一年生唯一の一軍にむっつりとした顔を向けた。
「確か山城君は次の関東大会で投げるんだよね？」
「あくまでも可能性の話だけどな。先発じゃねぇから、丹波さんが好投して最後まで投げ切ったら俺の出番はないし。まぁもしも出番が来たら誰にも打たせる気はねぇけど」
うっすらと額に汗を浮かべて、空は淡々と答えた。
大して緊張も期待もしていなさそうなその口振りの中に垣間見える、己の実力に対する確固たる自負。春市は「もう一人大物がいたよ」と肩を竦めながらも、羨望の念を向けずにはいられなかった。
「でも、例え可能性だとしてもやっぱ羨ましいよ。投手は他のポジションとは違って試合に出られる確率も高いし」
「まぁ、もともと青道はあんまり投手が揃ってるとは言えないしな。逆にあの内野陣からレギュラーを奪い取るのは難しそうだけど」

「うん。だからこそ、やりがいもあるんだけどね。ところで栄純君、さっきから何ぶつぶつ言ってるの？」

「くっ。俺が一軍に上がる前にこいつはもう試合に……いっ、いや、今は敵わなくてもすぐに俺も……」

「まともにセットプレーも出来ない奴が何言ってんだか……寝言は寝て言おうな、沢村」

「なっ!?　ちょっ～～～とだけ俺より上手いからって調子に乗りやがって！　見てろよ、すぐにお前よりも凄い球を投げていずれは剛速球投手として俺の名を全国に……」

「「あー。ないない」」

「そんなハルっちまで!?」

がび～んと栄純が口を大きく開けた時、グラウンドに設置されたアナウンススピーカーから独特の甲高い電子音が零れた。

――――一年沢村、山城は至急三塁ベンチ前に集合。

――――繰り返します。一年沢村と山城は至急ベンチ前へ――――

Ⅱ

ベンチ前で待っていたのは野球部副部長の高島礼、その背後には御幸一也と滝川・クリス・優がプロテクターをつけた状態で控えていた。

はて一体何だろうと頭上に？マークを浮かべた空と栄純に、礼は呼んだ理由を告げた。

「今日から二人には一年全体のメニューと並行して投手陣のメニューもこなしてもらうわ。練習量はこれまでの倍になるけど、がんばってね」

「おぉっ！　ついに俺もブルペンに入る日が！」

「元気がいいわね沢村君。ただいきなりメニューをこなせって言われても難しいでしょうから、しばらく二人にはそれぞれ先輩キャッチャーと組んでメニューを消化してもらうわ。この機会に色々教えてもらってね」

「おぉっ！　何か投手っぽい」

「投手だけどな……俺もお前も。で、クリス先輩と御幸さんがいるってことは……」

「えぇ。今回あなた達と組んでもらうのはクリス君と御幸君よ」
「まじっすか!?」
栄純が驚愕と喜びの入り混じった表情で御幸を見つめている横で、空もまた栄純ほどあからさまではないが内心でガッツポーズ。
学年と所属する軍の違いからこれまで空は就寝前の僅かな時間しかクリスと一緒に練習できなかったが、これからは普段の練習でも一緒に行える。
黄金色の未来に空がわくわくしていると、
「それで組み合わせなんだけど――山城君は来週関東大会で登板があるかもしれないから正捕手である御幸君と。沢村君はクリス君と組んでもらうわ」
「「えっ？」」
驚きの声は二つ。
片や当然憧れであるクリスに受けてもらえると思っていたから、片や知る限り最高の捕手である御幸に受けてもらえると思っていたから。
相手は違えど全く同じことを考えていた両者。
声の被った栄純と空はきょとんと顔を見合わせると、いつもならまず行わないで

あろう握手をがっしりとかわし、揃って高島へと顔を向けた。
「チェンジでっ！」
「できるわけないでしょ……」
はぁと深々と溜息を吐く副部長。
悩める才女の後ろで御幸がケタケタと笑っていると、クリスが口を開いた。
「……山城」
「はっ、はい！」
クリスの声に反応し、空は繋いでいた手を放して背筋を伸ばした。
いつもの緩い姿とは異なる、これまで見たことのない同輩の姿に栄純は驚きを隠せない様子でポカンと口を開けてその姿を眺めていた。クリスは特段語気を強めるわけでもなく、母親が我が子を諭すかのようなゆっくりとした口調で空に語りかけた。
「来週の関東大会で実際にお前の球を受ける可能性があるのは誰だ？」
「……御幸さんです」
「そうだ、俺ではなく御幸だ。ならばお前が今誰と組むべきかわかるな？」

「……はい」

憔悴に頷くと、空は御幸に向かって頭を下げた。

「これからよろしくお願いします」

「お前、本当にクリス先輩の言うこと〝だけ〟は素直に聞くのな」

呆れたとその顔には書いてあったが、空はとりあえず見ないことにした。

ひとまず上手く纏まったやりとりに礼は笑顔を見せた。

「山城君は納得したようね。じゃあ沢村君はどうかしら？」

「えっ？」

「やっぱりクリス君とは組みたくない？」

「お、俺は……」

「沢村。一つ言っておくが、そこにいる人は俺が知る限り最高のキャッチャーだぞ」

「はへっ？」

間抜けな声を出した栄純は一度空の顔を見つめ、そして礼の背後にいるクリスをまじまじと見つめた。

そして穴が開くほど見つめてからまたゆっくりと空の方へと戻す。

「……まじで？」
「まじだ。正直、御幸さんよりもずっと上……いっ、いててぇ！」
「ほほぉ。誰がクリス先輩よりも格下だって？」
ぐりぐりと、比較対象にあげられた御幸が空の右耳をねじりながら引っ張った。
その表情には笑みこそ張り付いているものの、笑っていない目と額にくっきりと浮かび上がった青筋がその心理状態を如実に表していた。
空は徐々に強くなる痛みに呻きながらも、その言葉を訂正することはなかった。
「じ、事実を述べただけ……」
「言うじゃねぇかルーキー。一度お前には上下関係ってものを教えてやらねぇとなって思ってたところだ」
「く、クリス先輩助けて……」
耳を引っ張る力がさらに強くなる。
このまま行けば本当に耳が引きちぎられるのではないかと、空は半分涙目で最も頼りにする先輩に救助を求めた。
「……御幸」

そして後輩からの救難要請を受けた先輩はため息と共に御幸の名を呼んだ。
やっぱり頼りになるのはクリス先輩あなただけです、どこまでも着いていきますと空は自分の想いが届いたことに目を輝かせ、
「――――とことんしごいてやってくれ。どうも山城は俺以外の上級生をどこか軽んじる傾向があるからな」
「クリス先輩～!!」
輝きは一瞬にして真っ黒に染め上る。
クリス先輩に裏切られたと、がくりと項垂れた空にはすぐ近くのはずの御幸の笑い声がどこか遠く聞こえた。
そんな一連のコント染みたやり取りに礼はクスリと笑みを見せ、
「色々な経験を積むためにも、しばらくすればまたバッテリーは入れ替えるつもりよ。だからそれまでの間、しっかりね」
「任してくれよ礼ちゃん。二週間でこいつに年上への口のきき方ってものを叩き込んでやるから」
「いや、それが必要なのは俺よりも副部長にちゃんずけのあんたの方じゃ……」

「ほら行くぞ、後輩。今からセットプレーとサインの確認して、ブルペンで投げ込み。寮に戻ったら純さんのマッサージがあるんだからな、もたもたしてる時間はねぇぞ～」
「人の話聞いてねぇし！　つーか、最後のは練習と関係ないし」
「ほら。早くいくぞ」
「やっぱクリス先輩カムバ～ック！」
空の叫び声が虚しく響いた。

Ⅲ

状況は２対２で７回裏、ノーアウトランナー一塁。
打順が下位であるということと、バッターが既にバントの構えをしていることから内野はそれに備えたシフトを引いている。
カウント１―０。空は一度背後のファーストランナーを目で牽制し、セットポジションからボールを投げた。

威力を抑えた高目のストレートが寝かされたバットに当たる。
勢いの死んだ球が土の上を転がるが、その方向はピッチャー正面。
「ボールセカン！」
投球と同時に走り出していた空は半身でボールをグラブに納めると、御幸の指示に従いそのまま上半身の捻りを利用して二塁へとボールを投げた。
ランナーがベースに到達するよりも早く矢のような送球が二塁ベースに入ったショートのグラブに収まり、続いて一塁ベースのカバーに入ったセカンドへとボールは回される。
グラウンドに高々と響く二つのアウトコール。
状況は一瞬にして2アウトランナーなしへと変わった。
――ナイスプレー、山城！
――今の感覚を忘れるなよっ！
――バッター！　バントするならもっといい場所に転がせよオラぁっ!?　いくら勢いを殺してもピッチャー正面じゃ意味ねぇぞ！
――よし、次川上入れっ！

活気ある声がグラウンド中を飛び交う。

一先ずの役割を終えた空は礼の言葉と共に帽子のツバに手をかけ、ベンチ前から走ってくる川上憲史と入れ替わる形でマウンドを後にした。

ふぅと息を吐きながら投手陣の待機場所であるベンチ前で水分を取る空に、宮内へと番を譲った御幸は「流石だな」と内心で賞賛の声を上げた。

……流石は丸亀シニア出身。一軍に上がってから初めての実戦形式の守備練習だってのに随分とスムーズに動けてやがる。

全国でも有数の強豪シニアに所属していただけあって、基本的なセットプレーやカバーリングの動きはしっかりとしている。

まだ一軍の空気に慣れていないために微妙な呼吸のずれこそあるものの、この分で行けば関東大会までには十分修正できる。

嬉しい誤算だと、御幸は組み上げていたスケジュールを脳内で訂正する。

……前に哲さん達を抑えたことから見ても、ボールの質そのものは問題ねぇ。セットで投げても十分試合で通用する。課題はクイックだが、これは一朝一夕で改善できるものじゃねぇな。後はいざ試合になった時にどこまで自分の力を発揮できる

か……

これぱかりは実際に試合をやってみないとわからない。

色々不安な部分はあるが、それを差し引いてみても期待の方が遥かに大きい。

……こっちは比較的順調。さて、あっちの二人はどうなっていることやら。

Ⅳ

ストレッチを始めてからおよそ15分。

沢村栄純はそろそろ限界に来ていた。

最早十分すぎるのではないかと思えるほどほぐした左腕を更に伸ばしながら、栄純はくるりと顔を隣で同じ様にストレッチを行うクリスへと向けた。

「あの～。ちょっといいっすか？」

「何だ？　腕が終わったら次は足だ」

「あっ、はい……じゃなくて！　俺は一体いつになったらボールを投げれるんすか？」

「不満か？」

不満だと反射的に言いそうになるのを栄純は何とか抑え込む。

栄純とクリスが組んでから今日で3日目。

その間に栄純がしたことと言えばストレッチや走り込み、内幹を鍛えるトレーニングなど地味でボールを使わない基礎的な物ばかり。まともにボールを投げたのは組んだ初日にブルペンで投げた5球ほどしかない。

……これじゃ今までの練習と変わらねぇよ！

と心の中で叫んでみるが相手は上級生。

いかんいかんと落ち着こうとするものの、やはり溜まった不満はなかなか消えない。

……俺がこんなことをしている間にもあいつは――

ギリッと、奥歯を噛みしめ表情をこわばらせた栄純にクリスは小さく鼻を鳴らした。

「お前の考えていることをあててやろうか？」

「えっ？」

「どうして山城がブルペンで毎日ボールを投げているのに自分は基礎トレーニングばっかりなのか……そんなところだろ？」

「なっ！　それがわかっているなら……」

「無駄だ。今のお前がブルペンで何百球ボールを投げこんだ所で何の意味もない。単なる時間の浪費だ」

「っつ！」

余りの言いように思わず頭に血が上る。

最早上級生だからとかの考えは栄純の中には一切なく、ただ感情の赴くまま掴みかかろうとクリスのユニフォームに左手を伸ばし――――

「……投手としての自覚があるなら利き腕を使うな」

あっさりと、その伸ばした手を掴まれる。

大きな掌で手首を掴まれた左手は栄純がどれだけ力を入れても微動だにせず、その拘束から抜け出すことができない。

……この人いったいどんな握力してんだよっ!?

栄純が驚いて動きを止めると、クリスはその掴んでいた左腕を離した。

どこまでも冷めた目が栄純の全身を射抜く。

「この３日間、お前の投手としての能力を見てきた。片、肘、手首の柔らかな関節に長い指。なるほど投手としてはいいものを持っている」

「い、意外に高評価……」

「だがそれだけだ。お前は体の使い方……特に下半身の使い方が全くなっていない。ほとんど草野球のピッチャーと同じ手投げだな」

「そんなことは……」

「ないか？　だが３日前に受けた５球はそうだったぞ。１球目と４球目は右に、残りの球は左にと一球ごとに体の軸が前後左右にぶれるためにフォームが安定せず、ボールに力が乗り切らない。今のままボールを無闇に投げ込んだところで大した進歩は見込めない」

……たった数球でそこまで見ていたのかよ。

淡々とした口調から述べられる解説に栄純は驚きを隠せなかった。

栄純の脳裏に空から言われた言葉がよぎる。

――――そこにいる人は俺が知る限り最高のキャッチャーだぞ

「今のお前に必要なのは短期的な視点からのトレーニングではなく、今後を見据えた長期的な視点からのトレーニングだ。サーキットトレーニングや走り込みを中心とした基礎的なトレーニングを積み重ねることで半年先、一年先に向けた体を作る。本格的にブルペンでボールを投げ込むのはそれからだ。理解したか？」

理論だった説明に栄純はぐぅのねも出ない。

単なる嫌がらせではなくしっかりと自分に合ったメニューを組んでくれていた以上、黙ってそのメニューに従うのが最良なのだろうということは、あまり考えるのが得意ではない栄純にもよくわかった。

わかったけれど、納得できるかどうかはまた別の話だった。

「……確かに先輩の言うことはわかるっす。このメニューが今後の俺のためだってのも……それでも」

「それでもなんだ？」

「それでも、それでも俺は半年とか一年後とかじゃなくて今すぐマウンドに立ちたい！」

栄純は真っ直ぐクリスの視線を受け止めた。

その余りにも強い意志の籠った目の裏に隠された焦燥に、クリスは眉を寄せた。
「……無理に焦った所で怪我のもとにしかならない。なぜそんなにも焦る？　お前にはまだまだ時間がある。秋大会に照準を合わせてしっかりとトレーニングを続ければお前にも十分チャンスは……」
「俺はっ！」
諭そうとするクリスの言葉を栄純の叫びが遮った。
「俺はエースになるためにこの青道に来たっす。だけど、今エースの座に近いのは悔しいけど俺じゃねぇ。今の俺じゃああいつには――山城には敵わねえ。でもだからこそ、これ以上差を広げられるわけにはいかない！」
「……だから山城がマウンドに上がるなら、自分も上がりたいと？」
こくりと頷いた栄純にクリスはこれみよがしに「はぁ」と大きなため息をついた。
「なるほど。山城が言ってた通りバカだな、お前は」
「んなっ!?」
「シニアの頃から質の高いトレーニングを積んできた山城とお前とではそもそも投手としての段階が違う。無理に追い付こうとした所で無駄だ――といったとこ

ろで、納得するわけがないよな」

　ぶんぶんと壊れたおもちゃの様に首を縦に振る後輩にクリスはさっきよりも更に大きいため息をついた。

「……いいだろう。ブルペンで実際にボールを投げさせてやる。条件付きでだがな」

「まじっすか!?　って、条件？」

「あぁ。今週末に関東大会が始まるのは知っているな？」

「えっ、そうなん……って、いや知ってますよ！」

「……知らなかったのか、まぁいい。うちが初戦で当たる横浜港北学園は神奈川の名門。守備力を売りにしているためさほど打線が強力なわけではないが、恐らく今の状態の丹波では最後まで投げ切ることはまず無理だろう。となれば必ずどこかで山城がマウンドに立つ機会がくる」

「あいつが……」

「そうだ。そしてその山城の投球を見てもまだエースになりたいと思っていられるなら、ブルペンでボールを投げさせてやる」

　どんな無理難題が来るのだろうと構えていた栄純はクリスの言う条件を聞き、きょ

とんと眼を瞬かせた。
「思っていられるって……それだけでいいんすか？」
「あぁ」
「なぁ～んだ。簡単じゃないっすか」
楽勝、楽勝と気楽に笑う栄純。
クリスはそんな余裕綽綽な後輩に何かを含んだ笑みを浮かべた。
「あぁ、楽しみにしている……」

ようやっと次は関東大会。サクサク行きたいな～（できるかは別にして）。
感想・評価待ってます。

9話

少し遅れましたが9話です。
ようやく関東大会までこぎつけた……

0

関東地区高等学校野球大会。
その名の通り、関東の8都府県の代表校が出場する地方大会である。
毎年春と秋の年二回行われるこの大会は地方大会でこそあるもののその認知度は高く、特に事実上春の選抜予選となっている秋季大会（東京都は除く）の重要度と盛り上がりは夏の本戦に次ぐとさえ言われている。
しかしそんな選抜のかかった秋季大会の一方で、春季大会の重要度というのはさほど大きなものではない。優勝したからと言って夏の本戦が有利になるわけでもなければ、全国大会に出場できるわけでもない。あくまでも夏の本戦前のエキシビ

ジョンマッチというのが正直なところである。しかしそんな大会だからこそ、多くの高校が新戦力を試しそこから新たなヒーローが生まれもする。

春季関東大会一回戦。横浜北学園VS青道高校。

横浜北学園の先行で始まった試合は当初投手戦の様相を見せ、一進一退の攻防が続いたものの終盤にして形成は横学へと傾き始めた。

８回表、それまで横学打線を２点で抑えていた青道の先発丹波が先頭打者にヒットを許すと、続くバッターにフルカウントからのフォワボール。ノーアウトランナー一二塁と塁が埋まった所で横学がエンドランを仕掛け、見事二番川崎がそれに応えてライト前へタイムリーヒット。

これにより点数は２対２から３対２へ。

勝ち越しを許した丹波は続く三番を何とか内野フライに打ち取るものの依然ランナーは残り、一アウト一、三塁。

次が四番ということを考えれば、一気にビッグイニング――それこそ勝負が決まりかねない重要な局面。

当然、そのことは一塁側青道ベンチとてわかっていた。

「か、片岡監督、やはりここは投手を変えた方がいいのでは……」

ベンチの中で唯一ユニフォームではなく、白いカッターシャツにスラックスという異なった出で立ち。裏方の事務を本分とする野球部部長としては監督の領域に余り踏み込むべきではないと知りつつも、太田一義は口を出さずにはいられなかった。

「丹波にも疲れの色が見えますし、次は前の打席に丹波からヒット打っている四番。やはりここは丹波に代えて川上を出すべきでは……」

既に川上の準備は出来ていますと、監督である片岡に川上をアピールする太田だったが当の片岡は無反応。難しい表情で腕を組みながらマウンドに集まる青道内野陣を見つめると、その重い口を開いた。

「……確かに丹波はそろそろ限界だな」

「おぉ！　ではやはり川上に交代を!?」

いやと、片岡は太田の言葉を否定した。

「――山城で行く」

「えぇっ！　山城ですか!?　いや、初めての公式戦でこの局面からというのは幾らなんでも……」

「……行けるか、山城」
それまでマウンドに向けていた顔を片岡は右斜め後方へと回した。
その視線の先にあったのは一人の戦士。
直前までブルペンで投げ込み、既に臨戦態勢を整えていたその少年は待ち侘びたとばかりに頭にかぶっていた白いタオルを放り捨てた。
「いつでも」

Ⅰ

――青道高校、投手の交代をお知らせします。８番、丹波君に代わりましてピッチャー山城君。ピッチャー山城君。
場内に流れた交代を告げるアナウンス。
そこに出てきた名前に球場は大きくざわついた。
――山城空？　おいおい。この場面で一年とか、青道は試合を諦めたのか？
――ばかっ、知らねぇのかよ！　あいつ、全中で優勝した山城だぞ！

――丸亀シニアの山城か……もしかしたら出てくるかもしれないとは思っていたが、まさかこんな場面で出てくるとはな。

――いや、いくら何でも公式戦初登板でこの場面はねぇだろっ！　青道の監督はいったい何考えてるんだ!?

ざわざわと収まるどころか波紋の如く広がり続けるスタンドからのざわめき。好奇の視線を一身に受けながら、山城空は丹波と御幸が待つマウンドへと上がった。

「お疲れ様です、丹波さん」

ねぎらいの言葉に丹波は何も返さなかった。

悔しそうに俯き、無言のまま空のグローブにボールを入れるとそのまま一塁側ベンチへと体を向けた。

「……後を頼む」

「はい」

ぼそりと呟いた言葉を最後に、丹波はベンチへと戻っていった。

丹波の後ろ姿を見送ると、空はさてと御幸の顔を見た。

青道の正捕手は半ば苦笑気味に肩をすくめた。
「随分と派手なデビュー戦になったな」
「いいじゃないっすか、派手な方が。ほら、これ抑えたら俺ヒーローだし」
「……緊張はしてないみたいだな。ルーキーのくせに相変わらず可愛げがないっつーか……やることはわかってるな？」
空はコクリと頷いた。
「力で捻じ伏せる」
「わかってるじゃねぇか。ランナーは気にしなくていい。だから全力で投げ込んで来い」
ぽんと空の胸をミットで叩き、御幸はキャッチャースボックスへと戻っていった。
それから数球の投球練習を終え、バッターが右バッターボックスに入るのをもって試合が再開する。マウンドで御幸のサインを待つ間、視界の端にバッターの力の入った顔が入り空はくすりと心の中でえくぼを作った。
……一年が舐めんなよって顔だな。
まぁ実際バッターにしてみれば、こんな試合を決めかねない場面で一年投手が出

てくれば舐められていると感じてもおかしくない。
意地でも打ってやると言う気持ちがバッターの顔から簡単に読み取れた。
……でも悪いっすね、先輩。
出されたサインに頷き、空はセットポジションへと入る。
同時、世界が変わる。
かつて、武士が刀を抜くことでその身体を戦闘用へと作り変えたように、山城空もまた15歳の少年から投手へと変貌する。
……高校に入ってから初めての試合。キャッチャーがクリス先輩じゃないなのは残念だけど……。
――――打たせるつもりはねぇ！
セットポジションから投げられたのは空の基本にして決め球、ストレートという名の四シームジャイロ。唸りを上げて突き進むそのボールは打者にバットを振らせることなく、インハイに構えていた御幸のミットへと突き刺さった。
――――ストライク！
審判のコールと共に一段と大きくなるざわめき。

けれど最早外野の余計な騒音は空の耳には届いていなかった。
御幸からボールを受け取ると、空は殆ど間を置くことなくモーションへと入った。
二球目も初球と同じストレート。
同じようにインハイへと投げられたそのボールは、打者を嘲笑うかのように振りぬかれたバットの上を通過してミットを鳴らす。
――――ットライク・ツー！
打者の顔がさっきまでとは逆の意味で強張っていくのが、マウンドにいる空にはよくわかった。こういう場合、打者に考える時間を与えてはいけないことも。
ボールを受け取ってすぐ空がセットに入ると、「タ、タイム」と打者が間を明けた。
バッターボックスを離れ、大きな軌道でバットを振る横学の四番。
一見四番らしい長打狙いのスイングながらも、ちらりとその眼が横学ベンチに向いたことに空は気付いていた。
ふぅ吐息を吐いた打者がバッターボックスに戻り、プレイが再開する。
「こいやおらぁ！」

……叫んでる割にはさっきまでの何が何でも打ってやるっていう感じがねぇな。

一アウト一、三塁で一点差。守備がいい横学にしてみればここはどんな形でもいいから後一点追加点が欲しい場面。そして御誂え向きに三塁ランナーは俊足の一番。

空がキャッチャーの判断を仰ぐと、御幸は一つ頷いてサインを出した。

その強気なサインに空の顔に笑みが零れる。

特に牽制を入れることもなく、空がセットポジションから左足を前方へと踏み出すと同時、塁を埋めていた二人のランナーが一斉にスタートした。

「スクイズっ!!」

サードの増子が声を上げる。

バッターは既にバットを寝かせ、バントの構えに入っていた。

……やっぱりな！

やっぱり来たかと、空は自分の読みが正しかったことを悟る。

ボールは未だリリース前であり、その気になれば強引にでもウエストすることは出来た。

けれどあえて、空はウエストしなかった。
投じられたボールはほとんどど真ん中。
ホームベースへと一直線に突き進むそのボールは待ち構えていたバットに当たる――――ことはなく、その直前で鋭く下方へと進路を変えた。
「なっ!?」
打者が声を上げ慌ててバットの軌道を修正しようとするが時既に遅く、バットの下をくぐり抜けた白球はキャッチャーのミットへと収まっていた。
――――ットライク！　バッターアウト！
主審の三振を告げるコール。
けれどそれを聞き終えるよりも早く、御幸はマスクを投げ捨て三塁へと走っていた。
スクイズのためスタートを切っていた三塁ランナーは慌てて三塁に戻ろうとするが、させんとばかりに矢のような送球が三塁へと走る。
「ショート！」
「ヒャッハー！」

三塁ベースカバーに入っていた倉持が御幸からの送球を受け取り、タッチアウト。
一アウト一、三塁というチャンスは一瞬にして三アウトチェンジへと変わった。
ダブルプレー。
それも何かも殴り捨てた四番のスリーバントスクイズを阻止しての三振ゲッツーに、球場は大きな興奮と歓声に包まれた。
――――うぉおお！　まじかよっ!?　スクイズ失敗の三振ゲッツー!?
――――しかも四番！　これはでかい！
――――なんで横学は強硬策で行かなかったんだ？
――――これは青道に流れが行くぞっ！
ざわめくスタンドを耳に入れながら、小走りでベンチへと戻る空。
そんなスーパールーキーを先輩達は手荒い祝福で出迎えた。
「ヒャハハハ。三振ゲッツーとか出来過ぎじゃねーかコノヤロウ！」
「ナイスピッチ」
「出来過ぎだオラァ！　でも調子に乗るんじゃねぇぞコラぁぁ！」
「純さん痛い！　まじで痛い！」

いてて と叩かれた背中をさすりながら空がベンチに入ると、一足先にベンチに戻りヘルメットを被った結城が出迎えた。
「よくやった山城。後は俺達に任せろ」
「お願いしま～す、キャプテン」
「あぁ。任せておけ」
バットを片手に、結城はバッターボックスへと向かった。
この八回裏、四番から始まった青道打線は横学の投手を捉え逆転に成功する。
そして最終回、マウンドに上がった空は五番から始まった横学打線を三者連続三振という文句のつけようのない完璧なピッチングを持って完全にシャットアウト。
結局、横浜北学園VS青道高校は３対４という結果を持って青道の勝利に終わった。
同時にこの勝利は、多くの観客達、そして関東の猛者たちに対し〝山城空〟という名前を刻みつけることとなった。
山城空の公式戦デビューは、こうして華々しいものとなった。

Ⅱ

9回表2アウト、打者のバットが空を切り三振のコールが審判から告げられる。
そしてそれは同時に、この試合の決着をも表していた。
マウンドで勝利を喜び合う青道ナインと同じく、スタンド席でもまた関東大会初戦の勝利に大きな歓声が沸き起こっていた。
耳をつんざくような音の中、その勝利の歓声に交じることもなく沢村栄純はただただ茫然とスタンドからグラウンドを見つめていた。
「見たか？　あれが山城空だ」
背後からかけられた言葉に、栄純はゆっくりと振り返った。
そこにいたのは栄純と同じく、スタンドから試合を見ていた滝川・クリス・優。
「最速152キロの真っ直ぐに、140キロオーバーの落ちる球。多少コントロールが甘くなる場面もあったが、それでもほぼきっちりと御幸が指示したコース通りに投げていた。殆ど文句のつけようがない完璧に近いピッチングだったな」
「あいつ、練習の時と……」

「迫力が違うか？」

栄純はゆっくりと首を縦に振った。

これまで栄純が空のピッチングを直に見たことは数えられる程しかなかったが、それらと比べても今日の試合で見せたそれはこれまでと違っていた。

特段球速が上がったわけでも、コントロールがよくなったわけではない。

けれどスタンドから見ていてた栄純がはっきりとわかるほど、練習で見せた空の投球と試合のそれとでは格が違っていた。

「本人曰く無自覚らしいがな。試合のマウンドに立つと、自然とギアが上がるらしい。わかるか沢村？　青道でエースを目指すということはこれから三年間、そんなあいつと競い合うということだ」

「あいつと……」

栄純の脳裏に浮かび上がる、圧倒的な力。

相手チームの心をへし折り、仲間を鼓舞するピッチング。

それは正に、栄純が思い描く『エース』のピッチングそのものだった。

ぐっと拳を握りしめる栄純に、クリスは小さく息を零した。

「この際だからはっきりと言うが、俺はこの先三年間お前がエースになることはないと思っている」
「っつ！」
「お前に才能がないとは思わない。むしろ、投手としてだけ見るならいい素質を持っている。例年の青道ならばいずれはエースになれたかもしれない。けれど、山城がいる限りそれはありえない」
それぐらい山城は特別なのだと、クリスは言った。
突き放す宣告に、でもと栄純は声を荒げた。
「でも、俺だって努力すれば！」
「努力すればいずれは追い抜けるか？　なるほど長い目で見れば確かにその可能性は０とは言えない。けれどそれは、少なくとも青道でではない」
「なんであんたにそんなことがっ!?」
「わかるさ。キャッチャーとして山城の才能を誰よりも知るからこそ、俺にはわかる」
かつての天才捕手は何かを思い出すかのように瞼を閉じ、ゆっくりと開いた。

「短い期間ではあるがお前のエースに対する意気込みは俺もある程度理解しているつもりだ。そのためにオーバーワーク気味の努力をしていることもな。けれどそのままエースの座に固執し、山城に追いつくために無茶な努力を続ければ未だ土台が出来ていないお前の体は間違いなく壊れる。下手をすれば二度と取り返しがつかないほどにな」

それは栄純を思っての言葉。自身の体験を踏まえ、才能ある後輩には己と同じ様になってほしくないからこその忠告だった。

「沢村は沢村、山城は山城。何もエース一人で野球をするわけじゃない。エース一人ですべての試合を投げ切ることが出来ない以上、控え投手の存在はチームにとって重要なものとなる。それにお前の野球人生は未だ始まったばかり。これからゆっくりと体を作り、焦らず自分のペースで成長していけばいい」

わかるなとクリスは後輩の肩に手を置いた。

栄純は俯き、返事をしなかった。やはりそう簡単に心の整理はつかないかと、返事はまた後日に改めようかとした時だった。

ぽつりと、俯いた栄純の口から音が零れた。

「……クリス先輩」
「なんだ？」
「先輩が俺のことを思って言ってくれたのは本当にありがたいっす。中学じゃあ俺が野球部の皆を引っ張ってたから、こんな風に言ってくれる人もいなかったし」
でも、やっぱすみませんと栄純は深々と頭を下げた。
そしてゆっくりと頭を上げた時、クリスの顔を見つめるその瞳には強い意志が込められていた。
「俺、やっぱりエースになりたいです」
「……さっきも言っただろう。下手に山城に追いつこうとすれば怪我のにしかならないと。もしも変な憧れでエースを目指しているようなら……」
「そうじゃないっス！　確かに、最初は田舎のみんなを置いて青道にきたからエースにならなきゃって……でも今日あいつが試合で投げてるのを見て、クリス先輩から話を聞いて。俺、わかったんです」
「何をだ？」
「俺、みんなの想いとか関係なしにエースになりたいんだって。エースじゃなきゃ

嫌なんだって。って、俺何言ってんだろ」

問いの答えになっていない答え。

栄純自身も自分の言った言葉の意味を理解していないのだろう。

あれ、あれ？と頭を抱える後輩に先輩捕手は助け舟を出した。

「つまり、自分のわがままな思いだけでエースになりたいと？」

「え、えっと、その……はい」

しゅんと小さくなる栄純に対し、クリスは苦笑せずにはいられなかった。

「随分と自己中心的な考えだな。気持ちだけならエース級かと思っていたが、まさか超エース級だったとはな。先輩捕手の忠告を無視とは恐れ入る」

「うっ」

「だが、山城も含めウチの投手に欠けているものであるのもまた確か。監督が見込んだのもその辺りか」

そう言って何やら思案を初めてしばらく。

観念したとばかりにクリスは息をついた。

「……いいだろう、ブルペンで投げさせてやる」

「へっ？　今何と？」
「関東大会が終わり次第、ブルペンでボールを投げさせてやると言った」
「よっシャアアア！」
もうこれ反対側の三塁側スタンドにも聞こえているんじゃね？といわんばかりの歓喜の叫びが、スタンド中に響き渡った。
それまで勝利の余韻に浸っていた一塁側スタンドはがやがやと別の意味で騒がしくなり、近くにいた青道野球部員のみならず関係のない一般の観客までもが栄純とクリスを振り返った。新入部員紹介の時とは比べ物にならない数の視線を浴びながら、早まったかもしれんとクリスは今日何度目になるかわからないため息をついた。
羞恥心で仄かに頬を赤く染めつつ、クリスは試合の終わったグランドに視線を落とした。
「……待っていろ山城。俺も必ずそこに行く」
しかしその前に隣の後輩を黙らせようと決心したクリスなのであった。

ちょっと文章に納得いってない部分も多いので、また後日書き直すかもです。
感想・評価待ってます。

10話

関東大会編終了〜。原作で言う所のコミックス 4 巻編に突入。いや、ほんと夏の予選に入るまで長い……

I

春季関東大会の日程は夏の本戦や秋大会と比べて酷く変則的で、開会から閉会まで僅か五日間の間に全ての試合が行われる。そのため勝ち上がった高校は翌日には次の試合が待っており、決勝まで進むとなれば五日間の間毎日試合をこなさなければならない。このいっそ猟奇的ともいえるほどのハードな日程はそれぞれの高校に単なるベストメンバー九人の能力だけではなく、ベンチも含めた総合力を問うものとなっている。

さて初戦を劇的な逆転勝ちで勝利した青道高校は勢いそのままに二回戦も無事突破を果たしたものの、続く三回戦では惜しくも勝利を逃していた。

余り重要度の高くない春季大会とは言え敗北は敗北。
本来であれば多少なりとも暗い雰囲気がチームを包むものであるが、どういうわけか試合に敗れた日の夜、青道高校の監督室は随分と明るい空気に満ちていた。
「いやぁ。今日の試合は惜しかったですな～。春のベスト16相手に後一歩まで追いつめたんですが……」
悔しいですなと言いながらも、その表情は随分と明るいものだった。
後一本出ていれば逆転でしたのにと、筒状に丸めた春季大会のプログラムをバットの様に振るう太田に高島礼は柔らかな表情で同意を示した。
「そうですね。敗れこそしましたが収穫も多い試合だったと思います。打線は相変わらず好調でしたし、何よりも丹波君がしっかりと試合を作れたというのはチームにとって大きな収穫かと」
「えぇ！　あの千川相手に七回三失点！　八回からマウンドに上がった川上も点数こそとられましたが、それでもいいピッチングだったんじゃないんでしょうか、監督！」
太田の同意を求めるような眼差しに、片岡鉄心はふんと鼻を鳴らし右手に持った

煙草に口をつけた。ふぅと吐き出された灰色の煙が立ち上り、部屋の端に設置された換気扇へと吸い込まれ消えていく。

「一昨日、そして昨日の試合が試合だったからな。丹波と川上――特に丹波には感じるものがあったんだろう」

「あぁ。山城ですか。確かにすごかったですなぁ～」

山城が登板した二日間の試合を思い出し、太田はうんうんと深く頷いた。

一昨日、横学戦ではピンチから登板し相手の勢いを完全にシャットアウト。

そしてまさかの先発として登板した昨日の二回戦では強豪作前学院相手に六回まで一塁すら踏ませぬパーフェクトピッチング。終盤の疲れから浮いた球を捉えられ一点こそ失ったものの、それでも全国でも定評のある作前打線相手に九回一失点とは上出来を通り越して完璧とさえいえた。

これぞ正しくエースと言わんばかりの大活躍。

そんなスーパールーキーがもたらした弊害に礼は苦笑した。

「昨日の試合の後は大変でしたね。殺到する記者陣に、練習試合を希望する電話の嵐。OBの方達からもお祝い代わりの選別を頂きましたし、一部では気の早いプロ

のスカウトも動いているとか」
「プロもですか!?　それはすごい！」
「クリス君や御幸君の時も注目度は高かったですが、山城君はそれ以上かと。夏の大会でもきっと我が青道の重要な戦力になってくれると思います」
「復調してきた丹波に川上、そして山城……苦しかった投手事情が一気に解決したんじゃないんでしょうかこれは！」
　試合の余韻が未だ残っているのだろう。
　鼻息を荒げ、投手王国の立国を謳う太田に片岡が「いや」と待ったをかけた。
「確かにいささかの目途は立ったが、まだ夏までは時間がある。それまでに投手陣がどこまで調子を上げて行けるかが甲子園に行くための鍵になる」
「そうですね。それに関東大会ほどではないとは言え、タイトなスケジュールの予選を勝ち上がっていくには投手三人ではいささか不安かと」
「とは言っても高島先生。二軍にあの三人ほどの投手は……」
「いずれにせよ、本戦まであまり時間がない。最後に残っているのは誰になるか……」
　夏の本戦まで、あと２か月。

Ⅱ

――山城君、この前の作前学院との試合ではいきなりの先発だったけど緊張はなかったのかな？

――九回一失点、これについての感想は？

――数多の勧誘を蹴ってまで青道に来た理由は？

――やましろく～ん。視線、こっちに貰えるかな？

――ちょっ！　押すなよ！

――取材時間が限られてるんだ！　ありきたりな質問しかできないなら下がってろ！

――なに！

山城君、山城君と連呼される名前に飛び交うシャッター音。

青道高校野球部のグラウンドの隅はまるで、ちょっとした記者会見場になっていた。

そしてそんな報道陣に囲まれる芸能人の如く、記者達の中心にいるのは先日鮮烈

なデビューを果たしたルーキー山城空。
　数多のカメラや年上の記者に囲まれながらも堂々としたその佇まいは、ある種の貫録すら漂っていた。
　そんな同級生の姿を、栄純はブルペンから唸りながら見ていた。
「ぐぐぐ。山城の奴、ちやほやされやがって！　しかも何か妙に慣れてるし！」
「シニアの時から取材には慣れているからな。それよりしっかりと肩を作れ」
「でも！」
「……止めるか？」
「投げます！」
　せっかく掴んだブルペンで投げる機会を失ってたまるかと、栄純は慌てて山城から視線を切りボールを投げた。いつものように球持ちのいいフォームから放られたボールが、立っていたクリスのミットを鳴らす。ふむとそのミットから伝わる手応えにクリスは声を漏らし、ゆっくりとボールを投げ返した。
「今の内に聞いておくが沢村、お前は自分の長所が何かわかっているか？」
「長所っすか？」

「そうだ。丹波なら長身を活かしたカーブ、川上ならば低めのコントロール、そして山城ならば伸びのあるジャイロボール……良い投手というのはそれぞれ自分だけの持ち味というものを持っている。そしてまたなければ試合に勝つことは難しい。ではお前の持ち味はなんだ？」

「俺の持ち味……」

栄純はボールを投げる手を止め、

「なんすか？」

「少しは自分で考えろ……」

あっさりと考えることを放棄したバカな後輩にクリスはため息を漏らした。

「ヒントを出そう。この前の二軍との練習試合、お前は４回４失点だったそうだな」

「えっ、あっ、はい」

「ウチの打線は二軍でも強力。並の投手ではそれこそあっという間に炎上するだろう。ではなぜ四隅に投げ分けるコントロールがあるわけでもなく、ＭＡＸ１３０にも満たない真っ直ぐしか投げられないお前がその程度の失点で済んだと思う？」

「そりゃやっぱり気持ちで負けなかったからで……」
「気持ちだけで抑えられたら練習はいらない。お前の投げるボールと他の投手の投げるボールの違いはなんだ？」
他の投手との違いと言われ、栄純の頭に真っ先に浮かび上がった投手はやはり山城空だった。
……あいつと俺の違い。
最初に栄純が空との差を思い知らされたのは、かつて共に行った遠投。
空がノーステップかつ低いライナーでボールをフェンスまで届かせたのに対し、ステップを入れて山なりに投げた栄純のボールはフェンスまで届かなかった。
いや届かなかったどころか――――
――――まともに真っ直ぐにも投げられないのにか？
山城に言われたことを思い出し怒りで体を震わせる栄純だったが、あれと何かに気付く。
そして思い出す。中学時代、何故かみんなが自分とキャッチボールをしたがらなかったことを。青道に入っての練習初日、監督に言われた遠投試験でボールがどう

いう軌道を描いたのかを。

……もしかして俺の持ち味って。

「気付いたようだな」

クリスの言葉を呼び水に栄純は思考の海から戻った。

そしてクリスの顔を伺うと、そうだと頷いた。

「柔軟な関節と球持ちの良い投球フォームに毎球異なるリリースポイント。そんな変則的な投げ方がボールに様々な回転をかけ、打者の手元で微妙に変化するクセ玉を生み出す。綺麗なバックスピンを至上とする日本じゃはっきり言って、投手と名乗るのもおこがましいクセ球だな」

「お、おこがましい」

「だがそのクセ球こそがお前の武器」

「クセ球が俺の武器……」

「そうだ。速い球を投げれないお前がエースを目指すならそのクセ球を磨き上げる以外に道はない。そのためにも前にも言ったように投げる際の軸を安定させる必要がある」

栄純に構えるよう指示を出し、クリスはマスクを被って腰を下ろした。
ベース板の上、ストライクゾーンど真ん中に茶色いミットが構えられる。
「とは言え、言葉で説明するよりも実際に投げた方が早い。左足に体重を乗せることを意識してボールを投げてみろ」
……左足。
言われた通り、栄純は軸足である左足に注意を払いながらボールを投げた。
足元に注意を払い過ぎたために少し高めに浮いたものの、乾いた音が栄純の耳を打つ。
なかなか良いんじゃないかと内心で手応えを感じる栄純だったが、実際にボールを受けたクリスは首を横に振った。
「全く駄目だな」
「んがっ!?」
「まだ軸がぶれている。軸足に体重が乗り切ってない証拠だ……そうだな、一度右足をもっと高く上げて投げてみろ」
「右足を？」

「そうだ。コントロールは気にしなくていい、限界まで高く上げろ」
それが一体何になるのかと疑問符を浮かべつつ、栄純は投球動作へと入った。
振りかぶって右足を後ろに引き、
……限界まで上げる！
勢いのついた右膝が顔につかんばかりに高く上げられる。
その瞬間、ストンと何かが噛みあうのを栄純は確かに感じた。
「っておぁああ!?」
だがその感覚もつかの間、栄純はバランスを崩し半ば上半身を前に突っ込む形でボールを放した。
まともに腕を振りぬかないで投げられたボールはミットが構えていた場所から大きく外れ、クリスの背後にあるネットへと突き刺さる。
結果だけを見れば大暴投もいいところ。
けれど、
「いま、確かに一瞬……」
「左足に体重が乗ったのがわかったか？」

こくりと栄純は頷いた。
それでいいと、クリスはマスクを外し下ろしていた腰を上げた。
「左足に体重がしっかりと乗れば自然と軸は安定してくる。そしてその状態で体重移動をスムーズに出来れば力のある――お前だけの暴れる球が投げられる」
「俺だけの……」
「今の感覚を忘れるなよ」
「って！　何帰ろうとしてるんすか!?」
ブルペンの出口にすたすたと向かうクリスを慌てて呼び止める。
呼び止められた本人は「うん？」と体は出口に向いたまま首だけを栄純へと向けた。
「まだ何か用か？」
「いやいや。俺の球を受けてくれるんじゃあ……」
「受けただろう？　二球も」
「えー」
「俺にも自分の練習がある。それに前にも言っただろう？　無闇にボールを投げて

も意味はないと。しばらくはこれまで通りサーキットトレーニングを中心に行え。そしてボールを投げたくなったらそれを使え」

クリスの指差したのはブルペンに設置された休憩用の小さなベンチ。

そしてその上に置いてあるのは、

「タオル？」

「シャドウピッチング。これから毎日ブルペンでボールを投げさせてやるが、身体の軸が安定するまではそれほど球数は投げさせない。だからそれ以外の時はボールの代わりにタオルを使ってシャドウを行え、さっきの感覚を意識してな」

これまでやったことがないためか、シャドウピッチングにどことなく懐疑的な表情を浮かべる栄純だったが軸が安定してきたら徐々に投げる数を増やしてやるとクリスが告げると、わかりやくすやる気の炎を滾らせた。

単純なやつだとクリスは肩をすくめた。

「それと、全体練習を見て思っていたがお前は野球の知識が足りなさすぎる。投手というのは単にボールを投げるだけではない。セットプレー、クイック、牽制、覚えることは山ほどある。本を読めとは言わないが、せめてプロ野球でも見てもっと

野球について学べ」
「うっ!?　でも野球はやっぱ見るよりもやるもので……」
「エースになりたいんじゃないのか？　山城は見ているぞ（嘘）」
「よっしゃ。メジャーリーグっすね！」
「プロ野球と言ったんだが……まぁどっちでもいい」
何となくこいつの扱い方がわかってきたなと思いながら、クリスはブルペンを後にした。

Ⅲ

陽が西へと沈み空が茜色から薄い黒へと染まる頃。
本日の練習を終えたばかりの青道高校野球部の専用グラウンドは緩やかな空気に満ちていた。球児達は練習中の張りつめた精神を解きほぐし、昼間の授業で出された課題や昨夜見たバラエティー番組何かの話題で盛り上がる。
背中越しから聞こえて来るそんな他愛無い会話を耳に入れながら、クリスは蛇口から流れ落ちる水流を両掌ですくい顔を洗った。

「ふぅ」

汗を流し落とし、柔らかいタオルで顔の水滴を取る。

ほっと一息を突きながらクリスは今日の練習を思い返していた。

……シャドウを始めさせてから1週間、少しずつだが沢村の軸も安定して来たな。

これまで変に指導を受けてこなかったのが功を奏したのか、それとも本人の素質ゆえなのか。ブルペンでボールを受けた初日と比べれば随分と軸を安定させてボールを投げれるようになっていた。また誰かから教わったのか、グローブを潰すようにして上半身にタメを作る新たな投球フォームも軸を安定させることに一役買っていた。

……まだ新フォームに慣れていないせいでコントロールが荒いが、軸さえ安定していれば自然とストライクはとれるようになる。三日後のことも考えれば、明日からはもう少しブルペンで投げさせるか。

軸が安定して来たことで前以上に暴れるようになったムービングボールに、タイミングの取り辛い変則フォーム。コントロールなど不安な部分も多いがそれでも対

戦する打者にとっては厄介なボールであることに間違いはない。
後は三日後の試合でどこまで自分の力を発揮できるか。
山城と丹波というエース候補が二人もいる以上、その試合の結果次第で沢村栄純が夏の大会に出られるかが大きく変わってくる。
……いや、沢村を心配するよりもまずは自分か。
思わず、自嘲する。
三日後に迫った狛代高校との練習試合。クリスもまた、栄純と同じくその試合でおよそ一年振りとなる実戦復帰を果たそうとしていた。
すっと、クリスはつい先日完治した右肩に左手を置いた。
……肩の調子は問題ない。
だが肉体的には完治していようとも、感覚的なものまではすぐには戻らない。
万全だった頃の感覚に少しずつ戻り始めているとは言え、不安なく試合に出られるかと言われれば首を横に振らざるを得ない。出来ればもう少し時間が欲しいというのがクリスの嘘偽りのない正直な気持ちだった。
……とはいっても、このチャンスを逃すわけにはいかない。

5月の中旬に差し掛かった今、三日後のチャンスを逃せば次に試合に出られる可能性があるのは下旬に入る翌週以降。

いやそもそも、一年近くも練習を休んでいた身にそのチャンスが巡って来るかどうかさえわからないのだから、何が何でもクリスは次の試合で実力を示す必要があった。

……一軍への昇格枠は全部で四つ。

今の所先週の練習試合で結果を残した小湊が一歩リード。次点で一軍の経験がある山崎と遠藤が続き、その後に一発のある前園が続いている。

なかなか厳しいなと苦笑するも、その顔に諦めの色はなかった。

もう少し残って練習するかとクリスが決めたその時だった。

「クリス」

「丹波……」

呼ばれ、振り返ったクリスの目に飛び込んできたのは良く知った顔だった。

青道の元エースにしてクリスと同じ三年生、丹波光一郎は驚くクリスに黒いタオルを見せた。

「ちょっといいか？」

勢いよく振られたタオルが黒き線となった小さな弧を描いた。

黒き半円は風を押しのけ、びゅっと鋭い音を鳴らす。

丹波は息を吐くと、それを見ていたクリスへと顔を向けた。

「どうだ？」

「右肘が下がっている。恐らくは疲れによるものだろうが、そのフォームだと肘を痛めかねない」

「右肘か……」

呟き、丹波は再びタオルを振った。

人気のなくなったグラウンドの端で風を切る音だけが何度も何度もリピートする。

腕を組みながらそれを眺めていたクリスは、懐かしいなと頬を緩めた。

「しかし久しぶりだな。お前がこうしてフォームを見てくれと言ったのは。確か最後に言ったのは二年の夏頃だったか？」

クリスの言葉に丹波は返事をしなかった。
ただひたすら、青道の元エースはタオルを振るう。
そして黒き線が描く弧の数が１００を超えたあたりで、ようやく口を開いた。
「……三日後の二軍の試合。お前も出るそうだな」
「うん？　あぁ、監督から聞いたのか？　先発が沢村だからな。指導を任された身として俺も先発のマスクを被る予定だ」
「……結果は残せそうか？」
「さぁな。随分と実戦から離れていたからな。実際に試合に出てみないと何とも言えないというのが正直なところだが――――」
ふわりと、クリスは笑った。
「それでも結果を出して見せるさ。でなければ一軍には行けないからな」
「……それは山城のためか？」
「うん？」
「一軍に行きたいのは山城とバッテリーを組みたいからか、クリス」
一体何を言っていると口にしかけて、クリスは寸前の所で飲み込んだ。いつ間に

か丹波はシャドウピッチングを止め、真剣な眼差しでクリスの顔を見つめていた。
だからこそ、クリスもまた正直に己の気持ちを述べた。
「あぁ、そうだ。俺は山城のボールを受けるために一軍に上がる」
「……そうか。今日は付き合ってもらってすまなかったな」
短く礼を述べると、丹波はくるりとクリスに背を向けた。
遠ざかっていく後ろ姿がいつになく小さく、クリスには見えた。

感想、評価待ってます

11話

I

私立青道高等学校。
かつて幾度となく甲子園に出場しその名を全国に知らしめてきた野球の名門校。
ここ最近は甲子園を逃しているとは言え、それでも紛れもない西東京3強の一角。
今年こそは甲子園へという期待から毎年週末ともなれば多くのOBや記者達が選手を一目見ようとグラウンドに詰めかけるのだが、今日ばかりはその規模がいささか異なった。
見渡す限りの人、人、人。
5月に入って3度目となる日曜日のこの日。
青道高校Aグラウンドの周囲は今年最大の人の波によって埋め尽くされていた。
下はまだ父親の肩に乗せられた小さな子供から上は杖を突いた老人まで。
単なる練習試合だというのに老若男女を問わず集まった彼らのお目当ては、マウ

ンドで投げているたった一人の投手。
中学から高い実績を残し、入学後瞬く間に一軍へと駆け上がったルーキー。
かの松坂大輔や江川卓、桑田真澄といったかつての甲子園のスター選手達にも匹敵しかねないとさえ一部の記者達から噂される、怪物の卵。
そんな今話題のスーパールーキーは噂に恥じないだけの投球をこれでもかとばかりに見せつけていた。
――――ットライク！　バッターアウト！　チェンジ！
今日何度目になるかわからない審判のコールにギャラリーから大きな歓声と拍手が沸き起こる。ギャラリーの声に応える様に山城空は軽く帽子の唾を掴むと、マウンドを降りて守備陣と一緒にベンチへと戻っていく。
無数のシャッター音とフラッシュの嵐を通り抜けてベンチに腰を下ろした空がふぅとタオルで汗をぬぐった時、空の目の前にスポーツ飲料の入ったペットボトルが差し出された。
「ほらよ」
「あっ。どうも」

短い礼の言葉を述べて空がペットボトルを受け取ると、プロテクターを外した御幸は空の隣に腰を下ろした。
「球の走りは悪くねぇな。ボールが外野に飛んでこねぇって純さんが叫んでたぞ」
「そうっすか……」
「次の回からあっちも3巡目。流石に何か対策を練ってくるだろうが、特に配球を変えるつもりはねぇ。このまま力で押していくから、とりあえず甘くならない様にだけ気を付けろ」
「はい」
打ち合わせというよりも簡単な確認を終え、空はペットボトルに口をつけた。
渇いた口内に広がるスポーツ飲料独特の甘い味を味わいながら、ちらりと空は視線を一塁側のネットへと向けた。ベンチに戻ってくる度、どことなく落ち着かない後輩の様子に御幸は苦笑せざるを得なかった。
「そんなに二軍の試合が――――クリス先輩の試合が気になるか？」
「そりゃまぁ……」
Aグラウンドで青道の一軍と帝東の試合が行われている同時刻、Bグラウンド

でもまた青道の二軍対狛代高校の試合が行われていた。注目度はＡグラウンドのそれと比べるまでもないが、空にとってはある意味自分の試合よりも大事な試合でもあった。

「まっ。確かに今日の試合の出来次第で夏に出れるかが大きく変わるからな。いくらあの人でも久々の試合で結果を残せるか何てわからねぇし、お前の気持ちもわからなくはねぇよ」

けどなと、御幸は語気を強めた。

「今は試合中だ。クリス先輩のことは試合が終わってから考えろ」

「……うっす」

「安心しろ。お前に心配されるほどクリス先輩は軟じゃねぇよ」

何せ俺が憧れている人だからなと、ニヒルに御幸は笑った。

Ⅱ

Ａグラウンドで青道の一軍と帝東の試合が行われている同時刻、ここＢグラウンドでもまた青道の二軍と狛代高校による練習試合が行われていた。

もっとも、例え同じ練習試合であってもその注目度は天と地ほどもの差があったが。

Aグラウンドが数えきれないほど数多の観客に囲まれ無数のフラッシュと歓声の中で試合が行われているのに対し、Bグラウンドの試合を観戦しているのは二十人にも満たない。

観客の数が全てでないとは言え、やはりどうしても寂しいという印象は拭えない。

試合のレベルもAグラウンドに比べれば見劣りするが、だからこそ個人の放つ輝きが一段と強く見えもするのもまた事実だった。

5回裏、狛代高校の攻撃。

1アウトランナー一塁でバッターは下位打線の8番。

カウントは2―1とバッター有利。

マウンドの沢村栄純は一つ息を吐き、セットポジションから右足をホームベース方向へと踏み出した。

――――ランナー走った！

同時、一塁から声が飛ぶ。

沢村がモーションに入ったと同時に切ったランナーのスタートは、およそ完璧に近かった。本来ならばこうなった段階でバッテリーの負けは半ば決まっている。けれどその敗北を、ホームから放たれた一筋の矢が覆す。

本塁から投じられた剛速球がセカンドベース前に置かれたグローブを揺らし、それに遅れて滑り込んできたランナーの右足がそのボールの入ったグローブへと触れる。

ランナーが目を見開くと同時に審判が右手を上げた。

――――アウトっ!!

本日三度目となるその光景に、少ないながらも歓声が飛んだ。

――うぉお！　また刺したぞあのキャッチャー！

――これで三個目！　狛代って確か機動力が売りのチームだろ!?

――御幸以外にも青道にあんなキャッチャーがいたのか!?

――つーか、何であれで二軍なんだよ！　どう見ても一軍クラスだろ！

まばらにざわつく場外と気持ちを同じくして、狛代のベンチもまた唖然とした表情でホームへと視線を注いでいた。視線を注がれた当の本人は特に大きな反応を見

せることもなく、指を立てた右手を大きく掲げた。
「２アウト！」
キャッチャー――滝川・クリス・優の力の籠った声に守備陣もまた「２アウト」と繰り返し、内野をまわったボールが投手である沢村の元へと戻る。
ボールを受け取った栄純はよっしゃあと声を荒げた。
「これで２アウト！　つーか、クリス先輩まじですごくないっすか!?　単に口うるさい先輩じゃなかったんすね!?」
「……いいから早く投げろ沢村」
「おらぁ沢村！　先輩に向かってその口のきき方はなんじゃ！」
「ちょっと良いピッチングしてるからってあんまり調子にのるなよ！」
「栄純君、山城君に聞かれたら怒られるよ」
一部本当に味方なのかと思うような野次を受けながら、栄純は投球動作へと入る。
ランナーがいなくなったことで大きく振り上げられた両腕に、高く上げられた右足。
右足が前方に大きく踏み出されてから遅れて左腕が振り下ろされ、１２０キロ前

半から中盤のまっすぐがホームへと向かう。
　一年の春先にサウスポーで１２０中盤が出れば上等の部類ではあるが、１４０キロを超えるマシンのボールを打ち込むことを常とする現代高校野球から見れば打ち頃のボールもいいところ。
　だというのに、
――――あぁ、またひっかけた。
――――これで何人目だ？
――――何であのボールが打てないんだよ。ほとんど真中へのまっすぐじゃねぇか。
　バットの芯を外したボールがショートへと転がる。
　緩く転がったボールをショートが難なくさばいて３アウトチェンジ。
　スコアボードにまた新たな０が一つ刻まれた。
――――これで５回が終わって２対０で青道がリードか。何か意外な展開になったな。
――――あぁ。正直青道の先発が一年って聞いた時はもっと荒れた展開になると

思ってたんだが。

――――まさかの無失点だもんな。

――――狛代も決して弱いチームじゃないんだがなぜかあの投手を捉えられてないよな。

――――あの一年ピッチャー、名前なんて言ったっけ？

――――さわむら……そう！　沢村栄純！

全くのノーマークだった一年投手の思いもよらぬ活躍に、観客席と狛代ベンチがにわかに騒がしくなる。そしてそれは青道ベンチもまた同じこと。

叫びながらベンチへと戻ってきた栄純に二軍の先輩達はうるせぇと声を荒げつつも、そのピッチングに関してだけは認めざるを得なかった。

一軍の試合で指揮を務める片岡鉄心の代わりにベンチに入った高島礼もまた、栄純の好投にすっと目を細めた。

……まさかこんなに早く結果を出すなんてね。

もとより栄純に才能があることは知っていた。

だからこそ礼自身が遠方まで足を運びこの青道へと招いたのだから。
けれど、こんなにも早く目に見えた結果を出すとは予想していなかったのもまた事実。
礼は手元のスコアブックに目を落とした。
……５回が終わって被安打２、四球２の失点０。
毎回の様に内野の頭を超えるポテンヒットやファワボールなどでランナーこそ出すものの、キャッチャーと厚い守備陣の助けを受けて未だ失点はなし。
小気味いいテンポを重視したピッチングは対峙する打者に考える暇を与えず、それが青道の攻撃のリズムにもつながっている。
……そしてその沢村君のポテンシャルを引き出しているのは間違いなくキャッチャー。
幾らポテンシャルがあろうとも、それを発揮できなければ意味はない。
それが伸び伸びと力を発揮できているのはキャッチャーのリードがあってこそ。
……さすがはクリス君ね。一年ぶりの試合だというのにほとんどブランクを感じさせないわ。

礼は感嘆の息を漏らさずにはいられなかった。

クリスの凄さ。それはミットを構えるコース一つとっても感じることが出来る。

通常キャッチャーというのは打たれたくないという習性から比較的コーナーに構えがちだが、まだまだ発展途上で細かなコントロールがあるわけじゃない沢村に対して四隅のボールを要求したところで投げ切れるはずもない。

むしろコントロールを意識するあまりに腕が振りきれず、持ち味であるムービングが失われる可能性すらある。だからこそ、あえてクリスはきわどいコースには構えずテンポを重視させることで相手打線に淡白なバッティングをさせている。

……沢村君の球質と今の段階を完璧に把握したうえでのリードに動くボールを難なく捕球するキャッチング技術、そして先程見せた強肩。

打撃面では三打数一安打と、守備面に比べればまだまだ本調子ではないようだがそれでもしっかりと結果を残している。

……まだ一試合――それも途中までとは言え素晴らしい活躍。

練習試合で結果を残しつつある小湊春市も含め、ここに来て一軍への昇格争いに滝川・クリス・優と沢村栄純の二人の名が新たに加わった。

より熾烈になるであろうチーム内での競争に礼は人知れずそっと笑みを浮かべた。

Ⅲ

「――――これが、ここまでの練習試合の結果と各選手の成績です」

そう言って、礼は片岡と太田に資料を渡した。

A4用紙10枚程からなる紙束を受け取った太田はそこに記載された詳細な記録に驚きの声を漏らしつつじっくりと目を通し、片岡は無言のまま紙をめくっていった。

毎週のように組まれていた練習試合もその殆どを消化し、２軍のそれ一試合のみを残すこととなった６月の初旬。空に黒いカーテンがまかれた頃、今日も今日とて首脳陣三人は監督室に集まっていた。

「御覧のように、今日の試合で一軍は予定通り全７試合を消化。レギュラーメンバーは勿論、控えメンバーもここまで良い活躍を見せています」

「みな順調なようですね、監督！」

「あぁ」

「野手に関してはやはり結城君が飛び抜けた数字を出していますが、他にも増子君や坂井君もいい成績を残しています。門田君のバッティングが不調なことを考えれば、一度レフトを入れ替えるのもいいかもしれません」

「あぁ。合宿終わりの練習試合では一度坂井をスタメンで試すつもりだ」

その後もいくつか一軍の野手陣に関する報告がなされるが、さほど重要な事柄はなくすんなりと終わる。もとより青道の野手陣は全国の強豪チームのレギュラーとも引けを取らない粒揃い。

監督である片岡も含めた首脳陣の三人ともさほど大きな心配はしていなかった。

問題なのはと、太田は手元の資料を一枚捲った。

「う〜む。やはりデータを見ても山城が頭一つ飛び抜けていますな」

「ここまでの3試合を投げて3勝無敗。24イニングで被安打は5、奪三振40の失点は僅か2。関東大会での成績も含めれば、通算防御率は0・78。対戦校が全て全国クラスという訳ではありませんでしたが、それでもこの成績は素晴らしいものかと」

「丹波や川上も決して悪くはないんですがなぁ……」

悪くないどころか、丹波に関して言えばここまで入部以来最も安定した成績を残している。防御率も３試合に登板し２点台前半と上々で、例年ならば間違いなくエース番号を与えられる程の活躍。しかし、山城の活躍の前にはどうしても掠れてしまう。

うーんと唸る太田を尻目に、高島はくいと眼鏡を上げた。

「私はやはり山城君にエース番号を与えるのが良いと思っています」

「えっ!?　いくら成績を残しているとは言え、まだ一年生の山城にエースの座を与えるのは幾らなんでも荷が重いんじゃ……それにそれではこれまで頑張ってきた三年生達の気持ちが……」

「チームのことを考えれば、最も良い投手にエースナンバーを与えるのは当然かと。ウチが実力主義であることは部員の誰もが理解している筈です」

「たっ、確かにその通りだが……片岡監督はどうお考えですか？　やはりエースの座は山城にと？」

太田と礼の視線が片岡へと集まる。

それまで紙面に顔を落として二人の議論を聞いていた片岡監督が、顔を上げた。

「……ウチは実力主義。一年であろうとエースに相応しいのであればエースナンバーを渡す。そのことは今の三年とてわかっていることだ」
「では、やはり山城に……」
「確かに純粋な実力だけで見れば山城は俺が求めるエース像に最も近い……が、あいつにはエースとして足りないものがあるのもまた事実」
「足りないもの……ですか？　それは一体……」
「――エースの座への執着心ですね」
疑問符を浮かべた太田に礼が答えを提示した。
片岡は深々と頷き、資料を置いてタバコに火をつけた。
「山城は実力面でいえば間違いなくウチの投手の中でもトップ。だがあいつには、何が何でもエースになろうという気持ちがない。あいつのモチベーションは良くも悪くもクリスだ。例え背番号が何番だろうと大して構いはしないだろう」
「た、確かに……」
山城がクリスのために数多の誘いを蹴ってまで青道に来たというのは有名な話。クリスを慕って高校を選んだだけあって、実際に入学してからも山城はクリス

にべったり。所属する軍が違うために練習中常に一緒ということはないが、それでも練習後毎日のように室内練習場や寮の裏の空き地で一緒に自主練習している二人の姿を部員達は幾度となく目撃している。

「実力はあっても、エースとしてチームを背負う自覚がないならばエースの座は与えられん。その点でいえば、これまでエース番号を背負っていただけあって丹波にはその自覚がある」

「では、丹波君に……」

「だが、山城がエースに相応しい実力と成績を示しているのもまた確か。川上も含め誰にエースナンバーを渡すかは合宿の結果を含めて俺が決める。それでいいな？」

「はい。問題ありません」

「わ、私も監督が決めることならば異存はありません」

よしと片岡が頷き、一軍の話はそこで終了。

続いて残る一軍昇格枠４つを巡って熾烈な競争を繰り広げている二軍へと話題は切り変わる。

「今の所、二軍の選手で目に見える活躍を納めているのは六名です。上級生を抑え二軍で最も高い打率を残している小湊君、安定した守備力で外野を支える山崎君、パンチ力のある打撃を見せる遠藤君、率こそ低いですが長打力がある前園君」

そしてと、礼は少しだけ口元に笑みを浮かべた。

「二軍の投手の中で最も防御率が良く、負け星がない沢村君。抜群の守備力と二軍で最も高い得点圏打率を残しているクリス君、以上六名になります」

「沢村とクリスですか？　いや、クリスはまだわかりますがあの沢村が……」

「そう言えば太田部長は沢村君の試合をご覧になったことはなかったんでしたね。捕手であるクリス君の力が大きい部分はありますが、沢村君はこれまで殆どまともなヒットを打たれていません。出所の見えないムービングボールは夏の大会でも大きな武器になるかと」

「ほぉ」

「またブランク明けのクリス君も非常にいい成績を残しています。守備は勿論のことバッティングも試合を重ねる毎に成績が良くなってきていますし、試合勘が完全に戻ればまた昨年までの様に一軍でもクリーンナップを任せられると思います」

なるほどと感心しながら、太田は紙面に目を落としクリスと沢村の成績に目を通していく。一軍への昇格枠は残り四つ。

つまり、先に礼が挙げた六人の内最低でも二人は落とされるという計算。

また礼が触れなかった二軍メンバーの中にも優れた選手はたくさんいる。

一体誰を一軍に上げて、誰を落とすのか。

片岡はふぅと口内に溜まった灰色の煙を吐き出し、少し短くなった煙草を灰皿に置いた。

「明後日の国士舘戦。今あげた六名は全員スタメンで出場させる」

「ぜ、全員ですか？」

「……絞り込みですね」

「あぁ。最近の国士舘は随分と調子を上げていると聞いている、試合での活躍を見て誰を一軍に上げきるかを決める」

最後の練習試合まで後二日。

誰が上がり、誰が落ちるのか。

夏が始まるのか、終わるのか。

二日後、全てが決定する。

次でようやく国士舘戦……大会まで長いです。あと、もしかしたら次の話でちょっとだけマネージャー（誰とは言わない）が出るかもです。

感想・評価待ってます。

P。S　ダイヤのエースの二次小説が少なすぎて泣いている今日この頃です。

誰か書いてくれないかな～（チラッ

12話

国士舘戦スタート。予定では次の話あたりで一軍メンバーが決まります。つーか、本当に夏大会までが長い……

P・S　けっこう急いで書いたんで、もしかしたら文章や内容がおかしなところがあるかもです。もしもあったら報告お願いします。

I

日に日に増えていく雨の日の数が梅雨の訪れを感じさせる六月の初旬。

ここ最近続いていた不安定な天気と肌に纏わりつくような蒸し暑さから打って変わって、新しい月に入ってから初めての週末を迎えた東京には眩いばかりの日差しが燦々と照りつけていた。もしかしたら昨日作ったテルテル坊主が効いたのかなどと頭の隅で考えながら、少女はその大きな瞳に映る光景に声を漏らした。

「ほわぁ。二軍の試合なのに本当にたくさんの人ですね」

すごいですと感嘆の声を上げたのは吉川春乃。
くりりとした大きな瞳と愛嬌のある顔立ちが特徴的な高校一年生の少女だった。
念願かなって今年の春先から青道高校野球部のマネージャーを務めることになった彼女は、未だ慣れない大勢の観客に圧倒されていた。
まるでお上りさんの様な春乃の反応に、藤原貴子は小さく笑みを零した。
「二軍とは言え今日の試合の結果で大会のメンバーが決まるわけだからね。一軍の試合もないし、このぐらいの人は集まるわよ」
艶やかなストレートの黒髪に少し切れ長の瞳。
可愛らしいと言うよりは美人という言葉が似合う少女、藤原貴子は同じマネージャーを務める先輩として後輩に「早く慣れておかないと大変よ」とアドバイスを送る。
先輩からの忠告に春乃は元気よく頷いた。
「はい！　頑張ります！」
「その元気が変な方向に向かなきゃいいんだけど……でも確かに、今年はいつもよりちょっと人の数が多いかも知れないわね」

「それってもしかして、前に先輩達が話していた山城君効果ってやつですか？」
「多分ね」
山城空が入部したことで例年よりも青道高校野球部を見に訪れる人の数が増えたことを、マネージャーの間では山城効果と呼んでいた。
青道高校に興味を持ってくれた人数が増えたことはマネージャーとして単純に喜ばしいものだったが、同時にそれは弊害ももたらしていた。
「そう言えば今日も他の学校の女の子に聞かれましたよ。山城君は出るのかって。出ませんって言ったら、せめてこれだけでもってプレゼントを私に押し付けて帰っちゃいましたけど……」
「ほとんどスター扱いね。ファンの子達を整理するこっちの身にもなってほしいものだわ」
アンニュイ気に、貴子はため息をついた。
あまりに過激ならば教師が出張るとは言え、基本的に行き過ぎたファンの暴走を止めるのはマネージャーの領分。
最上級生に位置する貴子はその責任感の強さと相まって自然と山城のファン達と

向き合う機会が多く、４人いるマネージャーの中で最も山城効果の被害を受けていると言えた。

どことなく哀愁すら漂ってきそうな先輩の姿に、春乃は慌てて両手を振った。

「だ、大丈夫ですよ貴子先輩！　今日は確か一軍のメンバーは室内練習場に籠って練習ですし。前みたいなことにはならないですよ！」

「だといいんだけどね……」

「なにか不安なことでもあるんですか？」

「いえ、少しね」

どことなく含みのある言葉に春乃はきょとんとするが、何でもないわよと苦笑を浮かべ貴子は両手を合わせた。

「さぁ。そろそろ戻りましょう」

「あっ。それなら大丈夫ですよ、貴子先輩」

「えっ？」

後輩からの思わぬ提案に驚く貴子に、春乃は笑みを見せた。

「貴子先輩、最近山城君のファンの子達の相手とかで働きづめじゃないですか。だ

からせめて今日ぐらいは休んでもらおうって、唯先輩と幸子先輩が」
「そう。二人ともここにいないと思ったら……」
「はい！　唯先輩はドリンク作り、幸子先輩は備品の確認をしています！」
マネージャーの仕事が残っている中、わざわざ春乃がここまで貴子を連れ出したのも貴子に仕事をさせないためだった。
せっかくの後輩達の思いやりを無下にするのも忍びないと、貴子は柔らかく微笑んだ。
「そう。なら今日は任せようかしら」
「はい！　任せてください！」
「……あなたが一番心配なのだけどね」
「ひどいですよ～」
「冗談よ。じゃああありがたく休ませてもらうわね」
悪戯っぽく笑って、グラウンドに背を向ける貴子にあれと春乃は首を傾げた。
「貴子先輩、試合を見ていかないんですか？」
「見るわよ。でもこれだけ人が多いと、ここからじゃあちゃんと試合が見れないで

しょ？　スコアボードすら見えないし、別の場所で観戦することにするわ」
「別の場所ですか？　それって……」
「ふふ。内緒よ」
同性でも見惚れてしまいそうなほど綺麗な笑みを見せて、貴子は歩き出した。

Ⅱ

青道高校は市街地から少し離れた、東京にしては珍しい閑静な住宅街の中にある。野球部のＡグラウンドの外野に張られた巨大なネットを超えると芝生の張られた小さな土手が広がり、その奥にはまだ真新しい洋風の家が広がっている。
春乃と別れた後、学校指定のジャージ姿のままで土手を訪れた貴子は、踏み締める懐かしい芝の感触に目を細めた。
……ここに来るのも久しぶりね。
昔から貴子はこの土手から試合を見るのが好きだった。
小さい頃、父親に連れられて試合を見に来てからというもの貴子は青道高校の

ファンとして週末になってはこの芝に腰を下ろし、陽が暮れるまで野球部の練習や試合を観戦し続けた。実際に貴子自身が青道高校に入学し、マネージャーとして野球部に直接関わるようになってからは芝に腰を下ろす機会も極端に減ったが、それでも思い出の場所であることに変わりはない。

……さてどこに座ろうかしら。

バックネット裏や内野のネット裏ほどではないが、この外野席にも多くの観客達が詰めかけ腰を下ろして目の前の試合を観戦している。

どこかいい場所はないかと貴子が周りを見渡すと、とある一か所だけぽかりと場所が空いていることにきがついた。イヤ、より正確に言うならばとある人物を中心にした５メートルほどの円の中に無人の空間が出来上がっていた。

……なにあれ？

円の中心にいるのは、端的に言って不審者。

徐々に夏を迎えようとしているというのに分厚いコートで身を包み、口元を大きなマスク、目元をサングラスで覆い隠している。

いまどき漫画でも見ない典型的な怪しい人物だった。

ひとまず監督の片岡に報告しようと思い立った貴子だが、コートの胸元からチラリと見えた紺色のアンダーシャツに思いとどまる。

そして体格や未だ幼い顔の輪郭を踏まえた上で情報を整理すると、一人の人物像が浮かび上がり深々と息を吐いた。

……まったく、こんなところで何やっているのかしら。

最早何のためらいもなく、貴子はその不審人物の元へと歩いていく。

周りの人たちが遠巻きに注目しているのがわかってもう一つため息をつきたくなるのを我慢し、貴子は不審者の隣へと腰を下ろした。

「こんなところで何をしているのかしら？」

周りに聞こえないよう小声で話しかけると、不審者は初めて隣に誰かが座ったことに気付いたようでびくりとその身体を震わせた。ぐるりと怪しさ満点の顔を左に向け、声の主を確認するとあからさまに安堵の息を零した。

「なんだ貴子先輩か……」

「なんだとは失礼ね、なんだとは」

貴子が目尻を釣り上げると、すみませんと小さく笑って不審者――もとい山城

空はサングラスをずらして目元を露にした。
茶目っ気を含んだ黒い瞳に毒気を抜かれ、貴子は小さな肩を落とした。
「また練習を抜け出してクリス君の試合の観戦？　先週も同じことをして監督に怒られてなかったかしら？」
「いや、そうなんすけど……やっぱり気になるじゃないですか？」
「あなたのクリス君好きも筋金入りね……それで、その恰好は何？」
「なにって、変装ですよ。ほら、先週練習着で観戦してたら人に囲まれるわ騒ぎを聞きつけた監督に怒られるわで大変だったじゃないですか。けどこの格好なら俺だってバレないでしょ？」
「そうね。山城君とはわからないわね」
ただ余りにも怪しすぎて警察に通報されるかもしれないけどと、貴子は心の中で呟いた。
まさに完璧の変装と自分の今の格好に何の疑いも抱いていない後輩に、貴子は一抹の不安を覚えずにはいられなかった。
……今度クリス君に相談してみようかしら。

本気でそんなことを貴子が思っていると、「そういえば」と空がマスク越しに遅ればせながら疑問の声を上げた。
「なんで貴子先輩がこんなとこにいるんすか？　もしかしてサボリ……」
「お生憎様。出来のいい後輩たちに休むよう言われたから、どうせならここで試合を見ようと思っただけよ」
「なーんだ」
あからさまに声のトーンを一つ下げた空に、残念だったわねと貴子は余裕の表情。つまらげに空が顔をグラウンドへと向けるのを同じくして、貴子もまた眼下に広がる試合へと意識を向けた。
「それで。今試合はどうなっているのかしら？」
「1―0で3回の裏。ウチの攻撃っす」
「1―0？　沢村君が打たれたの？」
意外な展開に貴子は驚いたような声を上げた。
本日青道の二軍と対戦している国士舘高校と言えば、10年ほど前までは東東京においてベスト4の常連だったが近年はかつての勢いはなく古豪と言った所が精々。

二軍とは言え、ここまでの練習試合で好投を続けてきた沢村が先制点を取られたことも驚きならば、小湊春市やクリスといった一軍候補のメンバーが多数打線にいながら未だ得点を奪えていないこともまた驚きだった。

「みんな調子が悪いのかしら？」

「調子はそんなに悪くないと思いますよ。ここから見ててもちゃんとバットを振れてますし。ただ……」

すっと空は目を細めた。

「それ以上にあっちの投手がいいだけです」

「投手が？」

貴子は目を凝らしてマウンドにいる選手を見た。

遠く離れた外野席からでもはっきりとわかる、帽子から零れ落ちるド派手な金髪。

見覚えのないそのシルエットに貴子は首を捻った。

「一年生……ではないわよね？　体格もいいし。でも、去年の練習試合であんな金髪の投手が国士舘にいたかしら？」

「クリス先輩と同じで最近怪我から復帰したみたいですよ？　ったく、ブランク

明けだってのに相変わらずボールは速いし、スイングは鋭いし……ほんと変わってない」

「あら？　知り合い？」

「前、俺やクリス先輩と同じチームにいた人っすよ」

「山城君とクリス君と同じチーム？　ということは……」

「財前直行。俺と同じ丸亀シニアにいた人で……かつてクリス先輩とバッテリーを組んでいた人です」

右手で頬杖をつき、むっつりとした顔で空はそう言った。

Ⅲ

大きな弧を描いて、ゆったりとしたスローカーブがホームベースへと向かう。

ストレートに的を絞っていたバッターはタイミングが合わず、力の抜けたスイングで何とかバットにボールを当てようとするもそれは叶わなかった。

バットの下をくぐったボールがキャッチャーミットへと収まり、審判は腕を上げた。

――――ストライクっ！　バッターアウッ！　チェンジっ！

三者連続となる三振ショーに観客席が大いに盛り上がる中、まんまと投手の術中にはまった前園は「くそっ」と胸中に溜まる感情を吐き出した。

ハイタッチを交わしながら意気揚々とベンチへと引き上げていく国士舘ナイン。青道のベンチ前でグローブを嵌めたまま「ぬぬぬ」と唸りを上げる栄純の頭を、クリスはミットで軽くはたいた。

「気負うなよ、沢村」

「クリス先輩……」

「お前に与えられたノルマは次の４回まで。点は取られたが内容自体は決して悪くない、気を抜かずに最後まで投げ切れ」

「うっす！」

気合一つ、栄純はマウンドへと飛び出していった。

まだまだ元気が有り余っている後輩に半ば呆れながら、クリスはベンチへと引き

上げる金髪の投手に目をやった。
……財前。
口元に小さな弧を浮かべ、クリスもまた自分の戦場へと向かった。

◇

「うぉおおおお！」
咆哮を上げ、栄純は左腕を振り下ろした。
スピードこそないものの力の籠ったボールがストライクゾーンに向かい、打者のバットを振らせた。鈍い金属音の後、引っ掛けたボールがセカンドへと転がる。
セカンドの守備に就いていた小湊春市は楽々そのボールを裁き、また一つアウトカウントが灯る。4回の表、国士舘高校の攻撃。
この回二番から始まった好打順も、青道の先発沢村栄純の前に凡退を喫しあっという間に2アウト。暗い顔で一塁からベンチへと戻る三番バッターに、ネクストサークルで出番を待っていた国士舘の4番――財前直行は明るく声を上げた。

「まったく、情けねぇなお前ら！」
「財前……」
「やっぱこのチームは俺が甲子園に連れて行くしかねぇな！」
大股でバッターボックスへと向かう財前に、栄純は顔を強張らせた。
クリスもまた、マスクの下で「来たか」と呟く。
――――来たぞ！
――――あぁ。初回にタイムリーを打ったバッターだ！
――――後数センチでホームランのフェンス直撃スリーベース！　国士舘の中でもこいつだけは別格だ!!
――――財前で金髪……思い出したっ！　財前ってどっかで聞いた名字だと思ったら、確か二年ぐらい前に東東京でちょっと噂になったやつじゃねぇか！
――――あぁ。一年生ながらエースで四番の……でも去年の夏に怪我したって聞いてたけど、もう治ったんだな。
ざわつく外野の声を浴びながら右バッターボックスに入った財前はゆっくりとバットを振った。

「よう。クリス、二回目だな」
「財前……」
「俺を抑える算段はついたかよ」
にやりと笑う財前にさぁなとクリスは嘯く。
プレイのコールがかかると、財前は軽口を辞め鋭い眼差しでピッチャーである栄純をにらんだ。決して大振りをしないよう意識したコンパクトな構え。
やはり沢村の球質に気付いているなと、クリスは脳内でシュミレーションを開始する。
……前打席。インコースに来たボールを限界まで引きつけてレフトフェンスまで持っていかれた。
フォームの出鱈目さと球持ちの良さから捉えづらいとはいえ、元々栄純のボールは決して重いわけではない。ミートポイントの広い金属バットならば、例え芯を外れても内野の頭を超えることも多い。
これまでの練習試合で闘った相手は例えコースが甘くても、動く球に対応しきれず凡打の山を積み重ねていたが今対峙しているバッターには通用しない。

少しでもコースが甘くなれば、今度こそ打球はフェンスを越えるだろう。
ならばどうするか。フォワボールで逃げる言う算段は鼻からクリスの頭にない。
公式戦ならともかく、これは練習試合。
この局面で逃げるような投手を監督が公式戦で使う訳がないのだから。
……そろそろ沢村も次の段階に進む頃か。
バッテリーを組んだ当初、投球における軸の安定を重視したためにクリスは栄純に対して制球には余り注文を出さず、試合でもコースには殆ど構えなかった。
……だが毎日の走り込みとシャドーである程度軸を安定させ、試合で自信を深めた今なら。
クリスはここに来て初めて、ミットをアウトロー一杯へと構えた。
……ボールになってもいい。絶対に甘くなるなよ。
初めて構えた厳しいコースに栄純は驚いた表情を見せるも、すぐにコクリと頷いた。
柔らかな関節によって初めて可能となる出鱈目なフォームからボールが投げられる。

投げられたボールの軌道は要求したコースよりも高く、ストライクゾーンからも僅かに外に外れている。

……このまま捕ればボールだな。

ストライクゾーンから外れていることから、財前はバットを振る様子はない。

クリスは僅かに左肘を開け、ボールが通るであろう軌道よりもよりアウトコース側からインコース側へとミットを滑らせた。

乾いた音が鳴った時、ボールを握るミットの位置はストライクゾーン一杯にあった。

それを見たアンパイアは右手を挙げた。

――――ットライク!!

「んなっ!?」

「なにかね？」

「……別に」

不満たらたらな顔で財前は審判から視線を切ると、バットを構え直しつつ背後のクリスをじろりと睨んだ。

「ちっ。相変わらず忌々しい捕り方しやがって。テメェは古田かよ」
「上手いもんだろ？」
「笑えねぇんだよ」
通常キャッチャーというのはストライクゾーンぎりぎりのボールを捕球する場合、少しでもストライクに見せるために捕球後ミットを僅かに動かすもの。
けれどクリスは捕球後ではなく、ミットを動かしながら捕球することで（さらに言うならば体の軸もミットと合わせて動かすことで）審判にあたかもストライクゾーンで捕球したかのように見せた。決して目立たないがボールをストライクに見せる捕球技術。
かつてクリスが関東ＮＯ１キャッチャーと称された所以の一つでもあった。
続く二球目。
再びアウトローに構えられたミットに向かって栄純の投げたボールが突き進む。
一球目とは違いやや低く、内側へと入ったボールを財前のバットが捉えた。
キィィン
甲高い金属音に一歩遅れて、ライト側のファールネットにボールが当たる。

――ファールボール

バットを振りぬいた財前が不満げに舌を鳴らすとは対照的に、クリスは内心で胸を撫で下ろした。

……危なかった。多少甘くなったとはいえアウトコースの動く球をあそこまで持っていくか。

流石はかつて天才と呼ばれた選手。

ブランク明けでもそのバッティング技術は些かも錆びついてはいなかった。

3球目、それまでの二球よりも外側に外したボールは当然の如く見逃され、これでカウントは1―2。

……勝負はここだな。

クリスの出したサインに、マウンドの栄純は目を見開いた。

何かあるのがバレバレなほど、じっとサインを凝視する新米ピッチャーに苦笑しながらもクリスは大きく頷いた。

……さぁ。お前の大好きな真っ向勝負だ。

構えるのはど真ん中。というより、今から要求するボールはまだまだ練習途中で

コースの投げ分けが出来ないというのが正直なところだった。
変にコースを意識して腕の振りが弱ればこの球に意味はない。
だからこそクリスが構えるのは栄純が最も得意とし、気合の入るど真ん中。
……この時のために練習してきた球だ。全力で腕を振りきって、ボールの勢いでバットを振らせろ！
これまでよりも更に大きく、栄純が振りかぶる。
「うぉおおお」
雄叫びと共に勢い良く左腕から投げられたボールはクリスの要求通りほぼど真ん中。
その一見すれば甘すぎるボールに財前もまた吠えた。
「舐めんなよコゾォ！」
鋭く振られた銀色のバット。
けれどそれがボールを捉えることはなかった。
それまで投げた三球と大してスピードは変わらないというのに、どういうわけか最後に打者の手元で伸びたボールが迎え撃つバットの上を通過した。

――――ットライク！　バッターアウト、チェンジ!!

『おぉおお』

「よっしゃあ!!」

どよめきが沸き起こると同時、栄純もまたガッツポーズと共に勝利の咆哮を上げた。

その一方で、空振りの三振を喫した財前は未だバッターボックスの中で自分の振るったバットを見つめていた。

「……今の球、ストレートか？」

「あぁ。何の変哲もない四シームだ」

「ちっ。あの程度のボールに俺が空振りするとはな」

チェンジのため、ばたばたとベンチにいた国士舘の選手とグラウンドにいた青道の選手が入れ替わる。交代が完了するまでの僅かな時間の中で、ヘルメットを外した財前は天を仰いだ。

「……シニアにいた時はまさかこんな練習試合――――それも二軍との試合でお前と初対決とは思ってなかったんだがな」

「あぁ。俺もだ」

様々な想いの詰まった財前の心からの声に、クリスもまた頷いた。

シニア時代、バッテリーを組み丸亀シニアの黄金期の基礎を作り上げた滝川・クリス・優と財前直行。東東京と西東京、別の地区の高校に進学した二人が交わした甲子園で闘おうという約束。けれどそれは未だ叶っていない。

「ったく、ほんとダセェよな。あんな約束しといて、まさか二人とも怪我して甲子園どころか去年まともに試合すら出てないなんてな」

「そうだな……だが、今俺達はこうして試合に出られている」

「ハッ！　ブランクを取り戻すのはしんでぇし、他の奴らはヘボばかりでやってられねぇけどな」

口では悪態をつきながらも、財前の表情は明るい。

バッターボックスからの離れ際、クリスとすれ違い様に財前は短く言葉を残した。

「……二軍でおわんじゃねぇぞクリス。あのクソガキはプロの誘い蹴ってまでテメェを甲子園に連れて行くために青道に入ったんだろ？　なら今度はテメェがあのガキをしっかりリードしてやれ」

「……あぁ、そのつもりだ」
「へっ」
まるで二人の今の立場を表すかのように、財前とクリスはそれぞれ別々のベンチへと戻っていった。

◇ちょっとした裏情報
・今回の話で空が中学卒業時にプロからの指名があったとありますが、当然上位指名ではなく将来性を見込んだ下位指名です（それも1球団のみ）。
・財前との対決でクリスが見せたボールをストライクに見せるキャッチングは、元ヤクルトの古田敦也選手のキャッチングを参考に書いています。文章で分かり辛い方は、一度古田選手の現役時代の動画を見られるといいかもしれません。
・藤原貴子さんの性格や口調が原作を読んでいてもいまいちピンとこなかったので（というか出番が少なすぎて……）、何か容姿がどことなく似ている『マリア様

がみてる』の小笠原祥子様を自分なりにアレンジした性格と口調にしてみました。祥子様ファンの方、ごめんなさい。

ちなみになぜ我らが空君が貴子さんを名前で呼ぶほどに親しげかというと、空がファンに囲まれた時に何度となく貴子さんが空を助けたことで二人の間に交流が生まれたからです（これが今回の話の冒頭における、春乃の「最近山城君のファンの子達の相手とかで働きづめじゃないですか」に繋がります）。

ちなみに、二人の間には恋愛フラグは建っていないので（精々が仲のいい先輩と後輩）、ここから恋愛関係へと発展させるには色々とイベントをこなす必要があります。正直それはそれで書いてみても面白そうなんですが、本編が進みそうにないんでまた暇な時にでも書くことにします（必ず書くとは言っていない）。

感想、評価待っています。

13 話

黒土舘戦～合宿直前まで終了。早く大会に入りたいので、この辺はサクサクいきます。違和感があったり、ここおかしいという部分があったら報告をお願いします。リアルが少し忙しいのですぐに対応できるかはわかりませんが、修正します。

P・S 感想での指摘を受けて気付きましたが、原作ではクリスと財前ってシニア時代違うチームだったんですね。知りませんでした。ただこの作品ではストーリーの都合上、財前とクリスを同じ丸亀シニアに所属していたとして扱うのでよろしくお願いします。

I

キィーンと、グランドに響きわたる一つの大きな金属音。

ボールが上っていくのに合わせて、グラウンド中の視線もまた上へと向いた。

高々と上空に舞い上がった白球は綺麗な放物線を描きながらレフトの頭上を越え、その奥のレフトフェンス上空を通過する。

まさにホームランのお手本のような打球に、打ったクリスは高々と右手を上げた。

――――うぉおお！　行ったー！

――――文句なしのホームラン！　これで一点差！

――――クリスの一発でようやく青道に点が入った！

――――すげぇ！　今の、来る球を完璧に読んでいたぜっ！

黒士舘高校対青道高校の練習試合。

３―０と黒士舘高校のリードで迎えた試合は６回の裏、４番滝川・クリス・優の二ランホームランで一点差へと追い上げた。

ホームランは野球の花という言葉を表すかのように、今日の試合一番の歓声があちこちから飛んだ。未だホームランの興奮冷めやらぬ中、ライト側の土手で試合を観戦していた藤原貴子もまた感嘆の声を漏らした。

「さすがはクリス君ね。配球を読んだ完璧なバッティングだったわ」

「決め球のスローカーブを狙い打ちか……あれされるとピッチャーとして嫌なんだ

よな～」

全身をコートで覆い隠しマスクとサングラスで顔を隠した不審者――もとい、山城空もまたクリスのバッティングに脱帽せざるを得なかった。

「これで3対2……」

「まぁ今の一発で簡単に崩れるような人でもないし、勝負はここからじゃないですか？」

「そうね。正直言って、沢村君から後の投手陣は余り安定しているとは言えないし気を抜けばまた突き放されるわね」

3対2と追い上げたものの、今日の財前のデキと青道の投手力を思えば喜んでばかりもいられない。むしろここからが本番だと、二人が共に見解を同じくした時だった。

――――見つ～け～た～ぞ!!

背後から聞こえて来る、おどろおどろしい声。

思わず空と貴子が顔を見合わせて振り向くとそこにいたのは、

「お、太田先生!?」

青道高校社会科教師にして野球部部長、太田一義であった。
何でこんな場所にと貴子が疑問を口にする前に、頬を紅潮させた太田は恰幅の良い体を揺らして大股で緩やかな勾配を下ってきた。
「練習場から消えたと御幸から聞いて探してみれば、こんな所にいたのか山城ぉ!!」
「うげっ。バレてる」
「あのぉ。太田先生、何で山城君がここにいるってわかったんです？」
怪しさ満点の変装とは言え、今の空の姿を見て山城空だとわかる人間はほとんどいない。
貴子とて、中に着ているアンダーシャツが見えるまで空だとは気付かなかったぐらいだ。
そんな疑問に太田はふんと鼻を鳴らした。
「山城が消えたという事実と、うちのマネージャーが顔を隠した不審者と仲よさげに一緒にいるという噂を聞けば何となく想像はつく。しっかりした分別を持つ藤原が、本当に不審者と一緒にいるわけがないからな！」

「しっかりしただなんて……そんな……」
「いや、照れる前に自分のせいで俺の正体がばれたことを気にしましょうよ」
空が突っ込みを入れている間にも、太田は二人のすぐ近くまで迫っていた。
「や〜ま〜し〜ろ〜。先週に引き続いてこれで三度目との脱走とは……試合で指揮を執っておられる片岡監督に代わり、私が説教してやる！」
「いや、それはまじで勘弁してください！　つーか、せめて言い訳を……」
「問答無用！　そこになおれ〜!!」
「あぁ、もう！」
空は身に付けていた変装グッズを全部外して貴子へと押し付けた。
「すいません貴子先輩！　それ、後で取りに行くんでそのまま持っといて下さい」
「はぁ。仕方ないわね……」
「や〜ま〜し〜ろ〜」
「やばっ！」
ついには走り出した太田に、空もまた逃走を図るためにスタートを切った。
そうしてトムとジェリーならぬ、空と太田の追いかけっこが始まった。

遠ざかっていく二人の後ろ姿に、空から預かった変装道具を抱えた貴子はくすりと笑った。

II

黒士舘高校対青道高校（二軍）の試合が4―2と黒士舘高校の勝利に終わったその日の夜。一先ず怒涛の練習試合祭りが終わりを告げた青道高校野球部メンバー達は休む間もなく、室内練習場へと集まっていた。

「これまでの練習試合、皆ご苦労だったな。今より、一軍昇格メンバーを発表する」

片岡の言葉に空気が一気に張り詰める。

二軍――特に後のない三年生達は「ごくりと緊張した面持ちで続きを待った。

「知っての通り、現在の一軍は全部で16名。これから発表する4名を含む20名は青道の代表としての責任を自覚し、選ばれなかった者は夏までの間一軍メンバーをサポートしてほしい」

まるで部員一人ひとりの息遣いが聞こえてきそうなほどに、室内練習場は静まり返っていた。誰かがごくりと喉を鳴らす。

そして遂に一軍昇格メンバーが発表される。

「一軍昇格メンバーは――――

遠藤直樹

小湊春市

沢村栄純

滝川・クリス・優

――――以上だ」

誰も何も言葉を発さなかった。

選ばれた者が歓喜の声を上げることもなければ、最後の夏まで大会に出られなかった者が悔しさのあまり嗚咽を漏らすこともない。

ただただ静寂。

静寂のみが室内を包んでいた。

「この4人を加えた1軍20名で夏を闘っていく。選ばれなかった三年だけここに残り、後は明日の練習に備えて解散だ」

片岡の言葉を受け、ぞろぞろと選手達が練習場を後にする。

その大きな流れの最後尾でクリスの後ろについていた空はチラリと振り返った。
最後の夏を選手として迎えれなかった三年生達。
俯きはすれど、誰も悔しさに身を震わせてはいない。
練習場を後にする最後の一人として重い鉄のドアを後ろ手でガラガラと閉め、空は自分の体重を冷たい扉に預けた。
扉越しに聞こえて来る悲痛な叫びと涙に濡れた声。
後輩たちの前では決して見せることのなかった先輩達の本当の気持ちに、空は瞼を閉じた。
「ふぅ」
「どうした？」
「いや、何か変な感じだなって」
試合に出れる選手がいれば、当然出れない選手もまた存在する。
当たり前のことだと頭ではわかっているのに、なぜか空には不思議に思えた。
自分の気持ちを持てあます空に、クリスは柔らかい笑みを見せた。
「シニアでは出来る限りベンチ入りできるようにチームの人数をある程度絞ってい

たからな。サブチームもあったし、レギュラーになれなくともベンチに入れないということはまずなかった」

「そうなんですよね……」

「選ばれなかった三年を見て何を思った？」

「何をっていうか……本当にこれで終わりなんだなって」

そう。今室内練習場に残っている三年生の夏はついさっき終わりを告げたのだ。

シニアの時のように何らかの形で試合に出れたのとは違う。

本当に彼らの高校最後の夏は始まる前にして終わったのだ。

別に選ばれなかった先輩の中に特別仲が良い人がいたわけじゃない。

会えば挨拶を交わし、時折話をする。

空にしてみればその程度の関係性だ。

選ばれなかったことを残念にこそ思っても、それ以上特別な感情を抱くほど深い間柄ではない。だというのに。

……なんだろう。この言葉にできない妙な気持は。

心の奥底に溜まった感情を空は上手く言葉にできなかった。

そんな後輩の肩にクリスは手を置いた。
「今抱えている気持ちがいずれお前をエースにする。だから忘れるな」
コクリと、空は深々と頷いた。
それでいいとクリスは手を下ろした。
「大会まで後１か月。俺達に立ち止まっている時間はない。選ばれなかったやつのためにもな」
「はい！」
空の胸に宿るこの形容できない思い。
その正体がわからなくとも、今はただ突き進むしかないのだ。
いつかわかることを信じて。
夏大会本戦まで、後一か月。

Ⅲ

青道高校野球部では、夏の大会に出れる一軍メンバー二〇人が決まった翌日から大会が終わるまでの間練習風景がガラリと変化する。

それまで一軍と二軍で分けて使用していたA、B二つのグラウンドは両面とも一軍専用となり、二軍以下選ばれなかった者達はみな一軍のサポートへと回る。
密度の濃い練習に一軍メンバーが汗を流す中、鋭い打球が右中間を襲った。
――――おぉ！
――――良い打球飛ばすな～。あいつ本当に一年かよ。
――――試合でも結構打ってたし、これはマウンドに上がらなくても使えるんじゃないのか？
部員達からあがる驚きと感嘆の声。
打った当人は「少し詰まったかな」などとグリップを握り直し、マシンの投げたボールに向かってバットを一閃。
ドライブ回転のかかった鋭い打球がほとんどライナーの軌道で、レフトフェンスを襲った。一年ながらに怪物っぷりを遺憾なく発揮する空の姿を遠目で見ながら、御幸とクリスという二人のキャッチャーは練習の汗を拭った。
「試合でも結構打ってましたけど、山城のやつやっぱ良い打球飛ばしますね」
「投手というのは基本的に野球センスに長けたやつが多いからな。シニアでも高い

打率を残していたし、もう少し慣れれば実戦でも十分に通用するだろう」
「投げない時でもあの打力をベンチで眠らせておくのは正直もったいないですね……守備も無難にこなしていましたし、これはマジで外野での起用もあるんじゃないですか？」
「たとえそうであっても、あいつなら難なくこなせるだろう」
「それに引き替え……」
ちらりと、御幸は空の隣のブースで打撃練習を行う栄純へと目をやった。
――――くそっ！　紙一重か！
――――何が紙一重だ！　バットとボールの間が三〇㎝以上あったぞ！
――――おらっ、沢村！　一体何球空振りすれば気が済むんじゃ!!
――――さっきからボールが前に飛んでねぇぞ！
「……当たれば飛びそうなスイングはしてるんすけどね」
「当たればな」
外野を守ればトンネル、バックホームでボールを投げれば途中でぐにゃりと曲がる。

そしてマシンが投げる130キロ半ばのストレートさえ殆どバットに当たらない。

はぁと捕手の二人は顔を見合わせてため息をついた。

「……あそこまで投手以外の適性がない奴も珍しいな」

「まぁ、沢村らしいっちゃあ沢村らしいっすけどね。そういやクリス先輩、礼ちゃんから聞きました？」

「あぁ。入れ替えの件か……」

「はい」

高校に入って日が浅い一年生投手に経験を積ませるために組まれた、栄純とクリス、空と御幸という二つのバッテリー。所属する軍の違いと直面する試合の関係からこの組み合わせになったが、クリスと栄純が一軍に昇格したことで本日このバッテリーを入れ替える運びとなった。

「ちょっと聞いときたいんですけど沢村の奴は今どうなっています？　最近あいつのピッチングを直で見てないんで、イマイチ状態が掴めてないんですけど」

「そうだな。セットプレーやカバーリングなど投手として足りない部分をあげてい

けばきりがない……が、純粋なピッチングだけで見ればある程度計算できるレベルには達している」

「へぇ。あの沢村が……」

「もともと素材としては一級品だからな。軸が安定し、フォームが固まってきたことで未熟ながらも内外の投げ分けができるようになってきている。まだまだ逆球も多いが、覚えた四シームもある。キャッチャーが上手くリードしてやれば早々打ち込まれることはない筈だ」

それは裏を返せば、栄純がそのポテンシャルを発揮できるかどうかはキャッチャーにかかっているということ。できるな？という無言の問いかけに、にやりと御幸は笑った。

「えぇ。俺があいつの力を１００％引き出して見せますよ」

「ふっ。まぁ、その点についてはあまり心配していない。ただ投球面に時間を多く裂いた分だけ、言ったように他の部分が全くと言っていいほどなっていない」

「じゃあ合宿中はとことん守備練っすね」

「あぁ。ここのところ少しオーバーワーク気味な部分もあったからな。肩を休める

のもかねて、しばらくはブルペンで投げさせずミッチリと守備を体に叩き込んでやってくれ」

「わかりました」

栄純の状態を一番よく把握していであろうクリスの言葉に、御幸は特に何か尋ねることもなく素直に了解した。そして今度は「山城はどうだった？」というクリスからの問いかけに、御幸はこの一か月を振り返った。

「そうですね……毎晩ボールを受けているクリス先輩ならわかっていると思いますけどボールの質については特に何も言うことはないです。四シームジャイロも二シームジャイロも実戦で十分通用しましたし、六回ぐらいまではコントロールも纏まっていました。まぁクイックとか細かな課題も見つかりましたけど、それより問題なのは……」

「試合の後半――それも七回を超えてからの投球か」

「はい。どうも七回で試合が終わるシニアの頃のペース配分が身体に染みついているみたいで、八回になると疲れからボールが甘く入って来ることも多いです。実際、これまで取られた得点のほとんどは終盤にとられたものでした」

「意識しろとは言っているんだが、やはりそう簡単にはいかないか」
「まぁ一年って考えたら正直十分すぎるんすけどね……時々一年とは思えないほど生意気だけど」
　ぼそりと付け足された言葉に思わずクリスは苦笑い。
「ペース配分については実際に九回まで投げて、徐々に身体で覚えさせていくしかないな。とりあえず本番ギリギリまで走り込みと投げ込みの割合を増やし、少しでもスタミナを付けさせるつもりだ」
「……夏までに間に合いますか？」
「正直厳しいだろう。だが終盤での失点は致命傷になりかねない以上、このまま放っておくわけにもいかない」
「出来ることはやっておくってわけですか」
「後悔だけはしたくないからな」
　クリスは三年生。
　つまりはこの夏がクリスにとって高校最後の夏であり、また同時に高校で山城と一緒にプレイが出来る最初で最後の夏でもある。

そしてそんな最後の夏に、かつて憧れた先輩と念願の正捕手争いが出来るのがこの上なく嬉しくて御幸は顔を綻ばせた。

「やっぱクリス先輩が戻ってきてよかったです」

「煽てたところで、正捕手の座は貰っていくぞ？」

「はは。望むところです」

二人の天才捕手は互いに視線を交わし、どちらともなく練習へと戻っていく。

合宿を前にして正捕手争いもまた加熱の一途を辿ろうとしていた。

次辺りに、一度クリスと空の過去話を挟みたいと思っています。まだプロットが全然できてないので投稿がいつになるかはわかりませんが、まぁ気長にお待ちください（もともとこの作品は気まぐれ更新ですし）。

感想・評価待ってます。

14話

遅くなりましたが、14話です。次話では、大阪桐生戦に入る予定です。
それと遂にUAが10万を超え、お気に入りも１５００件を突破しました。本当にありがとうございます。これからも、まったりじっくり頑張っていきます。

I

青道高校野球部には創部以来から続く伝統的な行事がいくつかある。
例えば夏休み、真夏の猛暑の中で行われる地獄の千本ノック。
例えば冬のオフ、12月の下旬に行われる終わりのないエンドレスマラソン。
そしてそんな行事の一つとして、大会直前合宿というものがある。
夏大会まで一か月を切った時期に行われるこの合宿において、本選に選ばれた二十名は選ばれなかった者達のサポートを受けておよそ一週間の間徹底的に体を苛めることとなる。

合宿開始から四日目。

今日も今日とて厳しい練習を終えた二十名の選ばれたメンバー達の顔には、くっきりと隠し切れない疲労の色が色濃く表れていた。

これまで合宿を経験したことのある上級生ですら練習の終わりと共にグラウンドに座り込む中、今回が初めての参加となる空はふらふらと頼りない足取りで何とかベンチにたどり着くと、そのまま倒れ込むようにベンチの上へと体を投げ出した。

「あー。疲れた～」

体力には自信があったんだけどなと呟きつつ、ごろんとベンチの上で仰向けになった空の目に入ったのは深い緑色の金属の天井。

そんな面白味の欠片もない緑をぼんやりと見つめていると、黒い影が空の顔を覆った。

「さすがにぼろぼろだな」

「あっ。クリス先輩……」

慌てて体を起こそうとする空を制し、練習着を真っ黒に汚したクリスは僅かに残るベンチの余白に腰を下ろした。先輩の気遣いを素直に受け取った空は――体を

動かす余裕がなかっただけとも言えるが――天井を見上げたま口を開いた。
「合宿ってこんなきついんすね……正直、舐めてました」
「一軍になった者に待つ最初の関門だな。だが良くもっている方だと思うぞ？同じ一年の沢村と小湊はグラウンドに倒れ込んだまま起き上がれていないからな」
「鍛え方が違うんすよ、鍛え方が」
「そこまで軽口を叩けるならまだまだ大丈夫だな。明日は走る量を更に増やしてみるか？」
「うげっ。それだけはマジで勘弁してください」
この四日間、ただでさえ空は調整に主眼を置く大会前としては有り得ない距離を走り込んでいる（なお、走り込みの後は休む間もなく疲れた体でブルペンに入って投げ込み）。
これ以上増やされたらたまらないと、心底嫌そうに顔を顰めた空に「冗談だ」と悪戯っぽくクリスは笑った。
「土曜に試合が組まれている。明日からは走る量を減らして調整に入るから、そのつもりでいておけ」

「試合っすか？」
「あぁ。大阪の名門、大阪桐生との練習試合――それも朝に一試合、休憩を挟んで昼から一試合のダブルヘッダーだ。沢村と御幸が昼からの試合でバッテリーを組み、俺とお前が朝の試合でバッテリーを組むことになる」
「へー。ダブルヘッダー……って、クリス先輩が受けてくれるんすか!?」
疲れていることも忘れて、空は勢いよく体を起こした。
聞き間違え出ないことを確認するようにクリスの顔を見れば、クリスは首を縦に振った。
「あぁ、そうだ」
「ッしゃぁ!!」
渾身のガッツポーズ。
あまりにもウキウキな後輩の姿に、クリスは苦笑を漏らした。
「土曜の試合は点差に関わらず、最後まで投げ切ってもらうことになる。疲れもあるし厳しい展開になるだろうが、全国の強豪と戦えるまたとない機会だ。気合を入れていくぞ」

「ようやくクリス先輩と一緒に試合でバッテリーを組めるチャンスが来たんすよ？　言われなくても気合入りまくりっすよ！」

「あぁ、俺もだ」

そう言って、クリスは瞼を閉じた。

瞼の裏に浮かぶは、かつての記憶。

クリスが空と初めて出会った時。

頂点まで連れて行くことを決めた過去の記憶。

Ⅱ

クリスが空と初めて出会ったのは、今からおよそ3年前。

クリスが丁度中学の最上級生に上がる間近――徐々に東京にも桜前線が到来しつつあった三月の半ばのことだった。

久方ぶりにシニアの試合も練習もなく、完全なオフとなった日曜日。

自宅で久方ぶりの読書を満喫していたクリスのもとに、所属するシニアチームの監督から一本の電話があった。

『よぉ、優。ちょっとグラウンドまで来い。面白いものが見れるぞ』

その肝心な面白いものが一体何なのかを言わないまま電話は切られたが、監督が面白いというからには、きっと何かとんでもないものであることをクリスは経験から知っていた。

そしてそのとんでもないものが、大抵クリスに迷惑をかけるということも。

聞かなかったことにするという手もあったが、そこは真面目なクリスのこと。

小さい頃からの知り合いということもあり、五割の不安と四割の諦め、そして一割の好奇心を胸に抱いてクリスは家を出た。

電車を乗り継いでおよそ三十分。

普段練習に使っている丸亀シニア専用グラウンドにクリスは着いたものの、そこに呼び出した当人はいなかった。

代わりにいたのは、ベンチの上で息を荒げたくせっ毛の子供。

見たところ随分と幼く、まだ中学にも上がっていないであろう小さな少年は某有名なスポーツメーカーのジャージに身を包み、ベンチの上で横になっていた。

気が付けば、クリスは少年がいるベンチへと向かって歩を進めていた。

「……誰？」
「それは俺のセリフだ」
はぁと、クリスは息を吐いた。
それが、後に黄金バッテリーとしてプロの世界を席巻することとなる滝川・クリス・優と山城空のファーストコンタクトだった。

◇

「こんな所で何をしている？　一応ここは私有地だぞ」
クリスはフェンスにかかった看板を指差した。
そこに書かれているのは、『私有地につき関係者以外立ち入り禁止』の文字。
基本的にシニアチームというのはどこかの公共グラウンドを借りて練習するということが多いのだが、丸亀シニアは年間通して使える専用のグラウンドを保有している。
そしてそれ故に可能となる練習量の多さが、丸亀シニアを関東有数の強豪として支える土台となっていた。別にチームが練習していない時に誰かがこっそりと忍び込んだからといって、それで一々目くじらを立てる気はクリスにはなかったが一応

ルールはルール。

グラウンドを使用するチームのキャプテンとして目撃してしまった以上、注意せざるを得なかった。

クリスが早めに出るよう促すと、少年はムスッとした顔で上半身を起こした。

「いや、俺はおっさんに言われた通り走ってただけなんだけど……」

「おっさん？」

誰のことだと言いかけたところで、クリスの背後から「お～い」と声が聞こえた。

耳馴染のその呼びかけに振り向くと、案の定の人物がいた。

「監督……」

「おぉ、休みに突然呼び出して悪かったな優」

許せと豪快に笑う、非常に立派な体格をした中年男性。

丸亀シニア監督、扇総一郎。

扇はクリスの体に隠れた少年を見つけると、持っていたビニール袋からスポーツドリンクを取出し少年へと渡した。

「ちゃんと走ったか？」

「言われた通り、20周きっちり走ったよ」
「それはよし！」
「監督。もしかして見せたいものって……」
「あぁ。こいつのことだ。ほら、自己紹介しろ」
扇に促され、少年は口をつけたペットボトルをベンチに置いた。
「えっと、小川小学校6年の山城空……です。4月から丸亀シニアに入る予定……です」
「ってわけだ。ちなみに山城、こいつは滝川・クリス・優。前からお前に言っていたキャッチャーだ」
「えっ！　おっさんが前から言ってたあのスーパーキャッチャー!?」
それまでのどことなくムスッとした顔から一転して、空は目を輝かせた。
まるで星でも見えそうなほどキラキラとした視線を向けられたクリスは、居心地悪そうに頬を掻いて自分の監督に目をやった。
「……俺のこと、一体なんて説明したんですか？」
「うん？　あぁ、別に嘘は言ってねぇよ。いずれは古田や野村を超える日本の一

のキャッチャーになる男って言っただけだ」
「その説明のどこに嘘がないのか俺が逆に知りたいぐらいです」
「ははは。自分のことを卑下する必要はねぇよ優。お前にはアニマル譲りの野球センスと、俺が叩き込んだ野球の知識がある。間違いなく15年……いや、10年後には日本を代表するキャッチャーになっている筈だ」
「その自信がどこから来るのか一度聞いてみたい所ですが――それで何で俺を呼んだんですか？」
そう。もしも空が丸亀シニアに入るなら、わざわざ今日クリスをここに呼び付ける必要はない。来月になれば嫌でも顔を合わせることになるのだから。
素朴な疑問に、扇は答えを返さなかった。
代わりに、別のことを聞いた。
「優、ミットは持ってきてるな？」
「えっ、はい。言われた通り持ってきましたけど」
「よし。山城、ボール持ってマウンドに上がれ」
「はーい」

ベンチから立ち上がると、空は置いていたグローブを左腕に嵌めた。
怪訝な表情でクリスが見つめる中、空はマウンドへと走っていく。
「監督？　いったいなにを……」
「言葉にするよりも体験した方が早い。優、実際にボールを受けてお前が判断しろ」
これ以上聞いた所で恐らく求める答えは返ってこない。
そう判断したクリスは、釈然としないまま持ってきたミットをつけていつもの定位置へと向かう。
既に空の体は温まっていたため、軽くキャッチボールを行いクリスは腰を下ろした。
「じゃ、いっきま～す」
「あぁ、こい」
ミットを構える。
……相手は未だ小学生。体格を考えればそれほど威力のあるボールは投げられない筈。
だがそんな常識的な考えと同時に、そんな普通のボールを見せる為だけにあの監

督がわざわざ呼び出すのかという疑問もまたクリスの中にはあった。
力まず、されど気は抜かず。
精神を集中させ、投球を待つ。
そして10秒後、クリスは己の判断が正しかったことを痛感することとなる。
マウンドに上がった空がゆっくりと両腕を振りかぶる。
どことなくぎこちない動作をもってやたらと高く上げられた左足が勢いよく前方へと踏み出され、それに遅れて上半身――右腕が振り下ろされる。
これまで様々な投手を見てきたクリスに言わせれば、無駄が多すぎる投球フォーム。
されどそんな無駄だらけのフォームから投げられたボールは、クリスの予想以上に速かった。
……速い。
迫りくる白球を目で追いかけながら、クリスは素直にそう思った。
球速になおせば、予想よりも5キロ近く速い。
……大体シニアの平均ぐらいか？

丸亀シニアのエースである財前ほどではないが、それでも小学生であることを思えば破格のストレート。今後しっかりと練習を積んで磨きをかければ、全国が相手でも十分使える武器になるだろう。

なるほど、これが監督が見つけてきた逸材かとクリスはボールが来るであろう低めにミットを構えようとして――

……いや、違う！

下げかけたミットを、逆に上へと上げた。

リリース当初、クリスが低いと判断したボール。

されどその低い筈のボールは、ベースを通過するときにはいつのまにかストライクゾーン高目へとその軌道を変えていた。

パァンと、乾いた音がミットから響く。

その音を聞いた空はマウンド上で一瞬呆けた顔をし、その直後喜色の色を爆発させた。

「すげぇ！　すげぇ！　本当に初めてで俺のボールを捕った！」

空が一人興奮冷めやらぬ様子で騒いでいる一方で、クリスは言葉を失っていた。

無言のままボールを収めたミットに目をやる。
……今のボールは。
「驚いたろ？」
「監督……」
いつの間に近づいていたのか。
半ば呆然としたクリスに、扇は悪戯が成功した子供の様に無邪気な笑みを見せた。
「俺も最初見た時は驚いた。確かに理論こそあったが実際に投げる奴なんて殆どみたことねぇからな。山城が投げたボール、ありゃあまだまだ未完成だが間違いなく」
「……ジャイロボール」
「あぁ。それもただのジャイロじゃねぇ、ストレートとして使える落ちねぇジャイロだ」
落ちないジャイロボール。
それは空想上の中にだけ存在する筈の、ストレートの進化系。
理論上不可能でないことはクリスも知っていた。
ただ、現実に再現できる可能性がほとんど０に等しいということも。

「一体どうやってあれを……」
「なんでも前に読んだ野球漫画に影響されて、練習してたらいつの間にかできたんだとよ」
「ま、漫画？」
「普通は練習してできるもんじゃなぇんだけどな……恐らく相当特殊な指先感覚と、体の作りをしているんだろ。まぁ、その習得に時間を注ぎ過ぎたせいで他はてんで素人なんだがな」
まともに野球のルールを把握しているかすら怪しいと、扇は笑う。
「どうもこれまでお遊びみたいな野球しかしてこなかったみたいだから、山城自身は自分の球の特異性をあんま理解してねぇ。ただまぁ、まともな指導者があいつの球を見たら……」
「矯正しようとするでしょうね」
「だろうな。その方が正しい」
ジャイロボールを追っても夢はない。
かつて、とあるプロ野球選手はそういった。

ジャイロボールを求めてもその先にあるのは、徒労だと。
そしてそれはきっと正しいのだろう。
才無き者は永遠に届かない。
才があっても届くかどうか――いや、例え届いても使えるかわからない。
ジャイロボールとはそういう不確かなもの。
指導者としては、才ある子供にそんな大博打をさせるわけにはいかない。
だからこそ指導者は、教え子に対してこれまで最も実績のあるスタンダードを教えるのだ。大成功はしないかもしれないが、また大失敗もしないから。
けれど。
「教え子が間違った方向に進もうとしているなら、それを咎め導いてやるのが教育者の役目だ。けどな優、俺はそいつに誰にもねぇ才能があるならそれを伸ばしてやるのもまた指導者の務めだと思っている」
何も型にはまらなくてもいい。
別に綺麗なバックスピンストレートじゃなくても、ゴロ狙いのダウンスイングじゃなくてもいい。人にはない才能があれば、それを思う存分伸ばせばいい。

己にあった、己だけの野球を身に付ければいいというのが扇の持つ野球観だった。
「あいつのジャイロは未完成。花で言う所の、まだ芽が出た段階だ。もしかしたら芽のまま終わるかもしれねぇし、逆に歴史に名を残すような大輪の花を咲かせるかもしれねぇ。今のあいつに必要なのはジャイロを容認できる俺みてぇな破天荒な指導者、そして何よりも実際にボールを受け、高みへと導いてくれる〝キャッチャー〟だ」
そう言って、扇がクリスを見た。
「どうだ、優？　わくわくしてこねぇか？」
「……わかってて聞いてますよね？」
「ハハ。お前があんなダイヤの原石どころか、地球産かどうかもわからない未知の原石を見せられて黙ってられないのはわかってるからな」
「前例がないっていうのはかなり難しいんですけどね……」
ふぅとクリスは息を吐いた。
その脳裏にはこれから待ち受けるであろう困難がいくつも浮かびあがる。
けれど、クリスは。

そんな困難を含めて面白いと、笑った。
「導いて見せますよ。俺もあのジャイロボールに夢を見たくなりましたから」
こうして、山城空と滝川・クリス・優の物語が始まった。
ジャイロボールに夢見て。
それは、過去の物語にして未来へと続く物語。

Ⅲ

ゆっくりと、クリスは瞼を開けた。
明るくなった視界に映るのは、あれから一回りも二回りも成長したかつての原石。
本当に大きくなったと、クリスは思った。
クリスが半ばマンツーマンになって指導し、巨大な基礎を作り上げていった三年前。
その後、クリスが卒業した後も空は様々な練習を重ね、経験を積み、驚くべきスピードで成長してこの青道へと入ってきた。
……まだまだ成長途中とは言え、基礎は完成しつつある。

扇監督にならって言うならば、今の空は蕾の段階。
花が咲くまで後一歩。
その最後の一歩を踏み出せるかどうかは、導くキャッチャーの腕にかかっている。
段々と教えられることが少なくなっていくことに、寂しさを感じる部分は確かにある。
けれどそれ以上に、その大事な最後の一歩に立ち会えることが、導けるキャッチャーが　自分であるということが、クリスにとっては何よりも嬉しかった。
「山城」
「はい」
「絶対、甲子園に行くぞ」
「うっす！」

前々から書きたかった、空とクリスの出会いが書けて作者的には結構満足です。

今後も合間合間に、過去話を挟んでいこうと思っています。

◇別に知ってもしらなくてもいい裏情報

・タイトルの意味

『ジャイロボールに夢見て』というタイトルは、クリスが空のジャイロボールに夢を見たことからきています。そのためこの物語は山城空の物語でもありますが、同時に滝川・クリス・優の物語でもあります。（実際にそうやって書けてるかは別にして）

・扇総一郎

クリスや空が所属する丸亀シニアの監督。登場時、42歳。

元は甲子園にも出場したキャッチャーで、ドラフトにかかっていたにもかかわらずそれを拒否し単身渡米してメジャーに挑戦。6年近いマイナーを経てメジャーに昇格し、正捕手まで後一歩と迫った所で怪我のため引退。それ以後はアメリカで身に付けたメジャー仕込みの野球をアレンジし、子供達に教えている。性格は破天荒ながらも、監督としての腕は確か。個人の才能を伸ばすことを第一に考えた野球観を持つ。アメリカ時代の縁からアニマルと仲が良く、クリスのことも幼い頃から

知っている。

感想・評価待っています

15話

なんていうか……クリス先輩ｔｕｅｅｅｅ？って話です。
野球描写が未熟なのは勘弁してください。あぁ、もっと文章力がほしい……

Ⅰ

本番の夏の大会までおよそ半月となった６月の中旬。
伝統行事である地獄の大会直前合宿を何とか乗り越え、青道高校は締めの土日にわたる計４試合の練習試合を残すのみとなっていた。
そしてそんな締めの初日となる土曜日の朝。
溜まった疲れが抜けきらず、試合が始まる前から重い体を引きずる青道メンバーの前に現れたのは遠い西からの刺客だった。
「今日は朝も早い時間からわざわざお越しくださってありがとうございます」
「いやいや、ウチにとってもいい経験になります。礼なんていりまへん」

恰幅の良い体に大きな福耳。
まるで七福神にでも出てきそうな大柄な男性――大阪桐生高校監督、松本隆広はえびす顔で片岡のねぎらいの言葉をやんわりと断った。
試合前ということで雑談もそこそこに両校の監督はガッチリと握手を交わし、持っていたオーダー表を交換した。
「夏も近いですし、お互い良い試合にしましょう」
「いい試合……それにしては一試合目の青道さんのオーダーは随分と変わっとるみたいですが？」
1番　セカンド　小湊春市（1年）
2番　ライト　門田将明（3年）
3番　ショート　楠木文哉（3年）
4番　キャッチャー　滝川・クリス・優（3年）
5番　ファースト　田中晋（3年）
6番　サード　樋笠昭二（2年）
7番　レフト　坂井一郎（3年）

８番　センター　遠藤直樹（３年）
９番　ピッチャー　山城空（１年）

受けとったオーダー表に目を落とし、フフと松本は含みある笑みを片岡に見せた。

「確かに今日の試合はダブルヘッダー。折角２試合もあるんやし、ベンチメンバーを使いたいって気持ちは十分わかります。けど……この桐生相手にまさか主力が誰一人出てこないってのは正直予想外でしたわ」

大阪桐生高校。

甲子園出場11回、優勝２回の実績を誇る西の野球名門校。

伝統的なパワー野球は全国一との呼び声も高く、昨年の夏の甲子園では見事準優勝を果たした。今年度はタレントが揃っていた昨年に比べれば全体的に粒が小さいものの、それでも絶対的なエースにして４番、館広美を中心にそえたチームとしての総合力では決して昨年に見劣りするものではない。

そんな全国でも屈指の強豪を練習試合の相手として呼びつけたにもかかわらず、一試合目に主力を誰一人出さないというのは舐めていると思われても仕方のないことだった。

「松本監督。これは……」
「わかっとります。片岡はんが人を侮辱するような人間やないってことは。青道さんとしても何らかの事情があるんでしょ。例えば――主力全員を注ぎ込んで盛り立てなあかんほど、二試合目の投手が不安定とか」
ぴくりと片岡の眉が動く。
まだまだ若いですな～と、監督歴20年を超える歴戦の名将はただでさえ細い目を更に細めた。
「しかしいくら理由があろうと、随分と思い切ったことをしたもんや。ベストメンバーやないとはいえ、ウチは一試合目に多くの主力を使ってます。こんな言い方は失礼かもしれませんが、控え相手ではまともな試合にならないかもしれませんで？」
「問題ありません。ウチの選手達はそんな軟じゃありませんから」
「ほぉ。えらい自信ですな……それはやはり彼が投げるからですか？」
ちらりと、松本は青道のベンチ前で整列する一人の選手へと目を向けた。
その視線の先にいる選手はどことなくそわそわと体を小刻みに動かしながら、試

合の始まるその時を待っていた。

「山城空……関東大会の映像を少し見せてもらいましたが、ありゃホンマにえぇ投手や。確かに彼が先発するなら、多少バックが弱くても何とかなるかもしれまへんな」

「……山城一人に頼る気はありません。あまり甘く見ない方がいいかと」

「ふふっ。他にも面白い選手がいると？　なら楽しみにしておきますわ」

どことなく張りつめたやり取りを終え、両校の監督は互いのベンチへと戻っていった。

◇

両校の選手が試合前の礼を終え、それぞれの持ち場へと向かっていく。

先攻である大阪桐生はベンチに戻って素振りを行い、逆に後攻めとなる青道のスターティングメンバー九名はグラウンドへと散らばった。

そして一試合目に出場予定のない青道の主力陣達がベンチで静かにグラウンドを見つめる中、どういうわけか同じく一試合目に投げる予定がない筈の沢村栄純はベンチ前でグラブ片手に一人元気な声を上げていた。

「よっしゃあ！」
「こらこら。お前どこ行くきだ？」
今にもブルペンに向かいそうな栄純の襟首を御幸が掴んだ。
「お前は昼からの試合で投げるんだから、今投げようとするんじゃねぇ！」
「いやでも、山城が撃ち込まれたら俺が……」
「いいから座ってろ！」
半ば強引に栄純をベンチへと座らせ、御幸もまたその隣へと腰を下ろした。
どことなく不服そうな生意気な後輩（NO2）に、御幸は悪態をつきながらすっとその視線をグラウンドへと向けた。
「沢村。山城のピッチング、よく見とけよ」
「ぬ？」
「今日の試合、多分山城はいつもみたいに三振ショーってわけにはいかねぇはずだ。疲れているから当然球威は落ちるし、コースも甘くなる。点数もそれなりにとられるはずだ」
「それのどこに見る必要が……」

「だからこそ、いい見本になる」
えっと、栄純は声を上げた。
意味が解らないと首を傾げる栄純に、御幸はいいからよく見とけと再度注意を促した。
「多分、今日のあいつはお前にとって最高の見本になる筈だ」
「見本……」
「そして俺にとってもな……」
御幸はいつになく真剣な眼差しで、自身と同じポジションを守る人物を見つめた。

Ⅱ

青道高校と大阪桐生との練習試合はテンポよく進み、試合開始から一時間を待たずして既に6回の表へと差し掛かっていた。
4対0、4点リードで迎えた大阪桐生の攻撃。
0アウトランナー一塁で右打席に入るは7番バッター。
これまでの二打席はヒットこそないもの、その力強いスイングは守る青道として

も決して侮れるものではなかった。マウンドの空は額から零れる汗を袖口で拭い、一度視線で一塁ランナーを牽制するとセットポジションからボールを投じた。

地を這うような伸びのあるストレート。

球速は普段に比べれば幾分か遅い130後半なれど、丁寧にコントロールされたボールが打者の膝元一杯に食い込んでいく。

けれど、そのボールがミットに届くことはなかった。

キィンと金属バット特有の金属音が響くと共に、どん詰まりの打球が一塁側ファウルゾーンへと転がる。

――ファールボール

カウント、0―1。

チッと打者は短く舌打ちすると、投手に近い左足を少しオープンに開いた。

数字にして10センチにも満たない、注視していなければ見逃してしまうほどの些細な変化。けれどバッターから最も近い場所にいる青道の守備の要は、マスク越しでもその微細な変化を見逃してはいなかった。

クリスから出されたサインに空は躊躇なく頷くと、プレートに軸足を乗せたまま

左足を前方へと勢いよく踏み出す。
一球目と何ら変わることなく勢いよく振り下ろされた右腕。
けれどその指先から離れたボールは、一球目よりも随分と〝遅かった〟。
チェンジアップ。
あえて力が伝え辛い握り方で投げられるこの球は、ストレートと同じ腕の振りながらもストレートに比べて回転が少なく球速も遅い。
緩急をつけるために非常に有効な球種であり、肩への負担が少ないということからメジャーではほとんどの投手がこのボールを持ち球としているという。
「っつ！」
投げられたコースは外角低め。
少々コースは厳しいが球速も大きな変化もない以上、決して難しい球ではない。
だというのに、どういうわけかバッターはタイミングを狂わせ上半身を前に突っ込ませていくではないか。
ゆっくりとホームベースの手前で沈んでいくボールに、バッターは体を泳がせながら辛うじてバットを合わせた。

鈍い音と共に、やや勢いの死んだ打球が三遊間へと転がっていく。
「ショート！」
「オーケー！」
よく通る爽やかな声と共にショートの楠木は上手くバウンドを合わせて打球をグラブに納めると、そのままステップを踏みセカンドへとボールを転送。
「セカン！」
ベースに入った春市は捕球と共にベースの角を蹴りつける。
これで1アウト。そしてそのまま春市は流れるような動作で滑り込んできたランナーを交わし、一塁へと力のあるボールを送球した。
投げられたボールは、打者がファーストベースを踏むよりも早くファーストが伸ばしたミットへと潜り込んだ。
――――アウト！
塁審のコールをもって6―4―3のダブルプレーが成立する。
教科書通り、お手本のようなゲッツーに試合を観戦しに来ていた観客達からも感嘆の声が上がる。

――おぉ。ゲッツー！
――あの二遊間も倉持・小湊ペアに負けてないぞ！
――これで2アウトランナーなしか。
――6回まであの大阪桐生相手に4失点。確かに良く投げているとは思うけど……
――でもまぁ、なんつーか。
――あぁ、物足りねぇよな。圧倒的な感じがないっていうか……
――これまでの練習試合で取りまくっていた三振も初回に二つとった後は一つだけ。ヒットもかなり打たれてるし、調整が上手くいってないんじゃないか？
ざわざわと、どことなく心配そうな声がギャラリーから飛ぶ。
そしてそんな声は当然、青道のベンチにも届いていた。
ベンチの最前列でそんな不安の声を耳にした御幸はわかってねぇなと苦笑しつつ、同じくわかってなさそうな隣の人物に一応尋ねてみる。
「で、俺が見ておけって理由がわかったか？」
「いや、全然」

即答だった。

半ば予想していたとはいえ、余りにも予想通りな栄純の答えに御幸は肩を竦めた。

「まっ。確かにいつもに比べりゃ三振は少ねぇし、ヒットもそれなりに打たれてる。4失点つーのもあんま良くはみえねぇわな」

でもなと、御幸は続けた。

「さっきのバッター、何球目を打ったか覚えてるか？」

「え？　二球目……」

「じゃあその前にヒットを打ったバッターは？」

「えっと……1球目？」

「その前は？」

「確か三球目……」

「今の山城の球数は52球。回を追うごとに球数が少なくなっているし、このまま行けば9回まで投げても90球いくかどうかってところだろ」

プロほどコントロールも球威もない高校野球の投手は、どうしても試合で球数が嵩む傾向にある。それが九回を投げて球数が90球前後となればプロでも上出来、こ

と高校野球という視点から見れば恐ろしく少ないと言える。
　この際だと、御幸はまだまだ未熟な投手の卵にピッチングの奥深さを教えることにした。
「三振を取るピッチングってのは、確かに派手で見栄えは良い。チームの士気は上がるし、上手くいきゃ相手の心もへし折れる。けどな、それだけ球数もかかるし体力も必要になる」
　三振を取るにはどれだけ少なくとも最低三球。
　見せ球を使えばさらに球数は増える。
　空はどんどんストライクを取りに行くピッチングのため比較的少なく済んでいるが、それでも９回まで投げればそれなりの数にはなる。
「ただでさえ試合の後半になったらいつもバテテくるんだ。疲れている今日みたいな時に球数も体力もいるいつものピッチングをやったらいいとこ５回まで。いや、球威が落ちてる分粘られて下手したら４回持たなかったかもな」
「じゃあ今日は三振が取れないんじゃなくて……」
「あぁ。そもそもとる気がねぇ。９回まで投げ切ろうと思ったら、球数を温存す

るために打たしていかなきゃいけねぇからな。まぁ初回はまだイマイチその辺りの力の加減がわかってなくて、随分と球数を使ってたけど」

言ってしまえば、今日の空のピッチングはいつのもペース配分を意識した投球の更に延長上にある。いつものピッチングを通常が8割の力、勝負所が全力とするならば、今日のそれは通常が6割、勝負所でも8割が精々と言った所。

球威とスピードに頼って空振りを狙いに行くのではなく、あくまでもコントロールを重視しバッターにあえて打たせることで球数を抑えている。

「最後まで投げ切るために球威を抑えた分、いつもの圧倒する感じじゃねぇから打たれるし点数もとられるけど、要所を締めるから簡単には相手に流れを渡さねぇ。テンポがいいから守備は守りやすいし、どんどん打球が飛んでくるからその勢いのまま攻撃へと入れる」

よ〜く見ておけと、御幸は目を細めた。

「あれが試合を作るっていうことだ」

「試合を作る……」

「何も全力で投げることだけがピッチングじゃねぇ。調子が良くても悪くても試合

を作り、9回まで投げ切る。それが先発として、そしてエースとしての条件だ」

「エース……」

ぎゅっと、エースを目指す少年は拳を握った。

黙りこんでじっとマウンドを見つめる栄純に、御幸は「まぁ俺もあんま説教できる立場じゃねェけど」と自嘲気味に呟いた。

……さすがに悔しいよなぁ。

投手の能力を引き出せるかどうかは捕手にかかっているのが、御幸の持論。

その意味で言えば、客観的に見てこれまで御幸は空の力を上手く引き出してきたと言えよう。けれど、じゃあ空とバッテリーを組んで今日のようなピッチングを引き出せるかと言われれば、正直厳しいというのが御幸の正直なところだった。

……打ち取るピッチングは投手と捕手の間に信頼関係がなきゃできねぇ。

何せボールがバットに当たるのだ。

少し飛んだ場所が良ければヒット、運が悪ければ長打にもなる。

特に空の様に三振を取れるストレートを持つ本格派の投手にしてみれば、捕手に余程の信頼がなければ打たせて取るピッチングなど成立しない。

……けど。今日山城は、これまで一度もクリス先輩のサインに首を横に振ってねぇ。

またサインを出すクリスにも迷いがない。

刻一刻と移り変わる流れを正確に把握するセンス、打者の待ちを読む洞察力、そして何より投手のことを知り尽くし、信頼していなければできない芸当だ。

……これが久方ぶりに試合で組んだバッテリーの姿かよ。

まるで三年間ずっと連れ添っていたかのような互いに対する絶対的な信頼。

それがクリスと自分との差を表しているようでもあり、御幸は言葉にできない感情を吐き出すように拳を固く握りしめた。

Ⅲ

最後に点数が入った5回以降、青道と大阪桐生の両軍は共にヒットこそでるものの得点には至らないという半ば膠着状態の展開が続いていた。そして4―0のまま動かなくなった試合はテンポよく進み気が付けば終盤、8回の裏へと突入していた。

この回、青道は二番から始まる好打順。
未だ無失点の好投を続ける大阪桐生のエース、館広美の重いストレートに何とか食らいついている門田に声援を送りつつ、クリスは隣で息をつく空へと話しかけた。
「どうだ？　チェンジアップの感触は？　少しずつ割合を増やしているが感覚は掴めそうか？」
「悪くないっすね……疲れてて変に体に力が入らない分、ここ最近で一番コントロールがつけやすいです」
タオルで汗を拭い、空は確かめる様に右手の拳を握っては解いた。
どうやら順調そうだなと、クリスは頷く。
「こんな状態で試せる機会はそうそうないからな。しっかりと感覚を掴んでおけ。これまで良い調子で来ている。次が最終回だが、最後まで焦らず丁寧にいくぞ」
「はい」
空が返事をするとほぼ同時に、門田はボールを打ち上げていた。
あっさりとセカンドがボールをキャッチし、１アウトとなる。
それを見届けたクリスはレガースを外してヘルメットを被り、バットを握るとネ

クストサークルへと入った。

……山城は良く投げてくれている。

点数こそとられたが合宿の疲れで体が重い中、きっちりと試合を作っている。

序盤は慣れないピッチングに多少戸惑う部分もあったようだが、それでも回を追うごとに良くなっていく修正力の高さは素晴らしいの一言に尽きた。

流石は幾度となく大舞台を経験しただけのことはあると、クリスは客観的に見て凄すぎる空のシニア時代の成績を改めて思い出した。

……しかし、あいつ一人に頼りきりという訳にもいかないな。

これまで青道のヒットは4本。

全くバットに当たらないという訳ではないのだが、ランナーが出ても後が続かずこれまで点数を奪えていなかった。

クリスはサークルの中で体を解しながら、立ち塞がる大阪桐生のエースの所作一つ一つをつぶさに観察する。

……長身から投げ下ろされる重い球に、カウントのとれる三種類の変化球。リリー

スポイントが早いためボールの出所は見易いが、その分角度がある。テイクバックの距離が毎球微妙に変わるのは恐らく打者のタイミングを狂わせることが狙いだろう。

コントロールも良く、またスタミナもある。

プロが注目するだけあって投手としての能力は間違いなく一級品。

ただ強いて欠点を上げるとするならば、大事な局面で空振りをとれるだけの絶対的な決め球に欠けているということか。

そうクリスが分析している間に、三番の楠木が外角のスライダーに手を出した。

勢いのない、打ち取られた打球がレフト方向へと上がるが飛んだ場所が良かった。

ふらふらっと上がった打球はショートの頭を超え、レフトとショートの丁度空いたスペースにポトリと落ちる。

半ばラッキーな形とはいえ、ヒットはヒット。

久方ぶりのランナーの出塁に、にわかにざわつき出す観客達。

クリスはネクストサークルの中で一度軽くバットを振るうと、ゆっくりバッターボックスへと入った。

……一アウトランナー一塁。最後の攻撃に勢いを持たせるためにも、ここは何としても一点、イヤ投手に与えるプレッシャーを考えれば二点は返しておきたい場面。

ここまでの三打席、四番でこそあったがクリスは後続に繋ぐことを意識したコンパクトなバッティングを心がけてきた。

しかし既に回は終盤の八回。

仮にクリスがシングルヒットで繋いだ所で、ここまでの打席を振り返る限り後続で舘から二点も取れる可能性は低かった。

……球のスピードには慣れた。なら狙ってみるか。

マウンドの舘はセットポジション。

大きめにリードをとるランナーの楠木が気になるのか、幾度となく牽制を入れている。

……ここまで見てきた限り、このバッテリーでピッチングを組み立てているのは間違いなく捕手の方。

リードの内容はやや守りに入っている部分があるものの、基本的にはスタンダード。

外の変化球を見せ球にカウントを稼ぎつつ、重いストレートをインコースに投げ込むことでバッターを打ち取る。

ストレートを主体にする投手に対するお手本のようなリード。

……だが前の回からアウトコースに要求する割合が徐々に増えてきている。恐らくは完封を意識することで、甘くなると長打の危険性があるインコースを無意識の内に避けようとしている。

そしてそのような完封を意識した状況で捕手が一番危惧するのは長打。

だとすれば必然的にアウトコースを中心にした配球になるのだが、前の打席でクリスはアウトローのストレートをライトフェンスまで持っていくツーベースを放っている。

簡単にアウトコースを要求するのは危険。

かといってランナーが溜まることは避けたい以上、四球は問題外。

ならばどうするか。

……この状況での初球の入り方となれば……

セットポジションからほとんど足を上げず、舘は左足を前方へと踏み出す。

その長い右手がマウンドから振り下ろされると同時に、クリスは左足を大きく開いた。

……ストライクにならないインコース高目へのストレート！

正にドンピシャ。

的を射るとはこのことか。

読み通り胸元に来たボールに対し、クリスは上手く腕をたたむと腰の回転でバットを振りぬいた。快音が響き渡り、打球がレフトへと飛翔する。

最早確認するまでもなかった。

バットを投げ捨て、ゆっくりとクリスは一塁へと走り出した。

――うぉお～！　入った、入ったぁあ！

――クリスの特大ホームラン！　飛距離何メートル出てんだよ!?

――後方のネットを超える打球なんて見たの、東以来だぞっ!?

――かつての天才捕手が更に力をつけて戻ってきた！

――これで二点差！　まだまだ試合はわからないぞっ！

今日一番となる歓声を浴びながら、クリスはダイヤモンドを一周する。

そしてホームベースを踏みベンチに戻ったクリスを真っ先に迎えたのは、これまで力投を見せる相方だった。
「ナイスバッティング。また随分と凄い飛距離っすね」
「あぁ。怪我をしていた間、肉体改造に取り組んだ甲斐があったな」
「もうバッティングの感覚は完璧に戻ったんじゃないんですか？」
「いや、まだまだこれからだ。だが今のは自分でもいいバッティングができたと思う」
ふっと、どちらともなく笑みを見せると二人はタッチを交わす。
四対二。勝負はまだまだこれからだった。

◇

擦ったような金属音と共に、ボールが内野へと上がる。
あぁと零れるため息と悲鳴はグラウンドの外から。
門田は悔しさに顔を滲ませながらバットを半ば地面に叩き付け、一抹の期待を込めて一塁へと走った。塁にいた空と春市もまた、奇跡を期待して次の塁へと向かう。
けれどサードがしっかりとボールをキャッチしたことで、奇跡の芽は潰えること

となる。

これでようやく試合終了だと、松本はベンチの中からほっと息を吐いた。

……4対3。勝つには勝ったが、またえらい接戦になってもうたな。

当初の予定では、もっと大差をつけて勝つはずだった。

それが打線が四点しか取れないことも予想外ならば、終盤になって追い上げられるのもまた予想外。野球というのはつくづく恐ろしいものだと、松本は身に染みて実感した。

そしてこんな予想外だらけの試合展開になった原因の二人の内の片割れ、山城空に松本は思いを馳せた。

……ある程度予想はしとったが、ほんまええ投手や。

ベンチから見ていてもはっきりとわかるほど、今日の山城は体が重そうでボールも走っていなかった。だというのに、強打が売りの大阪桐生相手にキッチリと試合を作り最後まで流れを持っていかせなかった。修正力の高さと言い、あれでほんまに一年かいなと松本はルーキー離れし過ぎた完成度の高さに感服するしかなかった。

……片岡はんも監督として冥利に尽きるやろうて。あんな投手、人生でいっぺん出
会えるかどうか。
だがこの試合で松本が本当に驚いたのは空ではなかった。原因のもう一人、まったくノーマークだった選手に名門大阪桐生はまんまと翻弄されたのである。
……なんや昔どっかで聞いたことある名前や思うたら、クリスってあの丸亀シニアのクリスかいな。最近全然噂に聞かんからすっかり忘れとったで。
守っては空を上手くリードして大阪桐生の勢いを削ぎ、打っては舘相手に四打数二安打一HR、二打点の大活躍。
間違いなく今の試合最大の立役者は空でも舘でもなく、このクリスだった。
……正直、何で控えに甘んじとうのかわからんわ。化け物みたいな肩しとったし体格もいい。ありゃ全日本選抜に選ばれるくらいの選手や。
他にも小柄ながらミートが上手く守備でも光るモノをみせた一番など、とても控えとは思えない充実っぷり。
こりゃ戦力の想定に大幅な修正の必要があるなと、松本は青道の層の厚さに舌を

巻いた。

……でもま、それでも勝ちは勝ちや。館にとっても今の試合はいい経験になったやろ。

午後に控えた青道の主力との戦い。

はてさてどんな試合になるやらと、松本は今から試合が待ち遠しかった。

というわけで、空の二つ目の変化球はチェンジアップでした。これまで引っ張ってた割に普通でごめんなさい。

なお、次話で栄純の試合を書く気はありませんのであしからず。しかしテンポを重視しているのに中々話が進まない……

感想・評価待ってます。

16話

遅くなりました、16話です。今回の話は本当に悩みました。何か無駄に長くなってしまったし……

I

大阪桐生と青道による二つの練習試合は、結局のところ二試合とも桐生の勝利で幕を閉じた。大会まで一月を切ったこの時期、同じ学校相手に二つ続けての敗北は応援に来ていた青道ファンに一抹の不安を抱かせたものの、ベンチの厚さや打線の好調ぶりなどポジティブな要素を感じさせる試合でもあった。

そして試合が終わったその日の夜、日付が変わるおよそ2時間前。

本来無人である筈の青道のAグラウンドには一つの影があった。

……今日の試合、山城の奴は9回投げて4失点。一方の俺は9失点。

腰に巻いたゴムバンドでタイヤを引きずりながら、沢村栄純はただがむしゃらに

走っていた。本来試合に登板したその日の夜は早めに休息を取り、疲れを翌日に残さない様にしなければならない。ならないのだが、

……寝れるわけねぇよ！

瞼を閉じると浮かび上がる、昼間の試合。

午前の試合で好投を見せた山城に負けるかと意気込んで臨んだものの、結果は散々。

甘く入った球は尽く弾き返され、守備ではエラーに悪送球とミスを連発。

もしもバックの助けがなければもっと悲惨な展開になっていた、そのことがわかっているからこそ栄純は悔しかった。

「うぉおおお!!」

登板後の決まりなどまるで無視して、栄純は雄叫びと共に足を動かすスピードを上げた。ただでさえ疲労の溜まっている身体での全力疾走は泣きたくなるほど辛いものだが、それでも栄純は走り続けた。

……次は、次の試合では絶対にこんな情けねぇ結果にはしねぇ！

コントロールもスタミナも、守備もバッティングも全て足りない。

けれど諦めはしない。
諦めれば、きっと追い付けないから。
今はまだ遠い。
けれど、いつかきっと。
「待ってろよ山城！　絶対、絶対に追いついてやる！　エースになるのは俺だっ!!」

◇

「お～お～。沢村のやつ、ついに叫びながら全力で走りだしたぜ。登板後だってのにいいのかよ。流石に止めた方がいいんじゃねェのか？」
「かまわねぇよ。明日はあいつ出番ねぇし、むしろここで止めて変に寮で騒がれる方が面倒だろ？」
「ヒャハハ。違いねぇ」
栄純の性格をよく理解しているが故の御幸の言葉に、倉持は笑った。
就寝前の軽い運動にと、ランニングで土手を走っていた二年生のレギュラーコンビがグラウンドで一人タイヤを引く栄純を見つけたのがつい5分ほど前のこと。

その頃からペースが変わらず、それどころかペースを上げて走り始めたルーキーに「やっぱバカだな」と倉持は口元から白い歯をのぞかせた。
「それで。今日実際に沢村のボールを受けてみてどうだったんだよ？」
「球自体はそんなに悪くねぇよ。甘くなることも多かったけど、いいとこに行ったボールは殆ど打たれてない。まぁ、バックの助けがあったとはいえあの桐生相手に疲れた体で９回まで投げ切って二桁失点してないんだ。一年にしちゃあ上出来だろ」
「へ～。珍しく褒めるじゃねぇか」
「あくまでも『一年』にしては、だけどな。内と外の投げ分けをしようとしてたみたいだけどコントロールは随分とアバウトだったし、フィールディングも拙い。打者を揺さぶる変化球もねぇし、正直あのままじゃ大事な場面は任せれねぇな」
「だよな～」
「でもまぁ、入学当初のことを思えば大した成長だと思うぜ？」
タイミングの取り辛い変則フォームから繰り出されるムービングボールに、それを活かした四シーム（真っ直ぐ）。更に今では未熟ながらも内と外の投げ分けさえ

しようとしている。まともに練習にすら参加させて貰えていなかったつい二か月前を思えば、随分な進歩の速さだった。

当時の栄純のことを思い出したのか、確かにと倉持は御幸の言葉に深々と頷いた。

「けどよ、いくら沢村のやつが成長したとしても夏の大会であいつの出番はあるのかよ？　ウチには丹波さんに山城、それにノリだっているんだぜ」

「出番があるかまではわからないけど……準備しとくに越したことはねぇだろ。大会じゃあ、いつ誰が怪我したり不調になったりするかわからないしな」

「それもそうか……ところでよ」

「ん？」

「ぶっちゃけ、お前は丹波さんと山城のどっちがエースに選ばれると思ってるんだよ？」

今年の夏のエースは一体誰なのか。

それは四月から青道野球部の中で囁かれ続け、今ではその話を聞かない日はないというぐらい日常的にかわされている話題だった。

「みんな気になってるぜ。どっちがエースになるのかってな。成績からいやぁそ

りゃ山城だろうけど、丹波さんも最近調子を上げてきてるし何より三年からの信頼がある。その辺、捕手としてどう思ってるんだよ？」

「別にどうもねぇよ。どっちにも資格はあるし、逆に足りないものもある。誰がエースになるのかは監督が決めることだろ」

「ちっ。優等生みたいな返答しやがって……でも山城がエースになったらお前は危ないんじゃねぇのか？」

「うん？」

にやりと、倉持は人の悪い笑みを浮かべた。

「だって山城のヤツ、クリス先輩にべったりだろ？　今日の試合見ててもお前と組んでた時よりもずっと伸び伸びと投げてたし。実力があって三年からの信頼が厚いあの人が戻ってきた以上、お前のレギュラーの座も終わりかもな」

「……本人目の前にしてズケズケ言うなぁ」

事実は事実だが、それでも笑いながらいうことではない。

まぁその辺りがクラスで浮いている理由なのだろうと、同じくクラスで浮いている自分を棚に上げて御幸は苦笑した。

「確かにポジション争いはキツクなるけど……正捕手の座を渡す気はねぇよ。クリス先輩にも、それに勿論ミヤさんにもな」
「ヒャハハハ。丹波さんに嫌われてるやつが良く言うぜ。エース候補二人から避けられて正捕手になれるのかよ」
「なってやるさ。どれだけ嫌われようと、避けられようとグラウンドに入ったら同じバッテリーだからな。先輩も後輩もねぇ。全力で投手の力を引き出して見せるさ」
「まっ。それだけ言えるならお前は大丈夫なんだろうけどよ……」
「何か気になることでもあるのか？」
「いや。なんつーか最近、丹波さんおかしくねぇか？」
あんま上手くはいえねぇんだけどと前置きし、
「丹波さんって難しい人だし、あんま後輩には心開いてねぇけどその分三年には心開いてるだろ？　特にクリス先輩とは仲良さそうだったし」
「あぁ。俺もクリス先輩が丹波さんのフォームを確認していたのをよく見たな」
「だろ？　だからクリス先輩が一軍に上がった時に最も喜ぶのは山城を除けば丹

波さんだと思ってたんだけどよ。それが……」
「どういうわけか丹波さんがクリス先輩を避けている……か？」
そのものズバリの回答に、倉持は目を見開いた。
にやりと口元に弧を描いた御幸に、倉持は面白なさげに口を尖らせた。
「気付いてるなら、何かしなくていいのかよ？」
「別にいいんじゃねぇか？」
丁度今年の四月ごろからだろうか。
クリスと丹波が一緒にいることを見る機会が少なくなったのは。
何となく丹波がクリスを避けるようになった理由を知りつつも（というかあからさま過ぎて）、御幸は自分から動く気はなかった。
「丹波さんの問題は、丹波さん自身で解決しなきゃいけねぇことだろ。俺達が変に出張ることじゃねぇよ」
「……お前時々つめてぇよな」
「俺達は野球をやるためにこの青道に来たんだ。そりゃ仲が良いに越したことはねぇけど、かと言って他人が――特に後輩の俺達が手出してまで無理やり馴れ合

う必要はねぇよ」

正論と言えば正論、冷たいと言えばそれまで。

御幸の考え方は実に捕手らしい、プロのそれにも繋がるプラティカルなものだった。

倉持ははぁと息をついた。

「お前、それゾノには絶対に言うなよ。あいつ、仲間とかを大事にするヤツだし」

「あぁ」

「しかしまぁ、大会まで後一か月だってのに色々問題も多いよなぁ」

倉持は空を見上げた。

さっきまで澄み切っていた六月の夜空には、徐々に暗雲が立ち込めようとしていた。

Ⅱ

雨が降っていた。

昼間の快晴とは打って変わり、陽が落ちると共に降り始めた予報にない豪雨。

激しく窓を打ち付ける雨音と、時折聞こえる雷鳴が音のない監督室を包んでいた。
そんな自然の音だけが聞こえる室内で、片岡は灯りもつけず来客用のソファーで瞼を閉じ静かに腕を組んでいた。
コンコンと、雨音に紛れながら戸が叩かれる音がする。
片岡が瞼を開くと同時に、扉が開かれた。
「ただ今戻りました」
「あぁ、二人ともご苦労だったな」
ほんのりと雨に濡れた太田と高島にねぎらいの言葉をかけると、二人はそのまま片岡の対面のソファーに腰を下ろした。
口を開かずとも雄弁に語る二人の浮かない表情に片岡は眉間に皺を寄せた。
「……それで丹波の状態は？」
「重症です。顎の骨に罅が入っています。幸い骨折には至らず脳にも影響がないとのことですが、しばらくは動かせないためそのまま病院で入院に……」
「……復帰の見込みは？」
「それが、その……医師によれば投げられるようになるのは早くとも7月の下旬。

少なくとも予選にはまず間に合わないと」
「そうか」
それだけ言うと、片岡は口を閉ざした。
大阪桐生との練習試合の翌日、合宿最終日。
青道高校は昼間に稲実と修北の二校を相手に合宿の締めとなる練習試合を行った。
本来ならば今頃、その二試合の結果を踏まえて夏の予選ではどのようなオーダーを組むかを考えている筈だった。
けれど、修北との練習試合中打席に立った丹波にまさかの顔面デッドボール。
これまでチームを支えてきたエースの負傷に首脳陣も穏やかではいられなかった。
高島はハンカチでスーツについた水滴を拭い、眼鏡のテンプルに手をかけた。
「先程ちらりと見ましたが、既に選手達の間でも少なくない動揺が広がっているようです。速めに対応しなければ手遅れになる可能性も」
「えぇ。特に今年の三年は絆が強いですから……」

精神的にも成熟したプロとは違い、まだまだ未熟な高校生では気持ちの切り替えというものが難しい。そして不安定な精神状態はプレーにも影響を及ぼす。

当然そのことは片岡とてわかっている。

「明日にでも選手を集め、丹波のことを言うつもりだ。無駄に隠せばそれだけ動揺も大きくなるからな。また三年に対しても状況を見ながらそのつど手を打っていく」

「はい。それがいいかと。しかし不幸中の幸い……とも言えませんが、ウチにはまだ山城君がいます。彼を主軸にし、沢村君と川上君で支えれば」

「あぁ。それしか方法はないだろう」

丹波という信頼を得ていたエース候補が離脱したのは大きな痛手だが、それでもまだ青道には山城空というもう一人のエース候補がいた。

チームを背負うというエースに不可欠な自覚が欠けているという不安もあるが、それを差し引いても実力という面では文句のつけようがない。

誰にも期せぬ形で青道の夏を任せる実質的なエースは決まったが、そうなるとまた別の問題も浮上する。

「しかし片岡監督。だとすればエースナンバーもやはり山城に？」

そう。

エースとしての象徴であるエースナンバーまでも山城に託していいのかという問題が。

続きを促す片岡からの視線に、太田は背筋を伸ばした。

「丹波がこうなった以上、山城を主軸にすることに私も異論はありません。けれどやはり、その、三年生と丹波の気持ちを考えればエースナンバーは丹波に託した方が……」

「仰ることはわかりますが太田部長。予選の間に戻ってこれるならともかく、間に合わないならやはり実際にマウンドに立つ山城君にこそエースナンバーを託した方がいいのではないでしょうか？　エースナンバーを背負うことでエースとしての自覚が芽生えるという事例も多々あることですし」

「しかし高島先生。これまで三年はエースである丹波と一緒にこの夏を闘うことを夢見て、そして丹波はそんな仲間の期待に応えるために頑張ってきました。それが純粋なエース争いで負けたならともかく、こんな形でエースの座を奪われれば三年

の士気に影響が……」

「状況が状況ですからみんなわかってくれるはずです。それにエース不在で予選を戦うとなれば、無意識のうちにエースの姿を求めてチームの中に緩みが生まれる恐れがあります」

「そうは言いますが……」

白熱するやり取り。

三年の気持ちを大事にして試合に出られない丹波にエースナンバーを渡すべきだという太田、出れない選手よりも実際に投げる山城にこそ託すべきだという高島。どちらも青道を思うが故の意見のぶつかり合いは平行線を辿っていた。

片岡はそのどちらに加勢するわけでもなく、無言で腕を組んだまま二人をやり取りに耳を傾けていた。

その時、コンコンと再びドアが叩かれる。

思わぬ来訪者に高島と太田が議論を切り上げて口を閉じる中、片岡が入るよう促した。

開かれたドア。

そして現れたのは、

「結城君……」

「それに御幸とクリスも、いったいどうしたんだこんな時間に？」

「いえ、お二人が帰ってきたら監督室に来るようにと監督から言われていたので……」

結城の言葉に高島と太田は揃って視線を対面へ。

組んでいた腕を解いた片岡は顔を呼びつけた三人へと顔を向けた。

「明日全員に伝えるが、チームの要であるお前達には先に言っておく。今しがた丹波の怪我の状態がわかった。……丹波は夏の予選には間に合わない」

『っつ!?』

はっきりと、三人の間に動揺の色が走る。

片岡はサングラスの中の眼を僅かに伏せた。

「……こんなことになるまで、俺は丹波をエースに据えるつもりだった。しかし丹波が予選に間に合わない以上、この夏は山城を主軸にして闘っていく。だがエースナンバーを山城に渡すかどうかを正直きめかねている」

「か、片岡監督もやはり迷っておられて……」

だからこそと、片岡は語気を強めた。
「お前達の意見が欲しい」
「自分達の……ですか？」
「あぁ。丹波と山城、どっちにエースナンバーを託すべきだと思う？　俺のことは気にしなくていい。率直な意見を聞きたい」
片岡がこのような誰を選ぶかということで選手に意見を求めるのは極めて異例だった。
異例だったが、それは裏を返せば現状がそれだけ切迫しているということでもある。
突然のことに戸惑う三人の中で、最初に口火を切ったのはやはり主将だった。
「率直な意見で構わないんですよね？」
「あぁ」
「自分個人としては、丹波にエースナンバーをと思っています。けれど例えどちらであろうと、監督の出した答えに従うだけです」
「うむ。御幸は？」

「そうですね……自分も監督の結論に従いますが、チームの士気を考えればやはり丹波さんに託すのがいいかと」
「わかった。クリスはどう思う？」
片岡は残った最後の一人へと目をやった。
「三年の中で山城と丹波の両方を最も良く知るお前の意見を聞きたい」
クリスは未だに答えを出しかねているようで、口元に手を当てていた。
そして答えが出たのか、ふぅと息を吐き出した。
「自分は――――」

◇

……お前にエースナンバーを託す、か。
つい一時間ほど前。皆の前で監督から言われたことを思い出しながら、空は自販機で買った馴染のスポーツ飲料を傾けた。
何となくわかってはいた。
丹波が怪我をした段階で、自分を投手の中心にして闘っていくということは。
わかっていたけれど、

……こんなに早く背番号を渡されるなんて思ってなかったな。

監督から手渡された背番号１は、今頃マネージャーの手によって試合用のユニフォームにつけられていることだろう。

レギュラー発表もまだの時期に一人だけ早くエースナンバーを渡されるという意味。

沢村などは贔屓などと騒いでいたが、

……エースの自覚を今から持っておけってことだよな。

はぁと空はため息をついた。

シニア時代も財前やクリスの世代が引退して以降、空は常にエースナンバーを背負っていた。けれどそれは単純に投手の中で最も実力があることを示す符号に過ぎず、決してチームを背負う意味合いは含まれていなかった。

……チームを背負う……か。

一体それが何なのか。

どうすればチームを背負ったことになるのか。

……もともとクリス先輩を甲子園に連れて行くために青道に来たのになぁ。

エースの座に全くの興味がないといえば嘘になるが、それでもクリスとさえバッテリーを組めるのなら背番号に執着はなかったというのが正直なところ。

それがどうして、いきなりチームを背負うという立場にいるのか空にはわからなかった。

……とりあえず自己啓発本でも読めばいいのか？

良い感じに迷走し出した空の思考を止めたのは、頭上からの声だった。

「さすがに戸惑っているようだな」

「クリス先輩……」

Ｔシャツにスウェットというラフな姿で階段を下ってきたクリスは自販機で缶コーヒーを購入すると、そのまま空の隣でプルトップを空けた。

「シニアでノビノビと野球をやってきたお前が、いきなりエースになってチームを背負えって言われた所で戸惑うのも当然だ。エースという称号を煩わしく感じるのもな」

「……はい」

「だがそれでも、俺はお前にチームを背負ってほしいと思っている」

「えっ？」

驚きの声を上げた空に、クリスは優しく微笑んだ。

「昨日、監督に呼ばれてな。丹波とお前、どっちにエースナンバーを託すべきかを聞かれたよ。一緒に呼ばれた結城と御幸は丹波に託すべきだと言っていた」

「……先輩は。クリス先輩は何て答えたんですか？」

「悩んだがな。丹波の思いは知っているし、お前がエースという称号に息苦しさを覚えるのもわかっていた。俺自身正直まだ早いとも思う。だがそれでも山城にエースナンバーを託してほしい……監督にそう言ったよ」

「なんで……ですか？」

「そうだな。色々あるがやはり一番の理由は――単純に見てみたいと思ったからだ」

「見てみたい？」

「あぁ。俺がまだ現役である内に、お前が日本一の投手になるのをな」

戸惑いの表情を浮かべる空の前でクリスは一度缶コーヒーに口をつけた。

「少し甘いな……山城。初めて出会ってからこれまでの三年間でお前は急激に力を

つけた。それこそ単純な実力だけで言えば、既にお前と互角に渡り合える投手は全国でも五人といないほどにな」

だがと、クリスは目を細めた。

「そんな彼らにあって、お前にないものが一つある」

「俺にないもの……」

「あぁ。これだ」

とんと、クリスは握った拳を空の胸元――丁度心臓がある位置へとあてる。

空はゆっくりと視線を下へと落とした。

「チームを背負っているという、エースとしての自覚。プライドと言い換えてもいい。どんな状況であってもノビノビと自由に野球を楽しめる、確かにそれはお前の長所だ。けれどそれではやはりチームを背負った相手の気持ちに呑まれてしまうこともある」

「気持ちに呑まれる……」

「俺からお前に出す、最後の課題だ。チームの想いを背負い、本当のエースになれ。そうすればお前は日本一の投手になれる」

日本一の投手になれる。
空は半ば呆然としながらそれを聞いていた。
けれどすぐに我に帰り、
「でもクリス先輩。チームを背負えって具体的にどうすれば……」
「特別なことをする必要はない。今まで通り練習し、毎日を過ごせばいい」
「それだけですか？　いや、ほらもっと上級生と会話する時間を増やすとか……」
「チームを背負うというのは本人の自覚と、仲間からの信頼で成り立つ。上辺を取り繕った所で意味はない。既にお前はその力でチームからの信頼を勝ち取りつつある。後はお前の気持ちの持ちようだ」
持ちようだと言われても空にはイマイチピンとこなかった。
それが顔に出ていたのだろう、クリスは苦笑を浮かべた。
「そう不満そうな顔をするな。実際、お前は無意識の内にその一歩を踏み出しているんだぞ？」
「えっ？」
「チームを背負うためにどうすればいいかを自分の意志で考え、悩む。入学当初の

お前では考えられなかったことだろ？　それこそが自覚の第一歩」

未だ入学から二カ月と言う短い期間ではあるが、その間に空は様々なことを知った。

試合に出ることに必死な選手の飢え。

夏を迎える前に終わりを迎えた三年生の無念。

それらは空の内面を劇的に変えることはなかったが、着実に変化をもたらしていた。

「大会まで確かに時間はない。だが焦るな。答えは自ずとお前の中から生まれてくる」

「答えは俺の中から……」

こうしてまた一つ、夜が更けていった。

感想・評価待ってます

第2章　夏大会編

17話

とりあえず、開会式まで。次からようやく本番となる予選に入ります……ここまで本当に長かった。というか、途中でエタらずにここまで来れたことが既に奇跡に近いという……

I

6月の下旬、この月最後となる火曜日。

例年よりもいささか早く梅雨入りをした東京は、これまた例年よりも早く梅雨のシーズンを終え、これから暑い夏を迎えようとしていた。

夏の高校野球予選開幕までおよそ二週間。

予選の組み合わせも決まりいよいよ間近に迫ってきた本番を前に、青道高校は暑

さとはまた異なる熱気に包まれていた。放課後毎日のように校舎裏で行われるブラスバンド部の演奏に、チアガール達による振付の練習。

クラス内における何気ない会話でも夏の高校野球が自然と話題に上り、普段はあまり関心のない生徒達までも試合に足を運ぶ算段を巡らせる。

毎年のように繰り返される、野球名門校ならではの光景。

否応なく高まる野球部への期待に応える様に、グラウンドでは連日熱いプレーが繰り広げられていた。

――――行ったぞセンター！

――――ボール三塁……いや、回った！　バックホーム！

――――舐めんじゃネェぞコラァ!!

――――うぉっ!?　すげぇレーザービーム！

センターから勢いよく投じられたボールは中継を挟むことなく低い軌道でホームに突き進み、ホームベース前で待ち構えていたキャッチャーのミットへと収まった。

マスクを脱ぎ捨てたクリスは地面についた左足でホームを陥れようとするラン

ナーをブロックしつつ、ボールの入ったミットを滑らかな動きで横へと滑らした。
際どいタイミングなれど、ホームに滑り込んできたランナーはタッチアウト。
シートバッティングの中でのこととは言え、センターとキャッチャーによる見事な連携プレーにグラウンドはにわかに活気づく。その様子をベンチ前から監督の片岡と共に観察していた高島礼は小さく頷いた。
「……丹波君が怪我をした時はチームの士気が低下することを懸念していましたが、声も出ていますしどうやら問題なさそうですね」
「あぁ」
「三年生は絆が強いですし、時期が時期です。状況によっては個別のカウンセリングの必要もあるかとも思ったのですが……」
「勝たなければ、甲子園に行かなければ丹波が投げられないのはみなわかっているからな。怪我の功名などというつもりはないが、丹波が怪我をしたことで選手達の間で甲子園という目標がより明確なものとなった。落ち込んでいる暇などないということもな。それに……」
「はい。御幸君とクリス君の存在ですね」

片岡の言葉を引き継ぐようにそう言って、礼は目尻を緩めた。

グラウンドでは御幸とクリスの捕手二人が競い合うように率先して声を出し、自分こそはとばかりにバイタリティー溢れたプレーで回りを引っ張っている。

「クリス君が戻ってきたことで、正捕手の座は完全な白紙に戻りました。御幸君にクリス君……それに宮内君の三人ともプレーに強い想いが籠っているのがこうして見ていてもわかります。そして他の選手達も彼らに引っ張られる様に……」

「レギュラーだけでは本当に強いチームは作れない。ベンチを含めたメンバーと共に競い合い、切磋琢磨することでチームは強くなっていくものだ」

「仰る通りだと思います……しかし、クリス君と御幸君。どちらを正捕手にするのか本当に難しい所ですね」

「あぁ」

シニア時代は関東NO1キャッチャーとの呼び声も高く、怪我をするまでは青道のクリーンナップを務めていた滝川・クリス・優。怪我から復帰した当初は多少のブランクを感じさせたものの、ほとんど勘を取り戻した今では以前と何ら遜色ない、それどころか昨年よりも一回り体格が大きくなったことでプレーの一つ一つに

磨きがかかってさえもいる。

そして一方、クリスが怪我して以降青道の正捕手の座を守り続けていた御幸一也。

クリスに比べれば体格的に劣るものの、強気なリードと強肩、そしてチャンスに強いバッティングはこれまで青道にいくつもの勝利をもたらしてきた。

両者とも間違いなく全国でもトップレベルの捕手であり、こうして同じチームにこのレベルのキャッチャーが二人もいるのは半ば奇跡とも言えた。

「エースである山城君との相性を考えればクリス君ですが、かと言って山城君と御幸君の相性が悪いという訳でもありません。それに御幸君にはクリス君にない、この一年間で積んだ経験があります」

クリスと御幸のどちらを正捕手にするか。

捕手の育成に悩むことの多い他の高校にしてみれば贅沢すぎる、されとて非常に難しい問題だった。片岡自身決めかねているのか、腕組みをしたままグラウンドで競い合う二人をサングラス越しに静かに見つめていた。

◇

学生にとって鬼門ともいえる期末考査を終え、生徒達がほっと息を吐きながら夏

休みの予定に思いを馳せる頃。一般の生徒が浮き足立ちながら帰路に就く一方で、これからようやく本番を迎える野球部員達は休む間もなくグラウンドに集められていた。

「今から背番号を渡す。呼ばれたものから取りにこい」

片岡の言葉にピンと空気が張り詰める。

夏の大会開幕まで残り一週間。

大会に出場できるのは1～20の背番号をつけたたった二十人の選手のみ。

青道ではもともと一軍という形で大会を闘う選手を選抜していたものの、それでもやはり正式に背番号を与えられるということは大きな意味を持つ。

そして与えられた数字の番号によっても――

「まずは背番号1……山城空」

「はい」

一人先に背番号を受け取っているため、空は返事を返すだけだった。

片岡は小さく頷くと、礼から2と書かれたゼッケンを受け取る。

「きたっ」と、誰かが囁いた。

「続いて背番号2だが――――」
背番号2。
それは正捕手を示す番号。
今回の発表における注目対象。
誰もが息を呑んでその続きを待った。
「――――滝川・クリス・優。お前に任せる」
ざわりと、空気が震えた。
――――クリス先輩が正捕手!?
――――御幸が落ちたっ！
――――やっぱり山城との相性をとったのか？
ざわざわと未だ喧騒冷めやらぬ中、クリスが片岡から背番号を受け取る。
そしてその様子を御幸は半ば諦観とも取れる苦笑と共に見つめていた。
背番号を受け取ったクリスが選手の列に戻ると、片岡は手を叩いた。
「今年の夏は山城をエースとして闘っていく。だが知っての通り山城はまだ1年だ、当然至らない部分も多いだろう。クリスには大会中山城についてもらい、状態

を管理してもらう。だから川上、沢村については御幸、宮内。お前達がコントロールしてやってくれ」

「「はい」」

「よしっ。では続けるぞ」

それからの発表は概ね皆の予想通りだった。

背番号1　山城空
背番号2　滝川・クリス・優
背番号3　結城哲也
背番号4　小湊亮介
背番号5　増子透
背番号6　倉持洋一
背番号7　坂井一郎
背番号8　伊佐敷純
背番号9　白洲健二郎
背番号10　丹波光一郎（入院中のため不在）

背番号11　川上憲史
背番号12　御幸一也
背番号13　門田将明
背番号14　楠木文哉
背番号15　樋笠昭二
背番号16　田中晋
背番号17　遠藤直樹
背番号18　宮内啓介
背番号19　小湊春市
背番号20　沢村栄純

選手の発表が終わるとこれまで選手を支えてくれてきたマネージャーにも試合用ユニフォームが渡される。感極まって涙ぐむ貴子を見て和む空気をもう一度引き締めるかのように、片岡は一歩を踏み出した。

じゃりっとスパイクが地面を踏み締める音がグラウンドに響く。

「……高校野球に次はない。そしてもう一度丹波と共に戦うためには、甲子園の舞

台に立たなければならない」

片岡が選手の顔を見渡すと、そこには覚悟を決めた漢達の顔があった。

「言われるまでもなく、覚悟はできているようだな……よし。いつものやついけ」

『はい！』

夏の予選を闘うメンバー十九人が円となる。

行われるのは創部以来、青道高校野球部に伝わる伝統。

選手全員が右手を胸に当てたことを確認し、結城はトントンと親指で心臓を叩いた。

「俺達は誰だ――――」

『王者青道!!』

「誰よりも汗を流したのは」

『青道!!』

「誰よりも涙を流したのは」

『青道!!』

「誰よりも野球を愛しているのは」

『青道!!』
「戦う準備はできているかっ!?」
『おおおぉお!!』
「我が校の誇りを胸に狙いは全国制覇のみっ！」
気合の宣誓と共に結城は左手を空へと掲げ、その人差し指で蒼天をついた。
そしてそれに合わせて、他の十八人もまたその指先を天へと向ける。
「いくぞぉ!!」
『おおおおおおぉおおお!!』

Ⅱ

全国高校野球選手権。
戦前から続き、夏の風物詩とさえ言われる一大イベント。
歴史あるこの大会もついに89回目を迎え、今年もまた全国各地で高校球児達が汗を流し甲子園出場という限られた枠を求めて競い合う。
そして7月12日、この日遂に東西東京大会の幕が開けた。

それは同時に、青道の夏が始まったことをも表していた。

◇

「あっち～」

神宮球場の入り口、数多の高校が入り混じった人混みの中を歩きながら空は天を仰いだ。

擦れ違うのは今し方開会式をばかりのユニフォーム姿の球児達で、帰り支度を整えた学校から我先にと駅に向かって歩いている。

色分けされた人の波が途切れることなく駅に向かって行進する様は奇妙の一言。

空はつい先程まで味わっていたすし詰め状態での開会式を思い返し、うんざりとした顔でぼやいた。

「何であんなに人が多いんだよ……狭いし暑いし、いくら神宮が広いっていっても詰め込みすぎだったろ、あれ」

「仕方ないよ。東京は西と東で大会は別れるけど、開会式は合同だから」

「どうせなら開会式も分けりゃあいいのに……東京ドームと神宮とかで」

「えっと……流石に東京ドームで開会式はないと思うよ？　それより早く戻ろう

よ。バスがもう来てるかもしれないし」
「大丈夫大丈夫。そんな焦ることないって」
「その余裕がどこからきているのか知りたいよ……」
困ったように春市は笑う。
他の学校と違い自前の移動用バスを保有する青道高校は電車ではなく、バスによる帰校となる。そのため迎えのバス来るまでの間、空は春市と共にトイレを済ませ他の部員達がいる集合場所へと戻っていたのだが――――
「あぁ～～～!!」
「ん？」
どことなく聞いたことのあるような、でもできれば聞きたくなかった声に空は春市との会話を切り上げ振り返った。
目に入ってきたのは白き軍団。
帽子からユニフォーム、アンダーシャツに至るまで白で統一されたその集団の胸元に黒の絹糸で刺繍されるは『ＩＮＡＳＨＩＲＯ』の文字。
「稲城実業……」

ごくりと、春市が息を呑むのが空にはわかった。
稲城実業高等学校。
青道、市大三高と並ぶ西東京三強の一つ。
ここ数年甲子園出場を逃している青道とは対照的に甲子園への出場回数を増やし、三強の中でも実質最強と謳われる名門校。
そしてその稲城でエースナンバーを背負っているのが軍団の先頭にいる――
「丹波さんの代わりに誰が青道のエースナンバーを背負っているのかと思えば、やっぱ山城じゃん」
「成宮……」
「成宮〝さん〟だっつーの、一年」
ぴしりと額に青筋を浮かべたのは、色素の抜けたような淡い髪色をした少年。
未だ幼さを残した顔つきの二年生サウスポー、成宮鳴。
鳴はやれやれと首を振り、
「ったく。相変わらず生意気っていうか、後輩なのに態度がでかいんだよ」
「……お前が言えたことかよ、鳴」

「俺は十分謙虚だからいいの！」
「どの口で言ってるんだか……」
稲実の正捕手にしてキャプテン、原田雅功からの苦言に反論すると、鳴はあらためて空へと向き直った。また面倒くさい人に捕まった――言葉にはしないものの、露骨に顔を顰めた空に鳴はにやりと笑みを見せた。
「そんな嫌そうな顔をするなって。こうして面と向かって話すなんて久し振りじゃん。この前の練習試合でも結局ちゃんと会えなかったし」
「……あんたが投げているのは見ましたけどね（出会わないよう逃げていたことは秘密）。随分と調子良さそうじゃないっすか」
「それはお前もだろ？　聞いてるよ、関東大会での成績。また速くなったらしいじゃん」
「まぁ。シニアにいた時よりかは……」
「でも野球は球速だけじゃないからね。縦と横の変化、それに緩急をつけた投球。それらが出来て初めて一流だし。ただ球が速いだけじゃあ……」
得意げな顔で投手というものを語り始めた鳴。

あぁまたかと半ば空が諦めていると、淡い金髪に大きな拳が振り下ろされた。
「いてっ!?　何すんだよ雅さん！」
「シニアで負けたからって他校の一年に絡んでんじゃねぇよ。相変わらず器の小せぇ野郎だ」
「別に絡んでないし！　器も小さくないし！」
「そうやってムキになるからガキなんだよ……」
原田と言い合いを始めた鳴に、置いてきぼりを喰らった春市はどうすればいいかわからず視線をキョロキョロ。空は今の内に逃げれないかな～などと算段を巡らせてみたものの、鳴と原田の後ろでじっと自分を見つめるシニア時代の先輩を見つけ、逃走を諦めた。
……前に投げ勝ってから、やたらと絡んでくるんだよなこの人。
空と鳴の出会いは二年前、シニアのとある大会における準決勝でのこととなる。
当時、共にチームの絶対的エースであった二人は先発として試合に登板。
試合は投手戦の様相を呈したものの、終盤に広橋の放った一発を空が最後まで守りきったことで丸亀シニアの勝利で幕を閉じた。

そしてそれからというもの、顔を合わせる度に絡んでくる鳴に対し空は内心でうっとうしく――もとい、苦手意識を抱いていた。

……あぁ。早くクリス先輩のとこに戻りたい。

切実にそう思っていると、それまで無言を通していたどこか影のある少年――シニア時代の空の先輩――白河勝之がぼそりと口を開いた。

「……久しぶり、山城」

「あっ、えっと……お久しぶりです。白河先輩」

「結局ウチに来なかったんだ」

「いやまぁ、最初から青道に行くって決めてましたし。それに……」

ちらりと、空は未だ言い争いを続ける稲実のエースを見た。

「稲実に行くってなったら、多分あの人怒ったでしょ？」

「……鳴はお前をライバル視してるから」

「白河先輩こそどうして青道に来なかったんすか？　先輩もクリス先輩を尊敬してたのに」

「鳴に誘われたから。それに一度、あの人と別のチームで戦ってみたかったし」

「あー。なるほど」

シニア時代、白河の状況に応じて打ち分けられるバッティングセンスとその高い守備力に空は幾度となく助けられたものだった。

それが今度は敵に回るかと思うと、中々に嫌なものがある。

「……言っておくけど、試合では容赦しないから。お前でも、そしてクリス先輩が相手でも」

「あっ。勝之がいいことを言った。確かウチと青道ってブロックが違うから、あたるとしたら決勝でしょ？　シニアの時の借りを返すんだから途中でコケないでよね。全力でお前と一也のバッテリーを叩き潰してあげるからさ」

腕を組み、自信満々に鳴はそう宣言した。

彼の頭の中では既に決勝での光景が広がっているのだろう。

しかし空は一つ、訂正せねばならないことがあった。

「えっと……決勝で俺と組むのは多分御幸先輩じゃないっすよ？」

「ほへっ？」

「鳴。青道の正捕手は御幸の野郎じゃねぇぞ。あいつの背番号は12だった」

「うそっ!?　一也じゃないってじゃあ一体誰が」
「――俺だ」
背後から聞こえた馴染のあり過ぎる落ち着いた声音に、空は歓喜した。
見知らぬ他校の先輩達に遭遇し、これまでどうすればいいかわからなかった春市もまたほっと安堵の息を吐き出し、空と共にその名を呼んだ。
「「クリス先輩！」」
「中々帰ってこないと様子を見に来てみれば……こんな所にいたのか」
やれやれとでも言わんばかりにクリスは頭を振ると空の肩に手を置き、ゆっくりと視線を稲実へと向けた。
「久しぶりだな。原田、それに白河も」
「あぁ」
「……お久しぶりです」
原田は素っ気なく言葉を返し、白河は丁寧に頭を下げた。
一方一人蚊帳の外に置かれた鳴は不満顔で、原田のユニフォームの袖を引っ張った。

「雅さん、雅さん。この人だれ？」
「……お前も名前ぐらいは聞いたことあるだろ、滝川・クリス・優。俺達三年の世代でＮＯ１と言われてたキャッチャーだ」
「あぁ……シニアの時有名だったアニマルの息子。でも確か、去年大怪我したって聞いたけど？」
「俺もそう聞いてたんだがな……もう怪我は良いのか？」
「お蔭様でな。この通り完治している」
右肩を回して治ったことをアピールしたクリスに、原田は「また面倒くさい敵が増えた」と小さくぼやいた。一方、鳴は興味を覚えたのかじろじろとクリスの体を見回す。
「ふ～ん。あの一也からレギュラーを奪った人か……青道で気をつけなきゃいけないのは山城と哲さんだけかと思ってたけど……面白そうな相手が増えたや」
「俺にしてみれば厄介な相手が増えただけだけどな……しかしクリス。今日の開会式でも丹波の姿が見えなかったが、やはり？」
「まぁ……な」

「そうか……出来ることなら万全な状態のお前達と戦いたかったんだがな」

例え敵チームであっても、これまで戦ってきた相手が不慮の事故で大怪我をしたとなればやはり感じるものもあるのか。

深々と原田は息を吐き出した。

「丹波については残念としか言いようがないが……だからと言って手を抜くつもりも、負けてやるつもりもない……決勝で会おう」

「あぁ」

そうして、両校は別れた。

青道の夏が、遂に幕を開ける。

≪ここだけの裏メモ≫

この作品におけるクリスと御幸の能力をパワプロ形式で表してみました。あくまでもネタ、もしくは参考程度なので、細かな突っ込みはご遠慮お願いします。

滝川・クリス・優（3年）
右投げ右打ち　捕手　１８２センチ　80キロ（肉体改造のため原作よりも増加）
ミートＢ　パワーＡ　走力Ｃ　肩Ａ　守備Ａ　エラー回避Ｂ
特殊能力：チャンス４、広角打法、安定度、キャッチャー◎、守備職人、送球４
御幸一也（2年）
右投げ左打ち　捕手　１７９センチ　71キロ
ミートＢ　パワーＣ　走力Ｂ　肩Ａ　守備Ｂ　エラー回避Ｂ
特殊能力：チャンス５、キャッチャー○、送球４
※能力値の基準としては、Ｃで甲子園に出場する選手の平均値と言った所です。
こうして見るとクリス先輩がチートすぎますが、この作品ではこういうものだと納得してください（原作でも怪我をする前は別格だったらしいし、問題ないよね？）

18話

0

ついに開幕を迎えた、第89回全国高校野球選手権西東京大会。
たった一つの甲子園への切符をかけた１１８の高校による熾烈なデスマッチ。
今年もまた数多の想いが交差する熱きトーナメントにおいて、六年ぶりの甲子園を目指す青道高校の初戦の相手は一回戦を勝ち上がってきた都立米門西高校。
とり立てて特筆することのない、ごくごく普通の公立校でありその選手達もいたって平凡。一回戦を勝ち抜いてきた勢いこそあるものの、ベスト４常連である青道との戦力差は比べられようもない。
普通に闘えば青道の勝ちは小揺るぎもしないというのは、誰もが納得する所。
そんな半ば出来レースとして府中市民球場で始まった、西東京大会二回戦　青道高校対米門西高校による試合。
全国レベルの打線を有する青道が先攻なだけに、観客席にいる誰もが初回から試合が動くことを信じて疑わなかったのだが――――

I

ざわざわと、まだテレビ中継もない二回戦にしては空白の少ないスタンドから多かれ少なかれ戸惑いの声がグラウンドへと零れ落ちていく。
彼らの視線が向かう先は、たった今０が刻まれたばかりのスコアボード。
誰もが予想していなかった展開。
青道、まさかの三者凡退による初回無得点。
試合は始まったばかりとはいえ、余りにもあっさりと終わってしまった青道の攻撃にぽつりと、誰かが呟いた。
『大丈夫かよ』、と。
その一言を皮切りに、スタンドから不安の声が漏れ始める。
――――おいおい。まさか三者凡退かよ。
――――初回だからって緊張してるのか？
――――山城のためにもここは先制点が欲しい場面だったよな。
――――あんな淡白な攻撃で大丈夫か？　今年の青道は？

――――大阪桐生との練習試合も2試合とも負けていたし、やっぱり調整ができていないんじゃあないか？

これまでの歴史を紐解けば、優勝候補と目されながらも実力を発揮できずに散っていった高校はいくつもある。またつい昨日には、全国でも有数と謳われた重量打線を抱える成孔学園がまさかの1回戦で姿を消した。

高校野球では何が起きるかわからない。

観ている者はそれを知っているからこそ、波紋は波紋を呼ぶ。

そしてそんな頭上から漏れてくる不安の声に、米門西高校野球部監督、千葉順一はしてやったりと満足げに自慢の髭を撫でた。

……フフフ。さわいどる、さわいどる。

この試合、千葉が先発としてマウンドに上げたのは一回戦に先発させたエースサウスポー菊永ではなく、背番号10の南平守。

プロでもなかなかお目にかかることのない、アンダースローの投手である。

……今回も菊永で来ると思ったろ？　フフフ、当てが外れたな。

青道が米門西の初戦にビデオを回していたのは千葉も知っていた。

エースである菊永は客観的に見て決して優れた能力を持つ投手ではない。
球速は１３０に満たず、変化球のキレもない。
コントロールも悪いことからビデオを見た青道は思ったことだろう、攻略は簡単だと。
……だがその油断がウチの付け入る隙よ！
アンダースローに転向した一年の秋以降、南平はこれまで一度として公式大会に登板したことがないため当然青道にはデータがない。
つまり青道にとってみれば、攻略やすしと油断していた所に未知の投手が出てきたということになる。
〝千葉流勝負の鉄則　その１　どういう形であれまずは先手をとる〟
初戦で多少なりとも硬くなっている青道に動揺が生まれればしめたもの。
そして千葉の狙い通り、青道の自慢の打線はデータにないアンダースロー特有の浮き上がる軌道に戸惑い、いい当たりこそあったものの結果として三者凡退の無得点。
自身の策が的中し、名門校をやり込めるのは控えめに言っても非常に気分がよ

かった。

……先手は取った。次は……

攻守の入れ替わったマウンドでは青道の一年生エース、山城空が投球練習を行っている。

そしてそれを待っていたかのように、あちらこちらから聞こえて来るシャッター音と炊かれるフラッシュ。

南平の時とは余りにも違いすぎる扱いに、今に見ておけと千葉は鼻息を荒げた。

パンと手を叩き、マウンドに熱い視線を注ぐ選手達の注目を集める。

「いいか！　世間でちっとばかり持て囃されているようだが、しょせん相手は一年だ！　お前達のスイングで、あの小僧自慢のジャイロボールとやらを思いっきり引っ張ってやれ！」

『はいっ！』

青道を０に抑えた自信からか、一年には負けたくないという思いからか、はたまたこれまで１４０キロ近いマシンのボールを練習で打ち込んできた自信からか。

いつになく気合の入った返事に千葉は手応えを感じていた。

……天才だか何だか知らんが、所詮は高校に入ったばかりの一年坊主。付け入る隙は必ずある。

どれほど才能があるのか知らないが、一年にエースナンバーを背負わせたことを後悔させてやる――そう、思っていた。

山城空の投球を実際に見るまでは。

◇

唸りを上げた豪速球が打者の胸元を通り抜けていく。

最早バットを振ることさえ忘れた打者がゆっくりと振り向けば、そこにはコース一杯、インハイギリギリで静止するミットがあった。

あっ、今ボールが通ったんだ――打者がそうぼんやりと思うと同時、球審が手を挙げた。

「ットライク！　バッターアウトっ!!」

球審のコールを聞くが早いか観客席から歓声が飛び、無数のフラッシュがたかれる。

――うぉおおお!!　これで8者連続三振！　すげぇ、全く相手になってねぇ

!!

――――150近い伸びのある球をあれだけコーナーに散らされたら普通は打てねぇよ！

――――っていうか、本当にあれで一年か!?　どう見ても超高校級じゃねェかよ!?

――――山城空、噂に違わないってことか……

――――9者連続狙っちまえ！

スタンドの盛り上がりとは対照的に、あえなく8つ目の三振を献上した米門西の八番は次の打者にアドバイスすることも忘れ、生気の抜けた顔でフラフラと自身のベンチへと戻っていった。

3回裏、2アウトランナーなし。

スコアは15対0と青道の圧倒的リード。

ここまで米門西高校が山城空から積み上げてきたヒットは0、四球も0、ランナーも0、三振が8つ。つまるところ、米門西はランナーを出すどころか誰一人としてボールを前に飛ばすことすら出来ないまま打者一巡を迎えようとしているのである。

スタンドは圧巻の三振ショーに大いに盛り上がり、９者連続を求めて三振コールの合唱が始まる。
米門西校のベンチからでも聞こえて来る三振コールに、千葉は苛立ちを隠せず唸り声を上げ拳を固く握りしめた。
……まさかここまで実力が違うとは……
先手を取り、優位に立ったはずだった。
だがそんな優位は、たった一人の一年生投手――山城空によって蹴散らされた。
……思えばあれが全ての原因。あの投球で選手達の心が折れてしまった……!!
１回の裏、米門西の攻撃。
初回を無失点に抑え勢いに乗る筈だった米門西の打線は、マシンでも経験したことのない１５０近い活きた球の前に完全に沈黙。
僅か９球にして、３つの三振を献上しただけであった。
余りにも違いすぎる実力差。
それを目の当たりにし、米門西校ナインの中にあった糸が切れてしまった。
２回の表、青道の攻撃の場面。

初回は丁寧にボールを低めに集めていた南平はまるで別人の様にボールが高めに浮き、あっさりと青道の打線に捕まって2回途中7失点で無念の降板。

そして投手が変わった後も青道打線の勢いを止めることも、山城空の蹂躙を止めることが出来ず気が付けばこの有様。

「……どうやって打つんだよ、あの化け物」

それはついつい漏れてしまった言葉だろう。

誰もが思っていながらもここまで言わなかったことを、菊永が独り言のように呟いた。

それは決して大きな声ではなかったけれど、お通夜の様に静まり返った米門西のベンチにいた全員に届いた。

何を弱気になっているか――千葉は怒鳴り声を上げようとして、

『ストライクッ！　バッターアウト、チェンジ!!』

――うぉおお、9者連続三振!!

――キタキタキタッ――!?　成宮に並ぶ投手がついに青道にもっ！

――こうなりゃ行けるとこまでいっちまえ!!

――山城く～ん!!

……ど、どうすればいい……

凍りついたベンチでどうすることもできず、千葉はただただ立ち尽くした。

Ⅱ

……勝負あったな。

青道のベンチでプロテクターを外したクリスは、意気消沈して守備に就く米門西校選手の顔を見てこの試合に決着がついたことを悟った。

例えどれだけ点数差があろうとも、高校野球には真の意味でのセーフティーリードは存在しない。少しでも気を抜けば、あっという間に流れが持っていかれてしまう。

それが高校野球。

けれどそれは逆転する意思があればという前提でのこと。

心が折れてしまえば、最早逆転はあり得ない。

そしてそうなる様にリードしたのはクリス自身だった。

もともと山城と米門西校打線との実力差は明白。
だからこそそれがはっきりとわかる様に行った、４シームジャイロのみでの勝負。
そうして成し遂げた九者連続三振。
対戦した打者は理解したことだろう、格が違うと。
……今後のことを考えれば、試合を早めに決めてしまうに越したことはない。
勝ち上がれば自ずと強敵とぶつかる以上、休める時に投手陣を休ませることもまた夏の大会では重要だった。
それにと、クリスはスタンドにある青道の応援席から少し離れた場所に目を向ける。
ビデオカメラとスコアブックを持って試合を観戦する制服姿の生徒達。
……どこの高校までかはわからないが、間違いなく偵察部隊。
三回戦に当たる学校か、はたまたその次か。
いずれにせよ、彼らに山城について多くの情報を与えるのは決して得策ではない。
指揮を執る片岡もまた同じ気持ちだったのだろう。

クリスが視線で促すと、片岡は言葉を発することなく頷いた。
「小湊（弟）」
「はっ、はい！」
「ブルペンにいる沢村と川上……それと御幸と宮内にも準備をさせておけ。４回は沢村と御幸で、５回は川上と宮内のバッテリーで行く」
「わかりました！」
「それと、お前も代打で使うからな。心構えはしておけ」
「は、はいっ！」
上擦った声で返事をし、春市はブルペンへと走っていった。
それを見送ると、片岡はベンチにいる控えメンバーへと向き直った。
「次の守備から大幅にメンバーを入れ替えていく。全員気持ちを切らすな」
『はいっ！』
この後、青道は４回の守備からレギュラー陣とベンチメンバーを大幅に入れ替えていく。
４回のマウンドに上がった栄純は緊張からか先頭バッターに四球を与えるもの

の、後続を打ち取り一回無失点。
５回のマウンドに立った川上はお手本とばかりにストライク先行のピッチングできっちりと米門西の攻撃を三人で終わらせ、これまた一回無失点。
入れ替わった打線もレギュラー陣に比べれば破壊力は劣るものの、それでも五回の青道の攻撃では狙い球を絞り三点を獲得。
終わってみれば試合は22対０、五回コールドで青道の圧勝に終わった。
順風満帆な滑り出しを切った青道高校。
――――甲子園出場まで、後５勝。

短いですが、キリがいいのでここまで。年内には何とか完結させたい所です。あと、章分けしてみました。

19話

I

7月17日月曜日。

辛かった期末考査も終わり、夏休みまで残すところ一週間を切ったこの日。

青道高校1年3組の教室は朝の一限目から重たい空気に包まれていた。

「えー。人生というのは一度きりのものだ。そしてだからこそ、常に未来を見据えた人生設計を行う必要がある。そう、あれは私が大学に入ったばかりの頃。当時、何をすればいいかわからない私に道を指し示してくれたのが恩師である山岡先生であり――――」

教卓から朗々と聞こえて来る『太田一義（当時19歳）の選択』。

とりたてて感動する話でもなければ、ネタとしてのヤマやオチがあるわけでもない。

ただただ長いだけの昔話に10代の少年達の精神は半ば限界にきていた。

――――なぁ。これいつまで続くんだ？

――んなもん知るかよ。ていうか、一体いつから三権分立の話が太田先生の人生碌になったんだ？

――つーか、いい加減止めねぇか？　オレ、この話もう三回ぐらい聞いてるぜ。

――あたしは五回……何かもう頭がおかしくなりそう。東条君、先生に止める様に言ってよ。太田先生って野球部の顧問なんでしょ？

――勘弁してくれよ。みんな知ってるだろう？

――あぁ、5組の山田……止める様に言ったら昼休みに呼び出し喰らって延々とマンツーマンで人生談義だっけか？

――寝たら寝たで問答無用で呼び出しだし……はぁ。休み時間までもう少しだから我慢しよう。

――人生って……理不尽だよな……

半ばお通夜の様な空気が教室に漂う中、一人講演を続ける太田は絶好調。

気温とはまた違う理由でワイシャツを濡らしながら熱弁を振るっている。

――早くチャイム鳴らないかな

みな気持ちを一つにして静かにただただ時が過ぎるのを待つ。
そして、遂にその時が来た。
9時50分。
小さなノイズを伴って教室のスピーカーに電源が入る。
そして待ち望んで止まない規則正しい電子チャイムの音が教室中に鳴り響いた。
全国共通の味気ないメロディーではあるが、1年3組にとっては今ほどこの電子音に安堵を覚えた時も少なかっただろう。
語りを中断された太田は顔を顰めたものの、時間は時間。
「もうこんな時間か……うーむ仕方ない。今日はここまでに――」
『起立！』
太田が言い切る前にクラス委員長が号令を取ると、誰一人遅れることなくクラスの生徒が全員勢いよく立ち上がった。
太田に口を開かせる間を与えることなく、委員長は頭を下げた。
『礼！』
ばっと、一糸乱れぬ動作で全員が頭を下げる様はまるで軍隊のごとく。

どことなく納得してなさそうな顔で太田が3組の教室を後にすると、クラスの空気が一気に弛んだ。

教室の隅にある自分の席でノートを広げていた空は太田が廊下に出たことを確認すると、大きく伸びをして凝り固まった身体を解きほぐした。

「あー。ようやく終わった～」

「あハハハ。相変わらずだったよね、太田先生。悪い先生じゃないんだけど……」

空の前の席で授業を受けていた小湊春市はくるりと椅子を回して苦笑い。

青道高校野球部が危なげなく三回戦の出場を決めた翌日。

初戦敗退という最悪の事態だけは避けられたことで一部の人間たちが安堵の息を漏らしたものの、まだまだ甲子園までの道は長い。

出来ることなら先を見据え、今の内に少しでも選手達に休みをとらせたいというのが全国の高校野球に携わる人間の本音ではあるが、

「試合の翌日でも普通に学校とか……期末考査は終わったんだから休みにしてくれりゃあ良いのに」

「さすがにそれは無理じゃないかな？」

「いや、そこは私立なんだし何とでもなるんじゃ――――」
「ならないと思うよ」
会話に割り込んできた主に春市と空はそろって顔を向けた。
そこにいたのはクラスメートにして、同じ野球部に所属する部活仲間。
クリーム色がかった金髪に万人受けする柔らかな顔立ち。
東条秀明はいつものように人当たりの良い笑顔を浮かべ、空いていた春市の右隣の席に腰を下ろした。
「あっ、おかえり東条君。もう用事はすんだの？」
「まぁ、用事って言っても隣のクラスの奴に借りていたCDを返しただけだし」
「んで東条、何でならないってわかんだよ？　スポーツの強豪校ならちょくちょく特別休暇を選手に与えてるって聞くぜ？」
「うん。それがこの前生物の吉沢先生に聞いたんだけど、そういった特別扱いを監督が断ってるらしいんだよ」
「監督が？」
「野球は大事だけど、選手達はあくまでも学生。だから過度な特別扱いは他の生徒

に示しがつかないし、選手のためにもならないって」
「あー。確かに監督ならいいそうだね」
納得したとばかりに春市が頷く。
野球部の監督を務める片岡鉄心は良くも悪くも一本筋の通った真っ直ぐな人間であり、不公平が生まれることは好まない。空も自分の期待が望み薄だと理解したのか、諦めと共に広げていたノートのページを捲った。
「なるほどな……監督が言ってるならそりゃ無理だわ」
「少なくとも監督が代わるまでは無理だと思うよ……ところでさ、山城」
「ん？」
「気にならないの？」
「何が？」
「何がって……」
困ったように、東条は目だけを背後へと向けた。
教室から廊下へと続く2つの扉。
開かれたままのその扉の向こうには、いつの間にか廊下を埋め尽くすほどの人だ

かりができていた。

――あっ、いたいた！

――ちょっ、押すなよ!?

――おー。あれが山城空か、確か昨日の試合9人連続で三振をとったんだろ？

――三年後にはプロ入り確実らしいし、今の内にサイン貰っとこうかな～

――私試合見てファンになっちゃった！　ほんとスゴかったんだから！

――はいはい、あんたの話はもう聞き飽きたから。えーと、確かあのピンク髪の子もベンチメンバーよね？　かわい～、女の子みたい。

――1年生エースってことでマスコミも例年になく球場に行ってるみたいだし、俺も次の試合から見に行ってみようかな～

がやがやと嫌でも聞こえて来るざわめきに、突き刺さる数多の好奇の目。

同じ一年のみならず、階が違うはずの上級生すらもぞくぞくと3組の教室の前に集まってくるではないか。もともと人見知りの気がある春市が頬を紅くして居心地悪そうに体を小さくする一方で、最も注目を浴びている筈の空は特に気にした様子もないまま変わらずノートに目を落としていた。そんな一年らしからぬ態度に、

東条は引き攣った笑みを浮かべざるをえなかった。
「……凄いね」
「うん？　あぁ、上級生とか階も違うのにわざわざここまで来るとかすげぇよな。俺ならクリス先輩に呼ばれない限り絶対上のフロアに行こうとか思わねぇもん」
「いや、そうじゃなくて」
「うん？」
「……いや、もういいよ」
疲れたように、東条は首を横に振った。
「山城がエースに選ばれた理由がわかった気がするよ……」
「あハハ……そうだね」
常識人コンビが顔を見合わせて乾いた笑みを浮かべると、一年生の非常識コンビの片割れは頭上に？を浮かべた。
「二人とも何言ってんだよ？」
「気にしなくていいよ……ところで、さっきから何読んでるのさ？」
「あっ、それ僕も気になってた。授業の間もずっと読んでいたよね？」

「あぁ、これか。見てみるか？」
ほいと、二人にも見えるよう空はノートの向きを変えた。
東条と春市が身を乗り出して広げられたページに目を通すと、そこにはビッシリと複数の選手についての記述が丁寧な字で書かれていた。
「これって……」
「次に当たる学校のデータ。今朝なべさんが渡してくれた」
「なべさん……あぁ！　2年の渡辺先輩。確か初戦の後、自分から偵察に志願したんだよね？　普通そういうのって試合に出れない3年の先輩がやることなのに」
「でも、これほんと良くできてるよ。投手の細かな癖に、打者の得意・苦手なコース。それに状況毎の細かな守備位置の差異まで。よっぽど詳しく試合を分析しなきゃとてもここまでの物はできないよ」
「クリス先輩も感心してた。これなら随分とリードが楽になるって」
レギュラー捕手として試合に出場するクリスは、練習や時間の都合から中々他校の試合を直に観戦するというのが難しい。録画した映像を後で見返すことは出来るが、やはり実際に観戦することで分かる事柄も多々ある。

クリス一人では把握しきれないリアルと映像との穴を、渡辺は見事に埋めてくれていた。

先輩のチームへの献身ぶりに感心しつつ、東条はぱらぱらとページを捲った。

「けどこのデータを見る限りでも、次の試合は大丈夫そうだね」

「まぁな。別に相手を舐める気はねぇけど、普通にやれば問題ない相手だ」

青道の3回戦の相手は都立村田東高校。

初戦の例があるだけに油断こそできないが、それでもごく普通に闘えば問題なく勝てる相手。問題なのはと、春市はノートの最後のページに張られた組み合わせ表に目を落とした。

「4回戦で当たる高校も気にはなるけど、やっぱり注目は市大三校だよね」

「市大……確か春の選抜ベスト8だっけか？」

「うん。準々決勝で当たるのはほぼ間違いなくこの市大だと思うよ。春の都大会では勝ったけど去年の秋大では負けてるし、因縁の対決だね」

「因縁か……」

「どうしたの、東条君？」

「いや、ちょっと中学の時に聞いた話を思い出して」
「聞いた話？」
春市の問いかけに、東条はどことなく空を気にしながら頬をかいた。
「市大のエースの真中さんって中学の頃からやっぱり上手くてさ。大会とかでも結構いい成績を残してそれなりに有名だったんだよ」
「あー。俺もちょっと聞いたことあるかも。スライダーの真中って。まぁ、部活野球でのことだから詳しくは知らねぇけど。で、それがどうしたんだよ？」
「野球部のヤツに聞いたんだけど、真中さんの中学にはエースの真中さん以外にもう一人いい控えの投手がいたんだって。長身で大きく縦に割れるカーブを決め球にする本格派の投手が」
「長身で……」
「カーブを決め球にする……えっ、それってまさか」
「うん。その投手の名前は丹波って言ったらしいんだ」
東条の言葉に春市は目を見開いた。
空はふぅと息を吐き出し、天井を見上げた。

「中学時代にエースナンバーを争った投手同士が、高校では別の学校で甲子園を目指して競い合うか。まぁそこまで珍しいことでもねぇけど……」
「丹波さんにとっては重要なことだよね。でも丹波さんは……」
「怪我の完治が七月の下旬だから、多分もう少しすれば普通にボールを投げれるようにはなる。けどどれだけ早く見積もっても、実戦で投げられるまでにはそっから最低二週間はかかる」
「そうだね。ボールを投げれるようになったからって、すぐに球威が戻るわけでもないし」
空の予測に、シニアで投手を務めていた東条も同意する。
そう、どう考えても丹波は予選には――準々決勝には間に合わない。
一年生の三人は誰一人として言葉を発さなかった。
そしてそのまま二限目のチャイムが音を鳴らすと、春市は椅子の向きを変え東条は自分の席へと戻っていく。
空は広げていたノートを机の中に仕舞い、窓の外へと視線を向けた。
「……やっぱ、投げたかったよな丹波さん」

「お願いします。今日から練習に復帰させてください」
それは、片岡と太田がいつものように練習前にプレハブ小屋に入ってすぐのことだった。

◇

一体いつから待っていたのか。
冷房も灯りもついていない、薄暗く蒸し暑い室内で額に汗を浮かべていた丹波は片岡と太田が室内に入るなり、冒頭の言葉と共に頭を下げた。
その余りの突然の出来事に首脳陣二人は面を喰らったものの、すぐに我に帰るとまず太田が叱責を飛ばした。
「なっ。無茶を言うな丹波！　お前の顎はまだ完治していないんだぞっ!?」
「……これ以上復帰を遅らすわけにはいきません」
「後一週間もすれば正式に医師から練習の許可も下りる。それまで……」
「それじゃあ遅すぎるんですっ！」
悲鳴にも似た叫びが、小さなプレハブを包み込む。
太田が言葉を失っていると、丹波は固く拳を握りしめた。

「復帰が来週になればどうやっても準々決勝には間に合わない。それだと……意味がないっ！」

「準々決勝……丹波、お前が気にしているのは市大の真中のことか？」

「……はい」

片岡が確認するようにその名を口にすれば、丹波は小さく頷いた。

「小さい頃からかっちゃん……真中は自分にとっての憧れでした。けれどそんな風に憧れてばかりいるのが嫌で、肩を並べたくて青道に入りました」

真中と同じく、丹波もまた市大三校からのスカウトは受けていた。

けれど同じ道を進んでしまえばこれまでと何も変わらない、そう思ったからこそ丹波は市大と肩を並べる強豪校である青道に行くことを決めた。

共にエースとなり、甲子園をかけて戦うことを約束して。

「……怪我でチームを離れ、エース番号もを背負わない自分は青道のエースではありません。でもせめて、真中と――かっちゃんとだけは自分がっ！」

一言一言に込められた丹波の想い。

指導者という立場からすれば丹波を止めならない。

けれど丹波の想いも痛いほどわかるからこそ、太田はどうすればいいのかわからず片岡の判断を待った。

片岡は伏せていた顔をゆっくりと上げた。

「……言いたいことはそれだけか？」

「っつ!?」

「完治まで後一週間。なるほど確かにボールを投げれないわけではないだろう、無理をすればブルペンにも入れるかもしれん。だがそんな状態で試合のマウンドに上がり、あの市大を抑えられると本気で思っているのか？」

「それは……」

「言葉に詰まるか……丹波、お前自身が今の自分状態を一番わかっているはずだ」

「それはわかっています……けれどかっちゃんとはっ!?」

「一個人の私情で万全でない投手をマウンドに上げるわけにはいかん。話は以上だ、寮で休んでいろ」

「か、監督っ!?」

「どれだけ言おうと、俺はチームの戦力にならない選手を使う気はない」

「っつ!?」

それは事実上の戦力外通告だった。

あまりにも厳しすぎる言葉に丹波は立ちつくし、全身を小刻みに震わせる。

片岡は棒立ちとなった丹波の横を抜けると、壁際のホワイトボードの前で歩を止めた。

「……甲子園だ」

「っつ」

「今年の甲子園は例年よりも開幕が遅い。組み合わせ次第では、試合までさらに時間的な猶予も生まれるだろう」

あくまでもくじ運次第ではあるが、上手くいけば最長で今から三週間弱の猶予がある。

そしてそれだけあれば。

「必ずお前を甲子園で投げさせてやる。だからそれまで腐らず、しっかりと仕上げておけ……あいつらを信じてやってくれ」

「……わ…かり……ました」

震えた声でそれだけ言うと、丹波はプレハブ小屋を後にした。
扉が閉じられた後、太田は不安げな表情で窓から見える丹波の後ろ姿を見つめた。
「丹波は大丈夫でしょうか？　その、正直言って納得している風には……」
「真中と戦うことを夢見て丹波はこの三年間をやってきた。それが叶わないとわかった以上、本当の意味では納得しないだろう」
「そ、そこまでわかっていらっしゃるなら何かフォローをしておいた方が……」
「すでにエースナンバーは山城に託した。この状況で慰めたところで、逆効果にしかならん」
最後の大会のマウンドに立てず、一年にエースの座を奪われる。
これまでエースナンバーを背負ってきた丹波にとってそれがどれ程辛い事かは、かつてエースナンバーを背負っていた片岡によくわかった。
「信じるしかない、丹波を。そして丹波のためにも必ず甲子園に行く」
「はい」

Ⅱ

7月20日。

西東京大会3回戦、青道高校対都立村田東高校の対決は戦前の予想通り終始青道ペースで進んでいた。3回終了時にして既に11対0、このまま進めば2試合連続となるコールド勝ちとなる。

9割方結果の見えた試合にスタンド席は早くも終戦ムードで、青道の応援に来ていたファン達は随分と気楽な様子で試合を観戦していた。

――いやぁ。今年の青道は強いですな～。

――もともと打線が強いのは知ってましたが、クリスが加わったことで更に打線に厚みが出ましたね。ここまで青道一の打点を誇ってますし、クリーンアップを任せてもいいと思いますが……

――いやいや。打線もそうだが、やっぱ今年は何と言っても山城でしょ！

――ここまで2試合の計6回を投げてパーフェクトピッチング。連続奪三振記録は途切れましたが、それでも打者18人に対して三振17個。間違いなく今大会稲実の成宮と並んで二大巨頭ですよっ！

――もっとピッチングを見たかったけどここでバッテリーごと交代か……

――確か2回戦も4回から変えてたよな？　勿体ねぇな～　バッティングもいいし、投手を変えるにしても外野で使えばいいのに。

――後のことを考えて休ませておくんだろ？　僅差ならともかく、こんな大差がついてたらわざわざ試合に出しておく意味ねぇし。

――にしても青道側の応援席埋まってんな～。まだ三回戦だろ？

――それだけ注目を浴びてるってことだよ。カメラ持った取材陣みたいなのも多いし、何より声援が黄色い……

――まっ、山城はそこそこ顔がいいしな。名門で1年からエースナンバーをつけて、顔も良くて実力もあればそりゃモテるだろ。

――妬ましい……

その後青道は二回戦と同じく4回を沢村―御幸、5回を川上―宮内のバッテリーが無失点で抑え、5回コールド16対0で勝利を収めた。

順風満帆、完璧と言っても過言ではない勝利にほくほく顔で観客達が席を立つ中、だらんと空いた村田東高校側のスタンドにはいくつかの影が残っていた。

……なるほど。これが青道か。

楊瞬臣はずれた眼鏡の位置を戻すと切れ長の瞳をすっと細め、もたれかかっているコンクリートの柱に体重を預けた。

整っている顔立ちをしているだけにそのちょっとした姿も画になるのだが、どこか感じられる冷たい雰囲気が他人の目を寄せ付けないでいた。

……強力な打線に堅実な守備、そして1年ながらもチームを任された絶対的エース。

走攻守がこれほどまでに揃ったチームというのも中々珍しい。

道理で優勝候補に目されるわけだと、楊は感嘆の息を零した。

……あの強力打線は確かに警戒が必要だが、抑えるポイントさえ間違わなければ手も足も出ないわけじゃない。むしろ問題なのは打撃、あの投手からどうやって点を取るか……

青道の若きエース、山城空。

独特の軌道を描く最速150オーバーのストレートに、殆ど球速が変わらず鋭く落ちる縦のスライダー（雑誌の呼び名に従うなら2シームジャイロ）。

これでコントロールが悪いのなら幾らでも対策のしようはあるが、生憎と山城は

コントロールもいい。ただでさえプロでも中々お目にかかれないレベルのボールがコースに投げ込まれれば、並のバッターでは手も足も出る筈がない。

……どうする。

考え込む楊に、同じく試合を観戦していたチームメイトが不安な声を上げた。

「な、なぁ、瞬。俺達、あんな投手から点取れるのか？」

「あんな球、マシンでも打ったことねぇぜ」

「……確かにあの1年は手ごわい相手だが、どんな投手であろうと必ず欠点はある」

それにと、楊は不安がるチームメイトの顔を見渡した。

「野球は点を与えなければ負けることはない。青道と戦うためにも、まずは次の試合を勝つぞ」

『おぉ！』

◇

三回戦を危なげなく勝った後、ユニフォームから制服へと着替えた青道の選手達はそのまま学校には戻らず、球場に残りスタンドである試合を観戦していた。

見ているのは三回戦第三試合、都立神山高校―明川高校。

この試合で勝った方が次の4回戦で青道が対戦する相手ということもあり、選手達はみな真剣な面持ちでプレーの一つ一つに目を凝らしていた。

そして空とクリス、そして栄純と御幸という青道の2つのバッテリーもまた、スタンドの最上段席に腰を下ろし渡辺が集めてきたデータ片手に試合を観戦していた。

そして試合開始から1時間弱。

大よそ結果の見え始めた試合に御幸は声を上げた。

「リードはしてますけど、やっぱナベのデータにもあるように明川のチーム力自体はそれほど高くありませんね」

「あぁ、そうだな」

御幸の批評に、クリスも同意する。

テンポよく進んだ試合は現在7回の表を迎え、3対0と明川がリードしていた。

「明川の打線のレベルはいいところ中の下～中の中。守備は固いが、飛び抜けた能力を持つ選手がいるわけじゃない。やはり明川がここまで勝ち進んできた理由

は……」

「はい。間違いなくあの投手ですね」

言葉が向けられた先はマウンド。

そこでは初回から表情を変えることなく、ただひたすらコーナーにボールを投げ続ける機械がいた。クリスは手元のノートに目を落とし、その機械の名を読み上げる。

「楊瞬臣。台湾からの留学生で、恐らく今大会Ｎｏ１であろうコントロールと常に表情を崩さないことからついたあだ名は精密機械。これまでの明川の全得点に絡んでいることから見ても、このチームの中心は間違いなく楊だな」

「えぇ。楊が１回戦からこれまでに出した四球はたったの一つ、それも明らかに勝負を避けた敬遠気味のものだけ……どっかの誰かさんとは大違いだな」

にやりと、御幸は意地の悪い笑みを浮かべる。

本日、村田東との試合の中で１回０失点四球一つ――先頭バッターを歩かせた変則サウスポーはびくりと、その身体を震わせた。

「いやいっぱ、コントロールの良い投手はリードしやすくていいよな～。点差があ

るのにどっかの誰かさんはいきなり先頭バッター歩かせるし、多少マシになったって言ってもまだ逆玉は多いし。ほんとリードし辛くて仕方ねぇよ。なっ、沢村」
「くっ!?　お、俺だってその気になればあれぐらい……」
「あー。無理無理」
「最初から決めつけてんじゃねぇよ！」
うがーと、栄純は御幸に飛びかかったが、御幸はそれを華麗にかわす。
そうして始まった若いバッテリーのじゃれ合いに苦笑しつつ、クリスは試合が始まってからこれまで一言も発さずに楊を見つめている自分の相方へと話しかけた。
「山城。お前は楊のピッチングをどう思う？　ずいぶんと熱心に見ているようだが」
「いや、ほんと凄いですねあの人」
はぁと感嘆の息を零し、まいったとばかりに空は小さく両手を上げた。
「これまで大体80球ぐらい投げてますけど、ほとんどキャッチャーがミットを動かしてない。真っ直ぐだけなら似たようなこと出来なくもないっすけど、それが変化球もとなるとちょっと敵いそうにないっすね」

「お前が手放しで他の投手を賞賛するのは珍しいな……」
「いやでも実際凄いですよあの人。これまで球が速い人とか、変化球のキレがすごい人は何人も見てきましたけど、あそこまでコントロールがいい投手は見たことがない」
ストレートの球速は一三〇前半とそこまで速いわけではないが、高校生離れしたコントロールを持って打者を翻弄している。
ある意味、ボールが速いだけの投手よりも攻略が難しい相手である。
その後、試合はそのまま楊がコントロールを乱すことなく9回まで投げ切り、3―0で明川の勝利に終わった。
「決まったな、次の相手が」
「はい。やっぱり明川が上がってきましたね」
「あぁ、次の試合はいかに楊を攻略するか。そこに尽きるだろう」
次の試合まで後3日。
――甲子園出場まで、後4勝。

空が青道に入学してからの丹波さん
1、片想いしていた捕手をぽっと出の一年に盗られる
2、怪我で最後の大会に出れない上、エースの座をこれまた一年に盗られる
3、幼馴染との約束を果たせず、監督から戦力外通告を受ける↑Ｎｅｗ
丹波さん……かわいそう過ぎるよ。

20話

I

七月も後半に入り、ますます暑さをましていく東京都。
連日のように更新する最高気温はワイドショーを賑わし、ここ数年で最も熱い夏という毎年のように繰り返されるフレーズが視聴者をうんざりとさせる。
いつもと変わらない、東京の夏。
そしてそれは試合を二日後に控えた青道にも同じことが言えた。
燦々と降り注ぐ夏の日差し。
遮蔽物のないグラウンドは、ちょっとした灼熱地獄と化していた。
……また今日も暑いな。
額に浮かんだ汗をハンカチで拭い、月刊『野球王国』記者峰富士夫は迷彩色のベレー帽を深くかぶり直した。三十を超えた小太りの中年男性にとって、この憎々しいほどの快晴は決して歓迎できるものではない。
とは言えこの暑さがミーハーなファンを追い払ってくれているのだからあまり文

句も言えないなと、峰はグラウンドネットにへばりつく集団に目をやる。

……次でまだ四回戦だというのに、この暑さの中これだけの人が集まっている。

見に来ているのは一部を除けば年配、それも峰でも何度か顔を見たことがあるような昔から青道のグラウンドに足を運ぶ熱心なファンが多かった。

やはりそれだけ今年の青道に期待しているのかと、峰は肩にぶら下げていたカメラを構えファインダーを覗きこむ。

もしかしたら使えるかも知れないとシャッターを切ってみれば、選手達のプレーに熱い視線を注ぐファンの中に見慣れた複数の顔が映っていた。

……『ザ・高校野球』に『週刊日報』、『ニュースポーツ』に『熱闘ハイスクール』。

他にもいくつか来ているな。

ネット越しにカメラを構えるは、峰と同じスポーツ記者達。

広いようで狭い業界である。

こうして顔見知りの記者同士が同じ現場に遭遇するというのも決して珍しくはないのだが、それでも予選が始まって間もないこの時期にとなると中々に珍しい光景。

……お目当てはどこも一緒ということか。
そんなことを分析していると、ちょうどそのお目当てに動きがあった。
ざわりと、ブルペンに張っていた集団から声が上がる。
――おい、今から山城がブルペンに入るみたいだぞっ!?
――なにっ!?　今日は軽い調整だけでブルペンには入らないと踏んでたんだが……くそっ、急いでブルペンに向かうぞっ！
――取材は断られたからなぁ。何とか写真だけでも収めないとっ！
――おい、聞いたか？
――あぁ。山城が投げるんだろ？　こりゃ見に行くしかねぇだろ！
――一年で一五〇キロとは……時代も変わったものだのぉ。
我先にとブルペンへと走り出す記者達、そしてその後を追う一般のギャラリー。
これは自分も急がなければと、峰は人の流れに圧倒されている新人に声を飛ばした。
「大和田！　俺たちもブルペン側に急ぐぞっ！」
「あっ、はい！　ちょっと待ってください！」

人混みでも否応に目立つ長身の女性記者を引き連れ、峰は第一ブルペンへと向かう。

人の波を掻き分けながら小走りでブルペンへと向かうその道中、大和田はキョロキョロと周囲を見回した。

「うわぁ。凄い人ですね……」

「当然だろう。ここ数年振わないとは言え、青道は全国でも名の知れた野球名門校。その青道で一年ながらエース番号を背負う投手が現れたんだ。話題にならない方がおかしい」

「山城……空君ですよね？　去年峰さんが記事にしていた」

「あぁ。世界でほぼ唯一といっていいジャイロボーラー。シニア時代から広橋君と共に何かと話題の尽きない選手だったが、高校に上がったことでその認知度が上がったな」

「確かシニアの時にバッテリーを組んでいた先輩を甲子園に連れて行くためにこの青道に来たと聞きましたが？」

「滝川・クリス・優、かつてその強打で一世を風靡した助っ人外国人、Ｊ・アニマ

ル・Mの息子だな。丸亀シニアの監督によれば、山城君のジャイロボーラーとしての才能が開花したのはこのクリス君による功績が大きいらしい。一年の頃から全国でも指折りのキャッチャーだっただけに去年の怪我には多くの野球関係者が嘆いたものだが、見事復帰を果たして約三年ぶりに山城君とバッテリーを組んでいる。その辺りのドラマ性も山城君が人気を博す理由の一つだな」

「へ～」

「感心ばかりしてないでお前もしっかり……っと、もう始まっているな」

二人がブルペンに着いた時には既に山城は肩を作り終わり、ボールを投げ込んでいた。

峰はどこかいい場所はないかと探してみるものの、写真の撮りやすいブルペンネット最前列は既にカメラを構えた記者達で埋まっており、今から入れそうな隙間はない。

「仕方ない。写真は後日に回すか」

「はい。それにしてもこれだけカメラがあるのに、随分と落ち着いていますね」

「山城君はこれまで何度も大舞台を経験しているからな。これぐらいは慣れたもの

だろう」

様々な視線やレンズが向けられるのをものともせず、マウンドに立った山城がゆっくりと足を上げる。次々と切られる無数のシャッター音がシャワーとなって降り注ぐ中、ダイナミックかつ流麗なフォームから力のあるボールが投じられた。

パンッと、キャッチャーのミットが乾いた音を鳴らすと、それを見ていた者達からおぉと声が上がった。

「……良いボールだ」

「凄いボールですね……私、途中から浮き上がっている様に見えましたよ!?」

「対峙する打者にしてみれば相当打ち辛いだろう。既にプロでも通用するという噂に偽りはなしか……やはり明川がどうやってこの山城君に対するかが次の試合の鍵になるだろうな」

「下馬評では圧倒的に青道の有利ということですが……」

「走攻守、全ての分野で圧倒している以上有利なのは間違いなく青道だろう。だが何が起こるかわからないのが高校野球だ」

二人で話している最中にまたミットを鳴らす音が響いたものの、今度はフラッ

シュは焚かれず外野からの声も殆どゼロに近かった。ゆっくりと、峰と大和田の両名は音のした山城の右隣のマウンドへと目線を動かした。

――おいしょー！　決まった！　アウトコース！

――ボール二個は外れてるっつーの！　ほら、早く構えろ。次はインコースだ。

――おりゃあ！

――コースが甘ぇ！　それじゃあ持っていかれるぞ！

――ぐぬぬぬ。さっきからダメ出しばかり……

――お前が内と外の投げ分けの練習をしたいって言い出したんだろうが。

やれやれと言わんばかりに首を振り、捕手はボールを投げ返す。

それを右腕に付けたグローブで受け取った投手は、ぐぬぬと唸り声を上げた。

「あの子は確か山城君の後に登板した――」

「あぁ。沢村栄純、青道では珍しいサウスポーの一年生投手だな。受けているのは御幸君か……」

「私、御幸君のファンなんですよね。だからレギュラーから落ちたのは残念という

か……」

「個人的な感情を仕事に持ち込むな。まぁ確かに、あれほどの捕手がレギュラーを獲得できないというのは全国でもそうあることじゃないが。ふむ……沢村君の奥では川上君が投球練習中か」

「どこにも丹波君の姿がありませんね……これまでの二試合でもベンチに姿はありませんでしたし、怪我で予選には間に合わないという噂は本当なんでしょうか？」

「わからん。だがもしも本当に丹波君が予選で投げれないとするならば、青道にとって大きな痛手であることに間違いない。いくら山城君がすごくとも、まだ一年。何らかの理由で降板するということは十分にあり得る。その時、控えの二人の投手がどこまで出来るか……そこが今年の青道のポイントになるかもしれないな」

◇

7月21日、午後八時三〇分。

東京都練馬区・私立明川学園。

完全下校時刻をとうに超え、残務のために残っている教師も明日の授業に備えてそろそろ帰ろうかという頃。節電のために無人の教室の電気は消す様にと厳しく律

せられているにも関わらず、その日の校舎には教師の集まる職員室以外にも明かりが灯る部屋があった。

明川高校第二視聴覚室。

授業でも殆ど使われないその古びた一室において、楊瞬臣はブラウン管テレビに映る粗い映像に鋭い目を向けていた。

……やはり球種が違ってもフォームには殆ど差がない。

画面の中では一人の投手――山城空が躍動感溢れるフォームからボールを投じ、バッターを見逃しの三振に打ち取っていた。

幾度となく目を通した映像に目を凝らし、そしてまた巻き戻す。

最早回数を数えるのが馬鹿らしくなるほど繰り返しただけに、その動作には淀みがない。

過不足なく目的のシーンまで映像を巻き戻すと、また画面に目を凝らした。

……関東大会の映像を見る限り、セットでも球威はそれほど変わっていない。その分クイックは遅いが、牽制とキャッチャーの強肩でそのロスを補っている。

関東大会と今大会では組んでいるキャッチャーが違うが、今のキャッチャーも

中々お目にかかれないほどの強肩。明川には飛び抜けて俊足と言える選手が存在しない以上、ランナーを無理に走らせるのは自殺行為と言えた。

……いやそもそも、どうやってそのランナーを出すか。

スピードボールに目が慣れるよう１６０キロにセットしたマシンのボールを打席で経験するという練習をしてはいるが、所詮は付け焼刃。

それだけで打てるなら苦労はない。

また山城には真っ直ぐの他にも、ほとんど同じ球速で鋭く落ちる球もある。

一体どうやって攻略するか。

しばらく思考の海に沈んだ瞬臣を引き上げたのは、がらりと開いた扉の音だった。

「何かわかりましたか？」

「監督……」

にこりと笑い、明川学園の野球部監督である尾形一成は瞬臣の隣の椅子に腰を下ろした。

「随分と熱心に見ていましたね」

「……すみません。こんな時間まで視聴覚室を借りて」

「てゆっか。自分が納得するまで見たいんでしょう？　他の先生達はもう帰られましたから、好きなだけ見なさい」
「ありがとうございます」
「それでいい作戦は浮かびそうですか？」
「そうですね……」
瞬臣は画面へと視線を戻す。
そこではまた一人、打者が三振を喫していた。
「……正直に言えば厳しいです。次の試合、まともにぶつかればウチの勝率は限りなく低いでしょう」
「瞬臣……」
「だからこそ、オレ達は一か八かの賭けに出る必要があると思っています」
「何か策があるのですね？」
「策と言えるほどのものではありません」
けれどと、瞬臣は尾形に真っ直ぐな目を向けた。
眼鏡の中に秘められた、強い意志の籠った瞳を。

「ウチが勝つ可能性があるとしたら、それしかないとも思っています」
「わかりました。次の試合はあなたに任せましょう。それで作戦とは？」
「はい――――」

Ⅱ

７月23日、午前９時半。
まだ陽も登りきっていないというのに既に気温は20度半ばを超え、自重という言葉をどこかに置き忘れたかのように出歩く者に容赦ない夏の日差しを浴びせていた。
連日続く気怠い暑さに誰もがうんざりと元凶の太陽を睨む中、ここ府中市民球場では気温とはまた別の理由で熱気に包まれつつあった。
４回戦　青道高校×明川高校
まだ朝も早い時間だというのに、このベスト８を決める闘いに集まった観客の数はおよそ３０００人近く。朝一からご苦労なことだと、まだ踏み荒らされていな

いマウンドの上から空はぎっしりと埋まった青道側の応援スタンドにちらりと目をやり、またホームへと戻した。

――一回表、明川学園の攻撃。一番センター　二宮君

ウグイス嬢のコールを受けて、打者が左バッターボックスに入る。

ようやくかと、空は手慰みにしていたロージンバッグを地面に落とした。

……前の試合を見る限り、正直言って明川の打線に脅威は感じなかった。

3番に入る楊がチームの中で唯一鋭いスイングを見せていたものの、それ以外は過去二戦でぶつかった公立校の打者と大差ないレベル。

空にしてみれば力を抑えて投げても簡単に三振が取れるレベルでしかない。

けれどそのことは当然、明川側も理解しているだろう。

……となれば、何らかの策を打って来る筈――

審判からのプレイのコールがかかり、試合が幕を開ける。

打者は大きく声を出すと、ややオープンスタンス気味に構えをとった。

……バットは短めに持ってるけど、極端って程じゃない。さて、一体何をしてくるのやら。

セーフティーか、それともスタミナ切れを狙った待球作戦か。
まぁいずれにせよ、それで怯むほど空は可愛らしい性格はしていないのだが。
マスクを被るクリスのサインに頷き、ゆったりとしたフォームから第一投が投げられた。
唸りを上げて突き進む剛球。
まるで浮き上がっていると錯覚さえ抱かせるその球は、力一杯振られたバットを嘲笑うかのように茶色いミットを揺らした。
――ストライクッ！
――うぉおお！　キタキタキタっ――!!
――そうだよ！　俺達はこの球を見に来たんだよっ！
――相変わらずえげつねぇ音させてんな……ほんとにあれで一年かよ？
――今の随分と振り遅れてたな……
――あぁ。明川の打線じゃあ、あのボールは捉えられないだろ。こりゃ勝負は見えたな。
期待通りの光景にスタンドのボルテージが早くも高まりを見せる中、その注目を

一身に浴びる当の本人はいささか怪訝な顔で返球されたボールを掴んだ。

……初球からフルスイング？

この試合明川はどのような作戦で来るのか、それを測るために投げた高目一杯へのボール。あらかじめ狙い球を絞っているならそれなりの反応を見せるだろうし、待球作戦ならばセーフティーの構えでもして揺さぶりをかけてくるだろう。

何にせよボールの軌道を確認するために初球はまず見てくるだろうというのが、試合前にクリスと空が予想したところだったのだが。

……低目を捨てての高目狙い？　それとも開き直ってのまぐれ当たり狙い？

だがいかなる狙いがあったとしても、そんな大振りで捉えられる程空のボールは優しくない。空がボールを投げ込む度にバットが空を切り、ストライクの数とアウトカウントが増えていく。1番、2番を共に難なく空振りの三振で仕留め、明川のキーマンたる3番の楊を落ちる二シームジャイロでこれまた三振に切って取る。

費やした球数は僅か十球。

正に敵を制圧するド派手なピッチングに、スタンドの熱は更にヒートアップ。

耳をつんざくような歓声を浴びてベンチに戻る空だったが、その顔には未だ疑問

の色が色濃く残っていた。
「クリス先輩……」
「あぁ。少々不可解だな」
初球の様子から高目に狙いを絞っているかと思いきや、低目のボールにもどんどん手を出してくる。そして好投手に対しては定番ともいうべき揺さぶりもない。
非常に楽な展開であるがゆえに妙な違和感が空に付き纏っていた。
そしてどうやらそれはクリスもまた同じようで、眉間に皺をよせている。
「……相手の狙いは見えないが、それを警戒してリズムを狂わしては元も子もない。お前はいつも通り投げていればいい」
「はい」
「できることなら先取点を奪って流れを掴みたい所だが……」
一回の裏、青道高校の攻撃が始まる。

◇

明川の初回の攻撃が三人で終ったその裏、青道の攻撃が始まる前にマウンドで投球練習を行う楊瞬臣は自身の異変に気が付きつつあった。

体重移動、リリースポイント、腕の振りにボールに対する指のかかり具合。
それら一つ一つを確かめながら丁寧にボールを投げ込んでいく中で、楊は疑念を確信へと変えていく。
……間違いない。
投球練習として投手に与えられた七球を投げ終え、ロージンのついた指先に小さく息を吹きかける。舞い上がった粉末は白き靄となり楊の視界を遮ったものの、すぐに大気へと溶けていく。
良好となった視界の先では、青道の先頭バッターである倉持が左打席に入っていた。
……俊足の一番バッター。春の試合も含めた盗塁成功率は九割超。塁に出せば厄介なランナーだが……
第一球。ワインドアップから投じられた球はインローへのストレート。
ストライクゾーンの隅を掠める、コーナーギリギリのボール。
倉持がそれを見逃すと、審判が手を挙げた。
――――ットライク！

……今のはストライク。
続く二球目も同じインローへのストレート。
ただし今度は先よりもボール一個分ほど外に外れており、倉持はこの球も手を出さなかった。
――ボール
……このコースはボール。
カウント1-1となっての三球目。
ここで楊が選択したのは、またしてもインローへのストレートだった。
二球目よりもやや内に入ったことで打てると判断したのだろう、倉持がこの打席初めてバットを振り下ろす。
けれど打てる判断したその球が通るのは、一球目よりもボール半分外に、二球目よりも半分内へと入った丁度ストライクゾーンとボールゾーンが重なり合う狭間。
鈍い金属音がグラウンドに響いた。
……どんなに俊足のランナーだろうと、塁に出さなければ問題はない。
詰まった打球が一塁へと転がる。

倉持は何とか生き延びようとボールと共に一塁へ疾走するが、中途半端に勢いが死んでいない分だけ打球の方が早かった。

「国見っ！」

「おうっ！」

ファーストが落ち着いてボールを掴みとり、そのままベースを踏む。

一アウト。

先頭バッターをきっちりと打ち取ったことで緊張がほぐれたのか、明川ナインに笑みが零れる。決して滑らかとは言えないボール回しを終えてマウンドへと帰ってきたボールを握りしめ、楊は確信に至る。

……やはり間違いない。

実際にこうして打者と対峙して見るとよくわかった。

体が軽い。ボールが指にしっかりと掛かり、イメージした通りのコースにボールが吸い込まれていく。

普段のボール一個の出し入れは愚か、更にその半分――目標として位置付けていたボール半分の出し入れさえ当たり前の様にできている。

どれだけ調子が良かろうと悪かろうと、毎回同じ投球が出来るというのが楊瞬臣の強み。
安定感◎、機械と呼ばれる由縁である。
けれど、そんな楊をしても思わずにはいられなかった。
「……今日は最高に調子がいい」
これまでの二試合で大量得点を積み重ねてきた強力青道打線。
その前に、楊瞬臣が立ち塞がる。

感想・評価待ってます

21話

I

全国高校野球西東京大会４回戦、私立青道高校と私立明川学園の対決。
青道が圧倒的優位との下馬評で始まったこの試合は非常にテンポよく進み、開始から僅か一時間足らずにして既に後半戦へと入っていた。
６回の表、明川学園の攻撃。
７番という下位打線から始まるその攻撃は、先頭バッターの空振り三振という最早見慣れた光景を持ってスタート。僅か３球でスコアボードに灯った赤いランプに、吉川春乃は黄色い声を上げた。
「うわぁ。すごい！　また三振ですよ、貴子先輩！」
「えぇ、そうね」
試合に出れない野球部員達が応援のために陣取るスタンドの最前列。
これまで頑張ってくれたマネージャーのためにと用意されたその一角で、青道の試合用ユニフォームに身を包んだ藤原貴子はマウンドに君臨する青道の若きエース

に感嘆の声を漏らした。
「ここまで山城君は打者16人に対して四球0、被安打0、三振13……正に文句のつけようがない完璧なピッチングだわ」
「確か一人もランナー出さなかったら完全試合……でしたっけ？　もしかしたらそれが出来るんじゃ……」
「そうね。明川の打線も全く山城君にタイミングが合ってないし、出来なくはないでしょうね。ただ」
「ただ？」
「この試合ではあまり達成してほしくはないわね」
えっと、春乃は驚きの声を上げた。
「なんでですか？　完全試合って確かすごい名誉なことなんですよね？」
「えぇ。プロでは勿論、高校野球でも完全試合を達成した投手は球史に名前を残すぐらい凄いことよ」
「だったら」
「でも、完全試合を達成するには試合の最後まで投げ切る必要があるの」

ノーヒットノーランであろうと完全試合であろうと、偉大な記録を為すには試合が成立する――つまりは決着がつくまで投げ切らなければならない。

野球の知識に疎い春乃でもそれぐらいは知っていた。

ごくごく当たり前のことを言われ、きょとんと目を丸くした後輩に貴子は苦笑を浮かべざるをえなかった。

「簡単に言えば球数がどうしても増えるのよ」

「それのいったい何が問題なんです？」

「つまりね」

「つまり、藤原さんは山城君の球数が増えて次の試合に影響しないかを心配しているのよ」「高島先生……」

「そうよね？　藤原さん」

貴子の言葉を引き継いだのは、マネージャー達と同じ場所で試合の展開を見守っていた副部長の高島礼だった。

くすりと大人の綺麗な笑みを見せた礼に、貴子は「はい」と小さく頷く。

春乃は突然の年長者の乱入にいささか緊張しつつ、疑問を口にした。

「次の試合に影響ですか？」

「えぇ。もしもこれが決勝だったなら、球数なんて気にせず最後まで投げ切って貰うのが一番いいわ。何て言ったって、ウチの投手陣で今一番力があるのが山城君だから。でも、今日の試合はまだ4回戦。甲子園に行くには今日の試合を除いてまだ3つも試合が残っているの」

戦力が充実し安定した先発ローテンションが組まれるプロ野球に比べ、負けの許されない高校野球はどうしても優れた能力を持つ投手――エースにかかる負担というのが大きくなりがちなもの。

毎試合の様に登板する関係から中三日～四日、下手をすれば連投などという極めて短い期間で次のマウンドに登らなければならず、疲労は蓄積する一方。

それまで好投を続けていた投手が、決勝では別人の様に打ち込まれるというのは決して珍しいことではない。

だからこそ各チームにとってはエースに休養を与えることが出来る展開作りと、二番手、三番手と言った控え投手の存在が重要となってくるのである。

「この先のことを考えれば仮にこの試合で完全試合を達成したとしても、結果とし

て次の試合に疲労が残るようなら意味はないの」
「な、なるほど。だから貴子先輩はこの試合は完全試合を達成しない方がって……」
「えぇ。特に次の準々決勝で当たる可能性が高いのはあの市大三高。出来る限り力は温存しておいた方がいいわ」
「だったらこの試合も、これまでの2試合みたいに継投で……」
「本来ならそれが理想ね」
でもと、礼は鋭い眼差しをセンター後方にあるスコアボードへと向ける。
そこに示されているのは戦前には誰も予想していなかった展開。
無数に並べられた0の行進。
青道高校×明川高校。6回表の時点で、未だ動かぬ0―0という最少スコア。
「そのためにはまず点を取らないといけないわ」

◇

振ったバットが空を切る。
リリース後、ストライクど真ん中と判断したそのボール。
舐めるなと始動を早めバットを出したものの、勢いよく伸び上ったボールはバッ

トに掠ることもなく中腰となったキャッチャーのミットに飛び込んだ。

――ストライクッ！　バッターアウト！

今日の試合で幾度となく告げられた三振のコールと、それを掻き消すかのような歓声。

投げる方は勿論だが、よくあんな漫画みたいなボールを簡単に捕っているなと、同じ捕手としての実力差を痛感しつつ明川学園の正捕手、関口は己のベンチへと戻った。

「すまん。瞬臣、また三振しちまった」

「かまわない。いや、むしろそれでいいくらいだ」

ここまで力投を続ける相棒に女房役として応えることが出来ず謝るも、当の本人は想定内だと言わんばかりの涼しい顔。

それはそれで悔しいものの、この憎々しいばかりの冷静さが関口には酷く頼もしかった。

バットとヘルメットを置き、瞬臣の隣にどっかりと腰を下ろす。

「でもいいのかよ？　もう六回だってのに、まだ一人もランナーが出てないんだ

ぜ？」

「問題ない。昨日言っただろ？　あの投手から点を取ろうとは最初から考えていないと」

そう、それが昨夜に楊瞬臣が出した結論だった。

一年生ながらも、青道の山城空は間違いなく全国でも指折りの好投手。

そんな怪物クラスの投げるボールを、お世辞にも強力とは言えない明川の打線が攻略するなどほぼ不可能。

連打は愚か、たった一本のヒットを打てるかさえ怪しいもの。

だからこそ瞬臣は発想を変えることにした。

どうせまともに打てないなら、無理に対策をしても意味はない。

ゆえに瞬臣はあえて誰もが必須と考える、山城空の攻略を最初から捨てた。

そう。全ては、

「勝負は後半――あの投手がマウンドを降りてからが本当の勝負だ」

「それは聞いたけどよ……点差があるならともかく、こんな接戦で本当にエースを代えるのか？」

「代える、いや代えざるをえない。確かにあの投手の能力は高いが、まだ一年だ。身体が出来上がっていない以上、次の試合のことを考えれば必ずどこかでベンチへと下げる必要がある」

スポーツに力を入れていない明川とは違い、青道は全国出場の義務を課せられた名門校。

一戦一戦に全力を注ぎつつも、必ず次の試合を見据えた采配をしてくると楊は確信していた。そしてそのためにも、

「今は三振してもいいからストライクゾーンに来たら全力でバットを振る。ただそれだけでいい」

「あの投手がマウンドを降りた後に備えて……か」

「あぁ。中途半端なスイングを繰り返して、いざ投手が変わった時にバットが振れないようでは困るからな。今の内に名門相手でも臆せず全力でスイングが出来るよう体に染みつけておく」

「なるほど……けどよ、本当にこのままでいいのか？」

「ん？」

「いやさ。あの一年の攻略を最初から捨てるっていうお前の作戦はわかるよ。正直、あの化け物からまともに打てる気がしないし。でも山城がマウンドを降りてからが勝負って言うなら、もっとこうやれることがあるんじゃないのか？」

例えば耐久作戦、例えば揺さぶり。

球数を投げさせれば投げさせるほど必然的に降板が早まるのだから、例え打てずともやれることは幾らでもある。

「青道がどれくらいの球数を限度と考えているのかはわからないけど、やっぱりただスイングするだけじゃなくて何か早めに降ろす工夫をした方が……」

「必要ない」

「でも、このままじゃそれこそ9回まで……」

「あぁ。むしろ、そこまで粘ってくれるなら好都合だ」

えっと関口は驚きの声を漏らす。

口を半開きにした相方を視界の端に捉えつつ、楊は青道のブルペンへと目を向けた。

「お前も知っていると思うが、青道には春までエースを務めていた3年の投手がい

ない。選手登録こそしているが、今日の試合でもベンチには入っていないままだ」
「あっ、あぁ。何でも大会前に怪我したって噂で聞いたけど……」
「現在の青道の控え投手は二人。二年のサイドスローと、一年のサウスポーだ。登板が少ないためにはっきりとは言えないが、映像を見た限りどちらも手も足も出ないようなボールを投げるわけじゃない。そしてこの二人がマウンドに上がるのが遅ければ遅いほど、俺達は有利になる」
「どうしてだ？　普通、早めに上がってくれた方がボールに慣れることができる分いいんじゃ……」
「普通ならな。ここで問題になってくるのは、控えの二人は今大会でまだ一度も接戦で投げていないということだ」
「あっ！」
「ただでさえ緊張する公式戦のマウンド。それも一つの失点が命取りとなる場面だ。回を重ねれば重ねるほど、終盤になればなるほど投手に圧し掛かるプレッシャーは大きく、重いものとなる。それまで大差のついた場面でしか投げてこなかった控えの投手がいきなりそんなマウンドに上がれば、平常心を保つことは難しい」

ただでさえリリーフピッチャーは感情のコントロールが難しいと言われているのだ。

経験豊富な三年生投手ならば自分を律する術ぐらい知っているかもしれないが、青道の控え投手はまだまだ若い。

いつも通り投げろと言う方が酷というもの。

「俺達がつくのはそこだ。そしてだからこそ」

「先制点はやれない」

「そうだ。先に点を与えてしまえば、相手にかかるプレッシャーは小さくなる」

現在の均衡状態こそがまさに楊の思い描いていた理想。

もとより9回で勝とうなどとは思っていない。

10回だろうと15回だろうと、勝負が決するその時まで楊は一人で投げ続ける気であった。

野球というのは点を与えなければ決して負けないのだから。

……ここまではほとんど期待通りに来ている。

守る選手達にとってもプレッシャーがかかるだろうに、試合の終盤に差し掛かっ

た今でも明川の選手達は集中を切らしていない。
多少のエラーやミスはあるが、間違いなく最高のパフォーマンスをみな披露している。
だからこそ怖いのは、
……何かの切欠でこの糸が切れること。
一度集中の糸を切らしてしまえば、そこから立ち直るのは非常に難しい。
計算が効かぬ不確定要素。
それが現れないことを楊は祈るしかなかった。

Ⅱ

6回の裏、青道高校の攻撃はクリーンアップからの好打順。
既に三巡目ということもあり、スタンドからは何とか点数をとの声が次第に大きくなる。
そんな期待を背負って打席に立った先頭バッターの伊佐敷だったが、追い込まれた後に外角のスライダーを引っ掛けあっけなく一アウト。

球場中が溜息で包まれる中、それを払拭するかのように四番結城哲也がインコースの厳しい球に上手くバットを合わせた。
打球に然程力はなかったものの飛んだコースが良かった。
ボールはサードの頭を超え、レフトライン際にぽとりと落ちる。
そしてその処理にレフトがもたつく間に結城は二塁を陥れ、ツーベース。
一アウトランナー二塁と一打勝ち越しの場面。
この試合何度目になるかわからないチャンスに観客席が盛り上がりを見せる中、打席に入ったのはこれまで全くいい所のない五番の増子透だった。
――打てよ増子～！
――そろそろ青道の力を見せてくれ～!!
――増子先輩～、お願いします！
――行け増子！　やってやれ！
応援を受け、「うがっ」と気合の叫びと共にバッターボックスに入る増子。
対する明川のエース、楊瞬臣はふぅと一つ大きな息と共に握っていたロージンをマウンドに落とした。

一度ランナーへと視線を送った後、セットポジションから投じられたその初球。
ボール気味のアウトローへのストレートに増子はバットを振るった。
鈍い金属音が響きわたり、打球はライトへと飛翔する。
――あぁ。ライトフライ。
――でも深いぞ、これなら……
オーバーフェンスとまではいかなかったが、それでも芯を外したにもかかわらずボールを外野まで運ぶ腕力は流石というべきか。
ライト白鳥の肩がそこまで強くないということもあり、結城は捕球と同時にセカンドベースを蹴った。見事タッチアップは成功し、これで二アウトランナー三塁。
そして打席に立つは今大会青道で最も勝負強いバッター。
六番、滝川・クリス・優。
――いけクリス！
――お前の広角打法を見せてやれっ！
――クリス先輩、一本お願いします！
ここまで点が入らず、フラストレーションを貯め続けてきた青道ファンにとって

は否が応でも期待のかかる場面。

にわかにボルテージを上げる青道側の応援スタンドだったが、その張り上げていた期待の声はすぐにざわめきへと変わることとなる。

クリスが打席に立った直後、キャッチャーが腰を上げたことで。

――おいおいおい。またクリスを敬遠かよ!?

――初回も敬遠で、四回は明らかに勝負を避けたフォアボール……いや、確かにこれまでのクリスの成績を考えれば当然なんだろうが。

――でも結城にもそんな攻め方だろ？　なんかこう……納得いかないよな。

――勝負しろよっ！　明川！

スタンドで不満の声が飛び交う一方で、この試合三度目となる四球を告げられたクリスは無言のまま一塁ベースへと歩いていく。

二アウト、ランナー一、三塁。

水は刺されたが未だ青道のチャンスであることに変わりはない。

長打が出れば一気に二点入る可能性もあるこの局面、青道は七番白洲をそのまま打席へと送り出した。

◇

……嫌な流れだな。

試合が行われているダイヤモンドから少し離れた一塁側ブルペン。

控え投手が肩を温めるその場所で、捕手用のプロテクターに身を包んだ御幸一也は険しい顔で現在青道が置かれている状況をそう評した。

……まさか楊の攻略にウチがこうまで手こずるなんてな。

スコアボードに並ぶ０の列。

これまでの二試合と同じ様にはいかないだろうとある程度予想はしていたが、それでもこの６回まで一点も取れないなど想定の範囲外。

……ランナーが出ないわけじゃない。

長打こそ少ないがヒット、またはエラーによってほぼ毎回の様にランナーは出る。

アウトカウントは増えるものの塁だって進むし、四回には一アウト満塁という絶好のチャンスだってあった。

だが、

……あと一本、点をとるための決定打が出ない。

相撲で例えるなら土俵際ギリギリで堪えられていると言った所だろうか。
もう一押しすれば勝てるのに、それが出来ないでいる。
そしてそんな状態がずるずると続き、気が付けば試合も後半。
決定打不足の原因は、はっきりしていた。
……まさか哲さんとクリス先輩との勝負を最初から捨ててくるなんて。
御幸は思い切った明川の作戦に驚きを隠せなかった。
強力打線が売りの青道ではあるが、当然のことながらその中にも得点源となるキーマンは存在する。一人は、言わずとも知れた不動の四番結城哲也。
そしてもう一人が復帰した天才、滝川・クリス・優。
上位打線が作ったチャンスは結城が、クリーンアップが作ったチャンスはクリスが返す。
このダブルチャンス打線とも名づけるべき打順で、青道はこれまでの二試合で圧倒的な打点を稼ぎ勝利を成し遂げてきた。しかし裏を返せば、それはこの二人に仕事をさせなければ青道の得点力を大幅に削ぐことが出来るということ。
それを明川は――――いや、楊瞬臣は証明した。

……一人でもランナーがいる場合、二人には問答無用で敬遠。ランナーがいない場合でも、最初から四球を前提に置いたコーナー攻め。

先程は外野の守備の乱れによって結城にツーベースを打たれはしたが、当たり自体はシングルヒット。もともとクリスと結城を塁に出すのは覚悟の上なのだろう。残りの打者７人でどう３つのアウトカウントを稼ぐか、それのみに焦点を絞って対策を考えてきている。

……一歩間違えれば即大量失点につながる危険な賭け。けど明川がウチを無失点で抑えるなら確かにこの方法しかない。

余計な四球を出さないのは勿論、狙った所に打たすことができる精密なコントロールがあって初めて可能となる作戦ではあるが、その分ハマった時の効果は絶大。特に今日の楊は何があったのか知らないが、前の試合の時よりもボールにキレがありコントロールも一段とよくなっている。

いかに強力な青道打線とは言え、今日の楊からクリスと結城を抜きに点数を取るのは中々に骨が折れる作業だった。

……ここまで山城の球数は70球。

明川の打線が強くない分、ペースを意識した投球をしていても簡単に三振が取れている。

このままのペースで行けば9回まで投げ切ることはできるだろうし、もしかしたら延長戦でも十分投げられるかもしれない。

けれど、それでは意味がないのだ。

……次にあたるのは恐らくあの市大三高。ここで山城に疲れを残すわけにはいかねぇ。

となれば当然どこかで継投に入らないといけないのだが、難しいのはそのタイミング。

このような膠着した試合ではリリーフに上がった投手に多大なプレッシャーがかかる。

特に山城の完璧な投球の後では、そのかかるプレッシャーも一押しだろう。

……監督も難しいとこだよな。

こんな場面でマウンドに上がる投手に求められるのは実力よりも気持ち。

御幸はすぐ隣で宮内にボールを投げ込む青道の実質二番手投手、川上憲史へと目

を向けた。回を増すごとに小動物を連想させるその優しい顔は強張っていき、腕の振りも徐々に甘くなってきている。緊張でガチガチなのは誰が見てもはっきりとしていた。

……もともとノリはプレッシャーに強い方じゃねぇからな。

こんな状態ではマウンドに上がったところで、実力の半分も発揮できはしまい。川上は特別球が速いわけでも、オンリーワンのボールを持っているわけでもない。腕を思いっきり振ることでもたらされるサイドスロー特有のボールの軌道と、低目のコントロールで勝負するコントロール型の総合タイプ。

それが持ち味を失えば、あっというまに打ち込まれるのは目に見えていた。

そして交代直後に一明川から一本出れば、流れはすぐさま明川へと行ってしまう。

こういう時に適しているのはと、御幸は〝そいつ〟へと視線を戻した。

「わっはっはっは！　肩が軽い軽い！　今日も調子がいいな～!!」

どんよりとした、青道にとってこの上なく流れの悪い試合展開だというのに流れ？　何それと言わんばかりに肩を回すのは一年生サウスポー、沢村栄純。

「ほらほら御幸先輩！　早く構えてくださいよっ！」
「……ここまで来るともう才能だな」
「ん？　何か言ったっすか？」
「何でもねぇよ！」
言葉と共にボールを投げ返す。
栄純はうきうきとした顔でボールを受け取ると、待ちきれないとばかりに振りかぶった。
「っし！」
球の出所が全くと言っていいほど見えない変則フォームから投じられるのは１３０キロに満たないストレート。けれどその所謂〝遅い球〟こそが栄純の武器だった。
ホームベース手前で微妙に変化したボールが御幸のミットへと飛び込んでいく。
自身のミットから鳴り響く乾いた音と手に残る感触に、御幸は小さく笑みを零した。
……やっぱり今日の沢村の調子はわるくねぇ。
いや、悪くないどころか良いとさえいってもいいほど。

ある程度コースにボールが散り、球にも勢いがある。
これに四シームと覚えたあの球が加われば、投球の幅は格段に広くなる。
……これなら。
胸中に一抹の確信を抱いた御幸の耳に、ベンチから己の名を呼ぶ声が届いた。
被っていたマスクを上げてベンチを振り返れば、そこにはブルペンを見つめる片岡の姿が。
……この場面で呼び出し？
ありえるのは次の 8 番坂井の代打か、もしくは――。
とにもかくにも、無視するわけにはいかない。
すぐにでも次の球を投げたそうにしている栄純の相手を宮内へと任せ、御幸はベンチへと走った。

Ⅲ

「監督」
「来たか……」

一塁側、青道ベンチの最前列。
サングラス越しにグラウンドへと注いでいた片岡は、ブルペンから走ってきた御幸へと顔を向けた。
青道を率いる監督としてやはりこの試合の展開には思う所があるのだろう。
元より厳しいその表情は更に一段と厳しく。
固く胸元で組まれた両腕が片顔の内心を忠実に表していた。
「御幸。今の状況がどういうものかわかっているな？」
「はい」
「なら相手の狙いも理解しているな？」
「山城の攻略を諦めての延長狙い……ですね？」
こくりと、片岡は頷いた。
明川は山城の攻略を諦めている。
それは明川の打者９人が簡単に９つのアウトを献上した一巡目である程度予想が付き、特に策もなくそのまま変わらずフルスイングで打ちに来た２巡目で確信へと変わった。

明川は回を重ねれば山城がどこかで必ず交代すると読み、それまで打つ気はないのだと。

守備の時に見せた結城やクリスとの勝負を避けるという極めてリスキーな作戦も、全ては試合を膠着状態に持ち込ませ山城の後に出てくる投手にプレッシャーを与えるため。

「今チームの流れは停滞している。このままずるずると行けば延長までもつれ込むかもしれん、相手の思惑通りにな」

勿論それは片岡の望むところではない。

「この回、ウチが点数をとれなければ7回から山城をレフトへと回す」

「っつ！」

「現状でチームのムードを変えるにはそれしかない」

エースをマウンドから下ろす、そのことの意味を片岡が知らない筈もない。

特に山城はこの6回まで、監督である片岡の目から見てもほとんど満点に近い投球をしてきた。ストライク先行で球数少なく、向かってくる打者を次々と三振に仕留めていく様は一年生ながら正に青道のエースとして相応しいもの。

だがその完璧さがチームに僅かな緩みをもたらしているのも、また事実だった。
山城がいれば点数は取られない。
そんな心の緩みが現在の無得点に繋がっている――というのは言い過ぎにしても、少なからず関係性があるのは間違いなかった。
「山城がマウンドから降りれば否が応でもチームの空気は変わる、試合の流れもな」
これまで完璧な投球を続けてきた山城がマウンドを降りれば、それまで青道が握っていた絶対的なアドバンテージ（点数を与えないという）は喪失する。
そうなれば明川は元来の作戦通り果敢に点数を取りに来るに違いない。
もしもそこで明川の勢いを止めることが出来なければ、試合の流れはたちまち明川へと移ってしまうだろう。
だが逆に完全に抑え、明川の目論見を崩すことが出来れば、
「流れはウチに来る」
明川に負けず劣らず非常にリスキーな作戦ではあるが、既に片岡は覚悟を決めていた。
御幸は驚きこそしたが、片岡の判断に口を挟む気はなかった。

このまま安全策を取って山城を続投させたところで、点が取れなければどこかで変えざるを得ないというのは御幸も感じていた所。監督が次の回から継投に移るならば、それに従うのが選手の役目だった。

既にブルペンでは沢村と川上が肩を作って待機しており、両名ともすぐにでも登板できる状態にある。

よって問題なのは、

「御幸。次の回、お前なら川上と沢村のどちらをマウンドに上げるべきだと考える？」

「自分なら……ですか？」

「そうだ。二人をよく知り、実際にブルペンでボールを受けていたお前の意見を聞きたい」

サングラスの内に隠れた片岡の鋭い目が御幸を射抜いた。

御幸は僅かな逡巡の後、口を開いた。

「自分は――――」

◇

6回の裏、2アウト1、3塁と絶好のチャンスを迎えた青道であったが、結局7番の白洲がフルカウントからセンターフライに倒れたことでこの回もまた無得点に終わった。

この試合何度目になるかわからない残塁に一塁側スタンドが深い溜息に包まれる中、守備に就くためベンチからグラウンドへと飛び出していく青道の選手を眺めていた一人の観客がそれに気付いた。

――おい！　山城がレフトに向かっているぞ!?

――なっ!?　まじかよ、じゃあマウンドには誰が……

――キャッチャーもクリスじゃねぇぞ！

これまでとは違うざわつきに包まれ始めたスタンド席。

場内のスピーカーに電源が入ると、誰もがそのアナウンスに耳を傾けた。

『青道高校、選手の交代をお知らせします。キャッチャーのクリス君に代わりまして、御幸君。レフトの坂井君に代わりまして、ピッチャー沢村君。ピッチャーの山城君がレフト。　6番キャッチャー御幸君、8番ピッチャー沢村君、9番レフト山城君。以上に交代になります』

アナウンス終了と共に球場に訪れた沈黙。
一拍の空白の後、その沈黙は今日一番のどよめきへと変わった。
――おいおいおい！　青道は何を考えているんだ!?　ここでバッテリーを交代!?
――クリスも山城も代える理由なんてないじゃねぇか!?
――いくら流れが悪いからって、ここまで好投を続けてきたバッテリーを代えるか普通？
――これで点数を取られたら監督の責任だぞっ！
――っていうか、沢村ってあの一年のサウスポーだろ？　例え代えるにしても、何で川上じゃないんだ？
――確か前の二試合真っ直ぐしか投げてなかったよな？　大丈夫かよ沢村で……
驚愕、憤怒、呆れ、不安。
様々な感情が入り混じった声がスタンドからグラウンドへと投げつけられる。
球場の誰もが様々な思惑を持って見つめる中、沢村栄純がマウンドへと上がった。

え〜。だいぶ投稿が遅れましたが21話です。今後もまったりじっくり、よろしくお願いします。

22話

I

……ここで動いてくるか。

今しがた6回の守備を終えて引き上げてきたばかりの明川ベンチ。

額から零れ落ちる汗を拭い、瞬臣は新たにマウンドに上がった青道の二番手投手へと視線を送った。

背番号20、一年沢村栄純。

高校野球では比較的珍しい、そして青道投手陣で唯一のサウスポー。

……投球練習を見ている限り、ストレートにはさしてスピードはないな。

また遠目から見る限りではこれと言った変化球も投げておらず、幾ら打者に有利なサウスポーとは言え、それまでマウンドに上がっていた山城空と比べれば雲泥の差がある。

日本のことわざを借りれば月とスッポン。

それこそ、比べるまでもないレベルである。

……このタイミングで動いてくるのは予想通り。山城がレフトへ退いたのも、想定の範囲内。だが――

「瞬臣、これってチャンスだよな!?」

興奮気味に話しかけてくるチームメイトに瞬臣は小さく頷いた。

「あぁ。投手が変わった。俺達の作戦通りだ」

「よっしゃ！」

山城空をマウンドから引きずり下ろした。

名門相手に一歩も引くことなく――それどころか、自分達の当初の作戦通りにことを運んでいる。それは自信となり、明川の選手全員へと伝播していく。

――遂に反撃の時が来たな！

――あぁ。相手は大したことない一年！　この回で必ず点数をとって瞬臣を楽にしてやろうぜっ！

――おおぉお!!

待ち望んでいた時がついに来たと盛り上がりを見せる明川ベンチ。

頼もしいチームメイトの姿に瞬臣は僅かに口元を弛ませたものの、すぐにまた険

しい顔で青道のベンチを眺めた。

……確かにここで投手を変えるのは予想通り。だがなぜあの一年をマウンドに送った？

青道にはまだ二年のサイドスローが後ろに控えている。

山城ほど突き抜けた実力はないが、名門青道で背番号を背負うだけあって纏まったいい投手だというのが瞬臣の率直な感想だった。

緊迫した場面で出てくるとしたまず間違いなくその投手だと思っていただけに、ここで一年の控えが出てくるのは全くの想定外。

単なる場繋ぎか、それとも未だ明川を舐めているのか。

あるいは。

……あの一年に何か特別なものがあるのか？

◇

7回の表、明川の攻撃は一番センター二宮から。

それまでの二打席を完璧に抑えられていたにもかかわらず、左打席に入る二宮の顔には一切の諦めの色はない。むしろそれまでには薄かった、何が何でも打ってや

ると言う闘志の炎が全身に漲っていた。
投手が山城から沢村に変わった途端にこの反応の変わり様。
随分わかりやすいなと、マスクの下で御幸は思わず苦笑を零した。
……まぁ、明川にしてみれば千載一遇の大チャンスだしな。
攻略の糸口さえ見つからない山城をマウンドから引きずり降ろして出てきたのは、一見何てことのない平凡な投手。
御幸とて逆の立場であったなら、否応なく気合が入る場面だ。
とは言え、それはあくまでも逆の立場での話。
青道の捕手として今御幸が気にしなければいけないのは沢村の精神状態だった。
……沢村のやつ、力んでねぇだろうな。
ただでさえ緊迫した展開での登板の上に、こうもあからさまに山城の時と対応を変えられれば体に力が入ってもおかしくない。
特に試合経験の浅い、単純で一本気な沢村なら尚のこと。
幾ら状態が良くともそれを発揮できなければ何の意味もない。
一抹の不安を抱えながら御幸はマウンドの後輩へと視線を向けた。

「はっ」

結論から言ってしまえば、その懸念は杞憂だった。

御幸が見たもの。

それは自分の世界に埋没し、静かに御幸のサインを持つ一人の〝投手〟だった。

……随分と良い顔してるじゃねぇか。

今の沢村の顔には馬鹿にされことに対する怒りや、緊迫したマウンドに上がったことに対する緊張などといった余分なものは一切ない。

あるのは何が何でも絶対に抑えるという、強い純粋な意志だけ。

……これは監督に言われたのが効いたか？

この回が始まる前、片岡は沢村をベンチ前に呼びつけていた。

攻守が入れ替わる僅かな時間だ。

事細かに何かを伝えられる余裕はない、ゆえに一言。

たった一言だけ、片岡はこれからマウンドに上がる沢村へと言葉を贈った。

――この試合の結果はお前にかかっている、と。

ともすれば重いプレッシャーになりかねない一言。

しかしその短い一言が、山城空と言う絶対的なエースの陰でここまで本当の意味で試合に関われなかった沢村栄純の心に火をつけた。

相変わらず人を乗せるのが上手いなと、御幸は改めて自分の監督の人心掌握力の高さに舌を巻いた。

……でもまぁ、お前がそんな状態なら何も問題はねぇ。

この回、青道はただ0で抑えるだけでは駄目なのだ。

まだ行ける、攻略できると思われてしまえば明川は決して試合を諦めない。

相手の作戦を打ち砕く完璧なピッチング、それこそがこの回沢村に求められるもの。

そしれそれが出来るだけの能力を、沢村は既に持っている。

サインをだし、コースへとミットを構える。

沢村は躊躇することなくそれに頷き、投球動作へと入った。

右足が引かれ、両腕が高く振りかぶられる。

……見ている連中の度肝を抜いてやれ！

Ⅱ

「おおおおぉっ！」
「っつ!?」
鈍い金属音と共に、芯を外れた打球が上空へと舞い上がる。
勢いのない打球は内野の頭を超えることなく、緩い放物線を描いてほぼセカンドの定位置へと落ちていく。打ち上げた明川の二番橋本は一抹の期待を込めて一塁へと走るが当然その期待は実らない。
セカンドを守っていた小湊がしっかりと落ちてきたボールを捕球し、アウトが成立。
7回の表が始まってから未だ5球。
されど電光掲示板に灯ったこの回二つ目となる、赤いランプにスタンドからどよめきが生まれた。
――おぉ！　セカンドフライ！　これで2アウト！
――随分と振り遅れてたけど、あれ130も出てないだろ？　その前の一番もインコースに振り遅れていたし、一体どうなってんだ？

――よくわかんねぇけど、随分と小気味いいピッチングしてるのは確かだよな。

――さ、沢村が何事もなく連続で打ち取った!?

――奇跡だ。いや、必ずこの後何かやらかすぞっ！　何せ次は楊だしな！

――何で青道側がこんなに驚いてんだよ？

――山城を代えた時は何考えてんだと思ったけど、中々やるじゃねぇかあの一年サウスポー！

頭上から降り注ぐ無数の声の中、凡退を喫してベンチへと戻る橋本はネクストサークルから打席へと向かう楊に対して小さく頭を下げた。

「すまん瞬臣」

「最後のボールは？」

「まっすぐ……だと思うけど、何か手元で動いた気がする。それにフォームが滅茶苦茶で、タイミングがすごく取り辛い」

「変則なのはビデオでもわかっていたが、その上ムービングボーラーか……」

呟き、楊は右打席へと入った。

いつも通りの動作でバットを構えながら、楊はマウンドに立つ新たな敵を見据え

た。

……想定外だったな。

山城を引き摺り下ろしたからと言って、すぐに得点が入るわけじゃないというのはわかっていた。近年振わないとは言え、青道はれっきとした野球名門校。いくら二番手投手であっても、決して打線が強いとは言えない明川がそう簡単に打てるものではない。だがそれでも緊迫した展開に持ち込みさえすれば、必ず攻略の糸口は見つかると踏んでいた。

だが実際にはここまで完璧に――それも殆ど注意すらしていなかった一年サウスポーによって――抑えられている。

恐れていた不確定要素が登場してしまったことに、楊は眉を顰めた。

……俺達の作戦は青道の投手陣の層の薄さを前提にしている。

ここまで明川の選手達が緊張を切らさずやってこれたのも、山城さえ引き摺り下ろせば何とかなるという希望があったからこそ。

それを打ち砕かれれば――

……ウチに勝利はない。

グリップを握る両手に力を込める。
一本、ここで一本出ればまだ明川に希望は残る。
打てないことはないのだと、まだ攻略できるのだとチームに示すことが出来る。
マウンドの沢村がモーションへと入る。
振り遅れぬよう楊がそれにタイミングを合わせる――前に、ボールは投げられていた。
……なっ!?
咄嗟に振りぬいたバットに振動が走った。
バットの先に当たったボールは一塁線へと転がり、ベースに到達するよりもずっと速くファールラインを超えた。
――ファールボール！
状況を告げるコール、スコアボードに灯った黄色いランプ。
痺れの収まった手元を見つめ、楊は再びバットを強く握り直した。
……了解（リャオチエ）。本当にタイミングが取り辛いな。
映像で見ただけではわからない、実際に対峙して初めてわかるこの感覚。

限界ぎりぎりまで隠れていた左腕が突如として飛び出し、いつボールをリリースしたのかが全く掴めない。これを初対決でタイミングを合わせるのは至難の業だった。

それに、

……動いたな。

決して大きな変化ではない。

しかし確実に、打ちに行く直前でスライダー方向へと変化した。

変則投法＋ムービング。打席に入る前からある程度わかってはいたが、実際に対峙して見るとその厄介さが際立つというもの。

……動く球を打つにはボールの変化を見極めることが常識だが――

メジャーでよく見られる、打席の後ろに立って引きつけて打つバッティング。

だがそれはボールに振り遅れないスイングができて初めて成立するものであり、残念ながら楊にはそれを為しえるだけのパワーが備わっていなかった。

ならばと、楊はそれまで長めに持っていたバットのグリップを一つ余らせた。

二球目。少しでもピッチングを齧った者なら滅茶苦茶とわかる汚いフォームから

再びボールが投げられる。一球目がインコースだったのに対し、今度はアウトコース。

ポイントを前にし、やや真ん中気味に入ったボールへと陽はバットを振った。

――ファールボール

引っ張った打球がサードの頭を超えてファールネットへと突き刺さる。

……少し始動が早かったか。

だが振り遅れて力ない打球が飛ぶよりも遥かにマシ。

未だその滅茶苦茶なフォームにはなれないが、幾ら速く感じようとも決して山城の剛速球程ではない。緩急をつける変化球もない以上、余程いいコースに決まらない限りはカットできる自信が陽にはあった。

……これまでの試合の映像を見る限り、この投手はまだ外のコースを突いたピッチングは出来ない。

カウント、0―2。

もしも自分があの投手をリードする立場ならと、楊は思考を巡らす。

セオリーならば一球外すところだが、外したところでそれを活かせる変化球を沢

村は持っていない。打者に余分な情報を与えないためにも、そして試合の主導権を握る意味でもここはすんなりと三球で切って取りたい局面。

沢村がモーションへと入る。

……初球、二球目は共に少し甘めの外のボールでカウントを稼いだ。

決め球となる変化球がない、アウトローを正確につけるだけのコントロールもない。

そんな投手をリードするとなれば（陽としてはやりたくもないが）、当然勝負球として最後に持ってくるのは――

……インコースへのストレート！

正にドンピシャリ。沢村の指先から離れたボールが向かう先はインコース高目。

予想通りのボールに楊は力強くバットを振り下ろした。

綺麗なセンター前を打とうなどいう考えは最初からなかった。

金属バットは木製とは違いミートポイントが広く、多少芯を外しても振りぬきさえすれば打球は内野の頭を超える。

ただただ強い打球を打つことのみを目的としたスイングを行いながら、楊は確信

する。

捉えた、と。

サウスポーの投手が右打者のインコースに投げ込んでいるだけに角度がキツイが、それでも問題なくバットを振りぬけると思ったその時だった。

……なっ!?

それは先までの二球とは似ているようで全く違う変化だった。

上下左右のいずれかに多少動く程度では済まされない。

バットがボールへと当たる直前、ただでさえ角度のついていたボールが更に内へと――それも〝ハッキリ〟とわかる程の変化で内角へと抉り込んできた。

「っつ!?」

何とかバットを抜こうとするがもう遅かった。

ボールが根元に当たり振り抜けなかったバットは鈍い音を鳴らし、力ない打球が三塁線へと転がる。痺れた両手を抱えて楊は一塁へと走った。

……あの角度から更に抉れただと？

そのボールの名を楊は知っていた。

空振りを取るためではなく、打ち取ることを目的としたムービングの一種。
日本では近年になって脚光を浴び始めた、曲がる真っ直ぐ。
……カットボール。まさか、意識して投げたのか？
陽が一塁に到達するよりも早く三塁手の増子から一塁手の結城へとボールが送られ、これで3アウト。礼儀としてアウトとなった後も一塁を駆け抜けた楊は、すぐにはベンチへと戻らなかった。ヘルメットを外し、新たに0の刻まれたバックボードへと目をやる。
明川高校、1番から始まった7回の攻撃もまた三者凡退。
そう、結果だけ見ればそれまでと同じ三者凡退。
けれどそこに秘められた意味を楊は誰よりも深く理解していた。
息を吐き、明川のエースは視線をバックボードから己の右手へと移した。
小刻みに震える――未だ痺れが残る手の平。
楊瞬臣はそっと瞼を閉じた。

Ⅲ

青道高校対明川高校。

戦前には誰も予想していなかった熱い投手戦が繰り広げられたこの試合だったが、その決着は意外なほどにあっさりと着いた。試合が動いたのは終盤、7回の裏だった。

7回の裏、攻撃側である青道は先頭バッターである8番沢村栄純に代わり、代打として一年の小湊春市を投入。7回に入ってから制球の定まらない明川のエース楊瞬臣からレフト方向へヒットを放つと、続く9番山城空もまた甘く真ん中に入ったボールを右中間に運び2ベース。ノーアウトでランナーを得点圏に貯めたところで、一番倉持がセーフティースクイズを決行。打球を処理したサードが一瞬どちらに投げるか判断に迷ったことで、ランナーはオールセーフ。

こうして青道に待望の一点が入り長かった均衡が破れると、後は一瞬だった。その後も連打を重ねた青道は明川のエラーもあって、7回に一挙5点を獲得。

8回の表は沢村から後を任された川上憲史がキッチリと明川打線を抑え、その裏に更に二点を加えてゲームセット。

青道7—明川0（8回コールド）

紆余曲折あったものの、終わってみれば青道のコールド勝ち。
けれど点差程に楽な試合展開でなかったことは、試合を観戦している誰もが理解していた。しかし何はともあれ、これで青道はベスト８一番乗り。
準々決勝進出を決めた。

ｓａｋｉとダイヤのＡ、それにネギま。
色々と更新しないといけない作品が多くて困る……

23 話

I

明川との試合を制してベスト8を決めた青道だが、のんびりと勝利の余韻に浸る暇は彼らにはなかった。あくまでも青道の目標は優勝ただ一つであり今日の勝利とて通過点に過ぎない。選手達は勝利の喜びを味わう間もなくベンチを後にすると、準決勝でぶつかる最有力候補である市大三高の三回戦を観る為にスタンドへとその場所を移していた。

もう間もなく始まるであろう試合にチームメイトが熱い視線を注ぐ中、どういうわけか山城空だけは心ここに非ずと言わんばかりにぼんやりと電光掲示板を眺めていた。

「どうした山城？　もうすぐ試合が始まるぞ？」

隣に座る後輩の異変にいち早く気が付いたクリスが声をかけると空は緩慢な動きで首を動かした。

「あっ。クリス先輩」

「いつになく気の抜けた顔をしているが何か気になることでもあるのか？」
「いや、気になることっていうか……その、クリス先輩」
「なんだ？」
「俺達って勝ったんですよね？」
空の口から出たのは余りにも間抜けな質問だった。
いつも冷静沈着なクリスもさすがに虚を突かれたのか目を瞬かせた。
「今さら何を言っている？　試合が終わる時お前もグラウンドにいただろう」
「それはそうなんすけど……なんてゆーか実感が湧かなくて」
頭の中では勝ったことを理解しているのになぜかその勝利を実感できない。
これまでにない変な感覚に戸惑う空にクリスはふむと目を細めた。
「ちなみに山城。実感が湧かないと言うが他に何か思ったことはあるか？」
「他にですか？」
「あぁそうだ。些細なことで構わないから言ってみろ」
「えっと。こんなこと言うのもあれなんですけど、正直素直に勝利を喜べなかったです。あと自分がレフトにいるのに違和感を感じてたっていうか、何で試合が終

わった時にマウンドにいるのが自分じゃないんだろうって思いました」
言葉にしてみると空は自分がおかしくなっていることをハッキリと認識できた。
試合終了時にマウンドにいなかったことなどシニア時代には何度もあった。
それこそ登板しないままチームが勝利したこともある。
けれどそのいずれもチームが勝てば素直に喜ぶことが出来たし、不満に思うことなど一度としてなかった。一年前とはまるで異なる己の変化にただただ困惑するしかない空。
そんな思い悩む少年の耳に飛び込んできたのは柔らかな微笑だった。
「ふっ」
「って！　笑う事ないじゃないっすか！」
抗議の声をあげると、クリスは笑いながら謝罪した。
「すまんな。だがお前も段々と自覚が出てきたようだなと思ってな」
「自覚ですか？」
なんのことかわからず首を傾ける空。
クリスは優しく微笑むと後輩の頭にその大きな右手を置いた。

「自分がチームを勝利に導かなければ気が済まない、誰にもマウンドを譲りたくない。自分勝手と言ってしまえばそれまで。チームスポーツにとっては本来マイナスとなるプライド」

「うっ」

「だがエースに必要なのもまたそのプライドだ。また一歩エースとしての道を進んだな山城」

語りかけるその言葉は後輩の成長を喜ぶ気持ちに溢れていて。

どこととなくむず痒く縮こまる空にクリスはまた笑った。

そんな青春ドラマもかくやという展開がスタンドの片隅で繰り広げられている間にもグラウンドでは遂に試合が始まろうとしていた。

西東京予選3回戦　市大三高―薬師高校

誰もが市大三高で決まりだった試合はこの後波乱を迎えることとなる。

轟雷市、この男のバットによって。

◇

それはまるでミサイルだった。発射台であるそのスイングは気を抜けば見失って

しまうほどに速く鋭く、轟音と共にボールを大空へと射出した。
打ち出されたミサイルは一般的なホームランの軌道である緩やかなアーチを描くことなく、どこまでも真っ直ぐな軌道で外野スタンドの外にある雑木林の中へと突き刺さる。
一瞬の静寂の後、音を取り戻した球場はざわめき立った。
――うぉおお!?　また打ちやがったぞあの四番!?
――これで今日何打点目だあいつ!?
――ランナーも帰って一点差！　まじでこれは市大も危ないぞっ!?
――あれで一年とか反則すぎるだろっ！
球場中の視線を一身に浴びながら打った選手は一塁へと走り出した。
ダイヤモンドを回るのは市大のものではない、ストライプのユニフォーム。
未だ幼さを残す少年が野性味溢れた笑い声を上げてホームを踏んだ時、スコアボードが動いた。
市大三高10―薬師高校9
戦前は誰も予想していなかったまさかの接戦、それも乱打戦。

スタンドの端で観戦していていた青道の選手達もまた驚きを隠せず、それぞれの形で己の心情を吐露する。クリスは険しい顔でグラウンドから視線を切ると膝元のスコアブックへと視線を落とした。

「これで三打数三安打五打点二HR。真中のスライダーを完璧に捉えたことといい、とても一年とは思えないな」

市大の真中と言えば甲子園でもその名を轟かせた西東京でも五本の指に入る名投手。

特にそのウィニングショットであるスライダーは曲がり幅が大きい上に手元で鋭く変化するため初見で攻略するのは極めて難しい。

けれど薬師の四番――それも一年の轟雷市は初対戦でいとも簡単にそのスライダーをライトスタンドへと叩き込み、真中の心をへし折った。

……驚愕するべきはやはりあのスイングスピード。限界までボールを引きつけても間に合うあのスイングがあるからこそどんな変化にも対応できている。

今はまだ点数上市大がリードしているが勢いは確実に薬師に傾きつつある。

大番狂わせがあった場合の状況を想定しつつクリスは青道のエースへと顔を向け

た。

「どう思う？」

「そうっすね……」

クリスと同じく厳しい目でグラウンドを見下ろしていた空は固まった身体をほぐすために肩を回す。うーんと大きく体を伸ばすと関節が鳴った。

「実際に対戦してないんでハッキリとはわからないですけど……多分、あれ相当なバッターですよ。スケールのでかさなら哲さん以上かも」

「轟の名前をシニアで聞いたことは？」

「ないです。三番と五番に入ってる秋葉と三島は確かシニアで対戦したことありましたけど、轟雷市なんて珍しい名前は一度も」

「高校に上がって急激に伸びたのか、それとも中学ではチームに入っていなかったのか……いずれにせよデータが少ないというのは不気味だな」

一発勝負の恐ろしさとでも言うのだろうか。

高校野球では極稀にこういう怪物が突然現れることがある。

しかしだからと言って黙ってやられるわけにはいかない。

「抑えるぞ」
その一言に全てが集約されていた。
できるか、ではない。抑えなければ青道に次はないのだから。
確固たる決意を固めた敬愛する先輩に空は明るく笑いかけた。
「大丈夫ですよクリス先輩」
笑いながらもその瞳には熱が。
隠し切れない炎が宿っていた。
「俺はあいつよりも凄いバッターを知ってますから」

Ⅱ

大番狂わせはなった。
打球を受けた市大のエース真中の途中退場などのアクシデントはあったものの、結局乱打戦を制したのは薬師高校だった。春の選抜ベスト八が三回戦で姿を消したというニュースは世間を賑わせ、新聞のスポーツ欄でも写真付きで大きく報じられた。一躍台風の目として注目を集めた薬師はその後の四回戦でも圧倒的な打力で都

立千草を捻じ伏せ準々決勝進出を決めた。

これによって7月27日の準々決勝は青道―薬師という大会が始まる前は誰も予想していなかった組み合わせとなったわけだが、予想していた相手と違うからと言って浮つくような選手は青道にはいなかった。

もしも順番が違えばグラウンドで涙を流していたのは自分達かもしれない。

そんな想いが選手達にバットを振らせ、足を動かした。

準々決勝の前日。翌日の試合に備えて全体練習が早めに切り上がった後、空とクリスのバッテリーは日課となる投球練習を今日も今日とて室内練習場で行っていた。

丁寧に整備されたマウンドの上で振りかぶると空は勢いよく左足を踏み込み、勢いそのままに右腕を振り下ろした。

「っち」

リリースの瞬間、舌を打つ音が零れる。

苦い顔で見送られたボールは生き物の如く唸りを上げてクリスのミットを鳴らした。

「やはりまだ浮いているな」
マスクを外したクリスの言に空は頷いた。
何度となく右手を握っては開く空にクリスは眉を寄せた。
「まだ違和感があるようだな」
「はい」
明川戦の後からというもの空は珍しくコントロールを乱していた。
怪我をしたわけでもフォームを崩したわけではない。
ただどうも細かなコントロールが定まらずボールが散らばってしまう。
……大阪桐生との試合の後辺りから指先の感覚が鋭くなってきているとは言っていたが。
この準々決勝の直前に来て更にそれが鋭くなるとはクリスも考えていなかった。
投手の指先感覚は主観的な部分が大きい。
プロの投手でさえ少し間隔が空けば狂ってしまうほどに繊細なものである以上、成長期にある高校生がふとした切欠で違和感を覚えても不思議ではない。特に一般の投手よりもより細かな指先感覚を必要とするジャイロボーラーならば尚のこと。

……だが多少の感覚の誤差ならばこれまで山城はすぐに対応してきたはず。
それが三日経ってもアジャスト出来ていないということはそれだけ誤差が大きく――山城の言葉を借りるならば感覚が鋭くなってきているということ。
……ボール自体は決して悪くない。いやそれどころか徐々に球威もノビも増しつつある。
測ってはいないが球速もいくらか上がっているかもしれない。
恐らくもう少し時間があれば山城も今の感覚に慣れるのだろうが生憎と試合は明日。
……明日までにどこまでズレを埋められるか。
それが対轟――ひいては対薬師の鍵となる。
空もそのことを理解しているのだろう。
エースとしての自覚が芽生え始め、轟雷市という明確な敵を見つけて闘志を燃やしていたからこそ余計に自分の状態に納得がいっていない。
……本当なら適当なとこで切り上げるべきだが。
今の精神状態のまま試合を迎えればマイナスにしかならないのは明白。

明日に響かない程度に好きなだけ投げさせてやるかとクリスがもう一度マスクを被ろうとした、その時だった。

……うん？

誰かの視線を感じて入口へと振り返る。

先程まで閉まっていたはずの扉が少しだけ空いていた。

人一人も通れないであろう隙間から見える外の風景。

遠目ながらも暗がりへと消えていくその背中は見覚えがあって。

……丹波？

なぜここにという疑問は後輩の催促で掻き消された。

「クリス先輩。もう一球お願いします！」

「あ、あぁ」

後ろ髪を引かれながらもクリスはマスクを被り直してミットを構えた。

「確認しながら大事に投げてこい」

「はい！」

◇

空が投球練習を行っているのとほぼ同時刻。
私立薬師高校の野球部部室では翌日の試合に向けたビデオ鑑賞が行われていた。
薄型液晶全盛の現代では最早見慣れなくなった小型ブラウン管テレビの画面に映るのは先日の明川と青道の試合。マウンドで躍動する若き青道のエースの姿に驚きの声を上げたのは同じ薬師のエースだった。
「うおっ!?　すげぇストレート。これで一年かよ」
画面越しでもわかる圧倒的な迫力。
こりゃ点取るの大変だわとぼやきつつも決して諦めた様子のない真田に、薬師高校野球部監督轟雷蔵は無精髭を撫でた。
「山城空。シニアからブイブイ言わせてたいわゆる野球エリートってやつだ」
「ブイブイって……今時そんな言葉使わないっすよ監督」
「るせっ！　で、どうだ雷市。ちゃんとイメージは掴めたかよ？」
ジェネレーションギャップを痛感しつつ、雷蔵は背後の我が子を振り返った。
むしゃむしゃとバナナを口一杯に頬張りながら画面に熱い視線を注ぐのは薬師の四番にして一躍その名を知らしめた怪物轟雷市。

小柄といっても差し支えない未だ成長途中の少年は画面の中でまた一つ山城空が三振を奪うと野性味溢れた笑いを漏らした。

「カハハ。こいつスゴイ……ビデオだけじゃイメージしきれない」

「ちっ。まぁさすがにジャイロボールなんてしろもんは実際に対戦してみなけりゃわかんねぇか。けどわかってんだろうな雷市？　明日の試合はいつも以上にお前が鍵になってんだからな。市大の時みたいに一本打ってエリート様のプライドを粉々にしてやれ！」

「……早く。早く青道と戦いたい。ぜったい、絶対山城ブッ飛ばす！」

「全国でも注目を集めている山城を打てば一躍お前がスターだ。そうすりゃプロのスカウトも見に来るしプロ入りの契約金だってガッポリ！　俺の借金だって返せるしお前も豚カツ喰い方って寸法よ！」

「と、トンカツ!?　喰い放題!?　う、うぉおおおお!!」

外まで響くのではないかと思うほどの大音量で叫びながら雷市は立て掛けていたマスコットバット片手に部屋を飛び出した。

開けっ放しになった入り口から室内へと聞こえて来る叫び声と風切音。

このまま放っておけば倒れるまでやっていそうな勢いに真田は呆れ顔だった。
「……明日試合ですけどほうっといていいんすか？」
「ほっとけほっとけ。ビデオでイメージできない分はバットを振って補うしかねぇんだからな。それより真田。お前わかってんだろうな？」
「何を……って聞くまでもないっすよね」
困ったように頭を掻く薬師のエースに雷蔵はにやりと笑う。
「青道との試合の鍵が雷市であることに間違いはねェが正直いくら雷市でも山城相手に市大の時みたく大量得点を取るのはまず無理だ。つまり守りが重要になるわけだが三野じゃあ青道打線を相手するにはちと荷が重い。真田、明日の先発はお前だ」
「三野さんにはここまで随分と楽させてもらいましたからね……やりますよ」
四回戦まで先発だった三年生の三野はハッキリ言って能力的に優れた投手ではなかった。
けれど彼がいたからこそ真田は負担が少ないリリーフに専念し痛めていた太ももを完治まで持っていくことが出来た。
先輩のお陰で立つことが出来る明日の先発マウンド。

「激アツじゃないっすか」
それはエースの心に火を付けるには十分すぎる着火剤だった。

Ⅲ

7月27日午後一二時五五分。
まもなく始まる西東京の四強を決める準々決勝。
その対戦は六年ぶりの甲子園出場を狙う名門青道と一躍台風の目となったダークホース薬師という奇しくも真逆のぶつかり合いとなった。
大会が始まるまでは誰も予想していなかった異色の対戦に興味を持つ人間は多く、まだ試合前だというのに球場は溢れんばかりの観客で賑わっていた。
――もうすぐだな。
――あぁ。順当にいけば青道だろうが波乱を起こすとしたらあいつだろう。
――薬師の轟な。前の試合見たけどすげぇ距離のHR打ってたぜ！
――ここまでパーフェクトで来た山城相手に真中を打ち砕いた轟がどこまで食い下がれるか、今日の試合はそこが鍵になるだろうな。

――どっちが上なんだろうな？　あぁ！　早く見たいぜっ！

ざわつくスタンド席。

高校野球ファンの間で交わされる話題は主に青道のエースと薬師の四番についてだった。

シニアから飛び抜けた成績を残し入学から僅か数ヶ月で名門青道のエースにまで上り詰めた天才山城空。一方、全くの無名ながらも市大の真中を粉砕しここまで大会随一の打撃成績を記録している薬師の怪物轟雷市。

まだ一年ながらも共に傑出した成績を残す怪物二人の対決はメディアでも取り上げられ、この試合が注目を集める要因の一つとなっていた。

熱気冷めやらぬ中電光掲示板に両校のスターティングメンバーが発表される。

先攻　薬師高校

一番　4福田

二番　9山内

三番　3三島

四番　5轟

後攻	青道高校	
一番	6 倉持	
二番	4 小湊	
三番	8 伊佐敷	
四番	3 結城	
五番	5 増子	
六番	2 滝川	
七番	1 山城	
八番	7 坂井	
九番	8 大田	
八番	6 小林	
七番	2 渡辺	
六番	1 真田	
五番	7 秋葉	

九番　9白洲

午後一時ちょうど。
準々決勝が始まった。

23話のまとめ
1・クリス先輩マジイケメン
2・空君なでポの餌食となる
3・怖いよ丹波さん
……冗談です（でも嘘は言ってない）

あと、原作を読んだ作者が思う轟雷市のステータス（Cで甲子園出場選手レベル）

轟雷市（１年）
右投げ左打ち　三塁手　１７２センチ　62キロ
ミートＳ　パワーＡ　走力Ｂ　肩Ｃ　守備Ｆ　エラー回避Ｅ
特殊能力：アベレージヒッター、パワーヒッター、威圧感、初球○、打撃信頼感、送球２
多少水増ししてるかもしれないけど、実際こんなもんだと思う。そりゃ原作の中でチート扱いされますわ（この作品の主人公も似たようなものだというのは秘密）。

24 話

I

大観衆の見守る中始まった青道―薬師による準々決勝。
その初回、薬師高校から始まったその攻撃は見守る誰もがいささか予想外の展開となっていた。スタンドのあちこちからざわめきが漏れる中、マウンドに上がる青道の若きエース山城空はプレートを外して肺に溜まった空気を吐き出す。
左を向けばランナー、後ろを向いてもランナー。
1回の表、一アウトランナー1、2塁。
それが今青道の置かれている状況だった。
そう。つまるところ初回から空はいきなりピンチを迎えていた。
この準々決勝まで一人のランナーも許していなかった怪物の突然の豹変にスタンドからは困惑の声と野次が飛んだ。
――おいおいおい。大丈夫かよ。

――いきなり先頭バッターを歩かしたと思ったら続く二番も四球。三番は何とか三振に仕留めたけど……

――どうもコントロールが定まってないみたいだな。さっきから肩を回してるぞ。

――次のバッターはあの轟だし、こりゃひょっとしてひょっとするか？

――こらぁ山城ー！　これまでの制球力はどうしたぁ!?

――せっかく見てきてやったんだから舐めた投球してんじゃねぇぞぉ!?

随分と好き勝手なこと言ってるなと空は半ば他人事のように思った。

今大会初めて迎えたピンチだというのにその顔には焦りの色はなく、ともすれば冷めていると思われかねないほどにその所作は落ちついていた。

ロージンのついた右手をグッと握りしめる。

……この感覚にもだいぶ慣れてきた。

最初は鋭すぎて戸惑った指先の感覚も昨夜の投げ込みの成果なのか、完全とは言えないまでもイメージと実際の感覚のズレが小さくなってきた。実戦とブルペンの差から先頭二人を歩かすことにはなったが、これからはもう少しボールをコント

ロールできるという自信はある。
けれど。
……イマイチしっくりと来ないんだよな～。
歯車が噛みあわないとでも言えばいいのだろうか。勝ちたいという気持ちも絶対に抑えたいという気持ちも確かにある。
あるのだが、いざこうして実際の試合のマウンドに立ってみるとどうもそういった気持ちと身体が結びつかない。その妙なズレが空に違和感を与えていた。
……まっ。ここでウダウダ気にしていても仕方ないか。
何せ次のバッターは大本命。
その大本命が遂に左バッターボックスへと入った。
「カハハハ」
笑い声と共に薬師の四番轟が構えへと入る。特段特徴があるフォームではない。
やや右肩を内へと引いたスタンダードなフォーム。
けれどその小柄な体から放たれる威圧感は決して並ではなかった。
……へぇ。

実際に対峙してわかるこの迫力、この圧力。シニア時代何人もの天才と呼ばれるバッターを相手にした空だが、対峙しただけでそのスケールの大きさを感じとれた打者は片手の指にも満たなかった。

つまり轟雷市はそれほどの打者ということ。

……初球はインハイへ外す四シームジャイロ。

出されたサインに素直に頷く。

視線でランナーに牽制を入れてから空は左足を踏み出した

――――ボール。

多少クリスが構えていた位置から外れたもののほぼ要求通りのボールがミットを鳴らす。

纏まってきたコントロールに手応えを感じる空が打者の反応を伺うと、

「うぉおおおお！　ボールがギュ～～ンって、グ～～ンって上がってきたっ!?　スゲェ、スゲェぞ！」

やかましく叫び声を上げて身体を震わす轟に空は自身のチームメイトの姿を重ねた。

なんていうかそっくりだった。擬音だらけなところとか、無意味に叫ぶあたりとかが特に。あぁきっと馬鹿なんだろうな～と察しつつ、今のボールに全く反応を示さなかったことに考えを巡らした。

……初見であのボールに反応しないってことはちゃんと見えてるってことか。

並のバッターなら初めてジャイロの伸びるボールをインハイに見ればまず仰け反る。

ある程度実力を持ったバッターならば例えボールでも思わずバットが出る。そのどちらもないということはしっかりと球の軌道が見えているということに他ならない。

……二球目はアウトロー。

球種は同じ四シーム。

恐らくはどこに意識を置いているのかを探るための調査。

空としてもそれに異論はなくセットポジションから右腕を振り下ろした。

指先から離れた百四十キロを優に超える白球はホームへと直進し、金色の一閃によって弾き返された。

「なっ!?」

驚愕の声はバットの金属音に掻き消される。レフトへと空が身体を翻すと打球は既にサードの頭を超えていた。角度のついたライナーが勢いそのままにグングンと飛翔距離を伸ばし、あわやレフトスタンドという直前でポールの左を通過した。

――――ファールボール

溜息と安堵の両方がスタンドから零れ落ちる。

空は半ば呆然という顔でホームへと振り返った。

決して悪いボールではなかった。多少内に入りこそしたがそれでも外角の低目という長打が出にくい筈のボールを轟は流しただけであそこまで持っていった。

……ホームランにならなかったのは単なる偶然。

結果だけで言えばストライクカウントが一つ増えて投手は楽になり打者は苦しくなった。

しかしこと内容という観点で見るならば真逆。少なくとも先の一球に限って言えば間違いなく轟雷市は山城空を上回っていた。

……完璧に負けたって思ったのはいつ以来だ？

高校に上がってからは記憶にない。多分、最後に思ったのは一年前。
シニア時代、全中優勝後に行った一打席勝負。
チームメイトが見つめる中行った親友との勝負の結果は――
……ホームランだった。
空の中で、歯車が噛み合う音がした。

Ⅱ

先頭二人を歩かせるという最悪の立ち上がりを迎えた空だが、実際にボールを受けるクリスは外野ほど大きな心配はしていなかった。
球自体には力がありコントロールも球数を放る毎に良くなってきている。
空本人が冷静だということと、ここで下手にマウンドに向かえば相手に付け入る隙を与えかねないという判断からあえてクリスは沈黙を保っていた。
……とは言えさすがにここは一言かけるか。
四番の轟がレフトへと放った大ファール。外の難しい球をやや振り遅れつつも真芯で捉えたそのミート技術はクリスをしても驚異の一言でさすがに打たれた空にも

動揺の色が見られた。ここで対処を間違えれば真中の二の舞になりかねないという判断からクリスが立ち上がろうとした、その時だった。

ぞくりと、背筋に悪寒が走ったのは。

「っつ!?」

気が付けば立ち上がるために伸ばそうとした両膝は中途半端に曲げられたまま固まっていた。まるで金縛りにあったかのように体が動かなかった。

唯一まともに動く目だけを動かしてクリスはマウンドを見た。

……山城？

主審から新しいボールを受け取ってマウンドをならす空の顔にはさっきまでの動揺は微塵も感じられなかった。いつも通りの表情と声で守備に声をかけランナーを牽制する。

一見すれば単に落ち着きを取り戻しただけとも思える姿。

……違う。

けれどクリスにはわかった。誰よりも近くで山城空を見つめてきた滝川・クリス・優だからこそ気付いた。これまでと何かが違うと。

今目の前ではとんでもないことが起きているのだと直感していた。

「君、どうかしたのかね？」

「いえ、何でもありません」

変な姿勢で硬直したクリスを不審に思った主審の言葉で金縛りは解けた。

マウンドを気にしつつも上げかけた腰を下ろし配球を考える。

……さっきの打球。ある程度外にも意識は置いていたようだが外一本で待っていたにしては僅かにスイングが外を通っていた。恐らくはコースを絞っているのではなくストライクゾーン全体に均等に意識を置いている。

カウントが若い内はコースを絞って狙い撃つというバッティングの基本とは真逆だが裏を返せばそれだけ自分のミート力に自信があるということ。

……ここは一球打ち気を逸らしておくべきか。

落ちるツーシームジャイロか抜いたチャンジアップか。

どちらにせよタイミングの合っていた四シームを続ける選択は有り得ないと結論付けた時、マウンドで静かにサインを待っている筈の空が動いた。右手で肩や帽子のツバを触り最後は拳を胸元へ。いつものルーティーンとは明らかに異なるその行

動の意味は、

……投手用のサイン。

どうしても投げたい球種がある時や、万一の時にと半ば保険として決めた投手からのシグナル。シニア時代から一度として使用したことのなかったそれを使って空が要求したのは。

……四シームだと？

それもコースはど真ん中という暴挙。一体何を考えているんだと思わず口から零れそうになる言葉を何とか呑み込む。真剣だった。空の瞳はこの上なく真剣にクリスに訴えかけていた。

――真正面から勝負がしたい、と。

空からサインを出すことも初めてならば、試合中にそのような我が儘を言うこともまた初めて。明らかに空の中で何かが変わっていた。

その変化が好ましいものかどうかはさて置き、今は大事な試合中。投手が暴走気味ならばそれを抑えるのが女房役である捕手の役目である以上、クリスは出されたサインに対して首を横に振らなければならない。

ならないのだが、

……俺もまだまだ甘いな。

このピンチの場面で投手の我が儘を咎める所か逆に喜ばしく思ってしまうなどチームの大黒柱である捕手としては失格もいいところ。これは確実に後で監督から怒られるなと苦笑を浮かべつつクリスもまたサインを出す。

全力で来いと言うサインを。

出されたサインにマウンドの空は一瞬目を大きく見開くとすぐに真剣な表情で頷き、軸足となる右足をプレートにかけた。そして左足を〝後方〟へと引いたかと思えばその両腕を大きく〝振りかぶった〟。

――はぁ!?

――まじかよっ！

――ランナーがいる場面でワインドアップ!?

――ランナー走れっ！

青道、薬師、観客といった立場の違いなど関係なく球場にいる誰もが驚愕を隠せなかった。ランナーとして出ていた薬師の選手はまさかの事態に一瞬呆気にとられ

たものの、ベンチからの声を受けて二人ともスタート。しかしそんなのは関係ないとばかりに空は腕を振り下ろした。指先から放たれたボールがホームに向かって直進する。

その進むコースは内でも外でも高目でも低目でもない、正真正銘のど真ん中。アウトローのボールをスタンド近くまで運ばれたことを考えればとんでもない暴挙、愚策。けれどそのボールはこれまで投げたどんなボールよりもノビて、そして速かった。

風切り音を上げるバットの上をすり抜け白球がミットを揺らす。

――ットライクー！

審判がコールする頃にはランナーは次の塁へと進んでいた。

一アウトランナー2、3塁。一打で二人帰ってくるというストライク一つを取るためにしては余りにも大きすぎた犠牲。だがそんなものは関係ないとばかりにバッテリーは同じボールを繰り返す。

四球目。ワインドアップから投げられたボールはやはりど真ん中への四シーム、ボールはホームベース上でバットに当たると三塁側ファールグラウンドへと大きく

切れていった。

続く五球目、六球目、七球目も全て同じボール、全て同じど真ん中への四シーム。

五球目は三塁側ベンチへ飛び込むライナー、六球目は当たり損ねの観客席に飛び込むファールフライ、七球目は三塁ファールグラウンドへと転がる緩いゴロ。

三つのファールが続きカウントは依然1―2から動かなかった。

――おいおい真っ直ぐ一本かよ。

――落とせば簡単に三振を取れるんじゃねぇのか？

――コースもど真ん中ばっかとか。なに考えてるんだあのバッテリー!?

ど真ん中真っ直ぐへの一本勝負というバッテリーの暴挙に青道のスタンド席からは不満の声が漏れる。けれどそんな声は一球また一球とボールが投げられる度に、球数を経るごとに轟のバットが少しずつ差し込まれその顔に焦りの色が強くなっていく度に小さなものへとなっていく。

――な、なぁ？　段々と轟が差し込まれてきてねェか？

――あっ、あぁ……それに見間違いじゃなきゃ一球毎に段々とボールが速くなっているような……

――よくわかんねぇけどこれって凄いんじゃないのか？

――だよな!?　それにこうっ、なんか観てて気持ち良いし！

――こうなったら三振取るまでいっちまえぇ!!

スタンドでは不思議な高揚感が生まれつつあった。

とある数人の胸から生まれたその高ぶりは次々と周囲へと伝染していき、十球目を数える時にはスタンドのほぼ全域を覆い尽くさんとしていた。

『さ～んしん！　さ～んしん！』

始まる三振コール。グラウンドにいる選手達でさえも少し顔を顰めてしまいそうになるほどの大合唱が球場中に響き渡る中で遂にその時は来た。

十一球目、やはりど真ん中への四シームに轟のバットが空を切った。ボールがミットに収まった直後、球審が右手を上げる。けれど告げられるべきコールは歓声によって呑み込まれた。

――うぉおお！　三振っ！

――マジかよっ!?　ほんとにど真ん中真っ直ぐで三振取っちまいやがった!?

――すげぇ！　すげぇよ！

――お、おれ鳥肌が止まらねぇよ！

――やましろく～ん!!

たった一つの三振を奪っただけだというのにスタンドは半ばお祭り騒ぎ。

観客達が余韻に浸っている間にも次の五番秋葉はあっさりと三振を喫し薬師の初回無得点が決まった。無数のフラッシュとシャッターの嵐を浴びてマウンドを降りる空だがその顔に笑顔はなかった。子供が母親の大事な皿を割ってしまったかのような、どことなく気まずげな顔でクリスの下へと歩み寄っていく。

「クリス先輩。その、俺……」

「試合が終わったら二人で反省会だな」

優しく後輩の頭に手を置いて微笑むとクリスは顔を上げた。青道のダッグアウト最前列ではチームのトップが腕組みをしながら難しい顔でバッテリーを待っていた。

「山城、クリス……」

「わかっています」

サングラス越しでもわかる鋭い視線を注がれるもクリスはたじろかなかった。何

か言いたげな空を右手で制し、どこまでもまっすぐに片岡と見つめ合った。
張りつめた沈黙が続いて数秒。
ふんと片岡は鼻を鳴らした。
「試合を私物化した責任はとってもらう。試合が〝終わった後〟にな。だからこの試合はお前達で勝負を付けろ」
「はい」

Ⅲ

五番の秋葉が三振に喫して三つ目のアウトカウントランプが赤く灯ると、ネクストサークルに控えていた真田は下ろしていた腰を上げた。薬師高校二年、六番にしてエース真田俊平。彼は絶好のチャンスに尽く凡退したクリーンナップに悪態一つ漏らすことなくベンチに戻るとバットを置き、自分のグローブに手を伸ばした。
……初回にウチが点取れなかったのって多分初めてだよな？
爆弾トリオをクローンナップに据えた今のオーダーになってから初回に点数が取れなかったことが初ならば六番の自分まで打席が回ってこなかったのもまた初め

て。

今までの相手とは違うことを痛烈に感じつつマウンドへ向かおうと身体を反転させた時、真田は未だバットを握ったままマウンドを見つめる雷市の姿に気が付いた。

……ったく。

高校野球の交代時間は限られている以上あまりモタモタはしてられない。仕方ないとばかりに肩を竦めると真田はベンチに置いてあった内野手用のグローブを手に取り後輩の胸元へと押し付けた。

「ほら行くぞ雷市」

「サ、サナダ先輩」

「今日はこの前みたいにポカすんなよ？」

「うっ、ウッス！」

慌ててベンチを飛び出していく背番号二〇。いつも通りの全力疾走で守備位置へと向かうものの、その後ろ姿にはどことなく覇気がない。

……やっぱ気にしてんのか？

さっきの打席の三振を。マウンドに上がった真田は土をスパイクでならしながらチラリとその目を青道のベンチへと向ける。

……まさか雷市を真っ向勝負で抑えられるヤツがいるなんてな。

青道のエースがすごいのは知っていたが雷市ならばきっと何とかしてくれると思っていた。けれど実際はど真ん中の真っ直ぐ勝負という誰が見ても明らかな形で雷市は捻じ伏せられた。後輩の凄さを良く知るだけにそれを圧倒した山城の実力がよくわかる。

……あれでまだ一年とかヤバすぎだろ。けど。

規定球の投球練習を終えるとバッターボックスに青道の一番倉持が左打席に入る。

ふぅ吐息を吐き出し真田はプレートに右足をかけた。真田俊平は楊のような精密なコントロールを持っているわけでも、空のような強力なストレートを持っているわけでも、真中の様な決め球となる変化球を持っているわけでもない。

ムービングを主体にした好投手ではあるがそれだけであったなら全国でも上位に入る青道打線と戦うことは出来なかったに違いない。

本来の実力差を埋めているもの。
それは――――
――――負けねぇよ一年にはっ！
投手としての心の強さに他ならない！
右腕が振り下ろされる度に本人の内面を表しているかのような荒々しいボールが指先を離れホームベースへと突き進んでいく。
シュート、カットボール、そしてストレート。
決して完璧にコントロールされたボールではなかった。けれど効果的に内角を使った投球が青道上位打線のバットを尽く詰まらせた。三つのアウトカウントを取るために費やした球数は十球。十球目のシュートで三番伊佐敷をショートゴロに仕留めるとスコアボードに０が刻まれた。
青道と薬師の試合は初回共に無得点からのスタートとなった。

お気に入り２０００突破ありがとうございます。今後もまったりじっくり頑張っていきたいと思います。

25話

I

薬師と青道、共に強力打線を有する両校。しかし大方の予想を裏切り中盤にさしかかってもそのスコアに未だ動きはなかった。4回の表開始時で0―0というスコアレス。バッターボックスにはこの回の先頭打者である薬師のクリーンナップの一翼、三番三島が入っていた。薬師ベンチから飛ぶ応援なのか野次なのかわからない声を耳に入れながら空は指先で遊ばしていたロージンバックをマウンドへと落とした。

……随分と怖い顔してるな。

普段よりも対峙する打者の細かな部分が良く見えた。表情筋は強張り、速球に対応するためなのかその左足は絶え間なくステップを踏んでバットは小刻みに揺れている。明らかに変化球を捨てた、四シームのみに的を絞った構え。

カウントが0―2と圧倒的に投手有利なことを考えればここは二シームかチャンジアップで打者のタイミングを外すのがセオリー。

出されたサインに頷き、空は両腕を振りかぶる。

「ふっ！」

投じたのは伸び上るような〝四シーム〟ジャイロ。相手の待ちを知りつつもあえて狙い球を放るという強気な配球はともすれば己惚れにも思える。けれど１４０キロ後半にもなるその己惚れは振るわれた銀色のバットの遥か上を通過し、インハイに構えられたミットへと飛び込んだ。

――ットライク！　バッターアウト！

まだ試合の中盤に差し掛かったばかりだというのに本日８度目となる三振コール。

初回の乱調は何だったのかといわんばかりの圧倒的なピッチングにスタンドは歓声の海に沈んだ。

――うぉおお!!　三振、また三振っ！

――10個のアウトの内８個が三振とかヤバすぎだろっ!?　相手はあの市大を打ち崩した打線だぞっ!?

――な、なんかよくわかんないけどとりあえず凄いっ！

――次のバッターはまたあの轟だっ！

――今度はどんな配球になるんだろうな？　さすがにもうさっきみたいな配球はないだろうけど。

――あぁ。轟も二打席目だしな、あいつならもう山城の真っ直ぐに対応できるようになってもおかしくないぞっ！

ざわざわとまるで地鳴りのような音を上げてその時を待つスタンド。

そしてネクストサークルから轟雷市が本日二度目となるバッターボックスに入ると歓声とシャッターの音が一段と大きくなった。

「打つっ！　ゼッタイ！」

気合と共に轟がバットを立てる。その構えは一打席目の時と比べてややトップが下がり、右足の位置は少し投手寄りへと変わっていた。三島ほど露骨ではないが間違いなく四シームの伸びと速度に対応するための工夫。

きっといつもならば一筋縄ではいかないと気を引き締めてコーナーを突いたに違いない。

けれど今は――

「……悪いな轟」

マウンドで小さく呟いて投球動作へと入る。クリスからのサインはない。

自分の内心を当たり前の様に察してくれた先輩に尊敬と感謝の念を改めて抱きながら空は右腕を振り下ろした。指先から生み出されたのは山城空の代名詞、四シームジャイロ。

漫画なら〝ゴウッ〟という擬音でも付きそうな豪速球は出されたバットに掠ることなくミットの構えられていたストライクゾーンど真ん中へと突き刺さった。

「ストライクッ！」

「っつ！」

叫ぶ余裕もないのか、それともそれだけ集中しているのか。轟は野性味溢れた三白眼を大きく見開くとすぐにバットを構え直す。パッと見では先と何ら変わらないフォーム。

けれどその中に隠された些細な変化を見つけ、空は僅かに口元を弛めた。

……また少しトップが下がったな？

注視していなければ見落としてしまうほどの極々小さな変化。きっと轟自身も気

付いてはいない、四シームに対応するために身体が勝手にとった無意識での行動。
しかしそんな小さな修正では最早意味はなかった。
……軽い。
身体が軽い。無理に力を入れなくても縫い目が指にかかりボールが走る。
スピードガンなどなくとも自己ベストの152キロを更新していると確信できるほどに四シームジャイロがよく走った。今ならかのボンズさえも抑えることが出来るという愚かな錯覚さえ抱いてしまうほどの全能感が空の全身を包み込んでいた。
カウント0―1となった二球目。
初球と同じ、ノーサインからのど真ん中四シームに再びバットが空を切る。
明らかに振り遅れたスイング、強張る表情。
それは見ている者に今の両者の立場をわからせるには十分だった。
――おい誰だよ？　もうさっきみたいな配球はないって言ったのは。変化球どころか全部ど真ん中への真っ直ぐじゃねェか！
――知るかよっ！　つーか圧倒的すぎるだろっ!?
――何キロ出てるんだあの球？　轟の時だけ明らかにスピードが違うぞ。

――スピードガン持ってるやつはいないのかよ!?

――すげぇ！　本当にすげぇよ！

スタンドからは様々な声が漏れた。実力伯仲の名勝負を期待していた往年の高校野球ファンからは戸惑いの声が漏れ、メディアの報道につられる様にして球場を訪れた人間からはただただ純粋な賛辞が飛ぶ。僅か二球で追い込んだ後、クリスから投げ返されたボールを受け取った空は間を置くことなくプレートに右足をかけた。

三球目、そのボールもやはり同じで結果もまた同様だった。ミットへと突き刺さる白球、空を切るだけに終わったバット。

繰り返される光景の中で唯一違ったのは審判のコールだけ。

――ットラク！　バッターアウッ！

この回二つ目となる赤いランプが掲示板に灯り、この試合九個目になるＫがスコアブックへと刻まれる。打席から注がれる気の抜けた眼差しを感じながら空は帽子を目深に被り直した。

……悪いな轟。もうお前は敵じゃねぇ。

◇

野球というスポーツにおいて一人の選手の出来が試合の勝敗を左右するという事例は実のところそれなりに存在する。平均レベルが高いプロの世界ではそう多くはないが、実力のブレ幅の大きいアマチュア――それも学生野球では一人の飛び抜けた選手の出来がそのままチームの勝敗に繋がるということは決して珍しくはない。

特に部員数が少なく決して一人一人の実力が高いとは言えない学校なら尚のこと。

薬師高校の場合、いまだ一年の轟雷市こそがチームの命運を握るカギの役目を担っていた。守備の面では粗が多くこれまでに犯した失策も数知れないが、それを補って余りあるほどの打力が小柄で内気な少年をチームの顔へと押し上げた。

どんな劣勢であっても轟にさえ回せば何とかなる、きっと打ってくれる。

例え言葉にはせずとも共有するその想いがそれまでほとんど無名だった薬師高校をこの準々決勝まで押し上げてきた原動力。それはプラスに働く一方で、時としてマイナスにも働いてしまう諸刃の剣に他ならなかった。

4回の表2アウト。まだ試合が劇的に動いたというわけではないのに薬師ベン

チには重苦しい空気が流れていた。やばいなと、ベンチに腰かける轟雷蔵は大して暑くもないのに頬から汗を垂らした。

……まさか雷市がこうも相手にならねぇなんてな。

ビデオを見た段階からある程度の苦戦は予想していた。山城空のことを野球エリートと皮肉りはしたが決して侮っていたわけではなく、むしろ十分すぎるほどの警戒を持って雷市に準備させたはずだった。しかし結果は二打席続いての三振。それもハッキリと実力差を見せつけられての凡退は雷市本人だけでなくベンチ全体にも影響を及ぼしていた。

……関東大会での試合も見たがいくら何でもここまでのピッチングはしてなかったぞ、おい。

この試合まで本当の実力を隠していたのか。だがそうだとすれば初回の乱調に説明がつかない。山城のピッチングが変わり出したのは雷市の対戦の途中、あわやホームランという大飛球の直後のこと。もしやと雷蔵は濡れた手の平を強く握りしめた。

……雷市のヤツがただでさえとんでもねぇ怪物を進化させちまったのか？

……覚醒。

Ⅱ

6回の裏。ネクストサークルで片膝を立てたクリスは真田と増子の対決を目で追いつつもその思考は別のことに――すなわち相方の空のことについて割かれていた。

初回に二つの四球を出して以降、空のピッチングはそれこそ神懸かりと呼ぶに相応しいものだった。5回に不運なあたりの内野安打を許したことでこの試合まで続いていたノーヒット記録こそ途切れたものの、上位打線を力で捻じ伏せ下位打線を球数少なく打ち取るピッチングは正に圧巻。特に轟を相手にした時などコースはともかく、球の質自体はクリスをして唸らせるほど。

……この試合でついに大空に飛び立つか山城。

例えば沢村に見せた比類なき強肩。

例えば結城がバットを振ることすら叶わなかった四シーム。

例えば関東大会で見せたルーキーらしからぬ好投。

春先にボールを受けたクリスがそう遠くないと予期したように基礎となる下地は空が高校に上がった時点で半ば出来上がっていた。ただ肉体面が整いつつあった一方で精神がそれに追いついていなかったのだが、この数か月で状況が大きく変わった。

……エースとしての自覚。青道という環境が山城に投手として大事なものを与えてくれた。

たった20しかない背番号を求めて行われる熾烈な競争。

ベンチ入りを外され涙を流した先輩達。

どれだけ実力差があろうと決してエースの座を諦めない同級生。

不慮な事態から突然与えられたエースナンバー。

様々な要素が絡み合い空にエースとしての自覚を芽生えさせ、精神面でも大きな成長を遂げた。そして本日、何が切欠になったのかは定かではないが轟雷市との対戦を持って山城空は遂に新たな段階へと足を踏み入れた。

……もしかしたら山城の指の感覚が鋭くなったのは予兆だったのかもしれないな。

雛が大空を飛び立つ前にその翼を羽ばたかせるように、大輪を咲かせる前の蕾が香しい香りを漂わせるように。実際は定かではない。ただはっきりとしているのは元より少なかった山城と正面から勝負できる打者が更に減ってしまったという事実だけ。

試合中だというのに思わず目を細めたクリスの耳に鈍い音が届く。

つられて意識をグラウンドへと戻せばベンチのサイン通り増子が一塁側に綺麗な送りバントを転がしていた。アウトカウントが一つ灯る代わりに一塁ベースにいた結城は二塁へと進塁。一アウト二塁という状況でクリスへと打席が回ってきた。

ゆっくりと立ち上がりバッターボックスへと向かうクリス。それを後押しするかのように青道の応援席から管楽器にのせてヒッティングマーチのＥｙｅ ｏｆ ｔｈｅ Ｔｉｇｅｒが流れ始めた。

……状況は六回の裏、一点差でウチがリード。

四回に伊佐敷の作ったチャンスを結城がきっちりと返した先制点が今現在におけるこの試合の全得点。良く持ち堪えているなとバットを構えたクリスはマウンドで奮闘を続ける薬師のエース真田俊平に内心で賛辞を贈る。正直に言えば真田がこ

こまで踏ん張るとは予想だにしていなかった。確かにそこそこ球速のあるムービング使い（付け加えるなら今の沢村よりも一段上のムービング使い）ということである程度の警戒はしていたが、それでも真田は楊のような正確無比なコントロールを持っているわけでも空の様な飛び抜けたストレートを持っているわけでもない。攻略とまではいかずともある程度の点数は取れると踏んでいたというのにここまで一点しか取れていないという事実。

……予想外だったのは気持ちの強さか。

投げている球はＭＬＢの投手を彷彿とさせるような現代的なものだが、内に秘めているのは一昔前の昭和の投手を思い起こさせる熱い炎。どこまでも強気、勝気。

クリーンナップが捻じ伏せられようと、味方の守備が足を引っ張ろうと、四球やヒットでランナーを溜めようと関係なく打者へと向かっていくそのどこまでの前向きな姿勢はどこか沢村に近いものがあった。そしてそんな前向きな気持ちが轟を封じられた薬師というチームをギリギリの所で繋ぎ止め、青道のあと一押しを妨げていた。

この試合三回目となるクリスと真田の対決。

その初球に真田が投じたのはインコースへのシュート。一打席目にクリスが詰まらされたキレのいいボールがユニフォームのロゴをかすめる様にしてミットへと突き刺さる。

――――ボール

ボールが収まったミットの位置を確認し、クリスはもう一度バットを構え直した。

……球のキレに変化はないな。

変化球に限らず全ての球に言えることだが、球数が増えてくれば自ずとボールに与える回転は小さくなりキレは悪くなる。特にシュートとカットのような正反対のボールを投げ分けていればキレが鈍るのも速い。それがこの六回まで鈍っていないのは流石だが、その代わりに時折コントロールが甘くなることがある。

……もっとも。どうやらボールが甘くなる原因は球数だけじゃないみたいだが。

クリスは真田の左足に鋭い視線を送った。

……投球後に僅かだが左足を引きずる場面がある。これまでの試合でも全てリリーフだったことを考えれば故障持ち……いや、これまでの投球内容を考えれば完治して間もないといったところか。

そんな状態にもかかわらずマウンドでは一切ナインに弱い姿を見せていない。

本当にいい投手だとグリップを握る両手に力を込めた二球目、再びクリスの胸元に今度はストレートが飛びこんで来る。ベース盤の端を通ったボールはストライクともボールともとれる微妙なコースだったが、審判が手を上げたことでカウントは並行に。

キャッチャーからボールを受け取るとすぐさまセットポジションから投球動作へと入った真田にタイミングを合わせながら、クリスは次に来るであろうコースを分析する。

……もともとこの投手にフロントドア、バックドアが出来るほどのコントロールはない。

特にコントロールがアバウトになってきている今は外を狙ったボールが真ん中に来ることも多い。だからこそ死球の危険を冒してまでインコースに厳しい球を放って印象付け、打者に踏み込ませない様な配球をしてきた。

……インコースだけでは勝負にならないのはさっきの打席でバッテリーも理解している筈。

ならば外のボールをいったいどこで使うのか。コントロールミスで真ん中に流れてしまう可能性がある以上、追い込んだ後の決め球としては有り得ない。そして出来るなら単に真っ直ぐなストレートよりも少々甘くなっても自ずと外に逃げるボールがいい。

つまりはバッティングカウントよりも前、インコースの軌道を印象付けた後のカウントが若い内に。

……外に逃げるカットボールを投げ込む！

真田の右腕が振り下ろされると、クリスは小さく上げていた左足を内へと伸ばしバッターボックスの白線を踏み締めた。限界まで伸ばされた両腕、大きな弧を描いたバット。

そのままであったなら詰まったであろう勢いある白球はホームベースの手前でその角度を変えると、まるで吸い込まれる様にバットの芯へと飛び込んだ。

キーンと、とても綺麗な音が球場に響いた。

高々と舞い上がった打球の行方をクリスは追わなかった。追う必要がなかった。行方など観なくても手の平に残った快感が結果を教えてくれていたから。

一塁へと走り出したクリスがその右手を上げると同時、歓声が全てを飲み込んだ。

――うぉおおお！　ホームラン！　クリスのホームランだっ！

――すげぇ。流したライト方向への打球なのにいったいどこまで飛んだんだっ!?

――内に二球続けられた後に躊躇なく踏み込むとか天才だろっ！

――すげぇ綺麗なホームランだったよな……轟の豪快なホームランとはまた違う軌道っていうか。

――クリスせんぱ～い！　愛してま～す！

――これで三点差！　試合が決まったか？

初回の三振コールならぬクリスコールに多少照れながら、ダイヤモンドを一周する。

そしてホームベースを踏んだクリスを真っ先に出迎えたのは次のバッターである空だった。二人は特に言葉を交わすことなく微笑むと、パチンッと互いの右手を合わせた。

この後、青道はホームランを打たれた後も崩れなかった真田の前に更なる追加点

を加えることが出来ず結局この回二点止まり。しかし今日の山城の出来を考えれば重すぎる二点だった。３―０で終盤に入った青道は薬師に得点どころかランナーすら許すことなく８回にももう一点追加して４―０。そして青道のリードで迎えた試合は遂に最終回を迎えた。

本当はこの25話で薬師戦を終える予定だったのですが、少々長くなったのでここまで。次話は薬師戦終了までと丹波さんについて少し書く予定です。

Ｐ・Ｓ・空君が覚醒して無双していますが、何もダイジョーブ博士の手術後ほど劇的に能力が上がったわけではありません。今回の能力変化をパワプロ的に言うならば、

球速Ｍａｘ１５２→１５４　ノビ４→ノビ５

って感じです（あくまでもネタなので本気にしないでね）。

覚醒しなくても元から最強だろって話もありますが、スポーツものを書く以上主人公の覚醒シーンってお約束じゃないですか？　まぁ正直に言うと設定上のライバルである大地との対戦で覚醒させれたら一番よかったんですが、私がそこまで書く気がないので無理やりここにねじ込むという形になりました。なんで少々おかしい所もあるかもしれませんが勘弁してください。

エイプリルフールネタ（IF話　藤原貴子編）

タイトル通りのエイプリルフールネタ。プロットもなく勢いで書き上げたので、違和感があってもご愛嬌でお願いします。

――随分と遠い場所に来てしまったわね。

目の前の建物を見上げ、藤原貴子は感嘆の息を漏らした。視界一杯に広がるのは緻密なレリーフの装飾に彩られた外壁。かつて授業でならった古代ローマの闘技場をモチーフにして作られたというそのスタジアムは評判以上に美しく、高層ビルの乱立するニューヨークの中心地で尚その存在感を露わにしていた。

……日本の球場も素晴らしいけどこれと比べては分が悪いわね。

通りで日本人が一度は行ってみたいアメリカの観光名所に選ばれるわけだと、苦笑と共に貴子は入口ゲートへと向かう。数えきれないほどの人が列をなして並ぶ他

のゲートに反し、向かったAゲートにはほとんど人がいなかった。空いていることには喜びつつもどこか違和感を覚えたままスタッフにチケットを見せてゲートをくぐる。

道中の通路もゲートと同じく他と隔離されていたらしく、人気の少ない通路にヒールの音がコツコツとやけに大きく鳴り響く。およそ数十メートルほどの孤独な散歩を楽しんだ後、眩いばかりの照明と優しい秋の風が貴子を出迎えた。

「すごい」

それを見た瞬間、自然と貴子は声を零していた。通路はバックネットのすぐ後ろへと繋がっており、外に出れば特に意識せずともグラウンドが一望できるようになっていた。

綺麗に整えられた天然芝、巨大な液晶のついたバックボード、試合開始にはまだ十分な時間があるというのに埋め尽くされつつある外野席。それら全てに圧倒されながら貴子は自分の席を探したのだが、

……本当にここでいいのかしら？

何度もチケットに書かれた番号とシートのそれを見比べてみるがやはり間違いは

ない。

シートの数がさほど多くなかったためにすぐにそのシートは見つかった。場所は通ってきた通路出口の真上、恐らくはスタジアム内で最も良く試合が見えるであろうバックネット裏 2 階席のど真ん中。どう考えてもプラチナと呼ばれる超 1 等席に恐る恐る貴子は腰を下ろす。

……ここってどのぐらいするのかしら？

試合が見やすい席というのは相応にして値段も高いもの。特に人気球団の試合やポストシーズンの試合ともなればいいシートにはプレミアがついて数十万近くなることもザラにあるという。だとすれば人気球団の試合――それも世界一を決めるワールドシリーズのプラチナ席ともなればその価値は一体いかほどのものか。

……考えないようにしましょう。

少なくとも自分が会社から貰っている給料では到底手が届かないことだけは確かだった。

周囲から突き刺さる好奇の視線に身を小さくしながら、貴子は肩にかけたバッグからチケットの半券を取り出す。

……いきなりこんなモノを送ってくるなんて。

かつての恋人から封筒が送られてきたのが今から2週間ほど前のこと。てっきり自分の存在はもう忘れられているのだと思っていただけに突然の便りに驚かなかったと言えば嘘になる。震える手で慎重に封筒を開けて見れば、そこには文はなく代わりにワールドシリーズのチケットとNY行の航空券が入っていた。いったい何のつもりかと本人に聞ければ一番良かったのだろうが、生憎と振った相手に自分から連絡できるほど貴子は強くなかった。

……何で来てしまったのかしら。

結局会社が忙しい中わざわざ有給を使ってまで異国の地を訪れた己を哂うしかない。

真に彼のことを考えるなら決して来るべきではなかった。来てくれという文はなかったのだしそのまま破り捨てるか、誰かに渡すべきだった。縁を断つつもりならば最後まで貫き通すべきだったというのに、今自分はこうして彼と同じ場所にいる。

……勝手な話よね。

酷く身勝手な理由で別れを告げておきながら尚も心の底では未だに何かを期待

している。もしかしたらやり直せるのではないか、また彼の隣に立てるのではないか。そんな淡い幻想を抱いてしまう藤原貴子にはもう自嘲すら出来やしない。

暗い思考の海へと潜っていた彼女を引き上げたのは湧き上がる歓声だった。試合開始までにはまだ幾分か時間があるというのに一体何なのかと顔を上げ、それを見た。

「あっ」

オーロラビジョンにはホームチームのブルペンの様子が映し出されていた。

背後でコーチが見つめる中、両腕を振りかぶる彼。貴子が知っている頃よりもその身体は幾分か大きくなっていた。高校時代とほとんど変わらぬフォームからその右腕が振り下ろされるとメジャーに一大旋風を巻き起こしたジャイロボールが唸りを上げ、捕手であるクリスのミットを鳴らす。一球、また一球と投げ込む度に歓声は大きくなる。それは彼がどれだけチームに必要とされているのかを示しているように思えて、貴子は目を細めた。

……随分と遠い場所に行ってしまったわね。

誰もが認める日本球界の若きエースが一足先にメジャーへと移籍した高校時代か

らの先輩を追って球界屈指のスラッガーであるライバルと共に海を渡ったのが今年の春。

　アメリカでは通用しないのではと一部の評論家たちの間で指摘されていたジャイロボールは並み居るメジャーの強打者達から三振の山を築くことでその有用性を証明し、かつての日本球界のエースは僅か半年でメジャーのトッププレイヤーの仲間入りを果たした。

……ふふ。彼が高校時代の後輩で、それもつい1年ほど前まで恋人だったなんて誰が信じてくれるかしら。

　藤原貴子が彼――山城空と付き合い始めたのは彼女が未だ大学生の時、空がプロに入って一年目の夏のことだった。本当に些細な偶然から高校卒業以来およそ二年半ぶりに彼と再会し、その後何度か一緒に出掛けている内に自然と交際がスタート。

　互いに初めての彼氏彼女ということもあって付き合ってすぐの内はそれなりにギクシャクしたものだが、二か月もすればそれも自然なものへと変わった。互いに忙

しかったため（特に空は）に世間の一般的な恋人に比べて触れ合う時間は少なかったが、それでも順調と呼べる程度には上手くいっていた。忙しい合間を縫って一緒に食事をし、遊びに出かけ、手を繋ぎ、身体を重ねる。オフシーズンには二人で遠出をし、思い出を作ったりもした。

傍から見れば順風満帆。貴子もまたそう思っていたし、彼女の思い違いでなければ空もまたそう考えていた筈。

……あの時は本当に幸せだったわね。

不安など何もなかった。そうして付き合い出してから四年が過ぎようとした頃だった。周りの友達がポツポツと結婚し始めるにつれて彼女もまた将来について考え始めるようになったのは。最初はこのまま交際を続けていずれ自分もという程度だった。けれど親しい友人達から結婚について詳しい話を聞く度に少しずつ彼女の中で何かが変わっていった。

――いいよねー貴子は。プロ野球選手と付き合えて。

――ほんと玉の輿だよねー。

――ウチ、結婚したけど旦那の給料が安くてこれからやっていけるか不安なん

だよね。あーあ、のんびり専業主婦できるかと思ってたけど私も働かなきゃダメか。

――その点貴子は勝ち組だよね。山城空って言えば球界の若きエースでしょ？　確かこの前年棒 3 億とかって聞いたよ。

――それ本当？　顔良くてお金持ってて、しかも性格まで悪くないって最高じゃん！

――私らとじゃ住む世界が違うよね。

――普通一流の野球選手ってアナウンサーや女優とかと付き合うのに、よく捕まえられたね？

――うんうん。貴子は綺麗だけど流石にそれだけじゃちょっとつり合いが取れていなかったり……なんちゃって！

きっと当人達にとっては恵まれた相手を持つ貴子をちょっとからかってやろうぐらいの軽い気持ちだったのだろう。でも何気ないその一言一言が彼女の心に波紋を投げかけた。

――住む世界が違う。

――つり合いが取れていない。

貴子は自分の容姿が優れていることを理解していた。高校、大学を合わせてそれなりの数の男性から声をかけられ、それなりの数の告白を受けるぐらいには綺麗だった。

でも、それだけだった。

彼女には誇るべき技能も、職も、地位にもいなかった。あくまでも少し綺麗なだけの一般人の一人でしかなかった。漠然と思い描いていた未来に黒い影が過り始める。

そんな心に影を落とす貴子とは対称的に、空はどこまでも成長を続けていた。国際大会で結果を残し、五年目となるシーズンでは遂に投手四冠を達成。翌年にはメジャーの名門チームでプレイすることが決まり、その注目度は否が応にも高まっていた。

最早日本国内で山城空の名を知らない者など存在せず、テレビでは多くの女優やモデルが好みの男性に空の名を挙げていた。

心に広がる影はどんどん大きくなる。

そして付き合ってから五度目となるクリスマス・イブの夜。とあるホテルのレス

トランで貴子は考え抜いた末の結論を打ち明けた。

――別れましょう、と。

それを聞いた時の呆気にとられた空の表情は今でもよく覚えている。当然の如く理由を求める彼氏に貴子は俯いてこう答えた。

――つり合わないから。

あなたの隣に立つには格も、勇気も、地位も、自分には全てが足りないから。たった一言に凝縮された意。それを読み取ってくれたのか、空は「そっか」とだけ呟いた後は何も言わなかった。無言でレストランを去っていく元彼氏の後ろ姿に思わず手を伸ばしかけて、すぐに自分はその資格がないことに気付いて元彼女は静かに涙を零した。

それからは何てことのない平凡な毎日が始まった。朝起きたら会社に向かって、時間になったら家に帰る。自分以外の誰かに料理を作ってあげることも、散らかった掃除することも、腕を組んで一緒に出掛けることもない。一切の余分なことを挟まない色褪せた生活。

辛いと思ったのは初めの一カ月だけで、それを過ぎればもう何も感じなくなって

いた。

ただ笑う回数は前よりも減った。

かつて毎日のように見ていた野球中継はメジャーから高校野球に至るまで一切目を通すことが無くなり、時間を持て余すことが多くなった。

そうして早いのか遅いのかすらもわからぬまま月日が流れ、今日の日を迎えた。

……きっと彼の試合を見るのはこれが最後になるんでしょうね。

でもそれでいいと思った。

弱い自分には不相応なほどに恵まれた最後だと貴子は思った。

◇

例年になく日本でも注目を集めたワールドシリーズ第一戦は日本人選手三名の活躍によりホームチームであるミラクルズの勝利に終わった。三番の広橋大地が初回からHRで魅せれば、五回には負けじと四番の滝川・クリス・優が満塁で走者一掃のタイムリーを放つ。

投げては先発の山城空が八回まで一塁さえ踏ませぬパーフェクトピッチングをこの大舞台で披露し、九回無失点の完封勝利。試合後には活躍した三人の日本人選手

が全員ヒーローインタビューを受けるというちょっとした奇跡が起きた。無難にインタビューをこなすクリスと広橋の姿を遠目で見ながら、貴子はただただ感嘆の息を零した。

……三人とも凄いわね。

ワールドシリーズに日本人が三人も出場するだけでもビッグニュースだというのに、その全員が結果を残した。しかもその内の二人はかつての級友と後輩。やっぱり住む世界が違うわねと半ば諦めにも似た達観を抱きながらシートから腰を上げる。

……本当はもう少しここにいたかったけど。

もう間もなく空のインタビューが始まる。聞いてしまえばきっとまた未練が残ると階段を下りて通路へと向かったその時だった。

――貴子先輩！

「えっ？」

それは日本語で、呼ばれたのは間違いなく自分の名前だった。思わず振り返った先。

そこにはインタビュアーからマイクを奪い、真っ直ぐにこちらを見つめるかつての恋人の姿があった。

『よかった。ちゃんと先輩が来てくれて』

「なん……で…」

『貴子先輩。あの、俺頑張りました。去年のクリスマス、先輩に釣り合わないって言われてから頑張りました』

「っつ!?」

グラウンドでは狼狽える女性のインタビュアーをクリスが、球団関係者を広橋が抑えていた。スタジアムの巨大なオーロラビジョンには息を吸い込む空の姿がデカデカと映し出されている。

『こっちに来てからクリス先輩と一緒に無我夢中で努力して、球速もコントロールも上げてタイトルも獲りました。チャンピオンリングはまだですけどこのワールドシリーズで絶対に手に入れます。そしたら――』

一度そこで空は言葉を切って瞼を閉じた。

そして再度瞼を開き、もう一度貴子を見つめた。

『先輩と釣り合う男として認めてもらえますか？　もう一度オレと付き合ってもらえますか？』

つい先程まであれだけ騒がしかったスタジアムが今や静まり返っていた。

六万人近い視線が己に向けられているのを貴子は感じていた。

感じながらもそんな些細なことはどうでもよかった。

……バカね。

つり合わないのは山城空ではなく藤原貴子の方だというのに。

……それを自分のことだって勘違いして。

どこか抜けているのは相変わらずだった。野球に関することならどんなに些細なことでも見逃さないのに、それ以外のことになると途端に察しが悪くなる。

でもまぁ仕方ないかと思ってしまうのは惚れた弱みだろうか。

そう言った欠点も全て含めて、藤原貴子は山城空のことを好きになったのだから。

……一人で勝手に悩んで、一人で勝手に拒絶して。ほんと私ってバカね。

ふぅと息を吐く。

空が、いやスタジアム中が彼女の答えを待っていた。

満面の笑みを持って貴子は叫んだ。
「えぇ！　待ってるわ！　大好きよ、空！」
歓声が、全てを覆い尽くした。

とりあえず書いてみた貴子さんネタ。うん、私の実力では所詮この程度ですね。
もう少し甘いのとか書いてみたかったけど、ネタが思いつかなくて断念。
空君24歳、貴子さん26歳ぐらいを想定して書いています。

26話

もしかしたら過去最長かも知れない。

I

青道の 4 点リードで迎えた最終回。そのマウンドにはやはり山城空が立っていた。

この回で少なくとも 4 点取らなくては試合終了となってしまう薬師の攻撃は一番の福田から。プロで最終回 4 点差となればある種試合が決まった感があるが、高校野球だと流れさえ掴めればまだ十分に逆転できる射程圏内。それも上位打線からの攻撃となれば追いつく側の応援席は逆転を信じて、逃げ切る側のそれは波乱が起きないことを祈って共に最後の声を振り絞りながら緊張と共に試合を見守るのが普通。

だというのにどういうわけかスタンドには弛緩した空気が流れていた。

――これで終わりだな。

――あぁ。7回も轟は山城の前に手も足も出なかったし、例えこの回に打順が回っても青道の勝ちは揺らがないだろ。

――怪物同士の対決は終わってみれば山城の完勝で青道は順当に勝利。薬師の真田の好投は予想外だったけどまぁ概ね予想通りか。

――市大に続く盤上狂わせはならず。やっぱ決勝は青道と稲実で決まりか。

――だな。

まるでもう試合が終わったかのような会話。だが事実として薬師の一、二番は簡単に山城の前に倒れ、ラストバッターになるかもしれない三番の三島もまた追い込まれていた。

9回の表、2アウト、カウント1―2。

くそっと口汚く言葉を吐き捨てて三島はバットを構えた。

……なんでこんなに上手くいかねぇんだよ。

三島が山城の姿を直に見るのはこれが初めてではなかった。シニア時代、練習試

合という場ではあったが二人は今のように投手と打者に分かれて対戦していた。結果は三島の惨敗。ヒットどころかまともにボールを前に飛ばすことすら出来ず三島はただただ山城空という怪物の前にひれ伏すしかなかった。

……ほんとだったらこの試合であの時の借りを返すはずだった。

あれから一体何回バットを振り込んだだろう。どれだけ身体を鍛えただろう。

雷市の練習方法をまねて重いマスコットバットで素振りをし、その父親である雷蔵に教えを乞いてフォームの改良にも着手した。だから再びこの夏の大会で山城と戦えるとわかった時、三島は恐れなど微塵も抱いてはいなかった。あの時の自分と今の自分は違うのだと。今度は山城にあの時の屈辱を味あわせてやるのだと、そう思っていた。

……なのにこの様かよっ！

三打席立って三振が三つ。ボールにバットが当たったことすら二度だけで、後は全て見逃しか空振り。シニアの時を上回る惨状。かつての実力差はこの数年で縮まるどころかより大きなものへと広がっていた。

それだけでも腹に据えかねているというのに、

……その明らかに手を抜いてますって感じが余計ムカつくんだよっ！

轟に対する時とそれ以外の時で投げ込むボールの差。素人目で見てもはっきとわかるその差は三島の打者としてのプライドを木端微塵に打ち砕いた。

――もしもこの時、三島が内から沸き起こる激情に身を任せていたなら試合は終わっていただろう。馬鹿にするなとただ力のままにバットを振っていたならこの打席で勝負は決していただろう。

けれど違った。ともすれば呑まれそうになる熱をギリギリのところで抑えつけ、三島はネクストに控える最大のライバルへとちらりと視線を送る。

……雷市。

自分のプライドを打ち砕いた第一号。いったい何度こいつがいなければ、こいつと出会わなければと思ったかわからない。大海を知らなければいつまでも井の中の蛙でいられたのにと恨んだかわからない。でも、それでも。

……お前の実力は認めてるんだよ、雷市。

常に長打を打つことだけを考えていた自分がついつい繋げることを考えてしまう程度には。ふぅーと大きく息を吐き出し、体内に籠った熱を取る。

幾分かクリアになった脳裏には山城と自分の実力差がはっきりと浮かんでいた。

……どうせまともにやっても打てねぇなら――

試合を終わりにすべく空がその両腕を振りかぶる。

決して悟られないようにいつも通りタイミングをとりながら三島は静かに時を待った。そして怪物の右手からボールが離れる瞬間、三島はバットを横へと寝かしつけた。

――なっ!?　薬師がバントっ!?

――それもセーフティー!?　この状況で!?

――失敗すればそく試合終了だぞ!?

どよめく外野の中、伸びのあるアウトローへの四シームに三島がバットを合わせる。ボールは寝かされたバットの先にぶつかり緩やかな放物線を描いて宙を舞った。

……あれでもまだボールの下かよっ!?

この9回でどんなノビしてんだと顔を歪め、三島は一塁へと走る。小フライトなった打球はサード方向へと飛んでいた。勢いを殺し切れなかったために滞空時間

が長くなったバントとしては不完全な打球。けれど滞空時間が長い分、一度地面に落ちればどれだけ早く捕球して一塁に送球しようと間に合わない。つまりこの試合が終了するかどうかはボールが地面に落ちるか否かに任された。

「うぬうぅぅうあ！」

予想外のセーフティーに出だしが遅れた増子だが、それでもボールは未だ地についてはいない。まだ間に合うと増子は懸命に巨体を揺らし左手のグローブを伸ばした。

「落ちろよコラー！」

三島の願いが届いたのか。ボールは増子のグローブの先に一度引っかかったものの最後は茶色い地面へと落ちた。

「しゃあ！」

ガッツポーズと共に三島は一塁を駆け抜けると、くるりと体を反転させた。今のがヒットになるのかそれともエラー扱いになるのかはわからない。

理想とする形での出塁では決してなかった。

けれどそれでもこうして塁に出れたのは紛れもない事実。

……後は任せたぞ雷市！

◇

試合終了の土壇場で何とか首の皮一枚を残した薬師高校だが未だ窮地であることに何ら変わりはなかった。四点という点差、二アウトという一つのミスも許されないアウトカウント。いくら強打が売りの薬師であろうともこの状況から試合をひっくり返すのは余りにも厳しく、ここまで誰一人としてまともなヒットを打てていないことを鑑みれば絶望にも等しかった。

二アウト一塁という状況で本日四度目となる打席に轟が入る。

試合が始まるまでは誰もが期待していた若き怪物同士の対決。恐らくはこの試合最後の勝負になるであろうというのにスタンドの反応は随分と冷ややかだった。過去三打席、轟が打席に立つだけでスタンドに沸き起こっていた熱は冷めきり、バットを構えるだけで巻き起こった歓声は最早ない。観客の中には早くも顛末を悟って席を離れる者も多いなど、投と打の怪物のどちらが上だったのかを如実に示していた。

スタンドにいる誰もが――――いや、それどころか実際にプレイする選手達の殆ど

さえこのまま波乱なく終わるのだと信じて疑っていないというのに、マウンドで土を慣らす空の顔は険しかった。

……流石にすんなりとはいかしてくれないか。

出来ればさっきで終わらせたかったんだけどなと思いつつ、空は対峙する打者へと視線を投げかけた。バットを構える轟はそれまでと違って随分と静かだった。何かにつけて動いていた口は横一文字に固く閉じられ、回を重ねる毎に固くなっていた身体からは余分な力感が抜けている。

……トップの位置も歩幅も元に戻ってるしこれは入ったか？

威圧感とでも呼べばいいのだろうか。轟から発せられる見えない何かがアンダーシャツを通り越して肌を焼き、空に警戒を促せる。これまでとは違うのだと、無力でしかなかった獲物は気を緩めれば呑たちまち込まれてしまう〝敵〟になったのだと教えてくれる。

……打たれるかもしれない。

対戦する前からそんなことを思うのは随分と久しぶりだなと、空は大きく右腕を回す。この九回までかなり省エネのピッチングをしてきたはずだがそれでも右腕は

やや重く、指先の感覚は鈍くなっていた。

……点差は四点。

例え一本出てもまだ二点の差があるとは言え、チームの主砲に一発が飛び出せばがらりと薬師のムードが変わる恐れがある。いささかセオリーからは外れるが、純粋に勝ちだけを考えるならばここは轟を歩かせランナーを溜めてでも五番と勝負をするのが最も安全。

……でもまぁ。ありえねぇよな。

守備側に圧倒的なアドバンテージのあるこの状況で勝負を避けるというのは自分が轟よりも下だと、青道が轟雷市という打者に屈したのだと認めたも同義。投手としての、そしてチームを背負うエースとしてのプライドにかけてもそんなことを認めるわけにはいかなかった。

……絶対に抑える。

疲労の溜まった身体に鞭を打ち二速で留めていたギアを一気にトップへ。頭の中で歯車がカチリと噛み合うと右腕は軽くなり、身体は自ずと臨戦態勢へと移行する。ホームベース後方では空の気持ちを察したらしいクリスがサインを出すことな

くミットを構えていた。

預けられた絶対の信頼に胸を熱くしながらゆっくりと足を引き、両腕を振りかぶる。

初回と同じランナーがいる状況にもかかわらずのワインドアップに驚きの声が上がる。

……小細工はいらない。

下手にコースを狙うのは愚の骨頂。今の轟ならば少しでも球威が落ちればたちまちボールはスタンドへと叩き込むだろう。この勝負は非常に単純だ。山城空のジャイロボールが轟雷市の能力を上回れば前者が勝ち、下回れば後者が勝つ。力対力。

全身の力を全て指先へと集め、空は右腕を振り下ろした。放たれる白球、唸る豪速球。

空気抵抗を極限まで減らしたボールは大台である一五〇の壁を優に超え、ミットが構えられた位置へと――――空が最も力を込めることのできるど真ん中へと疾走する。

――――決着は一瞬だった。

投じられた白き閃光、それを弾き返した金色の一振り。ハッキリとその攻防を目で追えた者はなく、抜けるような快音によって何が起きたのかをみな理解した。

角度のついた打球が空の頭を超え、センター方向へと飛翔する。市大戦で見せた弾丸ライナーとは異なった滞空時間の長い綺麗なアーチ。やや深めに守備位置を取っていた伊佐敷が一歩、また一歩と後退する。高々と舞い上がった打球の行方に集まる視線。けれどその中には刹那の攻防を繰り広げた当人達のそれは含まれてはいなかった。

投手は一度として背後を振り向くことなく己の全力を打ち返した新たな打の怪物を見つめ、打者は一塁へと走り出すことなくマウンドにそびえ立つ投の怪物を見つめる。彼らにはこの勝負の結末が既にわかっていた。わかるがゆえに敗者は面を伏せて涙を零し、勝者は胸元で力強く拳を握った。

「俺の勝ちだ。轟」

フェンスに背を付けた伊佐敷のグローブが柔らかい音を鳴らす。しっかりとボールの入ったグローブが高々と掲げられると同時に試合は決した。

――――ゲームセット！

主審から告げられた試合終了のコールに空がほっと胸を撫で下ろすと、身体が急に鉛のように重くなる。やばいと感じた時にはもう遅かった。よろよろとバランスを失い前方に倒れ込む空を救ったのは逞しい二の腕だった。

「随分と疲れたようだな」

「クリス先輩……」

「俺もお前もいろいろ反省の多い試合だったが、同時に得る物もまた多かった。いいピッチングをしたな、山城」

「へへ。厄介な敵も作っちゃいましたけどね」

言うことを聞かない身体をクリスに支えてもらいながら空は首を動かした。未だバッターボックスの中、そこにはチームメイトに声をかけられながらも立ち上がることができずに泣き臥せるこれからのライバルがいた。

「あいつ、伸びますよ」

「あぁ。そうだな」

準々決勝第一試合、青道高校4—0薬師高校。

青道高校、準決勝進出。

Ⅲ

メディアの宣伝によってにわかに注目を浴びた青道と薬師の対決。４―０と順当に青道が勝利したことで物足りなさを感じる者も多かったが、裏を返せばそれだけ今年の青道が盤石であるということを示す試合でもあった。勝利した青道を讃える校歌斉唱が始まると徐々に席を立ち始める観客達の中には一般のファンは勿論、どこかで見たことのある様な野球関係者の姿も多かった。改めてこの試合の重要度を感じつつ、市大三高の元野球部主将である大前は数字の埋まったスコアボードに目を細めた。

「やはり青道が勝ったな」

「あぁ」

「だな」

同意の言葉を返すのは大前と同じく四回戦の敗退を持って野球部を引退した市大の三年生達。私服に身を包んだ彼らは自分達を破った高校とライバルの試合を観戦するために球場まで足を運んでいた。

「総合力で言えば青道に分があるのはわかっていた。ただ薬師が――というより轟が完全に抑え込まれるのは予想していなかったな」
「んだけ山城が凄かったってことだろ？　あんまし言いたくねぇが今日のピッチングはマジで神懸かってやがった」
「三振のオンパレードだったもんな。そういや今日山城が奪った三振の数っていくつだ？」
「20。9回2安打2四球の完封勝利」
「……一年だよな？」
「多分な」
肩を竦めた大前に乾いた笑いが突き刺さる。直接試合で戦った彼らには薬師打線の恐ろしさが嫌というほどわかっていた。エースが途中でマウンドを降りるという緊急事態があったとはいえ、その圧倒的な破壊力の前に市大は涙を零したのだから。
「本物――か」
「まっ。そうじゃなきゃ一年でエースナンバーなんざ背負えねぇだろ。ウチの監督も色々骨を折るぐらい山城が欲しかったらしいし」

「青道に行ったから結局その苦労も無駄になったけどな。で、どこまで行くと思う？」
「それは青道がか？　それとも山城がという意味か？」
「んなもん一緒だろうが。エースがこけりゃチームもこける。そして今の青道のエースはあいつだ」
「つまらないことを聞いたな……そうだな。能力で言えば山城は既に全国でも指折り――いや、今日のピッチングだけで言えば恐らくトップだろう」
「おいおい。成宮や舘達を差し置いてかよ？」
いくら何でもそれはねぇだろと呆れた声が飛んだが、大前は至って真面目だった。
「差し置いてだ。少なくとも日本の高校において今日の山城を超える選手はいない」
「ってことは、ヒロは青道が甲子園に行くと？」
「そこまでは言わない。ただ青道が大きなアドバンテージを持っていることに間違いはないと思う。それだけ山城という存在は大きい」
一発勝負の高校野球において試合を任せることの出来る絶対的エースの重要度は極めて高い。勿論エースが全ての試合を投げ切れるわけではない以上控え投手の育

成は必要不可欠だが、それでもここ一番で試合を任すことのできる投手がいるかいないかでは勝率に雲泥の差がある。

「もっともこれはあくまでも野手として見た俺個人の意見だ。違う視点から見ればまた違うかもしれないがな」

意味ありげにそう言って大前は首を右へと回す。それに倣うように他の二人もまた同じ方向へと首を回した。三人の視線が向かう先、大きなコンクリートの柱の前ではここまで一切会話に参加していなかった市大の元エースが難しい表情で立っていた。

「真中、お前はどう思う？　山城と同じ立場だった人間からの意見を聞きたい」

「……青道がどこまで行けるかは実際にやってみるまでわからない。何が起きるかわからないのが高校野球だからな」

ただと、真中は言葉を置いた。

「山城は投手としては確かに成宮より上かも知れないが、チームのエースとしては成宮よりも下だ」

「投手としては上でエースとしては下？」

「なぞなぞかよ」
「どういうことだ真中？」
首を傾げる元野手達。真中は被っていた帽子を被り直すと青道の選手達が並ぶグラウンドを見下ろした。
「あいつには――山城にはエースとして足りないものがある。もしも順当に決勝で青道と稲実が戦うことになればその差が勝敗を分けるかもしれない」
「足りないもの……技術的なものではなく精神的なものか？」
「あぁ。山城はエースになって日が浅いからな。とは言っても青道には光一郎――丹波がいる。あいつも気付いている筈だし時期が来れば自然と伝えるだろう」
「ふーん。まっ、俺達が気にしててもしゃあねぇか」
「そうだな。他校のエースを心配してる余裕なんてウチにはねぇし。後輩達には俺らの分まで頑張ってもらわねぇと」
「帰りに学校に寄っていくか？　偶には練習を見てやるのも悪くは――ん？」
「どうしたんだよ？」
いやと、大前は視線を右上へと向けた。つられるようにして他の三人が顔を向け

たのは青道側応援席の上段。通路ゲートに向かうために多くの人間が階段を下る中、どういうわけか流れに反して上へ上へと登っていく後ろ姿に四人は見覚えがあった。

「ありゃあ丹波か？」

視線の先では夏制服に身を包んだ学生が急ぎ早に階段を蹴っていた。あの特徴的な後頭部は間違いないと村上が頷く。

「大怪我したって聞いてたけど元気そうだな。ベンチに入ってなかったってことはまだ投げれる状態じゃないんだろうが」

「しかしどこに行くつもりだ？　あの様子だと最上段まで行きそうだが……」

「トイレじゃねぇってことは休憩じゃねェの？　柱の裏とか影になってて結構涼しいしよ」

「このタイミングでか？」

青道は未だ校歌を歌っている最中。声を張り上げる集団から離れて一人だけ休むというのは中々に勇気がいる行動だ。丹波の行動の意味を理解できずに頭を悩ましていると、依然として丹波に視線を固定したままの真中が口を開いた。

「……少し行ってくる。悪いが先に戻ってくれ」

◇

「クっ！」

堪えきれぬ感情を吐き出すかのように丹波は怒気を上げ、スタンド最上段の外延部に張り巡らされた落下防止用の金網を掴んだ。一体どれほどの力を込めたのか。半ば老朽化していた金網は嫌な音を立ててその形を変え、金網が食い込んだ手の平はどうしようもないくらいの痛みを訴えていた。けれどそんな身体の危険信号を無視して丹波はより強く金網を握った。

「なんで、なんで俺はあそこにいないっ!?」

今日の試合、本当なら丹波がマウンドにいる筈だった。夢半ばにして敗れた幼馴染の無念を晴らすのは他の誰でもない丹波光一郎の筈だった。けれど実際に青道のマウンドに上がり薬師を圧倒したのは別の人間。

「どうして、どうして山城なんだっ!?　なんで俺じゃないっ!?」

試合を見るのは苦痛以外の何物でもなかった。自分がいた筈のマウンドで後輩が投げるのも、その後輩が見事に抑えるのも、そして試合後にチームメイトから手厚

く祝福されるのも。あらゆることが丹波を息苦しくさせた。もう限界だった。だから窒息する前に一人集団から離れてこんな人気のない場所に来た。ここならどれ程叫ぼうとチームにばれることはないから。

「俺と山城で何が違う？　なぜあいつがエースナンバーをつけている？　なぜあいつが先発としてマウンドに立っている？　なぜあいつがクリスに選ばれたっ？　なぜあいつだけがこうも恵まれているっ!?」

ガシャリと金網が音を上げ、悲痛な叫びが誰もいない空間に虚しく響く。はぁはぁと息を荒げ、丹波は力なく金網から手を離した。

「俺がいる意味は……一体、どこにある？」

エースとして活躍するために幼馴染とも別れて青道に進学しこの三年間を過ごしてきた。辛いことも苦しいことも山ほどあった。逃げ出したくなったのも数知れない。それでも諦めずにやって来れたのは絶対エースになるという明確な目標があったから。ところが最後の夏直前になって怪我をし、エースどころか投げることすら試合に出ることさえ儘ならない有様。そして自分の代わりにエースナンバーを背負いチームを牽引しているのは最も負けたくないと思っていた後輩だった。

「エースの座もクリスもチームの信頼も全て山城に奪われた……こんな俺に何の意味があるっていうんだ？」

監督が言っていたように仮に青道が甲子園に出場し、丹波が試合に出られる様になったところでエースナンバーはもう丹波の元には戻ってこないだろう。良くて二番手。いや成長を続ける沢村や川上のことを考えれば三番手、四番手ということさえ考えられる。

後輩のお零れで甲子園のマウンドに立つ。無様だ、この上なくみっともなく無様な光景だと丹波は吐き捨てた。

「もう青道は俺がいなくても回っている。山城さえいれば青道はやっていける……」

それまでとは一転した小さな声で呟くと、丹波は制服の尻ポケットから白い封筒を取り出した。宛名も氏名も何もない。純白の封筒の中心にはただ『退部届』とだけ書かれていた。真剣に己の書いた文字を見つめる丹波。それゆえに近づいてくる足音に彼は気が付かなかった。

「光一郎」

「かっちゃん……」

振り返った先にいたのはかねてより信頼を置く幼馴染だった。思いもよらぬ人物の登場に目を見開いて固まっていると、真中は柔らかな表情で久方ぶりの再会を喜んだ。

「久しぶりだな。怪我の具合はもういいのか？」

「あ、うん。もう完治したよ」

「ならいい。お前が大怪我したって聞いた時は流石に焦ったぞ？」

「ごめん、心配かけて……」

「別に謝ることじゃないだろ。それで怪我が治ったってことはもう練習に参加しているんだろ？　次の準決勝――は無理にしても決勝には間に合いそうか？」

「ど、どうだろ。ちょっとわからないかな」

困ったように笑って丹波は言葉を濁した。怪我が完治した割には随分と消極的な返しに真中が眉を潜めると、丹波が「そういえば」と語気を強めた。

「ど、どうしてかっちゃんがここに？」

「ん？　あぁ。青道と薬師の試合を見に来たんだが偶々お前の姿が見えてな。少し気になって追って来たんだ」

「そう……なんだ」
「ところで何でお前がこんな場所にいるんだ？　チームに戻らなくていいのか？」
「それは、その……」
真中からの当たり前の疑問に丹波は言葉を詰まらせた。俯き、あてもなく視線を彷徨わせる幼馴染の姿に真中が違和感を強くしていると、真中は丹波が手にしている物に気が付いた。
「右手に持ってるのは何だ？　封筒か？」
「っつ！　これはっ!?」
慌てて背中へと手を回すが遅かった。
真中の目は封筒の中心に書かれた三文字をしっかりと捉えていた。
「退部……とどけ？　光一郎、お前どういうつもりだ？　まさか部を辞めるつもりか？」
「その……」
「答えろよ光一郎っ！」
怒声と鋭い眼差しに屈したのか、丹波はおずおずと封筒を握りしめた右手を元の

位置に戻すと覇気のない顔で小さく首を縦に振った。
「うん。部を……辞めようと思ってるんだ」
「っつ!?　何でだ？　どうして今になって」
「今だからだよ、かっちゃん」
力なく丹波は笑った。
その顔には涙こそ浮かんでいなかったがまるで泣いている様に真中には思えた。
「俺が青道にいる意味はもうないから」
「なにを……言ってるんだ、光一郎？」
「だから俺がいる意味はもうないんだよ、かっちゃん。青道のエースには山城がいるし、控えの沢村と川上だって成長してる。ほら。故障明けで調整も儘ならない俺が入る隙間はないんだよ」
「お前。本気で……言ってるのか？」
真中は震えていた。これまでに覚えたことのない、内より湧き上がる怒りの業火に包まれて全身を震わせていた。端的に言って限界だった。
だから、

「うん。本気だよ」

そんなふざけた言葉を耳にした瞬間、気が付けば真中は丹波の胸倉を掴み上げその巨体を冷たい金網へと押し付けていた。

「かっ、かっちゃん？」

「ざけんなよ光一郎。いる意味がない？　入る隙間がない？　お前、それでも三年かよ。それでもチームを背負ってきたエースかよ。それでも甲子園を目指そうっていう高校球児かよっ!?」

「こ、これは俺個人の問題だし、かっちゃんには何の関係も……」

「あぁねぇよ！　けどな！　例え直接関係なくなって虫唾が走るんだよ。俺等が届かなかった夢を自分から手放しちまうような馬鹿を見るとなっ！」

高校球児の夢。そんなものは決まってる。

「甲子園！　どんだけ望んだからって行けるもんじゃねぇ。どんだけ練習したからって必ず行けるものでもねぇ。それでもそこに行くために俺らはこの三年間必死に練習して来たんだろうがっ！」

そしてどれだけ努力しようとも、もう真中には夢を叶えるチャンスはない。

市大の――高校球児としての真中の夏は終わったのだから。

「最後の夏に俺らは夢を叶えられなかった。監督をもう一度あの舞台へ連れて行けなかった。今でもあの試合を夢に見んだよ。もっと俺がしっかりしてればって後悔すんだよっ！　あぁそうだ。もしもやり直せるならやり直してぇよ！　過去に戻って薬師に勝てるなら二番手だろうが補欠だろうがかまわねぇ。チームが勝てるならエースの座を捨ててもいい。それぐらい俺はこの夏に賭けてたんだよっ！」

矢継ぎ早に言葉を吐き出し、真中は青道側の応援席を指差した。

「スタンドを見ろっ！　三年最後の夏、出たくとも試合に出れないやつは山ほどいる！　背番号を貰うってことはそんなヤツらの意志を引き継ぐってことだ。試合に勝ち続けるってことは負けたヤツらの意志を引き継ぐってことだ！」

青道は現在ベスト四。その場所にすら辿りつけず涙した高校生は星の数ほどいる。

「まだ夢を叶えるチャンスが残ってるっ！　なのにお前はその夢を、託された想いを自分から捨てる気か光一郎っ!?」

「でもかっちゃん。俺に出来ることは本当にもう何も……」

「っつ！　まだそんなふざけたことをっ!?」
「事実だよ。俺に任せるより山城に任せた方がチームは強い」
「仮にそうだったとしても！　投げれなくてもチームに貢献する方法はいくらでもあるだろ！」
そう。丹波にはまだ大事な役目が残っている。それは例え監督でも相方の捕手でも決してできないこと。青道でエースだった丹波にしか出来ないこと。
「山城にエースの心得を教えるって大事な役目があるだろうがっ！」
己の経験を、エースとしての心構えやあり方を後輩に伝えるということ。自分の培ってきた全てを託すということ。丹波自身そのことには気づいていたのだろう。目を逸らそうとするが真中は許さなかった。正面から目を合わせ、どこにも逃がさなかった。
「光一郎。お前だって山城に足りないものがあるのに気付いてんだろ？」
「それは……」
「初戦に比べれば今日の山城は確かにエースらしくなっていた。自分勝手な振る舞いもあったがチームを背負っているっていう自覚があった。一年であれはスゲェと

思うよ。チームからも信頼されてんだろう。何せあの轟相手に真っ向勝負を挑んでも守備に就いていた全員が不安な顔一つしていなかったぐらいだからな」

けどなと真中は声を荒げた。

「肝心の山城本人がチームメイトを信頼してねぇ！　同じエースっていう立場だったから試合中の視線の動きとか声のかけ方とかで何となく分かるんだよ！　あいつが本当に信頼してるのは捕手のクリスだけだってな！」

それは強者ゆえの弊害なのか知れない。一人で試合を支配できるからこそ他人を頼らない。山城にとってはクリスだけが頼れる唯一の仲間であり、それ以外は守るべきチームメイトの一人としか思っていないのだと真中は見抜いていた。

「お前しかいないんだよ光一郎！　山城にチームメイトの大切さを本当の意味で教えれるのは元エースであるお前しかっ！」

後輩を教えるのは先輩の役目、義務と言っていい。それはエースだからといって変わるものではない。否、エースだからこそ教えなければならない。最後の最後でエースを育てることが出来るのは同じエースだけなのだから。真中の叫びを聞いても丹波は何も答えなかった。ただただ無言を通す幼馴染に溜息を吐き、真中は両手

から力を抜いた。

「……お前が山城に対してどんな気持ちを抱いているのかは少しはわかるつもりだ。俺自身、似たような経験があるからな」

「かっちゃん……も？」

「あぁ。去年、山城ほどじゃねぇが俺より才能がある投手がウチに入って来た。まぁそいつは途中でいなくなっちまったからエースナンバーは俺に与えられたけどな」

もしもあいつが薬師との試合の時にいたら勝敗が変わっていたかもしれないと真中は肩を竦めた。

「正直いって初めてそいつの球を見た時は焦ったし、妬みもした。けどいつまでもそうやって妬んだ所で現実は変わらねぇ。それにチームにとっては良いことだしな」

負けたくなくて馬鹿みたいに練習して、それと同じくらい後輩に指導したと真中は言う。

「先輩としての役目を果たせ光一郎。それが三年の、元エースとしての責任だ」

「元エースとしての……責任」

そうだと頷き、真中はくるりと体の向きを変えてその場から離れていく。
あっと思わず丹波が声をあげると真中は足を止めた。
「山城はエースになってから日が浅い。口でチームメイトを頼れと言った所で理解することは難しいだろう。だがこのまま勝ち進んでいけばいずれ壁にぶち当たる。もしもそういう状況に陥ったら光一郎、お前が山城に声をかけろ」
そう言葉を残し、今度こそ真中は離れていった。

真中さんの口調がイマイチ掴めず苦労しました。

27話

夏の高校野球は残酷だ。プロ野球のように次はなく、一度の敗北で全てが終わってしまう。偶然だ、次やれば勝てる、負けたけど内容は向こうよりも良かった。どれだけ言い繕うとも意味はない。勝ち抜きのトーナメントにおいては結果こそが全てであり、負けを喫した瞬間にその年の夏は終わりを告げる。

夏の予選が始まっておよそ二週間。様々なドラマや波乱を乗り越えて西東京のベスト4に名乗りを上げたのは、青道、仙泉、稲城実業、桜沢の4校。例年初戦敗退の桜沢の躍進には多くの野球ファンが驚いたものの、他の三校に関して言えば概ね下馬評通りの結果となった。

全国でも指折りと噂される強力打線を有し、怪物ルーキーをエースに据えて5年ぶりの甲子園を狙う名門青道。成宮鳴という絶対的なエースを抱え、高い総合力と隙のない野球で連覇を目指す西東京の大本命稲城実業。先の二校に比べれば一枚格は落ちるものの、堅実な野球で近年その名を上げつつあるベスト8の常連仙泉。

復権を目指す名門、連覇を使命とする王者、下克上を狙う実力校、全く無名の

ダークホースとバラエティー豊かな組み合わせは世間の注目を大いに集めたが、その中でも一際大きくメディアに取り上げられたのは王者奪回を狙う青道――――というより山城空だった。

投球回数21、奪三振49、防御率0・00　ＷＨＩＰ　0・2

さほど多くない投球回数とは言え準決勝まで稲城の成宮と並ぶ無失点にして、西東京大会トップの奪三振率とＷＨＩＰ。そのふざけたセイバーメトリクスは野球関係者を大いに興奮させ、ルーキーながらにあの成宮と同格だという話題性が数字を見てもピンとこない野球素人の心に響いた。現代の名勝負とメディアが謳った轟との対戦を真っ向勝負でねじ伏せたこともあり、薬師を制した後の空は全国ネットでも取り上げられるほどの注目ぶり。

そのため青道と仙泉の準決勝では話題の山城を一目見ようと薬師戦に負けず劣らずの観客が神宮球場に詰めかけたが、青道のマウンドに噂の黄金ルーキーの姿はなかった。

代わりにそこに立っていたのは背番号20。

同じルーキーながらも全く話題に上がらない、無名のサウスポーが準決勝という

大舞台のマウンドに上がっていた。

◇

準決勝第一試合、青道VS仙泉。

この準決勝まで稲実と並び初戦から無失点記録を更新してきた青道だが、以外にもこの試合では中盤の時点で既に二点を奪われ仙泉にリードを許していた。今大会初となる青道の劣勢に不安の声をあげるファンは多かったが、所詮はイニングを多く残す中での一点差。

まだまだどう転ぶかわからないというのは両校ベンチの共通する認識であり、お互いに流れを掴むための機を伺っていた。

そしてそのチャンスが先に訪れたのはリードする仙泉だった。５回の裏、仙泉はラッキーなヒットで先頭バッターが出塁するとすかさず送りバントで攻撃の形を作り、続く六番の小川がじっくりボールを選んで四球。

一アウトランナー１、２塁。一打追加点の大チャンスで打席を迎えるのは仙泉の絶対的エース、大巨人真木洋介。自分の手で勝負を決めてやるという意識が強いのか、ネクストサークルでは長い腕を使って豪快にバットを振り回している。

一方守る側の青道はこれ以上の点はやるまいと、先発マスクを被る御幸が立ち上がりチームメイトに指示を送った。三人の外野手がじりじりと前進するのがダグアウトの中からでもわかって、強気な陣形だなとクリスは小さく声を漏らした。

……まだ回も残るこの場面でライトはともかくレフトも前進。なるほど、御幸はここが勝負だと読んだか。

恐らくその読みは間違っていない。六回の表の青道の攻撃はこの試合三順目となるクリーンナップから。同点、そして逆転へと繋げていくためにもここは是が非でも真木を抑えて反撃に勢いをつけていきたい。長打のある真木に対する前進守備はその覚悟の表れ。絶対に抑えろと、お前にはそれが出来るのだと投手に示している。

……まったく。実力を認めているのならもう少し普段から口にしてやればいいものを。

まぁ、そうなればきっとあの問題児はすぐに調子に乗るのだろうが。お互いに子守は大変だと目じりを緩め、クリスは隣に座るもう一人の問題児に目を向けた。

ムスッとした顔に不機嫌そうな目。クリス同様、先の薬師戦を私物化した罰則として本日のスターティングメンバーから外された青道の怪物エースは己に代わって

マウンドに立つ同輩を睨み、苛立ち気にスパイクを鳴らしていた。
「ったく。四隅に投げ分けるコントロールもねぇのに変にコースを狙おうとするから歩かせることになんだよ。まともには打たれてねぇんだからドンドン攻めろよ」
「珍しく荒れているな。ピンチを迎えているとはいえ仙泉相手にここまで四安打二失点。公式戦初先発だと考えれば今日の沢村の出来は上出来だと思うが？」
「それはそうかもしれないっすけど。変に意識してランナーだしてるのがむかつくっていうか、ランナー出たぐらいで慌てんなよっていうか、外野の野次なんて気にしてんじゃねぇよっていうか、いつもの強気はどうしたっていうか……」
「なるほど。つまりは沢村が心配だと？」
「いや別に心配ってわけじゃ。ただその、俺の代わりに先発してんだから無様なピッチングを見せるんじゃねぇって思ってるだけで」
拗ねたように、そしてどこか照れたように顔を背ける空。
少し前までならば自分以外の投手――それも同世代の投手に対してこうまで強い感情を見せることはなかっただろう。だが明確な実力差があっても腐ることなくひたすら前を向き続ける沢村（ライバル）の姿は、これまで頂点に君臨することが

当たり前であった空の心にも決して小さくない影響を与えているらしかった。

本当に環境に恵まれたなとクリスは目を細め、目の前の試合へと向き直った。

……沢村はよくやっている。だが山城の言う通りここに来て少し慎重になり過ぎているのも確かか。

とはいえ、それも無理はなかった。

ただでさえ公式戦初先発のマウンドは緊張するというのに任された試合は準決勝という決勝をかけた大一番。絶対に負けられないという責任感、ここまで先発として完璧な結果を残してきた空に負けたくないという意地、何で山城じゃないんだ等と無責任な言葉が飛び交う観客席からのプレッシャー。様々な重石がこれ以上点数はやれないと意気込む沢村の心に重くのしかかり、いつもの思い切りの良さを押し殺している。

……外野が前進守備をとっても沢村の表情が変わらない。不味いな、御幸がシフトを敷いた意味を理解していない。

恐らくはそれだけ余裕を失っているのだろう。このまま投げれば最悪自滅しかねない。

クリスと同じ危惧を抱いたのか、御幸は外野に前進シフトを指示すると主審にタイムを申し入れマウンドへと向かう。バッテリーの間で何やら会話がなされているが、依然として沢村の表情は硬いまま。

……この試合のことだけを考えるならここで山城と交代させるのが最善策だが。

薬師戦から中一日とは言え、今の空ならばキッチリとこのピンチを０で切り抜けるだろう。しかしそれでは例えこの試合に勝ったとしても次の決勝に疲労を持ち越すことになる。わざわざ監督が罰という名の休息を空に与えた意味がなくなってしまう。

……それに何よりここでの交代は沢村の成長を妨げることになりかねない。

投手とはピンチを経験することで成長していくもの。一年先、二年先の青道を思うならば間違いなく続投。しかし今の沢村をこのまま投げさせれば取り返しのつかない事態に陥る可能性が高いのもまた事実だった。どれだけ先のことを見据えようと、今この試合を勝てなければ決勝も甲子園もあり得ない。

……こういう時はベンチの采配がものをいうが。

続投か、それとも交代か。

全ての権限を握る片岡はじっとマウンドを睨み、そして空の名を呼んだ。
「山城」
「えっ？　はい」
「出番だ」

Ⅱ

5回の裏、1アウト1・2塁。
一打出れば試合の流れが大きく傾くこの場面。沢村の様子が普通ではないということで一度タイムをとった御幸だったが、間を開けても沢村の顔には依然として硬さが残るままだった。どんな声をかけても大丈夫っすとしか言わない後輩に、御幸は表情にこそ出さないものの内心で苦い顔をした。
……まずいな。沢村のヤツ、気負い過ぎてやがる。
変則フォームからのムービングボールが沢村の武器であることに間違いはないが、やはり最大の長所は何と言っても物怖じせずに打者に向かっていける強気なマインドにこそある。ごちゃごちゃと余計なことを考えず前を向いて全力で腕を振る

からこそ持ち味である癖玉を活かすことが出来る。

……初回に打たれたお蔭――ってのも変だが、いきなり2点を失った沢村はここまで余分なことに気を回す余裕はなかった。

だからこそ打者を抑えることだけに集中できたのだがある程度試合の展開が落ち着いたことで気持ちの余裕が生まれ、雑念が入り込む隙ができてしまった。そしてその雑念がこの5回、得点圏にランナーを出してしまった沢村の心をキツク縛っている。

……流石にこうなると長打の可能性があるインコースは要求しずれぇな。

とは言え沢村の持ち球は全て真っ直ぐ系統。まだキッチリと外角に決めきれるだけのコントロールがない以上、配球を考える上で強気なインコース攻めは必要不可欠。

こんな時タイミングを外せる変化球でもあればなという願望が一瞬御幸の脳裏をよぎったが、すぐにないものは仕方ないと切り替える。

……今の沢村じゃあ怖くてインコースのサインはだせねぇ。けどインコースなしじゃ真木を抑えるのはハッキリ言って無理だ。

つまり今御幸がしなければならないのは、目の前の硬くなっている後輩から余分な雑念を消し去ること。しかしそれが簡単に出来るようなら世の捕手は苦労などしない。

最悪交代も視野に入れた御幸がベンチの判断を仰ごうと振り向いた時、そこには丁度ダグアウトから飛び出す人物の姿があった。

――おい、あれ山城じゃないのか。

――ほんとだ。何だよ、ようやく投げるのか。

――けど、肩作ってたか？

スタンドのざわめきを浴びながら青道のエースは帽子を取り、ペコリと頭を下げる。

その足が向かう先はマウンド。小走りで近寄ってくる山城に御幸は怪訝な表情を浮かべ、沢村は驚きの声を上げた。

「なっ、山城と交代!?」

「バカ、よく見ろ。監督が動いてねぇし何よりグローブを持ってねぇだろうが」

「グローブを持ってない……ハッ、まさか俺のグローブを使う気か!?」

「どこの世界に利き手と逆のグローブを使う投手がいんだよ……伝令だ、ありゃ」
「伝令？　……つまりはボスの遺言っ！」
「お前実は結構余裕だろ？　もう面倒くさいからしゃべんな」
はぁと溜息を洩らしつつも、御幸は疑問を隠せなかった。
……伝令を使うってことは沢村の続投。それはいい。けど何で山城を伝令役に？　ルール上ベンチにいる選手であれば誰が伝令役であっても構いはしない。しかしクリスや春市といった人材を差し置いて、なぜ山城なのか。どう考えても向いてなさそうな人選に御幸が首を捻る中、その当人は「ども」と緊迫した場にそぐわない軽い声で帽子の唾に手をかけた。
「なんか随分と手こずってるみたいっすね」
「まぁ相手もベスト8常連だからな。そう一筋縄じゃいかねぇよ。んで監督は？」
そう問いかけると、山城はきょとんと眼を瞬かせた。
「え？」
「えじゃねぇよ。伝令で来たんだから監督から預かった言葉があるだろ？」
「いや、ないっすよ」

「は？」
「だから。監督からは伝令に行って来いって言われただけで、肝心の中身は何も言われてないんすよ」
　一体どういうことなんでしょと山城は不思議そうに呟くが、そんなことは御幸の方が聞きたかった。山城をメッセンジャーに選んだことといい、肝心のメッセージを預けなかったことといい。
……いったい監督は何を考えて……。
「まぁ。その代わり俺が言いたいことは山ほどあるんすけどね」
　御幸が疑念と困惑を深めている一方で、山城はくるりと身体の向きを変えた。
　やや鋭くなった瞳が向かう先は今日の青道のマウンドを託された同級生。いつになく思いつめた顔をしている沢村に山城は更に目つきを鋭くした。
「な～に一人前面してプレッシャー感じてんだよ沢村。半人前なら半人前らしくいつもみたいにバカやってろよ」
「んなっ!?」
「ビビって勝負を避けるなって言ってんだ。ったく、余計な頭使って外角でかわそ

うとする沢村とか見ているこっちの方が気持ち悪いぜ」
　やれやれと大げさに首を振る山城。ともすれば溜息すらつきかねないその姿に、沢村はギリッと奥歯を噛みしめた。
「テメェ、好き放題言いやがって！」
「事実だろうが。点取られたくないからインコースを攻めきれなくて、大したコントロールもないのに外のコース狙ってカウント悪くして歩かせる。弱いピッチャーの典型なんだよ、今のお前の投球は」
「っつ！　お、俺だってこれ以上チームに迷惑をかけないように色々と考えて……」
「それが余計だって言ってんだよ。自分がチームを背負ってるとか、自分が何とかしなくちゃいけないとか。沢村がそんなちゃんとした投手みたいなことを考えてんじゃねぇよ」
「ちゃんとした投手だっ！　俺はっ！」
「だったら証明してみろよ」
　こつんと、山城は己の右拳を沢村の胸元にあてた。
「本物の投手だっていうんなら変に意識して腕の振りを緩めてんじゃねェよ。思

いっきり腕振ってきっちりインコースに投げ切って見せろ」
「山城……」
目を見開く沢村に、にやりと山城は口元を歪めた。
「まっ、それが出来なきゃ所詮お前はそこまでだったってことだけどな」
「んがっ!?」
「安心しろ。例えお前が打たれても続くバッターは俺がキッチリ抑えてやるから。4点差ぐらいなら何とかなんだろ。だから安心して散ってこい」
「誰が散るかっ!?　つーか4点差ってホームラン前提かよっ!?　って、もう帰ってるし！」
好き放題言うだけ言ってベンチへと戻っていくライバルの後ろ姿に沢村はムキーと地団駄を踏んだが、マウンドを降りて追いかけようとはしない辺りまだ多少なりとも自制心は残っているらしかった。一方、半ば蚊帳の外だった御幸は煽るだけ煽って先輩に断りもせず勝手に帰って行った生意気な後輩に青筋を浮かべつつも、その効果だけは認めざるを得なかった。
……沢村の顔から硬さが消えた。監督はこれを狙ってあえて山城を伝令に。

まぁだからと言って山城の行動が許されるわけではないが。この試合が終わったらあの糞生意気な後輩を〆ることを心に決め、御幸は未だ怒り心頭の沢村の肩を叩いた。

「おら。今は試合に集中するぞ」

「わかってるっす！」

◇

伝令という役目を終えてベンチへと戻ってきた空を出迎えたのは一年生トリオの一角の春市だった。お疲れ様とわざわざねぎらいの言葉をかけてくれた友人に右手を上げて応えると、空はクーラーボックスを開き自分のドリンクを手に取った。

「小湊もいるか？」

「僕はいいよ。それよりさ山城君。栄純君に何を言ったの？」

「ん？」

ペットボトルを傾けながら目線を向けてみると、春市はどうやら困惑しているらしかった。はてと首を捻った空に春市はベンチから見ていた人間の疑問を口にした。

「栄純君、山城君の言葉を聞いて怒ってたでしょ？　いったい何を言ったのかなって」
「あー。別に大したことじゃねェよ」
「ほんとうに？」
「あぁ。天気の話とかとそんなんだ」
「いや絶対嘘だよね！　天気の話で栄純君あんなに怒らないよねっ!?」
「まぁ何でもいいじゃねぇか。どうやら肩の力は抜けたみてぇだし」
そう言った空の顔には随分と余裕があった。どう考えても状況に不釣り合いな表情を見せる青道のエースを、春市は心底不思議そうな眼差しで見ていた。
「なんか随分と余裕そうだね。リードされてピンチだっていうのに」
「まっ、沢村がいつも通り投げればこんな局面ピンチでもなんでもねぇしな。それに」
「それに？」
「……いや、なんでもねぇ」
それ以上の追及を避けるかのように空は指定席であるクリスの隣へと戻り、ふぅ

と短く息を吐き出した。寸前のところで耐えた自分を褒めてやりたかった。

……あぶねぇあぶねぇ。危うく言っちまう所だった。

――最悪俺とクリス先輩が出ればなんとでも何だろ。

自然と心に浮かんだその一言をうっかり漏らしてしまう所だった。

口にすれば敵はおろか味方すらも侮辱していると思われかねない危うい発言。

驕りや傲慢と言ってしまえばそうなのだろう。けれどそれに見合うだけの実力が二人に備わっているのもまた事実だった。

……試合の過程はともかく結果はもうわかってる。

監督に聞かれれば怒鳴られること間違いなしだが、空の中では青道の勝利は決定事項だった。故にむしろ今はと、勘ぐられないよう肩を解すふりをしてチラリと目線を左斜め後ろへ向ける。じろりとした目と合った気がして空は慌てて顔をグランドへと戻した。

……やっぱ見てるよな？

この試合中背後から常に感じ続けてきた視線。グラウンドから最も遠いダグアウトの最後列、そこには試合に出ることはできないものの今日からユニフォームを着

てベンチに入ることを許された丹波の姿があった。

……薬師との試合後からな～んか見られてんだよな。

気のせいか偶然かとも思っていたのだが、試合中もとなれば流石に勘違いではすまされない。見られている理由は不明。本人に聞ければいいのだろうが、結果的にとは言えエースの座を奪った一年が元エースの三年に対して気軽に話しかけられるわけもなく。

……く、空気が重い。

以前のように露骨に避けられるよりかは幾分ましとは言え、それでも居心地が悪いことに代わりはない。空はむずむずとする背中を誤魔化すように応援の声を張り上げた。

Ⅲ

準決勝第一試合、青道VS仙泉。

色々な意味で注目を集めたこの大一番、結果として観客の度肝を抜くことになった試合も遂にその決着がつこうとしていた。9回の裏、2アウトランナー3塁。

マウンドに立つ川上は心を落ち着けるように息を吐き出してからその右腕を振った。サイドスロー独特の角度のついたスライダーが内から外へと逃げていき、力んだ打者のバットを回す。鈍い音を上げて打球が転がった先はセカンドの正面。

あぁという悲鳴は仙泉の応援席から。しっかりとグラブにボールを収めた小湊亮介がいつものようにファーストへと送球し、ゲームセット。

今年の夏の二強の一枠が埋まったその瞬間を、峰富士夫と大和田秋子の記者コンビはスタンド席からしっかりと見ていた。

「最後に仙泉も意地を見せたが、やはり決勝に進んだのは青道か」

「はい。ですが随分と点差のついた試合になりましたね」

「９―３。序盤の流れを見ていればもっと接戦になるかとも思ったが、後半青道が突き離したな」

「そうなった原因は一体なんなんでしょうか？」

「やはり５回の攻防だろう」

パチンと音を鳴らして峰は持っている扇子を閉じた。

「５回の裏、１点リードの仙泉は１アウトランナー１、２塁と突き離す大きな

チャンスだったが、結局沢村君から追加点を奪うことはできなかった。次の回に青道が逆転したことを見てもあそこで試合の流れが一気に青道に傾いたことは間違いない」

「5回の裏……確か山城君が伝令に行ったのもその時でしたよね？」

「あぁ。そしてあの伝令の後から明らかに沢村君の投球が変わった。どこか逃げ気味だった四球から一転しての強気なインコース攻め。それが真木君に自分のスイングをさせず、ゲッツーという青道にとって最高の形を呼び込んだ。一体山城君が何を伝えたのか気になる所ではあるが……」

「ウチの雑誌、取材メンバーからは外されましたもんね」

はぁと心底残念そうに溜息をつく大和田に、それを言うなと先輩の峰はベレー帽を深く被り直した。

「ただでさえ今日の試合を見に来た記者は多いんだ。試合後にできる取材には限りがある以上、新聞や大手出版が優遇されるのは業界の常識だ。覚えとけよ、新人」

「世知辛い世の中ですよね……しかし峰さん。今日の試合、結局山城君は最後まで出場しませんでしたね？　てっきり調整のために最終回には登板するものだと思っ

ていましたが」

「ここまで大事に投げさせて来たとはいえ山城君はまだ一年だからな。試合勘よりも肩を休ませることを片岡監督は優先させたんだろう」

「それは次の決勝を見据えて、ということですか？」

こくりと峰は頷いた。

「まだ決まってこそいないが決勝は青道と稲実でほぼ間違いない。投手戦が予想される以上、少しでも山城君を万全な状態にしておきたいんだろう」

「なるほど」

「だからこそ今日の勝利は青道にとって大きい。山城君を休ませ、更には不安要素と目されていた控えの投手に経験を積ませることが出来たわけだからな。これは決勝に向けての大きなプラス材料だ」

9得点と奮起した打線も明るいニュースではあるが、青道にとって今日の試合最大の収穫は何より沢村に使える目途が立ったことだろう。山城の代わりに先発のマウンドに立った一年サウスポーは初回に2点こそ失ったものの、その後は無失点で切り抜けて結果7回2失点。接戦時に登板した明川戦での内容も含めれば十

分に合格ラインを超えている。
　また後ろの二回を任された川上君も一点は失ったが、大量リードを上手く使い仙泉に流れを渡さなかった。リリーフに信頼がおければ采配にも幅が出る。
　山城目当てに見に来たファンにしてみればいささか不満が残る試合かもしれなかったが、青道ベンチにしてみればこの上なく価値のある試合であった。
「決勝は明後日。いったいどんな試合になるのか……」
「楽しみですねっ！」
「あぁ」
決着の時は、もうそこまで迫っていた。

お待たせしました、準決勝です。
感想・評価待ってます。

28話

I

第89回全日本高校野球選手権西東京大会。

全国でも屈指の激戦区の一つとして目されていたトーナメントを勝ち抜き、来る決勝にまで駒を進めたのは二つの野球名門校だった。一つは、百戦錬磨の経験と実績を誇る職業監督、国友広重が率いる昨年の覇者稲城実業。もう一つは、かつて甲子園を沸かせた『鉄心』片岡鉄心が率いる青道高校。

西東京トップ３と言われる名門同士のぶつかり合い。

奇しくも昨年の準決勝と同じ組み合わせということで、決勝前からメディア各社はこぞって両校を煽るような謳い文句を並べ立てていた。

――昨年の屈辱を晴らせるか青道!?

――宣戦布告！　成宮鳴『頂点取ります！』

――下克上だ！　青道の黄金バッテリーが王者を狙い撃つ！

――国友監督、スーパールーキーへの秘策あり!?

――メジャーも動いていた！　両校エースの周囲に複数のスカウトの影!!

――球界の盟主、禁じ手の囲い込みかっ!?

一般の新聞からスポーツ紙、果てはゴシップを専門に取り扱う週刊誌まで。

真偽問わず、玉石入り混じった記事が乱れ飛んでは読者の目を引き、試合の注目度を高めていた。そして決勝前日となる7月30日、多くのギャラリーを集めた青道高校野球部専用グラウンドでは最後の練習が行われていた。

――オラァアア！

――行ったぞ、セカン！

――ナイプレー！

――バックホーム！

試合直前だからと言って特別な練習は何もない。普段のメニューをこなす中で選手達は声を張り上げ、一つ一つのプレイを確認するように手と足を動かす。

あと一勝、あと一回勝てば甲子園。

言葉にはせずとも思いは皆同じ。

そしてそんな青道が甲子園に行くための大きなカギを握るであろう若きエース

は、監督である片岡と副部長の高島、更には無数の報道陣に見つめられながら最後の調整を行っていた。絶え間なくシャッター音の嵐がブルペンに響き渡る中、エースの右腕が振るわれミットを鳴らす。ナイスボールの声と共に投げ返されたボールを掴み、山城空はまた投球動作へと入った。

「どうやら山城君の状態はいいみたいですね」

「あぁ」

安心したような高島の呟きに片岡が同意した。

二人の目の前で投球練習を行う空は先程からピシャリとクリスがミットを構えた位置にボールを投げ込み、その状態の良さをアピールしている。

「やはり昨日の試合での休養は大きかったですね。中一日と中三日では疲労の抜け方に大きな違いがありますし」

「準決勝では沢村と川上が良く投げてくれたからな。決勝前にあの二人に経験を積ませられたのはチームとしても大きい」

「仰る通りかと。ただそれでもやはり決勝ではリリーフを使わずに勝つことが理想だとは思いますが」

高島は眼鏡の奥の目をすっと細めた。

「相手が成宮君である以上、いくらウチの打線でもそう多くの点数は望めません。もちろんビッグイニングの期待はしていますが、昨日の投球内容を見る限りいささか現実的ではないかと。となればやはり重要なのは」

「……山城のできか」

「はい。あの薬師戦の後から山城君のボールは以前にも増して速く、鋭くなっています。既に高校生のレベルを大きく超えていますし、稲実打線でも山城君から点を取るのは厳しいかと。彼が最後まで投げ切ってくれるのがウチの最も勝率の高い形だと思っています」

まだエースになって間もない一年生にチームの運命を託す。信頼していると言えば聞こえはいいが、裏を返せばその才能に丸投げしているともいえる。

そのことに高島も思わないことがないわけではなかったが、現状においては山城の完投こそが青道の理想に間違いはなかった。

「不安があるとすればやはりスタミナ。薬師戦でも１００球に近くづくにつれてコントロールと球威を乱していましたし、いかに山城君に楽な展開を序盤に作ってあ

げられるかが明日の試合を左右する重要なポイントの一つになるかもしれませんね」

「……今になって戦い方を変えることは出来ん。やるべきことは既にやった。後は選手達を信じるだけだ」

◇

ふむ、という声が監督室に漏れた。

とんとんと指先が肘置きを叩き、鋭い眼差しが壁際のテレビへと向けられる。

資金が豊富な私立の名門らしく巨大な液晶モニターに映っているのはとある試合の録画映像。マウンドに立つ少年が躍動感溢れるフォームで右腕を振り、白球がバットをすり抜けてミットを揺らす。これまで幾度となく見返した映像の放映が終わると、国友は対面の席に座る部長の村田に指示を出した。

「4回の表、轟の打席からもう一度だ」

「はい」

最早慣れきった動作とばかりに村田はリモコンを操作し、3倍速で画面の映像を巻き戻す。本日だけで既に8度目となるシーンが画面に再生されると、国友は再び

険しい視線を注いだ。時刻はまもなく23時。こんな時間まで入念にビデオチェックするのは珍しいなと、村田は監督の行動をいささか意外に思った。
「やはり気になりますか？　山城が？」
国友は答えなかった。
ただじっと山城が映る画面を見つめ、しばらくしてから口を開いた。
「明日の青道との試合、分はどちらにあると見る？」
「珍しいですね。国友監督がそんなことを聞かれるとは」
事実意外だった。村田が国友と関わるようになってから決して短くない時間が過ぎているが、試合前に結果の予想を尋ねられたのは初めてかもしれなかった。
そうですなと村田は考え込み、
「今年のウチはタレントぞろい。原田や成宮といった投打の柱もいますし６：４でウチが有利なのでは？」
「ふむ」
「監督はどうお考えで？」
「６：４だ」

「おぉ！　監督もやはりそう思って――――」
「6：4でウチが不利だ」
「なっ!?」
夜分に相応しくない驚愕の声が村田から零れた。
いくつかのスポーツ番組や新聞を読んでも決勝の戦評予想は大方が稲実有利、もしくは5分5分というもの。にもかかわらず稲実の劣勢予想、それもそれを述べたのがチームを率いる監督であることに村田は驚きを隠せなかった。
「く、国友監督。それはいくらなんでも気弱すぎるのではありませんかっ!?」
「冷静に判断した結果だ。春の段階では6：4でウチが有利だったが、今はやや分が悪い」
「……そこまで山城の存在は大きいということですかな？」
「正確に言えば山城とクリスの〝バッテリー〟がだ」
淡々とそう言って、国友は画面を見た。
「かねてより青道のウィークポイントは投手陣、試合を任せられるエースの不在にあった。それが山城の加入により埋まり、クリスの復帰によって守備と打線に更な

る厚みが増した。ベンチの差を考えても総合力的にはウチが不利だろう」
「むぅ。となれば明日はかなりタフな試合になりますな」
「あぁ。恐らくは最後まで一点を争う展開が続くはずだ。訪れるチャンスの数もそう多くは望めまい。だが」
ネガティブな発言をするにもかかわらず国友の顔に諦めの色はなかった。
勝機が薄いなら、いかにしてその薄い勝機を引き寄せるかを考える。
それが監督の役目であり、それを成してきたからこそ国友は今この場所にいるのだ。
「青道にも不安要素がないわけではない。崩すべきは終盤、山城をマウンドから引きずり下ろす」

II

星を見ようと思った。
これまでの努力が報われるか否かの決着がつく決勝前夜。もうじき日付が変わろうかという時刻にもかかわらず、クリスは寮を離れAグラウンドの外野の向こうに

広がる土手に来ていた。ふかふかの芝生に腰を下ろし、天を見上げる。かつて徳島で見た星の絨毯に比べれば随分と劣るものの、東京の夜空にも星は煌めいていた。

……あと半日もすれば決勝か。

そしてその 3 時間後には全ての結果が出ている。引退か、それとも甲子園か。

学校からは試合に備えて早めに就寝するようにとの達しが出ていたが、あまり眠る気にはなれなかった。しばらく静かにクリスが星を眺めていると、その隣に腰を下ろす人物があった。視線を上に向けたまま、クリスはその後輩の名を呼んだ。

「眠れないのか、山城」

「えぇ、まぁ」

そう言って、山城空はごろんと芝生に寝転んだ。

彼の目もまた夜空へと向いていた。

「明日は気温が高くなる。ちゃんと寝なければ身体がもたないぞ？」

「それはクリス先輩もじゃないっすか」

「ふっ。そうだな」

そこで会話が途切れた。

そして少しの間を開け、今度は空が先に口を開いた。
「負けたっすね、国土舘」
「あぁ。だが大方の予想を裏切って東東京のベスト４だ。昨年までと比べれば大躍進と言って差し支えない結果だろう」
「でも財前先輩は絶対納得してないっすよね？」
「財前だからな」
「うわ。すげぇ説得力」
空は小さく笑ったが、それ以上言葉を続けることはなかった。
クリスもまた、何も発さなかった。
再び会話が途切れ、奇妙な間がポッカリと空く。明らかにいつもとは異なるギコチナイ空気。そのままどれだけの時間が経ったのか。
どこか困ったようにクリスが空を見ると、空もまた顔をクリスへと向けていた。互いを見合う形になったバッテリーはキョトンと目を丸くし、苦笑気味に笑い合う。
ギコチなかった空気はもう、どこかへと消えていた。
「こうして二人で星を見ているとあの時のことを思い出すな」

「クリス先輩もっすか？　俺もです」
そうして二人は夜空を見上げた。
一年前のあの日もまた、こうして二人は星を眺めていた。

◇

1年前の7月末。その日、いつものように病院で診察を受けたクリスは、すぐには寮に戻らなかった。ぶらりぶらりとあてもなく街を彷徨いながら時間を潰し、結果行き着いた先は青道高校からほど近い小さな市民公園のベンチ。
既に世間は夏休みに突入していたが、夜分遅い時刻ということで公園にはクリス以外の人影はなかった。ふぅと重苦しい息を吐き出し、クリスはそっと自分の右肩に触れた。
かつて強肩、剛腕と持て囃されたその腕は今や真っ白なギブスによって固められ、ボールは愚かそこらに転がっている小石一つさえ満足に投げられやしない。こうなることを知りつつも無理を続けた自分の馬鹿さ加減にほとほと呆れながら、クリスは昼間のことを思い出していた。
……マネージャーか。

夏の準決勝で稲実に敗北し、結城をキャプテンとした新体制に移行してから1週間。同級生達が気合を入れてグラウンドで汗を流す中、冷房の効いたプレハブで監督から告げられたのはマネージャーへ転向してはどうかという提案であった。

……覚悟はしていたんだがな。

だがいざこうして言われてみると、やはり少なからず想う所はあった。

肩甲下筋断裂および上腕回内筋断裂。

それがクリスの負った怪我の名称だった。

……完治まであと10か月。完治はどれだけ早くても来年の春以降か。

プロ野球選手であった父親が昔から贔屓にしていた医師の診断である以上、およそ期間に間違いはないだろう。学生スポーツにおける長期間のブランクが半ば致命的であることを考えれば、監督の提案は至極真っ当であった。

……返事は先でいいと監督は言っていたが、チームが新体制に移行したばかりなことを思えば余り悠長にはしてられないな。

例え選手としてチームに残りたいと言っても、監督はクリスの意思を尊重するだろう。しかしプレーできない人間がチームに残った所で意味はない。むしろ気を使

わせる分だけマイナスと言える。また気がかりであった捕手の後任については、御幸という一年ながらに優秀な選手がいる。

　クリスが選手としてチームに残る必要性は、どこにもない。

「ふっ」

　クリスは皮肉気に笑った。いくら天才だ、世代ＮＯ１捕手だと持て囃されようと所詮はこんなもの。帰ったら監督にマネージャーに転向することを伝えよう。クリスがそう決意した時だった、ギィッと甲高い自転車のブレーキ音が聞こえたのは。

　いったいなんだとクリスは顔を上げ、目を見開いた。

　公園の入り口、真っ白な街灯の光を浴びてそこにいたのは、

「はぁはぁ。ようやく見つけましたよ、クリス先輩！」

「山……城？」

　シニア時代の後輩、山城空。ここにいるはずの無い人物の登場にクリスがただただ驚き固まっていると、空は乗っていた自転車をその場に投げ捨て公園の中へと入ってくる。

　一体どれだけの時間ペダルを漕いでいたのか。空の着ていたＴシャツはぐった

りと濡れ、その呼吸は酷く荒々しかった。
「お久しぶりです、クリス先輩」
「……あ、あぁ。久しぶりだな、山城」
「隣、座ってもいいですか？」
「あぁ」
失礼しますと、空はクリスと同じベンチに腰を下ろす。それからしばらく、空は何も言葉を発さなかった。クリスも聞きたいことは山ほどあったが、いざ口にしようとすると何故か躊躇われた。久方ぶりの再会だというのに、気まずい空気が二人の間に流れる。
「……星、綺麗っすね」
ぽつりと、天を見上げて空が呟いた。
それがこの沈黙をどうにかしようとする空なりの努力であることが、クリスにはわかった。だから後輩と同じようにクリスもまた、東京の夜空を見上げた。
「そうだな。お前に星を愛でる感性があるとは意外だったが」
「うわっ。ひでぇっすよクリス先輩」

「昔徳島で合宿をしたとき、星を見ないでひたすら虫捕りに精を出していたのを俺は覚えているが？」

指摘すると、空は誤魔化すように笑った。

こんなやり取りも久しぶりだなとクリスは目を細め、本題へと入った。

「どうしてここに来た？　偶然ではないんだろ？」

「扇監督からクリス先輩が怪我してるって聞いて。その、いてもたってもいられなくなって……」

「ふぅ。黙っておいて欲しいと言っていたんだが」

だがまぁ、一か月隠し通せただけでも僥倖だったのかもしれない。諦めたようにクリスは右肩を抑え、そっと目を伏せた。

「お前にはあまり見せたくなかったんだがな。あれだけ体調管理について口うるさく言っていながら、俺がこの様だ」

「……治るん、ですよね？」

「あぁ。幸い選手生命が断たれるほどじゃない。キチンと治療を行えば完治する見込みだ」

「それはよかっ――――」

「だが、俺の高校野球はもう終わりだ」

えっと固まる後輩に、クリスは自分の決断を言うことにした。もしかしたら聞いてほしかったのかもしれない。決意が鈍ってしまわぬように。

「今日の昼間、監督からマネージャーに転向しないかという話が合った。迷ったが、俺はそれを受けるつもりだ」

「なっ、何で!?　クリス先輩、さっき怪我は完治するって言ってたじゃないですか!?」

「あぁ、確かに選手生命に関わる怪我ではなかった。だが完治するまでに後10か月。これでは春の選抜は勿論、最後の夏大も間に合うか怪しい。長期間のブランクを抱えた人間がすぐに活躍できるほど、高校野球は甘くないからな」

「で、でも別に選手を辞める必要なんてないじゃないですか！　怪我自体は来年の春には治るんですよね？　クリス先輩ならちょっとのブランクなんて！」

「……そうだな。奇跡的に上手く事が運べばもしかしたらギリギリ最後の大会には間に合うのかもしれない」

「だったら！」

「だがな山城。俺はもう、何としてでも復帰しようとは思えないんだ」

学生スポーツにおける長期間のブランクの一体何が恐ろしいか。技術的、体力的なことは勿論だが、実の所モチベーションを保てないということが一番のネックになる。

怪我を治したところで自分の居場所などないのではないか、以前のように試合で活躍などできないのではないか。活躍していた選手であればあるほど思い悩み、復帰への意欲を失い、最悪の場合には競技そのものから離れてしまう。片岡がクリスにマネージャーへの転向を打診したのも、そういった背景が少なからずあってのことだった。

「チームには俺の代わりとなる優秀なキャッチャーがいる。俺が無理してまで選手に復帰する理由はどこにもない。だから俺の高校野球は今日で終わりだ」

「そんな……」

「わざわざ会いに来てくれたのにすまなかったな。俺のことなど忘れて、お前は自分の野球に集中しろ」

そうして、クリスは腰を上げた。空からは何も返事が返ってこなかった。
もしかしたら失望されたのかもしれない。だがそれでいいとクリスは思った。今の自分に尊敬される価値などないのだから。かつての後輩に背を向け、出口に向かって足を踏み出そうとする――正にその時だった。
「クリス先輩」
己を呼ぶ声に、クリスは出しかけていた右足を止めた。振り返ってはいけないと、クリスは思った。ここで振り返れば決心が鈍ってしまう、そんな不思議な予感があった。
けれど、
「クリス先輩」
もう一度、クリスの名が繰り返される。
震えた声だ。
悲しむような声だ。
怒っているような声だ。
様々な感情が入り混じった声だ。

そして、初めて聞く声だ。

今の空がただならぬ状態にあるのはすぐにわかった。そしてそんな後輩を放っておけるほど、滝川・クリス・優という少年は冷血ではなかった。

ゆえに振り返る。振り返ってしまった。

「山城っ!?」

「……一球」

「っつ!?」

ぞくりとした。何に――というより、何もかもに。

聞いたことのないような平坦な声、無表情という名の表情が乗った顔。初めて目の当たりにする後輩の未知なる一面にクリスは息を呑んだ。

「山……し…ろ…」

「一球だけ、俺の球を受けてください」

その願いを、クリスは断ることができなかった。

一球だけの投球は、電灯に囲まれて比較的明るい公園の中央で行うことにした。

メジャーがないために大よその感覚でマウンドとホームベースの位置を決め、軽く線を引く。レシニアの練習帰りであった空は投げ捨てていた自転車カゴの中に入っていたスパイクに履き替えると、肩を解しながら土の盛られていない平らな地面をならしていく。一方、ホームベース後方に立ったクリスは空から借りた予備のグローブを左手に嵌め、その感触を確かめていた。

……形は悪くない。

とは言え自分のモノではないから違和感が先行するし、何よりもこれは幅の広く肉厚なキャッチャーミットではなく、あくまでも外野手用。レガースといった防具もない以上、キッチリとポケットで捕球しなければ怪我をする可能性があった。

……普通に考えれば止めるべき、なんだがな。

怪我をした右肩に直接負担をかけるわけではないとはいえ、クリスは一切の練習を禁じられている重症人。空にしてもまともに肩を作っていない状態であり、その上足場は滑りやすく不安定。リスクマネジメントで考えれば、今すぐにでも中止すべきだろう。

だがそれでもクリスは腰を下ろし、グローブを構えた。

それに合わせて空がすっと左足を後方へと引き、身体を捻る。かつてクリスが指導したダブルスピン投法。全身をフルに使ったボールが空間を切り裂き、クリスのグローブへと飛び込んだ。

パンッと乾いた音が公園に鳴り響く。

グローブを通した衝撃が右肩を鈍く痛ませたが、そんな些細なことは頭にはなかった。目を見開き、クリスは自分の左手に収まった白球を見つめた。

「今のボールは……」

「……3か月です」

はっと、クリスは顔を上げた。

投球を終えた空がゆっくりと歩を進めながら、ぽつりぽつりと呟く。それは決して大きな声ではないというのに、不思議なくらいクリスの耳にハッキリと届いた。

「今バッテリーを組んでいる後輩が俺のボールを捕れるようになるまでに3カ月。全日本で組んだキャッチャーも、結局最後まで俺の全力を捕ることはできませんでした」

腰を下ろしたまま固まるクリスの前で、空は膝を折った。

涙に濡れた顔がクリスの目の前にはあった。
「先輩だけなんです。俺のボールをあんな簡単に捕れるキャッチャーは。俺の全力を引き出してくれるキャッチャーはあなただけなんです、クリス先輩！」
「……」
「復帰する理由がないっていうんなら俺が理由になります。俺が先輩を必要としています。それじゃだめ…ですか？」
「……やましろ」
「辞め……ないで…ください」
「や…ま……」
「クリ…ス先輩は俺の憧れ……なんです。だから諦めないでください。俺から憧れを、夢を奪わないでください!!」
そうして空は崩れ落ちるように地面へと顔を伏せた。
夜虫の声に交じって嗚咽の音が夜の公園に木霊する。クリスはもう言葉を発せなかった。
何も言えず、ただただ固まることしかできないでいた。

……俺…は…。

マネージャーに転向すると決めた筈だった。

選手でいる理由がないから。チームに自分がいる必要がないから。

だが今はどうだ？

目の前には心の底から自分を必要だと言ってくれる後輩がいる。

こんな自分のために涙を流してくれる後輩がいる。

そして何より、

……俺自身が、一番傍で山城の成長を見届けたいと思ってしまっている。

まだ左手に残る熱。それがクリスの眠っていた捕手としての本能を呼び覚ましていた。

そっと瞼を閉じ、そして開く。世界はもう変わっていた。

「顔を上げろ、山城」

「……はい」

のっそりと空が顔を上げる。

真っ赤に充血した目をクリスは真っ直ぐに見つめた。

「正直言って俺はもう選手としての自分を諦めていた。チームに必要とされていないんだと勝手に思い込み、卑屈になっていた」
「はい」
「だがお前は俺が必要なんだな？　こんな俺でも必要としてくれるんだな？」
「はい。俺にはクリス先輩が必要なんです」
その揺るぎない返答にクリスは覚悟を決めた。
辛い道を進む覚悟を。
「わかった。なら俺は選手としての復帰を諦めない」
「クリス……先輩」
「必ず、試合でお前のボールを受けてやる」
「クリス先輩！」
涙に濡れた顔のまま、空はクリスの胸元へと飛び込んだ。
「俺、絶対中学でＮＯ１のピッチャーになって青道に入ります！　そしてクリス先輩を甲子園に連れて行きます!!　だから、だからっ！」
「あぁ。待っている」

優しい微笑を浮かべて、クリスは空の背中をそっと撫でた。
夜空には二人を見守るように無数の星々が光り輝いていた。

◇

「あと、一つです」
気合いに満ちた空の言葉にクリスは頷いた。
あと一つ、あと一つ勝てば甲子園。
明日の決勝で戦う稲城実業は間違いないこれまでで最強の相手だろう。
だが負けるわけにはいかない。
「あの時の約束を明日果たします。絶対、俺がクリス先輩を甲子園に連れて行ってみせます」
「あまり一人で気負いすぎるなよ山城。お前の前には俺がいる」
「はい。勝ちましょう。クリス先輩」
「あぁ。勝つぞ、山城」

お待たせしました。最新話です。

これで残すは決勝のみなんですけど……かなり難航しています。正直、批判覚悟でここで打ち切った方が作品としては綺麗に纏まりそうな気がしてるんですが、まぁ頑張ってみます。

次の更新がいつになるかはわかりませんが、気長にお待ちください。

29話

I

7月31日。7月最後となるその日、東京は熱く燃えていた。

もちろん物理的にではなく、あくまでも比喩として。今年一番とされる暑さが都内全域を包み込みオフィス街のサラリーマン達が額から汗を流す中、神宮球場は平日にもかかわらず数多の観客によって埋め尽くされていた。

内野席はもちろん数年ぶりに解放された外野席もその9割方が埋まり、今か今かとその時を待っていた。カメラマン席にはずらりと巨大な望遠レンズが並び、バックネット裏にはスピードガンとスコアブックを持ったどこぞのスカウト達が鋭い視線をグラウンドへと注ぐ。いくら西東京の代表を決める一戦とはいえ、地方予選としては破格といえる注目度の高さがその試合の重要性を嫌というほどに物語っていた。

西東京大会決勝戦

先攻　青道高校

一番　6倉持
二番　4小湊
三番　8伊佐敷
四番　3結城
五番　5増子
六番　2滝川
七番　7門田
八番　9白洲
九番　1山城
後攻　稲城実業高校
一番　8カルロス
二番　6白河
三番　5吉沢
四番　2原田
五番　3山岡

六番　４平井
七番　７梵
八番　９富士川
九番　１成宮

少しでも東京の高校野球に触れたことのあるファンならば聞きなれた名門同士のぶつかり合い。ある意味見慣れてしまった強豪同士のぶつかり合いにもかかわらず、この決勝が例年以上に注目を集めたのは二人のエースの存在がある。

片や稲城のエースにして昨年の甲子園を沸かせた高校球界ＮＯ１左腕、成宮鳴。片やシニア時代より怪物と呼ばれ１年生ながらに青道のエースの座を勝ち取ったジャイロボーラー、山城空。共に今大会未だ無失点という絶対的エースの投手戦に期待する人間は多く、決勝の組み合わせが決まってからというものテレビやネットではどっちが上かという議論がなされるようになったが、結局明確な答えは出なかった。

そしてその答えがもう間もなく出ようとしている。

観客席のボルテージは最高潮。

内野席では両校の応援団が早くも熱い応援合戦を繰り広げ、外野席では横断幕が掲げられる。そして13時ちょうど、遂に西東京の王者を決める戦いが始まった。

決勝は青道が先攻、稲実は後攻に決まった。

一回の表、まだ誰も足を踏み入れていないマウンドの上では稲実のエースである成宮が投球練習を終えて静かに息を吐いていた。ポンポンと左手でロージンを弄び、そのまま地面へと落とす。

……ようやくだ。

成宮はチラリと視線を青道のベンチへと向ける。そこには忘れたくても忘れられない、かつて年下ながらに己を負かした投手がいた。

……ようやく、あの時の借りを返せる。

ずっと引っかかっていた。シニアの最後の大会で山城の投げ負けたことが。

高校に上がり甲子園に出場した後も、喉に刺さった魚の小骨のように常にあの試合のことが心のどこかで引っかかっていた。

……雅さんは落ち着けって言ってたけど。

全く心配症もいいところだ。自分はいたって冷静なのにと成宮は哂う。

開会式で久方ぶりに山城と会ったとき、成宮は言った。

『全力で叩き潰す』と。

それは決して嘘ではなかった。この試合のために成宮は準々決勝、そして準決勝の投球回数と球数を減らし調整を続けてきた。もっと投げたいと思う投手としての本能を押し殺して万全な状態で試合に臨み、打順を下げることで投球だけに集中できるようにした。

そう、全てはこの試合に勝つために。

青道のリードオフマンである倉持が左打席へと入った。本来両打ちにもかかわらずわざわざ左投手に不利とされる左打席に立つ理由はいくつか考えられたが、成宮は考えられたそれらの案をすべて放棄した。それは考えるのは基本的に女房役である原田の役目ということもあったが、何より、

……どんな考えがあるのか知らないけどさ。

物事はいたって単純だ。

作戦も策もすべて、捻りつぶせばいい。

それを可能とするだけの実力が成宮にはある。いつものように成宮が振りかぶると倉持がバットを横にする。初球からセーフティーの構えだが成宮は慌てずそのまま左腕を振り切った。力の籠ったボールに倉持はバットを引いたが、白球はインコースに構えられた原田のミットを鳴らした。

ストライク1。続く二球目、中から外へと逃げていくスライダーを倉持は捉えきれずファールボール。これで0―2と早くも追い込んだ。セオリーならばここで一球打者の出方を見るために外に外すのだが、成宮と原田のバッテリーはあえてそれを選択しなかった。

三球勝負。初球よりもやや内側の伸びのあるストレートに倉持のバットは虚しく空を切り、ミットだけが音を上げる。

先頭バッターを空振りの三振、それも三球三振。これから先の展開を予期させるかのようなド派手な開幕の狼煙にスタンドは俄かに活気づく。無数の歓声を浴びながら成宮はチームメイトに声をかけ、最後に青道ベンチに座るライバルを見た。

「どっちが本当のエースなのかを教えてやるよ」

◇

一回の表、青道の初回の攻撃は三者凡退に終わった。先頭打者である倉持が三振に倒れた後、続く小湊と伊佐敷も丁寧にコーナーを突いた成宮の速球を捉えきれず凡退。比較的に立ち上がりを苦手とする成宮の不安要素を一蹴する完璧な立ち上がり。

そして一回の裏、今度は青道のエースである山城空が成宮に代わってマウンドに立っていた。先ほどの成宮の好投は当然、空も目にしている。

……やっぱ手ごわいな。

シニアで投げあった時よりも一回りも二回りも凄みを増した投球。さすがは全国でも有数の好投手だけあって、これまで青道が対戦してきたどんな投手よりも格上。おいそれと点数を奪えるような相手ではないのは明白だった。

……流石に全国への道は厳しい。でも。

小さく空は息を吐き出す。どれだけ厳しい相手でもここを勝たなければ全国には――甲子園には行けない。後一つ。後一つ勝てば甲子園。

……長かった。

1年前にクリスと交わした約束。それを果たす時が来たのだ。

クリスから出されたサインに頷き、空はゆっくりと振りかぶる。高校野球ファンには最早お馴染みとなった全身をフルに使ったダイナミックなフォーム。

全身の力を指先に乗せ、空は右腕を振った。

およそ１５０キロにもなろうかという剛速球。一般的なストレートとは回転も軌道も異なった現代の魔球、４シームジャイロが唸りをあげてホームへと突き進む。

バッターが身動き一つ取れずそれを見送ると、主審が小さく手を挙げた。

――――ストライクッ！

成宮に負けず劣らずの大歓声が球場に吹き荒れる。クリスからボールを受け取った空は、少し乱れた帽子の位置を戻しながら心の中で決意する。

……俺がこのチームを、クリス先輩を甲子園に連れて行く！

ギラリと空の瞳に炎が揺らめいた。

Ⅱ

青道と稲実による決勝は大方の予想通り、イヤそれ以上の投手戦となった。

初回、稲実の成宮が伸びのあるストレートと切れのいい変化球のコンビネーショ

ンで青道打線を簡単に三者凡退で切ってとれば、青道の山城は稲実の一番～三番までを現代の魔球と噂される四シームジャイロでねじ伏せ三者連続の三振を奪う。正に完璧といえる立ち上がりを見せた両者はその後も観客をくぎ付けにする快投を行い、三回終了時までに出したランナーは両校合わせて二回の表にヒットを放った青道のクリスただ一人。

グラウンドを取り巻く歓声とは対照的にどこまでも静かな序盤の3回までであったが、このまま最後まで行くとは球場にいる誰一人として思っていなかった。

4回の裏、2巡目となる稲実の攻撃はトップバッターであるカルロスから。一打席目とは異なり右バッターボックスの後方に立ち、グリップを限界ギリギリまで余らせるその構えに空は少しだけ眉を顰めて投球モーションへと入る。

振り下ろした右腕から投じたのはインハイへの四シームジャイロ。

まだまだ絶好調の力ある白球が振るわれたバットをすり抜けてミットへと収まり、一ストライク。続く二球目、今度はアウトローに投じたボールがやや高めに浮く。カルロスが振り遅れつつもバットを出すと、打球は一塁側ファールグラウンドへと飛んでいった。

……ここもしっかり振りぬいてきたな。

通常当てることも難しい剛速球や変化球と対峙した場合、大抵の打者はまずバットに当てることに必死になりスイングを崩しがちなもの。そうなると抜けたボールでもミスショットが多くなり投手が優位な状態で試合を進められるのだが、今のようにバットを短く持った状態でしっかりとコンパクトにスイングされるとそういうわけにもいかない。

昨日片岡が言っていたしっかりとボールを見定めてバットを振りぬき自分のスイングをする。当たり前といえば当たり前のことだが、その当たり前の事をただでさえ能力の高い選手全員が徹底できるからこその強豪。さすがは去年の優勝校と内心で呟き、空は初球よりもやや高めのインハイに釣り球の四シームジャイロを投じた。

これまで何人もの打者を三振に仕留めてきたボールにカルロスはバットを出しかけたものの、ギリギリの所でスイングを止めたことで審判の手は上がらなかった。

四球目、今度はそれまでの四シームジャイロから一転してど真ん中に縦へと落ちる二シームジャイロ。先の三球とはタイミングも軌道も違うボールにカルロスは態

勢を崩したが、それでも不格好ながらに何とかバットの先端に当ててカットすることで三振を免れた。

……少しボールが高かったか。

長くボールを見れる打席の後方に立っていたことも急な変化に反応できた要因の一つだろうが、何よりもバットが届いてしまう位置に空がボールを投げてしまったことが空振りを奪えなかった最大の原因だった。後ボール一個、いや半個も低めに決まっていたなら今頃はバックボードに赤いランプが灯っていたに違いない。

……でもこれで下準備はできた。

一度目に焼き付いた変化球の残像はすぐに頭から離れるものではない。クリスのサインに従って空が投じたのは真ん中高めへの四シーム。目付が多少なりとも低めにあったのだろう、カルロスは慌ててバットを出したが今度は逃げきれなかった。

乾いた音がグラウンドに響き、主審から本日早くも七個目となる三振のコールが告げられる。青道の応援席から湧き上がる大歓声。先頭バッターをきっちり抑えたことに空は少しだけ安堵の息を漏らしたが、すぐにその緩んだ表情は引き締められた。

凡退したカルロスに続いて右打席に入るのは稲実の二番、白河勝之。
かつての空の先輩はカルロスと同じように打席の後方に立ってバットを短く握ると、怜悧な目で空を睨む。
……白河先輩か。
シニア時代はその高い守備力とオールマイティーなバッティングに幾度となく助けられたものだが、こうして敵対すると面倒くさいことこの上ない。
内心で苦い顔をしながら空は腕を振り上げ、マウンドを蹴った。
余力を残した八割程度の投球ながらも勢いのあるボールがコーナーを突く。インロー、アウトロー、そしてインハイ。ここも真っすぐのみで早々に追い込んだ空だが、そこから先が問題だった。四球目、五球目と散らした四シームジャイロに反応されてファールボール。六球目の二シームジャイロを見逃されたことでカウントは並行にまで戻った。
……一打席目もそうだったけど相変わらず嫌なバッティングをするな、ホント。
白河は空のスピードボールをホームランに持っていくだけのパワーはない。けれどその分、優れた選球眼と高いミート力を持っている。

……打たれるとは思わないけど、流石にこれ以上粘られるのは面倒だな。

まだ四回。これから先のことを思えば球数は極力節約したいところ。一瞬空の脳裏に打たせて捕るピッチングが浮かんだが、すぐにそれは消えた。変に打たせに行くとどうしてもエラーだったり、不運なとこに打球が落ちたりでランナーを出してしまう危険性がある。

今日のような一点を争う試合展開においてわざわざ自分からリスクを負う必要などない。

ゆえに七球目。この試合初めて空は全力でボールを投げた。

細かなコントロールの利かない１５０キロオーバーの剛速球。真ん中よりもややインコース寄りの高めのボールに白河は反応できなかった。クリスのミットの音に空は三振を確信し、

――――ボール

「なっ!?」

主審のコールに空は目を見開いた。驚いたのはクリスも同じだったようでミットを静止したまま背後を振り返ったが、当然判定は覆らない。

3―2のフルカウント。空は内に溜まった苛立ちを抑えるようにマウンドの土を蹴った。

……さっきはストライクって言ってたじゃねぇか。

確かにやや微妙な高さではあったが、ここまではストライクの判定を受けていた筈の場所だった。勿論審判とて人間なのだから間違うこともあるだろうが、何もこの決勝でなくていいだろうにと空は苦虫を噛みしめた。

クリスの指示に従って一度プレートを外し、大きく深呼吸。少しの間をあけてから改めてクリスの出したサインを確認し、空は頷いた。

「っ！」

いつも以上に腕を振るイメージで投じた一球。それはここまで平均１４０キロを優に超えていた一連のスピードボールに比べて随分と〝遅かった〟。

特に曲がらなければ鋭い落ちもない、重力に従ってゆったりと落ちていくチェンジアップ。傍から見れば何てことのないスロ―ボールにもかかわらず、ここまで粘っていた白河のバットは空を切った。

――――ットライク！　バッターアウトッ！

打者11人に対して9個の三振。その圧倒的なピッチングに球場は大いに盛り上がったが、それに反して空の表情は随分と硬いものだった。

額から否応なく零れ落ちる汗を袖口でぬぐい、ホームへと視線を送る。

そこにはカルロス、白河と同じく打席の後方に立ち目一杯にバットを短く握る稲実の三番の姿。

……ほんと、楽させてくれないな。

◇

「こらこら！　なに三振してんのさ！」

二打席連続の三振を喫してベンチに戻った白河を待っていたのは、お冠になったエースからの叱責だった。あぁうるさいとグチグチ文句を垂れる成宮を無視し、白河はバットケースに自分のバットをしまった。

「まったくさぁ。俺が9番に下がっているんだから、ちゃんと上位打線でチャンスを作って点を取ってよね。無得点じゃ試合には勝てないんだし」

「……いわれなくてもわかってる。鳴は自分のピッチングに集中してればいい」

「だったら結果を見せてよね。あんまり悠長にしているようだと俺が自分の手で決

めるよ？」
「……監督の指示無視して大振りしてた鳴にあのボールが捉えられるとは思えない」
「んなっ!?」
白河の物言いにカチンときたのだろう。米神を引くつかせる成宮だったが、それを爆発させることはしなかった。ふんと短く鼻を鳴らし、ベンチに置いていたグローブを右手にはめる。
「まぁこんな序盤に試合が動くなんて俺も思ってないし。青道打線は俺が抑えるから、何とかして山城から点を取ってよね」
「わかってる」
「ん。任せたからね」
アッサリとそう言って成宮は控え捕手である多田野を連れ投球練習のためにベンチを離れた。遠ざかる後姿を見送っていると、監督の国友からお呼びがかかった。聞かれたのは最後に打ち取られた決め球についてだった。
「白河。山城のチェンジアップはどうだ？」
「……正直、ビデオで見ていたよりも厄介です。フォームにほとんど違いがないで

すし、何よりあの真っすぐを見せられた後だとわかっていても体がついていきません」

でも、と白河は言葉を続けた。

「鳴のチェンジアップほどじゃない」

「次は対応できるか？」

「バットに当てるだけなら」

「ならばいい」

そう言って、国友はいつもと変わらず仏頂面をマウンドへと投げかけた。

小高い丘の上で躍動するのは往年のライバルである青道の若きエース。中学から上がってまだ数か月足らずのルーキーの前にここまで稲実打線は完璧に抑えられていた。

……なるほど。確かに天才だ。

こうして直に見るとよくわかる。国友は素直に山城の実力を認め、その溢れんばかりの才能を称賛した。長年監督業を務める国友をしても中々お目にかかれない逸材。

現在高校球界ナンバーワン左腕と謳われる成宮ですら、一年のこの時期にはまだ山城ほどの完成度はなかった。

……とは言え、山城も完璧なわけではない。

未だ一人のランナーも出していない現状に部長の村田は焦っているが、国友からすればある程度予想の範疇。このまま最後まで行くなどあり得ない。それは選手達もしっかりとわかっているようで、ここまで焦らずしっかりと己の役割を果たしている。

……勝負は後半。

少しの綻びにつけ込めるかどうか。それがこの試合のカギになるだろうと国友は静かに瞼を閉じた。

だいたい後二、三話（もしくは四話）でこの作品は完結です。後少しの間、お付き合いください。

30話

I

甲子園出場の切符をかけた大一番。青道と稲実による西東京予選の決勝は見ている者に息を突かせぬ投手戦となった。稲実の絶対的エースがストレートと変化球を織り交ぜた多彩なピッチングで青道の強力打線を翻弄すれば、青道の黄金ルーキーは力で稲実を捻じ伏せる。正に両者の持ち味が存分に発揮されたエース同士の投げ合い。

未だ点数に動きのないまま試合は終盤へと差し掛かっていた。

7回の表、この回の先頭バッターであるクリスが第一打席に続いて出塁したのを確認すると、空は応援の声を張り上げるチームメイトの間を抜けて静かにベンチ裏へと下がった。プロも使用する球場だけ神宮のベンチ裏スペースはそれまでの都営球場に比べて随分と広かったが、経費削減のためなのか設置されている冷房設備や照明設備は動いていなかった。薄暗く蒸し暑い無人の空間の中で空はユニフォームのボタンを外し、ぐっしょりと汗で濡れたアンダーシャツを脱ぎ捨て新しいもの

へと取り換える。

……あちぃ。

これでアンダーシャツを取り換えたのはこの試合三度目と、いつもに比べて回数が多かった。それは単純に気温が暑いということもあったが何より、

……流石は去年の優勝校。楽に投げさせてくれないな。

個人で見れば稲実には轟のような図抜けた打者はいない。けれどこと打線という観点から見れば、稲実打線は個人の能力差が大きかった薬師のそれよりも一段も二段も上。一番～九番までずらりと油断できない巧打者が並び、その一人一人が何とか空を攻略しようと一丸となって向かってくる。バットを短く持って打席の後方に立つのは勿論、ミートしやすいタイカップ型バットの使用や投球リズムを狂わす間の取り方、揺さぶり。例え自分が打てなくても後の打者のために少しでも球数を投げさせる。好投手を崩すための基本ではあるが、稲実ほどのタレントが揃ったチームにやられると投げている空としてはたまったものではない。

……でもまぁ、ここまでは悪くない。

粘られているのと球審の判定が厳しいせいで空にしては珍しく四球を多く出して

いるが、それでも６回終了時までまだまともなヒットは一本も打たれていなかった。記録上許した二本のヒットもボテボテの内野安打と、中途半端な位置に落ちたポテンヒット。

稲実打線の特徴を把握したクリスのリードと空がいつも以上に神経を使って投げているだけあって、打順が二巡しても稲実打線は空のボールを捉えきれてはいない。特に粘る打者に対して投げた全力の四シームには今の所、稲実バッターの誰一人としてバットに掠りすらしていなかった。

その圧倒的な精神的アドバンテージが球数の嵩む空の疲労を押し留めていた。

……流石にそろそろ点は欲しいよな。

一点、一点あればいいと空は思った。

最小リードさえあれば最後まで守り切って見せる。しかし相手はあの成宮、早々にチャンスが巡ってくる投手ではない。

だからこそ、この終盤に先頭バッターのクリスが出塁している意味は大きい。ノーアウトランナー一塁、最悪ツーアウトになってもいいから得点圏にさえ回してくれれば自分が決めてやる。そんな決意を宿してベンチに戻った空が目にしたのは、バ

ントを失敗し俯きながらベンチへと戻って来る門田の姿だった。
思わずつきそうになる溜息を呑みこみ、空はヘルメットを被ってネクストサークルに向かった。送ることが出来なかったためアウトカウントが一つ増えて一アウトランナー一塁、打席に入るのはここまで全くタイミングの合っていない八番白洲。
せめてゲッツーだけは避けてくれと空は祈ったが、その祈りは届かなかった。追い込まれ厳しいコースのスライダーを打たされてショートゴロ。あぁという青道側応援席からため息が漏れる中、稲実は軽やかに6―4―3とボールを回しダブルプレイ。
青道はこの試合初めてのノーアウトのランナーを活かす所か、二塁にさえ進めることが出来なかった。およそ想定していた最悪の展開にベンチに戻った空は今度こそ溜息をついた。
……やっぱこの試合は俺とクリス先輩でどうにかしなきゃダメだな。
チームメイトがあてにならない以上、自分とクリスで何とかしなければならない。そうしなければ試合には勝てない。自分が頑張らなければ、クリスを甲子園に連れて行くことはできない。そう確信し、パンと頬を叩いて空が気持ち新たにマウ

ンドへと向かおうとしたその時だった。
「丹波先輩？」
行く手を遮るように空の前に現れたのは、青道の元エース丹波光一郎。未だ試合に出ることを許されていない最上級生はいつにも増して険しい顔で空の顔を見た。
「えっと……」
どことなく苦手としている相手の登場に空は戸惑ったが、丹波は何も言わなかった。以後心地の悪い時間がきっかりと 5 秒。それからようやく、丹波は口を開いた。
「……しんどいか、山城？」
「えっ？　いや、まだ行けますけど……」
「ならいい」
それだけ言うと、丹波は自分席へと戻っていく。一体なんだったのか。
首を捻りながら、空はマウンドへと向かった。

◇

「あ～。もう！　なんなのあの審判！」

先頭打者を出しながらも後続をキッチリと打ち取り、結果7回の青道の攻撃を三人で終わらせた成宮。ここまでランナーを出しつつも要所要所をキッチリと締めることで得点を渡さないそのピッチングは全国区の名に恥じないものであったが、どうも本人的には納得がいっていないらしかった。苛立ち気にスパイクを鳴らし、後輩が手渡してきたスポーツドリンクを一気に喉へと流し込む。

ぶはぁと豪快に息を吐き出し、成宮は隣に座る相方の原田へと不満をぶちまけた。

「ねぇ雅さん！　あの審判どう思う！　なんか回を追うごとにストライクゾーンが小さくなっていってる気がするんだけど!?」

「騒ぐな鳴。万一聞かれたら印象が悪くなる」

「あんなヘボ審判からの印象が悪くなったって別にいいけどね！　ったくさぁ！　せっかくの決勝なんだからもっとまともな審判に判定してほしかったよ！」

声を荒げ、「お代りっ」と多田野に空になった紙コップを突きだす成宮。元々我が儘で王様気質な成宮だが、点を取られていないのにこうまで荒れるのは中々に珍しかった。

だが声を荒げたくなる成宮の気持ちも原田にはよくわかった。何せ一番近くで判

定を聞く原田自身が、可能ならば主審に抗議を申し入れたいぐらいだったのだから。

「初回はまだ普通だったんだがな」

「4 回からでしょ？　あの審判がストライクゾーン狭くしだしたの。ったく、いくら打者が打てなそうだからって勝手に弄るなっての」

試合展開によって審判がストライクゾーンを変えるというのは、実の所高校野球ではままあったりする。打者が打てていないようなら若干ゾーンを狭くして打ちやすくしたり、逆に投手が打ち込まれているならゾーンを広くして打ち取りやすくしたり。

それは全ての選手に悔いを残さないで欲しいという審判なりの配慮なのだろうが、今日のそれはいささか度が過ぎていた。

「際どいとこは全部ボールで、ストライクゾーンはいつもより一回り小さいとか。俺と山城じゃなかったら今頃自滅して試合になってないよ？」

「お前らじゃなきゃあそこまでゾーンを狭くはしなかっただろうがな。しかし本当にタフな試合になってきたな。鳴、体力はまだいけるな？」

「当たり前でしょ。あんな嫌がらせには負けないっての！」

ベーと審判に向けて舌を出す成宮。既に球数は１００球を超えているというのに元気一杯な後輩の姿に原田はやれやれと首を振り、静かに拳を振り下ろした。
「った!?」
「審判に喧嘩を売るな。それより見ろ」
原田が促す先にいるのはここまで成宮と互角、いやそれ以上の投球を見せる青道のルーキーエース。この回も先頭の山岡を三振に仕留めてはいるが、
「へ～。少しボールが荒れてきたね」
「あぁ。さすがにキツクなってきたみだいだな」
ボールの球威こそまだ落ちていないものの、序盤に見せた細かなコントロールは失われつつある。だがそれも当然と言えば当然。何せ山城はここまで稲実打線と狭いストライクゾーンと言う二つの敵に対峙しながら投球を続けてきたのだ。むしろ１年生にもかかわらずここまで持っていること事態が異常とさえ言えた。
にやりと、成宮はその口元に弧を描く。
「さぁて。いったいどこまでそのピッチングが続くかな」
そしてそのマウンドの重みに気が付くのは一体いつになるのか。至極楽しそうな

顔で成宮は年下のライバルのピッチングを見下ろした。

Ⅱ

……暑い

止まることなく額から垂れる汗を拭う。暑いのは決して嫌いではない空だが、それにしたって限度がある。いったい今何度あるんだよと内心でぼやき、ロージンを塗った指でボールを握る。セットポジションからチラリと一塁を見れば、そこにはこの試合4つめの四球で出したランナーの姿があった。データではそれなりに足の速いとされる稲実のセカンドはやや大きめにリードをとり、ぶらぶらと身体を揺らして今にも走らんとばかりにタイミングを計っている。

……さっきから塁上でちょろちょろと。

クリスから矢のような牽制を受けたばかりだというのに一向に大人する気配がない。これならばいっそスタートを切ってくれた方が投げている空としては楽なのだが、ランナーはスタートの構えこそするものの球この三球、一度としてスタートを切っていない。

いや恐らく実際に走る気はないのだろうと空は思った。

何せホームベースを守護するキャッチャーのクリスは強肩を通り越した鬼肩。少々空のクイックが遅くとも十分にランナーを刺せるだけの肩がある。今大会1、2の俊足を誇るカルロスならともかく、それ以外のランナーでは余程完璧にタイミングを盗まない限り二塁を陥れるのは難しいというのは誰の目から見ても明らか。

にもかかわらず挑発的なリードをとり続けるのは、

……俺の投球を乱すためか。

どれだけランナーが走らないとわかっていても、一塁でうろちょろするランナーがいれば投手としてはどうしても気にしてしまうもの。

本当に面倒くさい相手だと空は一旦落ち着くために今の状況を口にしてみることにした。

「7回の裏、1アウトランナー一塁。カウントは1―2」

そして打席に入るのは稲実のレフトを守る梵。層の厚い稲実でレギュラーを張っているだけあって良いスイングをするが、普通に投げていればまず問題ないというのはこれまでの2打席でわかっていた。むしろ問題はと、空はセットから五球目

を投じる。

終盤になっても未だ衰えない四シームジャイロが外角へと向かうが、流石に序盤とは違い狙ったコースにドンピシャというわけにはいかずやや外へと逸れた。

しかしそれでもいつも空が脳内でイメージしているストライクゾーンをボールは通過し、クリスの茶色いミットへと納まる。いつもならばこれで見逃し三振の完成だが、

――――ボール

本日何度聞いたかわからないその判定に空はハッキリと顔を顰めた。青道スタンドの一部から主審の判定に対する不満の声が上がったが、一度下した判定を審判が覆すわけもなく。カウントは2―2の平行へと戻った。

落ち着けというクリスの言葉に頷きながら、空は投げ返されたボールを受け取る。

……ほんと慣れねぇな。

4回から急に狭くなり始めたストライクゾーン。

これまで様々な審判に出会ってきたが、それでもこうも極端に投手に辛い審判にあたったのは初めてだった。普段は審判に対して不平を漏らさない空も、こうも己

の中のストライクゾーンと食い違えばフラストレーションも溜まるというもの。

唯一幸いなのは、この審判は空と成宮の平等に厳しいということ。もしも空だけに厳しいようならば今頃審判の顔面めがけて全力の真っ直ぐを投じていたことだろう。

……ここまで小さいゾーンの中でやり繰りしてきたけど、やっぱ厳しくなってきたな。

徐々にではあるがコントロールが甘くなってきている。いつもならまだ問題ない程度だが、制限されたゾーンで勝負するにはやや厳しい。

……真ん中に投げてもあんまし打たれる気はしないけど。

試合の展開が展開だ。下位打線とは言え、ある程度目が慣れたであろう三巡目。ランナーがいる状況で安易に真ん中へストライクを取りに行くのはリスクが高い。

かといってコースは狙いにくく、二シームやチェンジアップも決まらない可能性がある。ならばどうするか。

簡単だ、絶対に掠りもしない球をど真ん中に投げ込んでやればいい。

「ふぅ」

ギアを入れ替える。三速で留めていたギアを一気にトップへ。
やや重くなった体に鞭を打ち、全身の力を乗せた渾身の一球を空は投じた。
元より四隅など狙えない剛速球がほぼほぼ真ん中へと疾走する。この日最速の真っ直ぐはバットの振るわれる遥か前にホームベースを通過し、乾いた音を球場に響かせた。
――――ットライク！　バッターアウト！
新たに灯る赤いランプ、湧き上がる歓声。
再び額から流れてくる汗を拭い、ぼんやりと靄のかかる頭で空は思った。
早くベンチに戻りたいと。

◇

７回を終わっても尚続く投手戦。ずらりとスコアボードに並ぶ０の連なりは観ている者に緊張と興奮を、プレーする選手に圧迫と重圧を強いていた。
８回の表、ここまで空と共に稲実打線を抑え続けているクリスはベンチに戻るなりプロテクターを外し大きく息をついた。それは先の７回をキッチリと切り抜けたことへの安堵であり、また自分の中に溜まった硬さを解すためのものでもあっ

た。

……緊張、しているな。

クリスは今自分が感じているモノをそう分析する。本来捕手はチームで最も冷静でなければならないのだが、いくら頭が切れると言ってもクリスはまだ学生。初めて味わう甲子園をかけての一戦、それも胃がキリキリするような接戦に緊張しないわけがなかった。

……ここまで山城の球数は97球。

1回平均14球前後と考えれば悪くない数字だが、山城にしては随分と多い。特に未だヒット2本しか打たれていないことを思えば多すぎると言ってもいいかもしれない。

球数が増える原因は稲実打線の粘りもそうだが、やはり最大の原因は何と言ってもあの狭いストライクゾーンにある。いつものようにゾーンを広く使えないから打者はコースを絞りやすくなり、余計な四球も増える。恐らくは成宮のボールを受ける原田も頭を悩ませているだろう。バッテリー泣かせの審判にクリスはついつい溜息をつきたくなった。

……80球を過ぎたあたりから徐々に細かな制球が定まらなくなってきている。幸いまだ球威は衰えていないが、一体どこまで持つか。

いつでも交代できるよう既に沢村と川上は投球練習を始めている。二人の実力をクリスは信頼していたが、できることなら頼りたくないというのが正直な所だった。

……決勝と言う大舞台、一点を争う試合の終盤、そして制限されたストライクゾーン。

同じ一点を争う試合展開だった明川戦の時とは、打線の強さも条件もかかるプレッシャーもすべてが違う。リリーフとしてこの上なく難しいマウンドに経験の浅い二人を送り出して、山城が下がって勢いづく稲実打線を抑えて来いと言うのは無茶を通り越して無謀の類。どう考えても現実的ではない。

……青道の勝利のためには山城に何としても最後まで投げ切って貰う必要がある。

この8回表の攻撃はその山城から打順が始まる。いつもならその打力に期待するところだが、状況が状況。打順がトップに戻るということもあるし、ここはアウト一つを献上してでも体力を温存し投球に備えるべき

。

……そのことは当然山城もわかって――――

キィイイン

目が覚めるような快音にクリスは思考の海から抜け出しハッと顔を上げた。飛び込んできたのはつんざくような無数の歓声とレフトへと転がる打球、そして全力でダイヤモンドを疾走する空の姿だった。

……山城！

Ⅲ

クリスの考えることは勿論空とてわかっていた。自分の重要性も、そしてここで倒れておく必要性も。だから初めは打席に入っても打つ気はなかった。バットを構えたまま三振に終わり後の打者に託すつもりだった。けれど2ストライクと追い込まれた時、ふと空の脳裏にある疑念が浮かんだ。

――――本当に託していいのかと。

ここで自分が倒れてはまた無得点に終わるのではないかと。空は自分の体力が残

り少なくなっていることを自覚していた。延長になれば間違いなく成宮に分がある。だからこそ９回で試合を終わらせなければならない。

――気が付けばバットを出していた。

恐らく稲実バッテリーも打って来るとは思っていなかったのだろう。成宮にしては随分と素直にストライクを取りに来たストレートに対して空は思いっきりバットを振りぬいた。

「んなっ!?」

驚愕の声と共に成宮が振り向くがもう遅い。既に打球は三塁手のグラブをすり抜けレフト線へと転がっている。空はレフトの捕球体制が悪いことを確認すると、一塁コーチャーの止まれという指示を無視してそのままセカンドへと走った。

『セーフ！』

セカンドのタッチよりも早く空の足がベースに届いた。塁上ではぁはぁと呼吸を荒げながら、空はベンチで難しい顔をしているクリスに心の中で謝罪した。

……すいません、クリス先輩。

尊敬する先輩の意図に背くのは心苦しかったがそれでも結果的にはノーアウトラ

ンナー2塁という終盤に沸いた絶好機。こうなればランナーが投手だろうが関係ない。多少無理をしてでも青道は点数を取りにいかなければならなくなった。

打席に入るのはここまでヒットのないトップバッター、倉持。右打席に入った青道のリードオフマンは早々にバントの構えをとった。

……サインは送りバント。

じりじりっと空がいつもより一歩大きいリードをとるとマウンドから矢のような牽制球が飛んできた。然程上手い牽制ではなかったが帰還はギリギリ。ふぅと塁上で息を零しつつも、空はリードを狭めるつもりはなかった。

……成宮さんはフィールディングが上手い。

おまけに三塁に投げやすい左投手。ファーストがかなり前に出てきていることを合わせればタッチプレーとは言え、余程上手いバントでなければセーフになるのは厳しい。そしてそんな上手いバントをさせるほど成宮鳴は甘くない。

だからこそ、空は安全マージンを殆ど残さない限界ギリギリのリードをとった。塁間の距離を短くして少しでもバントの成功率を上げるために。

……これで多少でもピッチングに影響が出てくれればいいんだけどな。

しかしそんな投手ならここまで青道打線を０で抑えられている筈もなく。空に打たれた時とはまるで異なる厳しいボールが倉持に襲い掛かる。胸元へと食い込むキレのいいスライダー。これまで苦しんできた変化球に倉持はバットを合わしきれずボールを打ち上げた。

あぁという悲鳴は青道の応援席から。幸いにも上がった打球は捕手が掴むよりも早く地面に落下したことでアウトカウントが増えることはなかったが、今の一球はどちらに分があるのかを知るには十分すぎた。

……あの感じじゃコースを狙うどころか、バントをすること自体が難しいか。

続く二球目と三球目は良いコースだったものの厳しいゾーンの中には入っておらずボール判定。これでカウント上では２―１と打者有利。行くならここだと空は思った。

セットポジションから成宮が右足を前へと踏み出し左腕を振るう。チラリと見えたボールを握る指の形を認識した瞬間、空はスタートを切った。

「スチール!!」

ショートの白川が声をまさかと驚きの声を上げたが、空としては何も盗塁を狙っ

ているわけではなかった。いくらリードを大きく取っていたとはいえ、空のスタートはスチールを狙うには余りにも遅い。ゆえに狙いは意表を突いた三盗などではなく、

……ストレートなら！

ややのけぞりながらも倉持はインハイへのストレートにバットを合わせた。打球は死にきらず転がった場所もほぼほぼ投手の正面とおよそ最悪のバントだったが、成宮が捕った瞬間にはもう空は三塁に到達しようとしていた。

「っつ!?」

「鳴！　ファースト！」

「わかってるよ！」

成宮は三塁に投げることを諦め一塁へと送る。８回の表、１アウト三塁。

青道にとってはまたとないチャンス、稲実にとってはこれ以上ないピンチの場面で稲実の内野陣はマウンドへと集まった。その間空はギャンブルスタートによって手に入れた三塁ベースの上で荒くなった呼吸を戻しながら、半ば苦笑気味にベンチを仰いだ。

……監督、怒ってるよな。

そして恐らくはクリスも。何せ一歩間違えば一気にチャンスを潰しかねなかった身勝手なプレーだ、怒らない方がおかしい。それでも空はこうしなければならなかった。

……説教なら後でいくらでも受けます。

だから今はと守る人間のいなくなったホームベースを見つめる。

一点。

この勝負を決めるための一点。それがどうしても欲しかった。

後少し、9月中には完結させたいなー。

31話

I

8回の表、1アウトランナー三塁。一打勝ち越し、いや試合展開を思えば一気に勝利を決めてしまいかねない大事な場面で打席に入ったのは青道の二番、小湊亮介。

青道で最も器用なバッターであり、バントからバスター、エンドラン、カットまでありとあらゆる小技を駆使するそのバッティングは曲者として関係者から評価が高い。

そんな曲者に対して稲実ナインが敷いたのは前進守備。状況を考えれば至極当然な守備体形であったが、一方で普通とは異なる点もあった。

……外野が随分と前に来てんな。

三塁でリードをとりながら空は稲実のポジショニングを確認する。内野はスクイズ警戒のためなのか通常の前進守備よりやや前に来ているものの、大よそ教科書通り。反して外野は一般に教わる位置取りよりも更に前。あれでは少しいいあたりを

されれば、その時点で外野の頭を超えるだろう。

……長打よりポテンヒットの可能性を潰したいってわけか。

そしてその判断は恐らく間違っていないと空は思った。小湊亮介はミートは上手いものの体が小さく、パワーも決してあるとは言えない。成宮ほどの本格派と対峙した場合、上手く外野と内野の間に落とすようなヒットは打てても大きなあたりは難しいだろう。

……普通ならここでスクイズなんだろうが。

初球、成宮の投球と同時に小湊がバットを横へと倒し空がスタートを切る。するとファースト、そして投げ終えた成宮が躊躇なくホームへと駆け出した。

――――スクイズッ！

誰かがそう叫んだが不思議なことに小湊はバットを引く。ワンバンしたボールを原田は身体で前に落とし、慌てて三塁に視線を送るがそこに飛び出したランナーの姿はなかった。

スタートを切ってすぐに止まった空はゆっくりと三塁へ戻り、汗を拭う。

……さすがに警戒してるか。

相手の出方を伺うために行った偽装スクイズ。ベンチからのサインで行った1プレイは空に、そして青道に稲実の警戒の深さを知らしめた。もしもあのまま本当にスクイズを行っていればまず間違いなく失敗していただろう。何せスクイズとはあくまでも奇策。意表を突くからこそ効果があるのであり、警戒された中で行えば成功の確率は低くなる。

特に成宮のフィールディングを考えれば猶更。

それを青道ベンチも感じたのだろう。

空と小湊に出されたサインはあえて小細工はせず、打者に任せるというものだった。

狙い球を絞って打って行け。小湊がバットを構えるのを見ながら、空は思考を巡らす。

……ここまで小湊先輩はサードゴロ、四球、セカンドゴロ。

選球眼の良さとミート力の高さ、そして狭いストライクゾーンを考えればクリーンヒットやタッチアップは難しくとも四球ならば十分に狙える。そして1アウトランナー1、3塁とランナーを溜めてクリーンアップに回す形となれば青道とし

ては最良。

とは言えだ。

……まぁ。みすみすそれを許す人じゃねェよな。

ぐるりと、マウンドの成宮が左肩を回す。ギアを入れ替えたのだと同じ投手である空にはわかった。

……四球が出せない一打勝ち越しの場面、バッターは小細工が上手い典型的な二番。

内野を前進させることで当たり損ないのゴロを封じ、外野を詰めることでポテンヒットの可能性を消した。となればもう投げる球種は決まっている。

そしてその予想した通りの球を成宮は投げた。それは空振りの取れるフォークでもなければ評価の高いスライダーでも、青道打線が手こずっているチェンジアップでもない。投球の基本であるストレート。やや甘いインコースのボールに小湊は当然バットを振り下ろし――――今日一番のスピードと球威にバットを圧された。

金属バット特有の擦った甲高い音が神宮に響く。

ふらふらっと上がった打球に小湊は歯を食いしばりながら一塁ベースへと走りだ

し、原田はマスクを外して叫んだ。

――――ライトッ！

緩いアーチを描いた打球が飛んだ先は一塁ベース後方。ベースの手前でファールグラウンドへと切れていった打球は定位置であったならまず間違いなく捕ることは不可能だっただろう。だが外野に敷かれた極端な前進守備が、そして鍛え抜かれた広い守備範囲が捕球を可能にする、可能にしてしまう！　ボールへと飛び込んだライトの富士川がボールの入ったグローブを掲げると、稲実の応援席から歓声が巻き起こる。しかしその歓声は一瞬にして驚愕の声へと変貌した。

――――バックホーム！

◇

走る走る走る走る。

三塁からホームへと続く道、まるで目印のように引かれた白線を踏みしめてただただ足を動かす。呼吸はどうしようもないぐらいに荒く、身体はまるでマラソンでもした後かと思うぐらいに重い。ちらりとボールの行方を確認すれば既にライトは起き上がり、バックホームの態勢に入っていた。

分が悪い。これまでの経験から空はそう直感し、

……それがどうしたっ！

些細なことだと前を向く。このタッチアップが無謀なことなんて最初からわかっていた。いくら捕球体制が悪いとは言え、捕球位置はかなり浅い。ライトの肩も含めれば成功率は良くて2割と言った所だろう。次からクリーンアップということもあってコーチャーは行くなと言った、しかしそれを振り切って空はこの分の悪いタッチアップを挑んだ。

ここで行かなければきっと点は入らない。そう判断したがゆえに。

「っつ！」

気を抜けばスピードを落としそうになる、余計なことに意識を割けば足がもつれそうになる。だから余分なことは全て切り捨て、ホームベースだけを見た。

……もう少しっ！

白いホームベースまであと1メートルと空が迫った時、ライトからの返球がホームを守護する原田のミットに飛び込んだ。原田はやや高めに逸れた送球を捕るために浮かしていた腰を下ろしながら左足を引き、くるりとその巨体を反転させ間近に

迫ったランナーを待ち構える。大きな岩が進行方向を遮っているのを見た瞬間、空は飛んだ。

低い体勢で土を蹴り、大きなスペースの空いている2時方向へと飛びこみながら迫りくるタッチを掻い潜ってベースへと手を伸ばす。

ベースに触れた感触とミットに触れた感触を同時に味わいながら、空はゴロゴロと地面を転がった。全身真っ黒に染まった体。けれどそんなことはどうでも良かった。

顔についた土を払うこともなく、空は慌てて顔を主審へと向ける。

タッチが先か、それともホームインが先か。

運命の分かれ道、主審の手は大きく横へと広げられた。

――――セーフ!!

判定はホームイン。その瞬間、神宮球場は爆発した。

歓声、嘆き、驚き、ありとあらゆる声が球場に渦巻いてより爆発の大きさを増していく。

そしてその中心にいる背番号1は身体を横にしたままぐっと、両拳を固く握り

しめた。

青道高校、１点先制。

８回の表　青道１―０稲実

Ⅱ

唖然、呆然。今の彼女の内心を表現するとしたらそういった単語がぴったりとあてはまるだろう。バックネット裏２階席。例年よりも遥かに多い記者のためにと今回だけ特別に設けられた関係者専用スペースの一角で大和田は半開きになった口に手をあてた。

いや彼女だけではない。彼女の同業者達もまた、反応の違いこそあれみな驚きを隠せなかった。あちこちから聞こえてくる凄まじい歓声を耳にしながら、大和田はまるでうわ言のように呟いた。

「一点、とっちゃいましたね」

「あ、あぁ」

大和田の隣に座る峰もまた驚愕から抜けきらないのだろう。いつもに比べてやや

歯切れの悪い返事をしながら畳んでいた扇子を開き、パタパタと生暖かい風で汗を飛ばしながらスコアボードに目をやる。これまで０が続いていたスコアボードに新たに刻まれた１の数字。峰は確認するかのように今しがた脳裏に焼き付いたばかりの光景を振り返った。

「まさかあの浅いライトフライでタッチアップを強行するとは」

「タイミング的にはアウトでしたよね？」

「あぁ。だが送球が上に逸れていた分だけ原田君のタッチが遅れた。山城君も絶妙なタイミングで死角へと跳んでいたからな。とは言えセーフになったのは殆ど偶然だな」

「どうして山城君は強引に突っ込んだりしたんでしょうか？　例えタッチアップできなくても次はクリーンアップですし、わざわざ分の悪い勝負を挑む必要はなかったのでは？」

「若さゆえの暴走か、それとも何か感じるものがあったのか。いずれにせよ危険な走塁だったな」

峰は表情を少し渋くした。それは分の悪い賭けを挑んだということよりも、それ

によって生じる怪我のリスクを思ってのことだった。山城は投手。万一さっきの無茶な走塁で怪我でもしていたらその時点で青道の勝機は限りなく小さくなっていただろう。

とは言えだ。

「危険な走塁だろうと結果は結果だ。この終盤に来ての一点は青道にとって限りなく大きな意味を持つ」

「このまま最後まで行くんでしょうか？」

「さぁな。山城君も少しずつボールが荒れてきているし、見た所体力も限界に近いようだ。稲実が後攻めと言うことも含めればまだまだ勝負はわからん」

何よりと峰はマウンドに視線を落とす。そこには青道に先制点を許した後も変わらずにボールを投げ続ける背番号1がいる。本当は悔しいだろう、辛いだろう。だがそんな素振りを一切見せることなく、崩れることなく続く三番の伊佐敷をキッチリと仕留めるその姿は正に稲実のエースとして相応しいもの。

そしてそんなエースを支えるナインの顔も決してまだ試合を諦めてはいない。

「昨年の王者がこのまま負けるとは思えん」

◇

8回の裏、一点を勝ち越した青道のマウンドには当然山城空が立っていた。先程の1点の立役者にしてここまで稲実打線を0に封じ込めてきた青道のスーパールーキーの登場に青道の応援席からは更にも増した歓声が、稲実の応援席からは憎々しいとばかりに呻きの声があがる。球場中の視線が自分に注がれているのを肌で感じ取りながら、空はこの回の先頭打者に意識を割く。

左打席の後方に立ち、短く持ったタイカップ型のバットを構えるのは稲実の絶対的エース成宮鳴。今日は9番に下がっているとはいえ、本来はクリーンアップを任せられているだけの強打者。気を抜いて対峙できる相手ではない。

しかしそれがわかっていても尚、空は逸る己の気持ちを律しきれなかった。

……あと2回、あと2回抑えれば甲子園。

高鳴る胸の鼓動を何とか抑えようとしてみるが無駄だった。先程ベンチでクリスから受けた筈の無謀な走塁についての注意でさえ、今の空の頭にはもう残ってはいなかった。あるのは明確な形になった勝利への渇望のみ。

もう少しで勝てる、あと少しで約束を果たせる。

クリスから出されたサインにまるで機械のように頷き、空はボールを投じる。この終盤になっても未だ一四〇キロ台を維持している四シームジャイロ、しかしボールは珍しく要求されていたコースから大きく外れた。

……焦るなよ俺。あとたったアウト六つじゃねェか。

肩に入っていた力を抜き、再度ボールを投じる。しかし疲労で重くなった体は中々言うことを聞いてくれず、よりカウントは悪くなり２―０。その後何とかファールを二つ奪い平行カウントまで戻したものの、そこからが長かった。二シーム、四シーム、そしてチェンジアップ。持てる球種の全てを使って勝負を決しに行くも、コースに投げ切れずその悉くがカットされる。

しつこいと、頬から垂れる汗を拭う。四シームの球威とノビが未だ衰えないために成宮は基本真っ直ぐ待ち。三振をしないよう始動を早くしている分少々二シームやチェンジアップのコースが甘くなっても中々芯では捉えきれていないが、その一方で空もまた仕留めきれていない。このままでは堂々巡りの持久戦。

だから残り少ない体力を振り絞り、空はギアを一つ上げた。

……いい加減にっ。

振りかぶった右腕を思いっきり振りきる。この試合幾度となく投げてきた全力での四シームジャイロ。ただただど真ん中目がけて投げた渾身の真っ直ぐにそれまで粘っていた成宮のバットも遂に空を切った。

――ットライク！　バッターアウトっ！

この試合17個目になる三振。

空はふぅと肺に溜まった二酸化炭素を吐き出し、ロージンバックに手を伸ばす。スコアボードに灯る一つ目の赤いランプ。それは試合終了までのカウントでもあった。

……あと5つ。

Ⅲ

稲実の野球部員なら誰もが知っていることだが成宮鳴はプライドが高い。典型的なエースタイプとでも言えばいいのだろうか、基本的に自分が中心にいなければ気が済まない性質だ。文化祭で劇をするとなれば目立つ主役級の役しかやりたがらず、体育祭のクラス対抗リレーでは進んでアンカーに立候補する。そして野球でも

その性格はしっかりと現れていて、本分であるピッチングは勿論、打撃でも自らのバットで試合を決めに行こうとすることが多い。だからそんな成宮がわざわざ打順を下げてまでピッチングに専念すると試合前に聞いた時、カルロスは素直に驚いた。

いやカルロスだけではない。成宮に誘われて稲実に入った二年生の誰もが彼らしからぬ発言に耳を疑い、そして理解した。今日闘うのはそれほどの相手なのだと。あの成宮鳴がそうまでしなければいけないと判断した投手なのだと。

けどどうやら自分達はまだ鳴の執念を甘くみていたらしいと、ネクストサークルの中で稲実のリーディングヒッターは思った。ブラジルの血を引く彫の濃い顔が見つめるのは何とかしてボールに喰らいついていく自分達のエースの姿。

……鳴があんな泥臭く粘るなんてな。

8回の表、稲実は一点を失った。失点の原因は酷くハッキリとしていた。山城空、現在進行形で稲実の前に立ち塞がる青道のルーキー一人に翻弄され、点を奪われた。

同じ投手を務める一年坊主、それもライバル視していた人物に点を奪われるなど成宮にしてみればこの上ない屈辱だろう。だから8回の裏の攻撃がラストバッ

ターから始まった時、てっきり成宮は長打を狙いに行くものだとカルロスは思っていた。受けた屈辱を返すためにホームラン狙いの大味な打撃をするのだと半ば決めつけていた。

ところがだ、蓋を開けてみれば実際にはバットを短く持っての粘りのバッティング。いつもとは明らかに違う姿にカルロスが口元を緩めていると、粘っていた成宮がついに倒れた。三振を喫し、ベンチへと引き上げてくるエース。普段ならビハインドの状況で三振後の成宮など面倒くさくて声をかけようとも思わないが、この時ばかりは自然とカルロスの口が動いていた。

「どうだった？」

「球威とノビは見ている分にはあんまし変わらないけど、やっぱコントロールは大分バラついてるね。球速も落ちてきたからカットしてけば十分四球は狙える」

「ふ～ん、なるほどね」

三振した割には随分とサバサバとした成宮が口にしたアドバイスは、ほぼほぼネクストでカルロスが抱いていた感想と同じものだった。コンコンとバットで肩を叩いたカルロスは打席に向かおうと成宮の横を通り、

――後は任せたよ

そんな呟きを耳にした。ハッとカルロスが背後を振り返るが、その時にはもう成宮の背中は遠くなっていた。そして数秒ほどその場で立ち尽くしていたカルロスだが、主審の呼び掛けに我に返ると慌てて打席に入った。いつものように足場の土を念入りに固めながら思うのは、やはりさっきの一言。

……後は任せたよ、ね。

我が儘王子にしては随分と殊勝な言葉だ。これまでそんなことを言ったことがあったか記憶を辿ってみるものの、該当するモノはなし。

ゆっくりとバットを構え、マウンドに立ち塞がる敵と目を合わす。青道の背番号１はまるでカルロスなど眼中にないかのように視線を切ると、相も変わらずの大きなフォームからその魔球を投じた。伸び上がってくる速球に合わせて上から出したバットはボールの下っ面を叩き、打球は一塁側のファールネットを揺らす。

……ちっ。まじで化けもんだな。

打席を外したカルロスは苦々しく空を見つめる。もうこれでこの試合４度目の対戦、球種は９割方わかっていて、更にはコースも大分甘かったというのにそれで

もまだ芯で捉えきれない。バックスクリーンに表示される球速は初回よりも５キロ落ちる１４４キロ、神宮のスピードガンがかなり甘いことを思えば実際には１４０前後と言った所だろう。

……俺が１４０の真っ直ぐに振り遅れるか。

カルロスは稲実打線の中でもめっぽうストレートに強い。実際山城対策として行った１６０キロのマシンバッティングではチーム内で最も良い成績を収めていた。しかしそんなカルロスをもってしても未だ捉えきれないジャイロボール。正に魔球と言うのはこのことだとカルロスは身をもって実感していた。

……でもまっ、流石に球速が落ちた分バットには当たるな。

来るとわかっていてもかなりの確率で空振りしていた序盤に比べれば随分と状況は改善されたと言える。バットを短く持って打席に後ろに立ち、しっかりとボールを見極めればある程度カットしていくことは可能。ボールとストライクがハッキリしてきたし粘っていけば成宮が言ったように四球も十分狙えるだろう。とは言え、それはあくまでも追い込まれるまでの話。

……山城にはもう一つの真っ直ぐがある。

成宮の打席でも投げていたギアを一つ上げてのジャイロボール。球速、キレ、球威、全てが一段階上のボールに対応できる自信がカルロスにはなかった。

だからストライクの後に2球ボールが続いた後、2―1と打者有利のカウントになってカルロスは動いた。立つ場所を打席の後方から前方へと変え、グリップを握る両手の位置を少しだけ下へとずらす。

……さぁ来いよ一年。

山城はカルロスの変化に少しだけ眉を潜めたものの、すぐにそれまで通り投球モーションに入った。対峙するカルロスは身体全体でリズムをとりながらグッと左手に力を込める。

……ウチのエースが任せたって言ってんだ。

ここまでカルロスの成績は3の0。トップバッターとしての役目を全く果たせていない。

だからこそこの打席は、

……塁に出るしかねぇだろ！

やや高めのボールに対してカルロスは全力でバットを振り下ろす。いっそ極端ま

でのダウンスイングがボールの上を叩くと、打球はホームベースの手前で大きく弾みショート方向へと跳ね上がった。

――――ショート！

ショートを守る倉持が勢いよく前へと駆け出し難しい体勢で捕球するが、そんなものはカルロスには見えていなかった。コンマ一秒でも早く1塁に到達するためにあらゆる余分なものをそぎ落とし、ただただ眼前のベースに向かって飛び込んでいく。

――――セーフ！

ファーストのミットが揺れるよりも早く、ランナーの手がベースに触れた。わぁっと盛り上がる稲実応援席の興奮を感じながら、カルロスは口に入った土を吐き出す。

決して綺麗なヒットではなかった。

しかしそれでもカルロスにとってはHRと同等の価値を持つ一本だ。

……さぁて。走るぜ。

にやりと、今大会1、2を争う足のスペシャリストはニヤリとベースの上で口元を歪ませた。それはまるで勝負はこれからだと謳っているかのよう。

青道1―0稲実。8回の裏、1アウトランナー1塁。
ネクストバッター、白河。

今日の一言、「野球は一人でも出来るんや！」

32話

I

八回の裏、一アウトランナー一塁。この状況で打席に入るのは稲実一の巧打者、白河勝之。前打席でヒットを打たれているだけに決して侮れる打者ではなかったが、単純に打者だけに全神経を注げばいいというわけにもいかなかった。

……厄介なランナーを出しちまったな。

一塁で大きなリードをとるカルロスに空は顔を顰めた。アウトランプが一つ灯っているとはいえ終盤になっての同点のランナー、それも全国でも有数の俊足のランナーだ。流石に今度ばかりはスタートを切ってくれと安易に思うわけにはいかない。すっとプレートから足を引きファーストへとボールを投げるそぶりを見せると、カルロスはすぐさま一塁へと戻った。そして再び空がセットに入ると、また大きくリードをとる。

……ここは走ってくるよな。

カルロスはこれまでのランナーとは違い、クリス相手でも盗塁を決められるだけ

の足がある。１アウト一塁と二塁とでは得点の期待度にかなりの開きがある以上、一点を追いかけるこの展開で稲実ベンチがカルロスにグリーンシグナル（盗塁自由）を出さないはずがなかった。

……確かデータによれば初球からガンガン走ってたはず。

特に終盤になればなるほど初球に走る割合は高くなっている。恐らくは打者の邪魔をしないための配慮なのだろうが、余程自分の足に自信がなければできない芸当だ。そしてカルロスは今大会一度として盗塁を失敗していない。

……無理にクイックを早くしようとすればボールに力が無くなる。

だからこそ牽制を繰り返し少しでもスタートを遅らせようとしているのだが、どうも手応えは薄かった。空の牽制は決して悪くない。クイックの遅さをカバーするためにシニアの頃から磨きをかけていただけあって、一年にしてはかなり上手い方に入る。しかしその程度ではスペシャリストの妨げにはならないらしかった。

……けどだからってみすみす走らせるわけにはいかねぇ。

セットポジションの態勢でいつもよりやや長めにボールを持ってからホームに向かって足を踏み出す。これで一球様子を見てくれれば儲けもの、そう考えて行った

小細工は結局意味をなすことはなかった。

――スチール！

ファーストの叫びが耳へと届く。これでも来たかと、半ば祈るようにして空は腕を振った。ゾーンから外れたアウトハイの真っ直ぐを白河が見送ったことで、勝負は一旦投手と打者から離れランナーと捕手の一騎打ち。

そして本塁を守護するクリスの動きはほぼほぼ完璧だった。

捕球から送球までの一連の動作には一切の無駄がなく、セカンドへの送球も糸を引くような剛速球がセカンドベース手前と言う最高の場所にコントロールされていた。およそこれ以上ないというぐらい理想的な流れ。しかしそんな完璧をもってしてもカルロスの神足を阻むことはできなかった。

「っつ！」

カバーに入った倉持がタッチをアピールするも塁審の手は平行に開いた。一アウト一塁は二塁へと状況を変え、ボールカウントが一つ増える。気にするなという内野陣からの励ましの声に表面上は応えつつも、空の内心は決して穏やかではいられなかった。

……これで一打同点。

カルロスの足ならば長打は愚か、シングルヒットでもホームに変えられる可能性が十分にあった。ここまで来て同点など冗談ではない。空は得点圏へと進んだ忌々しいランナーを睨み、ホームへと顔を戻す。打席ではかつての先輩が短く持ったバットを構えてその時を待っていた。

……前の打席は外の四シームにバットを合わせられてライト前。

セカンドとライトの丁度中間に落ちた不運なポテンヒットだったが、この場面でそれは許されない。いやそれどころか前に飛ばされることすら危険だと空は考えていた。

……ゴロなら捕球ミスに送球ミス、フライなら目測を誤る可能性がある。

勿論後ろを守るチームメイトの守備力を思えばその危険性が薄いことは承知していたが、それでも決して０ではない。野球はいったい何が起きるかわからないのだから例えコンマ１％でも失点の危険があるのなら任せるわけにはいかないと、空は重くなった体に無理やり火を入れギアを上げる。

……三振ならエラーの心配はない。

何せボールを受けるのは空が最も信頼する先輩。万一にも後ろに逸らすことはありえないという信頼を胸に抱いて右腕を振るう。コースは甘々、されど一段階迫力を増した速球に白河のバットは空を切った。

――ットライク！

今日の試合でいったい何度耳にしたかわからないストライクのコール。この終盤になっても未だ自分の全力が捉えられていないという事実は疲労した空の精神を幾分か慰めたが、だからと言って実際に体力が回復するわけではない。肩で息をすることを隠せなくなるまでにギアを上げての全力投球は着実に空の残り少ない体力ゲージを蝕んでいた。

それを察してだろう、1―1と並行カウントになってクリスが出したサインはチェンジアップ。一球緩い球を挟むことで打者を惑わせ、全力投球でなくとも三振を奪うための布石にする。自分を思い遣ってくれた先輩のサインに空はすぐさま頷き、モーションへと入った。コースはボールになってもいいから出来るだけ低く。それこそ半ば叩きつけるイメージで投じた変化球はおよそ空の理想通りの軌道を描き、真ん中やや低めからボールゾーンへと落ちていく。緩急、コース共に完璧。

練習でも滅多に見られない最高のボールに白河の上半身は前のめりになり、つられて出したバットがふらふらと宙を泳ぐ。打者としてはおよそ死に体。

空振りをとった、そう空が確信した瞬間だった。

コツンと、小さな音がしたのは。

「んなっ!?」

それはボールがバットに当たる音だった。そう、白河は完全な死に体になりながらも左手一本でチェンジアップにバットを合わせてみせたのだ。空の目が驚愕に見開く中、打球は三塁側にコロコロと転がっていく。本当にあてただけ、それこそバントにも近い死んだ緩いゴロにマウンドから降りた空は素早くグラブを伸ばした。ちらりと三遊間に視線を飛ばせばランナーのカルロスは既にハーフウェーを超えて三塁に向かって走っている。

「山城！　ファースト！」

サードに送球すれば微妙なタイミングであったが、ホームから出された指示は無理をするなというもの。既に一アウトを取っている以上、下手にギャンブルをかけるよりは確実に一つアウトを取って次の打者と勝負すべきという判断だった。いつ

もなら迷うことなくクリスの指示に従っていただろう。けれど一点を守り抜くことに囚われ過ぎた心が正常な判断を狂わせた。

……サードにはいかせねぇ！

あろうことかクリスからの指示を無視し、空は体を反転させてサードへとボールを送球。凄まじい速球が三塁へと向かうが、疲れのせいか送球はランナーとは逆の方向に逸れていた。時間にすれば二、三秒のロス。そしてその数秒が成否を分けた。

――――セーフ！

サードの増子がタッチするよりも早く、カルロスのスライディングが三塁を陥れる。増子はすぐさまファーストを見たが、その時にはもう白河は一塁ベースを駆け抜けていた。

スコアボードにＦｃ１、投手のフィルダースチョイスが表示される。

二アウト三塁の筈が一アウト一、三塁。

自分のミスがピンチを大きくしたことを認識した瞬間、ガクリと、空は身体が一気に重くなるのを自覚した。

◇

……ついに来たな。

青道のミスによって訪れた大チャンスに俄かに湧き立つ稲実ベンチの一角、ここまでずっと最前列で試合の行方を見守っていた歴戦の名将は機が熟したことを察する。乾いた目線の先にはマウンドに集まる青道の内野陣の姿があったが、タイムを取った所でこの流れが変わることはないと国広は確信していた。

……八回の表に青道は待望の一点を取った、しかしその一点が逆に山城を縛り付けた。

絶対にこの一点を守らなければならない、そんな強迫観念があのような単純なミスを招いた。そしてそのたった一度のミスがチームを窮地へと追い込むのだ。

……どれだけシニアで経験を積もうと所詮は一年。

本当の意味で一プレイの怖さをまだ知らない。

甲子園のかかる決勝の重み、プレッシャーを深い所で理解していない。

……山城の体力はもう限界に近い。

しかしそれでもここまで耐えてこられたのは精神の力に他ならない。張りつめていた緊張の糸がマリオネットのように体を動かし、疲労を押しとどめてきた。けれ

ど一つでもミスを犯してその糸が解れてしまえばたちまち隠れていたモノが顔を出す。

一遇千載の好機、逃す気はさらさらなかった。

Ⅱ

1アウト、ランナー1・3塁。一打同点、いやあるは逆転さえあり得る青道にとっての大ピンチ。タイムを取ったマウンドには外野陣を除いた6名の選手が集まっていた。

「山城」

「すんません、やらかしました」

内野陣を代表してクリスが何か言うよりも早く、集まったチームメイトに対して空は小さく頭を下げた。ペコリと帽子を取っての謝罪する顔にはどことなく焦りのようなものが見え隠れしていたが、クリスがあえてそれを指摘することはなかった。いや、というよりは指摘できなかったという方が正しいだろう。何せ今はピンチの真っ最中、ここで変に焦りを自覚させれば一気に投球が壊れかねない。最低限

には落ち着いていることもあり、クリスは「わかっているならいい」と短く息を吐き出してチームメイトの顔を見渡した。

「動きは全員頭に入っているな？　ディレイドは無視してスクイズ警戒。一点もやれない場面だがサードランナーは足の速いカルロスだ。ホームに変えられてもまだ逆転されるわけじゃない、間に合わないと感じたら一塁に転送して確実に一つアウトを取るぞ」

クリスの言葉に内野陣が頷く。青道の内野は全国でも一級品。事細かに説明しなくとも皆やるべきことはそれぞれ理解していた。2、3の簡単な確認ごとを終えてから内野陣は各々のポジションへと散らばっていき、クリスもまた自分の領域へと戻りマスクを被った。

……ここにきて山城が判断ミス。

普段なら決してしない初歩的なミスを犯したという事実が、いかに空が感じている重圧、そして疲労が大きいかということを教えてくれる。己のポジションに腰を下ろし、クリスはマスクの中からここまで奮闘を続ける自分達のエースを見た。

額から絶え間なく零れ落ちる汗に落ち着かない呼吸。限界が近いのはもう明らか

だったが、幸いにもまだ瞳の奥の炎は消えていない。

……このピンチさえ凌げれば。

一点リードしたまま青道の攻撃に繋げることができる。そうすれば多少なりとも体力の回復、あるいは沢村と川上に心の準備をさせることもできる。そのためにもあと二つ、何としてでもアウトを取らなければいけない。

パンとミットを叩き、クリスは打席に入った稲実の三番吉沢の仕草を念入りに観察した。

……相変わらず短く持ったバットに打席後方でのスタンス。

今日三度の対戦ではヒットこそ打たれていないものの厳しいストライクゾーンをうまく使われ二つの四球を与えている。少々際どいコースぐらいでは中々バットを出してくれないだけに、かなり制球がアバウトになってきている今の空ではコース勝負などまず不可能。となれば自ずと真ん中付近での力勝負になるわけだが、

……吉沢は明らかな真っ直ぐ待ち。素直に行くのは少々危険か。

まだ捉えられていないギアを上げた四シームならば大丈夫かもしれないが、空の残り体力を考えればそう連投できるものではない。ゆえに真っ直ぐの軌道から落

ちていく二シームジャイロでカウントを稼ぎ、追い込んだ所を渾身の四シームで空振りの三振に切って取るのが理想。とはいえ、いつもいつも理想通りに行くのならキャッチャーがリードで頭を悩ませるはずもなく。限られた時間で様々なパターンを検討したクリスだったが、結局初球に出したサインは第一案の二シームジャイロ。

振ってくれれば儲けもの、例え振らなくとも打ち気を逸らすことは出来るという判断だった。低く低くとジェスチャーを交えてからミットを構える。サインに頷いた空がセットポジションから腕を振り、

――サインとは全く違う抜けたボールがど真ん中へと投じられた

目を見開くクリスの眼前で吉沢のバットが煌めいた。極めてシャープなダウンスイングが白球を捉え、鋭いライナーがピッチャーに向かって飛んでいく。間違いなくヒット性の打球。ただそれは余りも正面過ぎた。まるでお手本のようなピッチャー返しは稲実にとっては不運にも、逆に青道にとっては幸運にも反射的に伸ばした空のグローブの中に飛び込んだ。

「ファースト！」

クリスが指示を出すが、無理な体制で捕球した空はすぐには送球に移れない。よ

ろけた姿勢を立て直している間にランナーはそれぞれ帰塁したためダブルプレーは不成立。

――――あぁ～あ

両校の応援席から漏れるため息の雨。とはいえ、結果だけ見れば青道がランナーを進めることなくアウトカウントを一つ増やしたといえる。２アウトランナー１、３塁。

これで十分青道には無失点で切り抜ける芽が出てきたというのに、クリスの表情はどこまでも堅かった。大きく眉を顰め、マウンドで入念にロージンを手に塗す空を睨む。

……遂にボールが抜けるようになってきたか。

不味い傾向だと思う。これまでギリギリの瀬戸際で留まっていたというに、ここに来て遂に踏みとどまれなくなってきている。抜けたジャイロボールなど少々速いだけの棒玉。

そして次の打者は、そんな甘い球を決して逃しはしないだろう。

……稲実の４番、原田雅功。

三塁応援席から鳴り響く『アフリカン・シンフォニー』。力強い楽曲に乗って稲実の大黒柱がゆっくりと右打席に入る。

クリスは脳裏に浮かぶ嫌な予感を拭うことができないでいた。

Ⅲ

クリスの嫌な予感とは対照的に、エースと4番の対決は終始エースの優勢で進んでいた。恐らくは根本的に合わないのだろう。過去三打席を振り返っても原田は空のピッチングに翻弄され2つの三振に一つの内野フライ。この打席でも瞬く間に追い込まれるなど、独特なジャイロの軌道にうまく対処できないでいた。

……あと一球。

1―2と追い込んだ瞬間、空は己の中にほっとした安堵の気持ちが生まれるのを確かに感じた。投手有利のカウントになったからと言って気を抜くなど三流もいい所の行いだと重々承知していたが、それでも逸る気持ちを抑えきれなかった。

……色々あったけど。

形式的に1塁と三塁に視線を送りはするが最早ランナーのことなどどうでもよ

かった。何せ勝負はこの一球で蹴りがつく。崩れ落ちそうになる体に鞭を打ってギアを上げ、投球モーションに入る。

「これでっ！」

終わりだとただただ真ん中目がけて全力で右腕を振る。投じたのは絶対的な自信を持ったウィニングショット。疲労が蓄積しても尚一度としてバットに掠りすらさせていない渾身の四シームがストライクゾーンに確かに入ったのを感じて空は自分の勝利を確信した。

これで終わりだと、失点せずにベンチへ帰れると。

そう、体から力が抜けた瞬間だった。

ボールが視界から消えたのは。

「えっ？」

純粋に疑問の声が空の口から洩れた。

どうしてボールが消えたのか。どうしてボールはクリスのミットの中にないのか。どうして聞こえるはずのない金属音が聞こえたのか。どうして原田はバットを振りぬいているのか。心の中でいくつも積みあがる疑問、疑念。

その答えは審判からもたらされた。

――――ファールボール

あり得ぬ宣言に空は耳を疑った。けれど一塁側ファールゾーンに転がる硬球の意味を理解して、愕然とした。

……あて…られた？

轟の時のように決して完璧に捉えられたわけじゃない。明らかに振り遅れた、それこそ何とかバットにあてたというだけの打球だった。本来であれば多少眉を顰めこそすれ、驚くようなことじゃない。だがこれまでギリギリの所で何とか繋ぎとめていた空にとって、絶対的な自信を持っていた生命線をカットされたという事実はこの上なく重かった。

……偶然だ。

きっとたまたまバットに当たってしまっただけだと心の中で呟く。それは気持ちを切り替えたというよりは半ば現実逃避にも近かった。クリスがサインを出すよりも早く、空は投手用のサインを使って再度同じ球を要求する。

……もう一球続ければ今度こそ空振りをとれる。

否、奪わなければならない。

球速が落ち、コントロールも乱れてきた現状。他の球ではもう空振りを取ることは難しい。その上体力と引き換えに唯一空振りを奪える決め球さえ失ってしまえば、

……もうマウンドにはいられない。

ギュッとグローブの中のボールを握る。この試合、空は自分がスタンドプレイに走っていることを自覚していた。チームの和を乱してでも勝つために全力を注いできた。

きっと監督もチームメイトもいい気はしてないだろう。だがそれでも未だ空がマウンドに立っていられるのは、圧倒的な力で稲実打線を抑え込んできたからに他ならない。

そしてそれができなくなってしまえば、最早自分に居場所はない。

「っつ」

まるで焦るようにセットポジションに入り全身の力を振り絞る。また一つ身体から力が失われていくのを感じながら、空は今度こそと右腕を振り切った。

さっきと同じ全力を込めての真っ直ぐ。
決して本調子でないとはいえ、目の前の打者から空振りを奪うには十分すぎるボールの筈だった。けれど今回もミットがその音を鳴らすことはなかった。
――ファールボール
鈍い金属音、転がる打球。
繰り返される光景。
なんでだと、最早実際に言葉を吐き捨てて空は強く奥歯を噛み締めた。
……なんで空振りがとれない？　なんであてられる？
わけがわからなかった。これが広橋大地なら、轟雷一なら理解できる。だが今空が対峙しているのは天武の才を持つあの2人ではない。過去三打席の内容を加味してもバットに当てられるはずがないのだ。
空は苛立った視線を打者へと向けた。あと一歩の所で踏みとどまる原田の顔はこの上なく澄んでいた。追い込まれているのに一切焦りの色はなく、ただただ来たボールを打つことだけに集中し、鋭く研ぎ澄まされていた。
……これが四番ってことかよ。

かつてクリスは言った。四番に求められるのは打率やHR数といった表面上の数字だけではないと。ここ一番、勝敗を分かつ大事な場面での集中力が必要なのだと。そしてそれは四番という重圧を背負い続けることで磨かれていくものなのだと。

背筋に冷たいものが走る。単純な力量差を超えた重圧を空は感じた。

けれど、

「負けてたまるか」

一方的にクリスへサインを出して、空はプレートを蹴った。三度投じるのは全身をフルに使っての渾身の真っ直ぐ。左足を大きく踏み出して下半身の力を上半身へ、そして指先へと集める。そして勢いそのままに右腕を振り降ろす一瞬、空は身体からすぅっと力が抜けるのを感じた。

「あっ」

自分でも驚くほど間の抜けた声と共に投げたのは、自分でも驚くほどに気の抜けたボールだった。球威もなければノビもない、ただ少し速いだけの棒玉。およそ打撃投手としてなら完璧な一球が振り下ろされる銀色のバットに向かって吸い込まれていく。

キィィィン

心地いい快音を響かせた打球が空の頭上目がけて飛んでいく。

反射的に伸ばしたグローブ。

今度は、届かなかった。

――――うぉおおおお!!

そこから先の光景を空はよく覚えていなかった。気が付けば打球はセンターフェンスにぶつかっていて、ゆっくりとサードランナーのカルロスがホームに還ってくる。これで同点。打ったと同時にスタートを切っていたファーストランナーの白河もいつの間にか三塁を回っていて、ボールが戻ってくるよりも早く本塁へと滑り込んできた。

これで逆転。

逆転。

そう、逆転のタイムリー二ベース。

耳をつんざく歓声の中、スコアボードの数字が書き換えられる。０の代わりに刻まれた２という数字を、空は虚ろな目で眺めていた。

8回の裏、青道1―2稲実。
稲実高校、逆転。

スタミナ不足はそう簡単には克服できないよって話。
あっ、9月中に完結は多分無理です。すいません。

33話

I

球場の空気は一変していた。

それまで球場を包みこんでいた青道ファンによる血気盛んな応援の声は鳴りを潜め、代わって稲実ファンによる大合唱が地鳴りのように鳴り響く。たった１プレイで見事なまでにくっきりと分かれた明と暗。

つくづく野球とは恐ろしいものだと、峰は改めてその怖さを思い知される気分だった。

「追い込まれてから粘りを見せ、失投を一球で仕留めた。さすがは稲実の４番だな」

「この２点は大きいですね」

峰と大和田、月間『野球王国』記者コンビが揃って見つめるのは一気に優勢が入れ替わったスコアボード。８回の裏、稲実は主砲原田によって遂にあの山城を打ち崩し、待望の得点、それも２点という逆転を果たした。峰は後輩の言葉に同意

すると、扇子でを開き汗が垂れる顔を仰いだ。
「青道の残す攻撃は9回の表のみ。この終盤に来ての逆転は精神的にも青道にとってダメージが大きい。それにまだ稲実の攻撃は終わっていない」
「2アウトランナー二塁。8回までの山城君でしたら問題なく抑えてきましたが今は……」
「あぁ。厳しいだろうな」
そういって、峰は視線をグラウンドへと落とす。小高いマウンドの上ではこの回二度目となる円が作られていた。ただ先のそれと今のとでは傍から見ていても明らかに空気が違うのがわかる。その最たる証が、円の中心にいながらも顔を上げられずにいるエースだった。
「ここまで山城君もよく投げてきたがやはり限界だったな」
「これは稲実打線の粘り勝ちということでしょうか？」
「そうみて問題ないだろう。稲実は打てないながらも審判の狭いゾーンを上手く利用することで球数を稼ぎ、山城君のウィークポイントであるスタミナを的確に削っていった。この辺りは百戦錬磨の国広監督らしい作戦だな」

「耐球作戦……明川と同じですね！」
「あぁ。ただ明川と違うのは稲実にはそれをこなせるだけのタレントが揃っていたということだ。耐球作戦は好投手に対する基本戦術だが、稲実ほどの強豪校が行えばその効果は何倍にもなるからな」
　また成宮という山城と互角に渡り合えるエースの存在も大きい。ロースコアな展開で進めば進むほど投手にかかるプレッシャーは大きくなるのだから。そういう意味では稲実だからこそとれた作戦だとも言える。
「山城君……やはりここで交代でしょうか？」
「おそらくな。いくらなんでもこれ以上は引っ張れないだろう」
　山城を見に来た観客には残念だろうが、ここで代えなければ一気に点差が開きかねない。2―1という現状でさえ青道には厳しいのだ。2点、3点と差が広がれば青道の勝機は限りなく小さいものとなる。
「そのことは当然青道の片岡監督もわかっているはず。得点圏にランナーを背負っているが2アウトだ。リリーフにかかるプレッシャーは大きいだろうがここは何とか踏ん張って次の攻撃に――」

「えっ、でも峰さん。青道ベンチから伝令が出てきましたよ？」
「なに？」
後輩にならって視線をずらせば、青道ベンチから飛び出してきた選手は確かにマウンドにこそ向かっているもののグローブをはめていない。伝令を出すということはつまり続投を意味する。馬鹿なと、峰は片岡の正気を疑った。この場面、誰から見ても山城の限界は明らか。続投など冷静に考えればあり得るはずがない。
「それに伝令を託されているのは――」
意外な人物の登場に峰は目を見開いた。

◇

「……すみません」
聞こえるか聞こえないかわからない、消えるようなか細い声で空は謝罪の言葉を述べて黙り込んだ。いや、それ以上何か話す気力すらないのかもしれない。稲実に逆転された後、マウンドに集まった青道の内野陣と共にクリスが見たのは虚ろな瞳で力なく項垂れるエースの姿。青道の中で最も付き合いの長いクリスでさえ、こうまで打ちのめされた空を見るのは初めてだった。

「山城……」

名前を呼ぶも、空はピクリとも反応しなかった。クリスは何か言おうと再度口を動かしかけたが、結局何も言うことはできなかった。

慰めも、叱責も、激励も、同情も。

今自分が何か言えばきっと山城は本当に立ち直れなくなる。それがわかってしまうからこそ、クリスは口を閉ざすしかなかった。

……俺のミスだ。

空が重圧を感じていることはわかっていた。

いや、わかっていたつもりだった。

……もっと早く気が付くべきだった。

空が一人で全てを背負いこんでしまっていることに。こうして今にも崩れ落ちそうなほど精神的に追い詰められていたことに、もっと早く気付くべきだった。

見抜くための材料なら目の前にいくらでも転がっていた。いつもよりも荒々しい投球、回を経るごとに険しくなっていく顔、一点をもぎ取ったスタンドプレイ。

この上なく明白だ。

にもかかわらず、こうしてハッキリとした形になるまでクリスは何もできなかった。捕手としての役目を果たせなかった。

ギュッと、握った拳に力を込める。

……俺は無意識の内に山城に頼りすぎていた。

焦っていたのかもしれない。甲子園をかけた決勝という初めての大舞台に。こいつなら何とかできる、山城ならきっと大丈夫。そんな信頼といえば聞こえのいい短絡的な依存がクリスの目を曇らせた。自分の不甲斐なさを呪うクリスだったが、まだ試合中である以上後悔ばかりもしていられない。奥歯を噛み締めながら投手交代を求めるためにベンチを振り返り、そして目を見開いた。ダグアウトから勢いよく飛び出してきたのは確かに青道の投手。けれどつい今しがたまでブルペンで肩を作っていた沢村でも川上でもない。

山城、沢村、川上に次ぐ青道投手陣最後の一人。かつてエースと呼ばれた男がグローブも持たずマウンドへ向かって走ってくるではないか。

「……丹波」

丹波光一郎。本来この決勝で投げる筈だった男が、伝令役としてマウンドに上

がった。

II

8回の裏という終盤に来て遂に逆転を許してしまった青道高校。この回二度目となる内野陣がマウンドに集まったことで球場にいる誰もが投手の交代を予想していたが、実際に青道ベンチが下した判断は伝令、つまりは山城の続投だった。

この意外過ぎる采配に神宮はどよめきに包まれたが、何も驚いたのは観客達だけではない。青道ベンチの一員である太田もまた伝令を送った片岡に驚きを隠せないでいた。

「か、監督。本当に山城を交代させなくてよろしいんですか？」

太田がそう不安な声を漏らすのも無理はなかった。ここまでよく頑張ってきたものの、山城が限界なのは誰の目からも明らか。いくらエースナンバーを背負っているとはいえ、これ以上引っ張る理由などどこにもない。

「川上の準備は出来ています。今からでも交代した方が……」

「いや、交代はない」

太田の進言をバッサリと切り捨てる。そう一刀両断されてしまえば、部長ではあるものの実質的な采配の権限を持っていない太田には何もできない。

とは言えやはり疑問は残る。せめて理由をと太田が尋ねるのを予期していたかのように、片岡はマウンドに視線を固定したまま重い口を開いた。

「……今日までの山城についてどう思う？」

「えっ？」

「エースとして相応しかったと思うか？」

その問いかけがこの続投と何の関係があるのか太田にはわからなかった。けれど監督にはきっと何か考えがあるのだろうと思い直し、ここ数週間の記憶を振り返ってみる。

「相応しい……と思います。その、多少独りよがりなプレイもありましたが成績は素晴らしいですし、十分エースと呼べる投球をしていたかと」

「確かに山城がここまで築いてきた成績は目を見張るものがある。試合を重ねるごとにエースとしての自覚と責任感も芽生え始め、成長を遂げてきた。もしも山城がいなければ大会をここまで勝ち抜いてくるのも容易ではなかっただろう」

だが、と片岡はそこで言葉を区切った。

「試合を勝ちあがるごとに、山城がエースとしての自覚を強めるごとに俺は山城に足りないものを感じるようになっていた」

「足りないものですか？　それはいったい……」

「信頼だ」

真中が市大のエースであったように、片岡もまたかつての青道のエースという山城と同じ立場にいたからこそ気が付けた。一見チームメイトを信頼しているように振る舞ってはいても、山城が本当の意味で信を置いているのはクリスただ一人だということに。

「チームを背負うエースとしての責任感を養うにつれて無意識の内に山城はチームメイトを〝共に闘う仲間〟とはみなさなくなっていた。だからこそ状況が切迫すればするほど自分一人で抑えようとして投球が強引になる」

それはルーキーながらにエースを任されたことの弊害なのかもしれない。本来片岡は丹波をエースに据え、その姿を学ばせることで空にエースとしての在り方をじっくり理解させるつもりだった。けれど丹波の怪我によって状況が一変した。

チームメイトとの仲間意識を育む間もなく与えられたエースナンバーは、確かに空にエースとしての器を形作ってはくれたが完成とまではいかせてくれなかった。
「いずれ壁にぶつかることは予めわかっていた」
「そ、それならどうして山城に伝えなかったんですか？　前もって伝えていればあるいは……」
「無駄だ。単に口で伝えたところで意味はない。例えクリスが言ったとしてもな」
刃物の危険性を口で説明しても実際に怪我をしなければ覚えないように、具体的な体験と結びつかなければ聞き流されるだけ。特に空のように飛びぬけた実力があれば尚更だ。
「独りよがりで打たれた山城は今自分を見失っている。本来であれば交代が最善だろう。だが見方を代えればこれはチャンスでもある」
「チャンス、ですか？」
「あぁ。山城にエースとして足りないものを本当の意味で理解させるためのな。だからこそ丹波を伝令役に選んだ。前エースである丹波にな」
「し、しかしそれは余りにも危険ではないですか？　丹波は厳しい顔をしていま

したし、何よりも山城が立ち直れないまま更に追加点を奪われるようなことになれば……」

「投手を交代してもリスクはある。なら俺はここまで闘ってきた選手達の可能性を信じたい」

それにだと、片岡はこの劣勢の状況にもかかわらず少しだけ口元を緩めた。

「これまで散々山城に負担をかけてきたんだ。そろそろ上級生も意地をみせなければな」

◇

――山城にお前の想いを伝えてこい。

そうベンチから送り出された丹波だったが、実のところ何を言うべきかは定まっていなかった。丹波が空に抱く気持ちは色々と複雑だ。純粋な私情だけでいえば憧れだったクリスの期待と信頼を独占し、エースの座を奪い取った憎い敵。しかし少し冷静になって考えれば大事な時期にチームから離脱した自分の穴をしっかりと埋めてくれた後輩でもある。

理屈で考えれば恨むのは筋違い。けれど理屈だけで割り切れるほど丹波は大人で

はなく、また感情だけで一方的に逆恨みできるほど子供でもなかった。

……俺はどうすればいい。

励ましの言葉をかければいいのか、叱責すればいいのか、あるいは無様に逆転されたことを哂えばいいのか。モヤモヤとした気持ちを抱えたまま丹波は久方ぶりにマウンドの土を踏みしめ、力なく俯く後輩を目の当たりにした。

……山城。

心のどこかで丹波は山城空を自分とは違う存在だと思っていた。その図抜けた実力が明らかになればなるほど、あらゆる悩みとは無縁の突き抜けた存在だと勝手にみなすようになっていた。だからそんな超人がこうして情けない姿でいることに、かつての自分を彷彿とさせる弱い姿を哂していることに丹波は衝撃を受けた。

……そうか。こいつも……

少し考えれば当たり前なのだ。どれだけ実力があろうと山城空はまだまだ未熟なルーキー、決して完璧などではない。足りないものはいくらでもあって、弱い部分もちゃんとある。そんな至極当然のことを丹波は今になってようやく気がついた。

――先輩としての役目を果たせ光一郎。それが三年の、元エースとしての責任

だ

幼馴染から突き付けられた言葉が蘇る。静かに瞼を閉じ、そして開く。

胸に溜まったわだかまりはもう、消えていた。

「顔を上げろ、山城」

だが空は依然として俯いたままだった。もしかしたら聞こえていないのかもしれない。だったら無理やり聞かせるまでだと、丹波は空の両肩に手を置いて前後に揺さぶった。

「山城」

「あっ。丹波……さん」

のっそりと幽鬼のように青白い顔が上がる。今の今まで丹波が来ていたことにも気づいていなかったのか。覇気のない声には微かな驚きが含まれていた。

空は焦点の合わない瞳で丹波を見た後、すぐに視線を逸らした。

「……すみません」

「なぜ謝る？」

「だって逆転されて……俺、エースなのに。絶対点を与えちゃいけないのに……試

合を壊してすみません」

　ともすれば今にも泣きだしそうな声だった。どうやら根本的に思い違いをしているらしい。ふぅと丹波がため息を漏らすと、空の身体がびくりと震えた。

「山城。俺は今呆れている。なぜかわかるか？」

「それは逆転されたからで……」

「違うな。俺が呆れているのはたかが勝ち越されたぐらいでお前がもう負けたような顔をしていることにだ」

「えっ？」

「試合はまだ終わっていない。点差はたった一点、最後の攻撃もまだ残っている。なのにどうして俯く？　どうして負けたと決めつける？」

　そう言うと、空はポカンとした顔をした。

　一体この人は何を言っているのか、そういう表情だった。

「いや、だって……相手は成宮さんで……」

「成宮がどうした。ウチの打線は同点にもできないほど弱いのか？」

「それは……」

言葉に詰まった空を見て、丹波は苦笑した。その反応だけで空がチームメイトに対して何ら期待を抱いていないことがわかってしまったのだ。ここまでの試合の展開を見ていればそう思ってしまう気持ちもわからないではないが、それではいけない。

「山城。ベンチ裏で俺は聞いたな？　しんどいかと」

「……はい」

「あの時、お前はまだ行けると言った。今はどうだ？　しんどいか？」

「しんどい……です」

「だろうな。何せここまでずっと試合の重みを一人、いやクリスと合わせても二人で背負ってきたんだ。しんどいと思わない筈がない」

むしろそれで 8 回まで持った方が驚きだ。改めて山城空という怪物のスペックの高さを丹波は認識した。

「しんどいと、疲れたと感じた時、重みを軽減する方法がある。それが何かわかるか？」

「……なんですか？」

「簡単だ。自分の重荷を他の奴らにも背負わせればいい」
「はっ？」
「何も投手一人が辛い思いをする必要はない。苦労は分担すればいい、そのために野球には９人も選手がいる」
「いや、ちょ――――」
「打たれたのは捕手の責任、負けているのは打線が不甲斐ないから。そう考えれば少しは気が楽にならないか？」
「……思えませんよ、そんなこと」
「なぜだ？」
「なぜって……」
唇を噛み締め、空は再び下を向いた。
あぁ、やっぱりわかっていないと丹波は思った。
「好き勝手に一人でやって逆転されて、それで誰かに押し付けるとかできるわけないじゃないっすか。先輩達だって納得するわけないっすよ」
「だからさっきから誰とも目を合わさないのか？」

返答は帰ってこない。けれど無言こそがその答えだった。恐らくは恨まれているに違いないとでも思いこんでいるのだろう。

今度こそ深々と、丹波は息を吐き出した。

「山城」

「……はい」

――――あまり俺達上級生を見縊るな。

そう言って、後輩の頭を軽く叩いた。突然の衝撃に伏せていた顔を上げて目を白黒とさせる空に、丹波は〝彼ら〟を指し示した。

この苦境の中でもいつもと変わらぬ4人の内野手を。

えっと間抜けた声を漏らすエースの姿に小さく笑い、かつてのエースはこれまで何度となく共に闘ってきた仲間達に顔を向ける。

「稲実相手にここまでたったの2失点。お前は先発としての役割を見事に果たしている。もしも今責められるべき人間がいるとしたら、それは一年に頼ってばかりで肝心な所で役に立たない上級生だな」

「げっ。丹波さん、俺らが気にしていることを！」

「へぇ〜。試合に出てもいないくせに言うねピカイチロウ、これは後が楽しみだね」
「だが事実だ。俺達がもっと点数を取っていれば山城に負担を強いることもなかった」
「ウガウガっ！」
生真面目な丹波らしくない皮肉めいた軽口を皮切りに、ここまで沈黙を続けていた内野手達が次々と口を開いていく。オーバーアクションをとる倉持、ニコニコとした笑顔でさらりと毒を吐く小湊、真面目に自分達の未熟さを反省する結城、何を言っているのかわからない増子。いつもと同じ。
そう、いっそ不自然なまでに何らいつもと変わらない光景。
「なん…で…」
理解できなくてパニくる空に、青道の二遊間コンビが人の悪い笑みを浮かべる。
「ひゃハハハッ！　お前の落ち込んだ顔とか初めて見たぜっ！」
「マウンドじゃ大抵すましてるか笑ってるかだったもんね。あれ、打席から見ると結構ムカツクって知ってた？」
「どうして……」

困惑する空に、青道の4番と5番が宣言する。
「安心しろ。点なら必ず俺達がとってやる。お前を負け投手にはさせない」
「うがうが！」
「いや、なんで、なんでそんな顔でいられるんすかっ!?　一人で好き勝手やった挙句に逆転されたんですよ？　恨まれて、当然なのに……」
改めて自分のやったことの愚かさを再認識したのか、後半になるにつれて空の言葉から段々と力がなくなっていく。そんないつになく弱気な後輩を先輩達は一笑した。
「ばーか。一年のミスにぐちゃぐちゃ文句言う先輩がいるかよ」
「後輩のミスをカバーするのは先輩として当然だしね」
「山城。確かにお前は独りよがりな投球をした、そのことは素直に反省すべきだ。だがそれを理由に俺達がお前を見捨てることは決してない。なぜならお前は俺達の後輩であり、そしてエースだからだ」
「ウガッ！　ウガウガッ！」
空は呆然と彼らの言葉を聞いていた。

ゆっくりと、丹波が空の背に手を置く。

「山城、確かにお前は強い。つい一人で先走ってしまう気持ちもわからないでもない。だが忘れるな、お前は一人じゃない。そしてクリスとの二人だけでもない。お前にはもっと多くの仲間がいる」

「仲間……」

「チームを背負う気概を持つことはエースとして大切だ。だがそれに押し潰されるな。決して独り善がりになるな。もっとチームを、先輩を、仲間を頼れ。お前が考えているほどこいつらは弱くない」

かつてのエースが今のエースへと伝える、最初にして最後の教えだった。

ここから先はもう本人次第。

押し潰されたまま終わるのか、それとも立ち直るのか。

……まぁ、この顔を見れば答えは出ているな。

随分と血色がよくなった頬を一瞥してから、丹波はここまで一言も発していない選手へと視線を送る。真剣な眼差しで深々と頷く姿を見る限り、どうやらもう一人も立ち直ったらしかった。

……俺の役目はここまでだな。

先ほどからセカンドの塁審がチラチラと時計を確認している。自分の役目が全て終わったことを悟り、丹波は最後に柔らかくエースの背中を叩いた。

「任せたぞ、エース」

Ⅲ

――任せたぞ、エース

そう残して丹波はマウンドを降りた。同時にマウンドに出来ていた輪も解かれ選手達が各々のポジションに散らばっていく。プレイが再開するまでのわずかな時間、ただ一人マウンドに残った空は深く息を吐きだし自分の中に埋没した。

……仲間を頼れか。

正直に言えば丹波の言ったことがすべて理解できたわけではなかった。

何せまだ高校に入学してから4か月足らず。仲間が大事だと説かれて、はいそうですかとチームメイトに全幅の信頼を置けるほど空は先輩達のことをよく知らない。

だがそれでも、芽生えたものは確かにある。

……俺はクリス先輩を甲子園に連れて行きたいと思ってた。

かねてからの約束、夢。それ自体は今も変わっていない。

だがここに来てそこにもう一つ新たな目標が加わった。グラウンドで最も高い場所からぐるりと、空はチームメイトを見渡す。サード、レフト、ショート、センター、セカンド、ライト、ファースト、そしてキャッチャー。

クリスを除けばあまりよく知らない、そして知ろうとも思わなかった先輩達。

けれど今は、

――この〝チーム〟でもっと闘ってみたい

エースとしての義務感でも何でもなく、心の底から素直にそう思えた。

止まっていたプレイが再開されると打席に入る稲実の5番山岡が一気に試合を決めようと気合十分な顔でバットを構える。タイムを取る前と何ら状況は変わらず2アウトランナー二塁。一打でれば本当に試合が決まりかねない大ピンチ。

しかしそんな圧倒的不利な場を目の前にしているにもかかわらず、空の顔は不思議と明るかった。身体は鉛のように重いというのに心は羽のようにどこまでも軽

かった。

緊迫した場面にそぐわぬ笑みさえ浮かべ、空はうずうずと疼く身体を抑えながらクリスのサインを待つ。

……やべぇ、楽しい。

こんなにピンチが楽しいと、野球が楽しいと思えたのは随分と久しぶりだった。エースに選ばれ試合の責任を背負うようになってから忘れていた感覚。懐かしくも心地よい感覚に身を委ね、空はセットポジションから左足を前方へと大きく踏み出す。

サインに従って投じたのは四シームジャイロ。

バッサバッサと三振を奪っていた序盤に比べれば格段に球威も球速も落ち、コントロールもアバウト。それまでの打席とは比べるまでもなく甘い球に山岡は初球からバットを出した。やや芯を外したものの力強い打球が空の足元を抜けていく。

打たれたことに対する驚きはない。

打ちごろとまではいかずとも、最早空振りを奪えるようなボールでないことは空自身がよく理解していた。2アウトのため打った瞬間にセカンドランナーはスター

トを切っており、このままセンターに抜ければいかに強肩の伊佐敷とてホームで刺すことは難しいだろう。最悪の展開を想像した青道の応援席から立ち昇る悲鳴。

けれど対照的に後ろへと振り返る空の顔に悲観の色はない。

彼らは言ったのだ。

もっと仲間を頼れと。

後輩のミスをカバーするのは先輩として当然だと。

ならば、

「捕れるっすよね、小湊先輩！」

小刻みにバウンドを重ねた打球がセカンドベースを超えてセンターへと抜け出さんとする間際、突如として出現したグローブが打球の行方を遮った。

それは正に神業と呼ぶに相応しいプレイだった。

小さい体を目一杯セカンドベースに伸ばしながらしっかりと打球を捕球した小湊は、体が地面に着くよりも早くカバーに来ていた後輩にボールを送った。

「倉持っ！」

「うっす！」

掛け声とともにボールはセカンドのグラブからショートの右手、そしてファーストのミットへと送られる。４―６―３。一塁塁審が右手を上げたことで成立したスーパープレイに青道の応援団からはそれまでの悲痛な叫びから一転して歓声が巻き起こる。

３つ目のアウトがとれた空はマウンドを離れ、ベンチの前で満面の笑みを浮かべて二遊間を出迎えた。

「ナイスプレイ！」

８回の裏終了。

青道１―２稲実。

この試合の決着がつくかどうかは次の９回の表に託された。

青道高校９回の打順は、

４番　結城

５番　増子

６番　クリス

空君復活。これで丹波さん人気が少しでも上がればいいなぁ（チラッ

あと1話か2話で完結になると思いますので、いましばらくおつきあいください。

34話

I

１―２と青道の一点ビハインドで迎えた９回の表。この回に少なくとも１点取らなければ回の裏を待たずして夏を終えてしまう青道の攻撃は４番の結城から。

ここで一本打ってくれと球場中に詰めかけた青道ファンの願いを一身に浴びながら青道の主砲は打席に入り、静かにバットを立てる。鋭い眼光が見つめる先にいるのは依然として青道の前に立ち塞がる分厚い壁、成宮鳴。既に１００球を優に超えた球数を投げているにもかかわらずこの９回にもマウンドに上がった稲実のエースは静かにプレイのコールを待っていた。

――――プレイッ

最後の幕が上がる。

ゆっくりと成宮がモーションに入るのに合わせて、結城もまた足を上げてタイミングを計った。一点を追いかけるこの状況において先頭打者の役目は極めて重要だ。先頭が出るかでないかでは得点に対する期待値、そしてベンチのムードも大き

く変わる。

初球、コースからやや外れたスライダーを見送ると結城は一度打席を外した。バッターボックスの外で軽く素振りを行ってから打席に戻り、バットのグリップを握りなおす。

「ふぅ」

静かに漏れたその吐息が今の結城の心情を示していた。ここまで結城は成宮相手に3―0と完全に抑え込まれ、主砲としての役割を果たせていない。チャンスの場面で一本打てていればと、後悔を抱いてしまうのも4番として当然のことだった。

2球目、胸元への真っ直ぐに結城はバットを出した。過去の打席でタイミングを合わせていただけあって振り遅れることはなかったものの、芯を捉えきれず打球は綺麗にバックネットへと突き刺さった。これでカウントは1―1。

まだどちらが有利ということもなければ、不利ということもない。カウントが若いこと、ストレートにタイミングが合っていること、そして打順が下位に行くことを思えば追い込まれるのを覚悟してでも甘い球だけを待ち、長打を狙いにいくのも4番の選択肢としては十分にあり得た。しかしカウントが平行に戻った直後、結城

は両手の位置を上へとずらしバットのグリップを余らせる。

現在放送中のテレビ中継では青道の4番としては弱気な選択だと昔気質の解説者が苦言を呈したが、当然のことながらそんな外野の声など結城の耳には届かない。

3球目、成宮が投じたのはストライクゾーン低めのフォークボール。しかしさすがの成宮も疲労は隠せないのか、序盤に比べれば随分と落差が小さくキレも悪い。届くと瞬間的に判断した結城は短く持ったバットを落ち切らない白球目がけて振りぬいた。

鋭いスイングに弾き返されたボールは瞬く間にショートの頭を越え、前進してきたレフトの前に落ちる。成宮の表情が苦いものに変わるのを横目で確認しながら結城は1塁を大きく回ってストップ。ノーアウトランナー1塁、望んでやまなかった先頭打者の出塁に青道の応援席は一気にヒートアップ。心なしかブラスバンドの演奏は音量を上げ、可愛らしく踊るチア部員達の動きが大きくなる。

押せ押せムードが球場に漂い始める中、続く5番の増子に青道ベンチが命じたのはバントだった。1点差である以上同点狙いでランナーを進めるのはセオリー通りとは言え、クリーンアップに送らせてまで下位打線に勝負を任せるというのは

高校野球でも中々に珍しい。しかしそんな一見奇妙に思える采配を疑問に思う人間は球場にはいなかった。

皆知っているのだ、次の打者が誰なのか。

単純な成績だけで言えば青道一、打席数こそ少ないもののここまで最も多くの勝利打点を挙げてきた強打者。スタンドから流れ始める『Ｅｙｅ Ｏｆ Ｔｈｅ Ｔｉｇｅｒ』。誰もが一度は耳にしたことのある力強い楽曲に乗って彼は打席に立った。

滝川・クリス・優。

重い怪我を乗り越えて復帰した天才が遂に勝負の舞台に上がる。

◇

９回の表１アウトランナー２塁。追いかける青道からすればここしかないというチャンスで打席を迎えたのは６番のクリス。ここまで成宮相手に２打数１安打の１四球と打線の中で最も成宮にあっており、更には大会を通じての得点圏打率も極めて高い。

否が応でも高まる得点の期待。そんな盛り上がる青道の気勢に水を注すかのように守る稲実側は一度タイムを取った。先ほどランナーを進めたことで１塁は空い

ている。稲実側からすればここは危険の大きいクリスとの勝負を避け、守りやすい形にしてから次の7番打者勝負にした方が幾分かは勝算が高い。

けれどマウンドの輪が解かれプレイが再開したとき、捕手である原田は立ち上がってはいなかった。いつものようにどっしりと腰を下ろしてミットを構えるその姿は、見ている者に勝負だということを知らしめるには十分だった。

――おい、ましかっ!?　稲実、クリスで勝負かよっ!?

――ここまでの打席を見ている限り成宮の分が悪いように思うけど……

――やっぱこう、あるんじゃねぇのか？　ほら、エースの意地とかさっ！

――いやそれよりも逆転のランナーを出すことを嫌ったんだろ。ほら、青道のベンチ前を見ろよ。

――うぉっ!?　ありゃ御幸じゃねぇか！　そういや青道にはまだあいつがいたんだったな！

――あぁ。後攻めの稲実からすれば最悪同点まではOKの場面だ。ここでクリスを歩かせて御幸勝負っていう逆転のリスクは冒したくなかったんだろ。

球場の至る所で稲実の意図が話し合われたが、どれが本当なのかは当人達に聞い

てなければわからない。しかしただ一つハッキリとしているのは、成宮と原田のバッテリーは勝負を選んだということ。

打席に入るクリスにしてみればその事実だけでよかった。

……感謝する、原田。

こうして自分に贖罪の機会を与えてくれたことに。クリスはいつもと変わらぬルーティーンで土をならしバットを構えながら、前の回の丹波の言葉を思い出した。

……もっと仲間を頼れか……耳が痛いな。

あれは空に対してだけではなく、自分にもまた向けられた言葉であることをクリスは理解していた。チームメイトをないがしろにした気はない。ただ山城空という輝きに魅せられるあまり、いつの間にか空と自分だけでこの決勝を闘っている気になってしまったのもまた事実だ。チームの要である捕手としてはあり得ぬ醜態。それを払拭するためにもここは打たなければならない。

……いや違う。

そんな個人的なことはどうでもいい。

チャンスメイクをしてくれた結城と増子のためにも、一緒に闘ってくれるチーム

メイトのためにも、そして何よりもこんな情けない先輩を慕ってくれるエースのためにも。

……絶対に打つ。

内に秘めた炎が静かに燃え上がると共に全身の感覚が四方へと広がっていく。

いつもならばこういうチャンスの時、クリスは相手の配球を読んだバッティングをする。捕手という己の立場を活かして相手がどう攻めてくるのか、どんなコース、ボールを投げるのかをある程度決め打った上で打席に立つ。

その読みの精度の高さが打者としてのクリスを支えているのだが、この場面ではあえてその読みを全て捨てた。理論的な読みを捨て、ただただ本能的な感覚に身を任せた。

……今なら。

論理だった理由があったわけじゃない。

だが〝今の自分〟にとってはこれが最善なのだと直感したのだ。

主審からプレイのコールがかかると成宮が投球モーションに入る。甲子園でもクイックには定評があるだけあって、その動作には一切の無駄もなければ癖もない。

球種を判別することは愚かまともにタイミングを合わせることさえ至難だというのに、

……外角にフォーク。

リリースするよりも早くコースと球種の両方を見抜くとは一体どういう魔法か。

クリスはバットをピクリとも動かさず予想通りアウトコースに沈んでいく変化球を見逃した。

――ボール

主審の低い声をどこか遠くに聞きながらクリスはバットを構えなおす。

――静かだった。

ブラスバンドによる演奏や声援など球場は数多の音で囲まれているというのにクリスがいる世界はどこまでも静かで、そしてどこまでも澄んでいた。

2球目と3球目に成宮が投じたのはアウトコースへのスライダー。ボールゾーンからストライクゾーンへと入ってくるお手本の様なバックドアだったが、厳しいゾーンに入れようと内に大きく曲げてきた分だけコースはやや甘かった。

打とうと思えば打てたかもしれない、けれどクリスがそのバットを動かすことは

なかった。

――――ットライクツー！

これでカウントは1―2と投手有利。一度もバットを振ることなく追い込まれたことに青道ファンからは心配の声が飛んだが、とうのクリスの表情には何の変化もない。

真剣な顔を崩すことなく3度バットを構えなおす。そんな余りにも平然としすぎる所作を不気味に思ったのか、稲実バッテリーは1球釣り玉も兼ねて高めにボールを外した。

が、やはりバットは微動だにもしない。

2―2の並行カウント、次が勝負球になることは誰もがわかっていた。この勝負の命運を占う5球目、成宮が綺麗なクイックモーションからボールを手放した瞬間、クリスの世界から色が消えた。

……チェンジアップ。

それは青道打線が警戒しながらも結局誰一人として捉えきれなかった魔球だった。打者方向へややスクリュー気味に落ちていくチェンジ・オブ・ペース、7回

に入ってから一度として投じていなかった変化球をバッテリーは決め球として選択した。

この緊迫した場面で緩い球を要求した原田も豪気ならば、見事にその期待に応えた成宮は怪物としか言いようがない。それほどまでにそのチェンジアップは完璧だった。

真ん中やや低め。

追い込まれた打者心理からすればついついバットを出したくなる位置からボールゾーンへと沈んでいくブレーキングボール。球速、コース、高さ、全てにおいて完璧。

例えあらかじめ来ることがわかっていてもストレートとの球速差から体がついていかない、ヒットどころかバットに当てることすら極めて難しい最高の1球。プロで活躍する一流のスラッガーでさえ、このチェンジアップに対処するのは至難の技だろう。まかり間違っても高校生が打てるようなボールではない。

けれど、

「っつ！」

かつて至宝とまで呼ばれた才能が、そんな道理を覆す。

極限までに高まった集中が、奇跡を呼び起こす。

――それは後にバッティングのお手本とさえ謳われるほどの美技だった。

小さく上がった左足が下された先はバッターボックス前方の丁度ど真ん中。緩急に惑わされなかった上半身が弓のように後方へと引き絞られ、下半身は軸足に体重を乗せたまま決して開かない。沈むボールに対して伸びる両腕、伸びるバット。ややアッパー気味のレベルスイングがボールを捉える刹那、全身から集約された力がそのスイングを加速させた。

快音を鳴らし大きく振りぬかれたバット。

見た者を虜にするほどに美しいスイングから放たれた打球は、これまた見た者を虜にするほど美しいアーチを描いた。上空に高々と舞い上がった白球が向かう先はセンター最深部に悠然とそびえ立つバックスクリーン。打った瞬間にそうだとわかる当たりだというのに、誰もがその打球に目を奪われ息を呑んだ。それまで騒然としていた球場に訪れた一時の静寂。そんな中、クリスはバットを捨てゆっくりと1塁へ走り出す。

そして長い滞空時間を経て打球がバックリーンに触れた瞬間、世界は音を取り戻した。

――うぉ、うぉ、うぉおおおおおお!!

――ホームラン！　クリスの逆転2ランホームラン!!　青道がこの土壇場にきて逆転しやがった!?

――クリスせんぱぁぁぁぁい！　愛してまぁぁす！

――成宮が打たれたっ!?　おいっ、すぐに稲実優勢にしていたネット記事を書き換えろっ！　この勝負、本当にわからなくなったぞっ!?

――な、なんか凄いバッティングだったな、こう、魂を揺さぶられるっていうか。

――う、うん。野球ってすごいんだね。私、ビックリしちゃった。

――なんという美しい放物線じゃ。ひょっひょっ、長生きはするもんじゃの。

思わずあの小僧に王の姿を重ねてしまったわい。

興奮冷めやらぬ神宮球場。

ダイヤモンドを一周したクリスはホームで待っていた結城とタッチをかわし、べ

ンチへと戻る。そこで待っていたのは満面の笑みで自分を出迎える仲間達だった。
手荒いという言葉も生ぬるい祝福の嵐に揉みくちゃになった後、クリスは呆然自失といった単語がよく似合う後輩に微笑んだ。
「これで勝ち投手の権利は得たな」
「クリス……先…輩…」
「少しはお前に釣り合う捕手になれたか？」
「俺には勿体ないくらい……最高の捕手ですよ」
悪戯っぽく問いかけたクリスに空もつられて笑った。
9回の表、青道3―2稲実。
青道高校、土壇場で逆転。この後、逆転したことでそのまま打席に送り出された7番門田と8番白洲はややボールが荒れた成宮相手に粘りを見せたものの結果的には凡退。
その結果3―2と、同じ1点差ながらも立場を代えて最終回に突入することになる。
稲実の攻撃は6番の平井から。

立ち向かうのは青道のルーキーエース。
山城空が最終回のマウンドに上がる。

Ⅱ

――幕が下りようとしていた。
3週間にも及ぶ長きトーナメントの集大成。青道と稲実、西東京を代表する野球名門校同士が甲子園というたった一つの切符をかけて争い合う西東京大会決勝戦。
試合開始から2時間弱、前評判に違わぬ投手戦となったこの試合も遂に最終回を迎えた。
佳境を迎えたことでより一層激しさを増す応援合戦。リードする青道側はこのまま逃げ切ることを、追いかける稲実側は何とか追いつき、そして逆転することを祈って声が枯れるまで声援を送り続けた。
9回の裏、先頭打者として打席に立つのは稲実の6番平井。
相対するのは1年生ながらも最早青道の絶対的エースとして君臨する山城空。この最終回のマウンドにも空が上がると分かったとき、観客席からは驚きと称賛の声

が上がった。しかしその一方で関係者からの反応は随分と冷ややかだった。

〝どうして限界と思わしき投手を続投させるのか？〟

試合を中継するテレビやラジオの解説者達からはそんな批判交じりの疑問が飛ぶ。最後に何とか立て直したとはいえ空の投球に最早序盤ほどの力がないのは明らか。青道が登録している投手の数は全部で4人。実質投げられない3年の丹波を除いてもまだ2枚カードを残しているのだから、ここは捉えられ始めた空を無理に続投させるよりも継投で逃げ切るべきなのではないかと。

確かに彼らの言うことは間違っていない。

事実、青道の監督である片岡にも直前までその考えはあった。けれど空の瞳に宿る強い意志の炎が、何としても勝つという覚悟が、彼にエースの続投を決めさせた。

酷使、無謀と思われても仕方のない采配だ。失敗すれば謗りは免れないだろう。だがそれらの批判を全てを覚悟した上で、片岡は山城空というエースの可能性にかけたのだ。

――――あと3つ。

いかなる結果を迎えるにしろ、この試合最後になるであろうマウンド。いつもの

ようにロージンを弄びながらそこに立つ空の胸は迫ったその時に大きく高鳴った。
緊張は勿論ある、下位打線とは言え油断してはいけないのも重々承知している。だが不思議と不安や怖れといったネガティブな感情は全くない。
……ありがとうございます、クリス先輩。ありがとう、先輩達。
胸中を占めるのは先輩達に対する感謝の念。この９回のマウンドに立たせてくれたチームメイトに心の底から感謝し、勝利という最高の結果で酬いることを誓って空は右腕を振るう。代名詞であるジャイロボールにはもう殆ど力は残っていなかった。
球速こそ何とか未だ１４０キロを維持しているものの浮き上がるようなノビはなく、コントロールもアバウト。面白いように三振の山を築き上げた序盤とは打って変わって中々空振りは奪えず、強い当たりがファールゾーンにちらほらと飛んでいく。一歩間違えればたちまちスタンドイン。そんな薄氷の上にいるにもかかわらず、その腕の振りが緩むことはなかった。
２シームジャイロ、チェンジアップ、そして４シームジャイロ。
持ちうる球種を全て使ってのコンビネーション。クリスの出したサインを信じ、

バックの仲間を信じて空はただただ全力で右腕を振り続けた。
そして、遂にその時が訪れる。

――テレビをご覧の皆様。聞こえるでしょうか、この歓声がっ！　感じますでしょうか、この熱気が！

解説者席に響くはここまで試合を実況してきた男性アナウンサーの声。球場の熱にあてられたのか、興奮を隠そうともしない熱い叫びが電波に乗って関東中のテレビに届けられていた。

――この試合を見て未だ予選だといったい誰が思うでしょう！　全国高校野球選手権西東京大会決勝、青道対稲城実業っ！　長きにわたって甲子園の切符を争う名門同士の対決は互いに一歩も引かない接戦でした！

どうせなら甲子園の決勝で見たかった。喉の奥から上がってきそうになるその言葉をアナウンサーは寸前の所で飲み込んだ。半開きになった口を固く結び、２つの赤いランプが灯ったスコアボードを確認する。

――青道１点リードで迎えた最終回も遂に２アウト。２アウトランナー１

塁、カウント2―2！　打者成宮鳴、投手山城空っ！　次が最後の一球になるのかっ!?

３６０度から降り注ぐ歓声、悲鳴、祈り。

数えきれないほど多くの人間の想いに囲まれながら、空はプレートに足をかけ最後のサインを確認する。１塁には同点のランナーがいたがそんなものは目に入らなかった。真っ直ぐな瞳が見つめるのはホームベースの先に構えられたミットと、限界まで短く持ったバットを構える好敵手。

一つ年上の、ライバル。

……尊敬するぜ、成宮〝先輩〟。

同じ投手相手にこんな気持ちを抱くのは初めてだった。純粋な投手としての能力なら決して劣っているとは思わない。けれど〝チームのエース〟としては間違いなく負けていた。

そのことを素直に認め、理解し、空は左足を大きく踏み出す。

この試合１３１球目となるボール。

山城空を支え続けたジャイロボールが今、その右腕から放たれた。
「らぁっ！」
「っつ!?」
１４０キロの真っ直ぐが成宮の胸元へと奔る。
それに対して振るわれたバットのタイミングはおよそ完璧だった。恐らくは真っ直ぐ一本に絞っていたのだろう、追い込まれているにもかかわらず一切迷いのないスイングが白球へ振り下ろされる。
キィイインと、金属バット特有の甲高い高音がグラウンドに響いた。
球場に詰めかけた誰もが一斉に上空を見上げる。
雲一つない青空に高々と舞い上がった白い点。数万にも及ぶ注目を集めた白球は重力に従って静かに落ちていき――――確かに、キャッチャーミットの中に収まった。
ボールの入ったミットをクリスが掲げる。
主審は無言で頷き右手を上げた。
――――アウトっ！　ゲームセット！

それが結末。
青道の優勝が決まった瞬間だった。

はい、ようやく長かった決勝に決着がつきました。
青道が優勝して終わるというのは当初からのプロット通りですが、正直に言うとクリスに逆転2ランを打たせる気はありませんでした。（プロットではクリスの後の門田と白洲が上級生の意地を見せて逆転という内容でした）
いささか安易な展開になったかなぁという気はしますが、その分クリス先輩の活躍を描けて個人的には満足です。
完結まであと一話、最後まで頑張りたいと思います！

最終話

I

熱き夏の大会、全国高校野球西東京大会。

甲子園を懸けて行われた 3 週間にも及ぶ熱きトーナメントの頂きに立ったのは闘将片岡鉄心率いる青道だった。ここ数年全国の舞台から遠ざかっていた名門の復活に球場はお祭り騒ぎ。青道の応援席からは歓喜の嵐が吹き荒れ、スタンドの至る所からシャッターの音が鳴り響く。そんな興奮冷めやらぬ青道応援席の一角、むさ苦しい野球部員達がずらりと並ぶ列の中にひっそりと佇む青道のユニフォームに身を包んだマネージャーの少女達。ここまで部員達と共に声援を送り続けていた彼女らもまた歓喜の輪の中にいた。

「やった！　やりましたよ貴子先輩！　甲子園、甲子園ですよっ!?」

「えぇそうね……本当に…やったわね」

マネージャーの中で唯一の一年生である吉川春乃が満面の笑みで隣にいる先輩の手を掴むと、濡れた声が返ってきた。もしかしてと春乃が顔を横に向けてみれば、

案の定そこには涙ぐむ最上級生の姿。泣き顔も綺麗だなぁと春乃がその横顔にしばしの間目を奪われていると、後輩の視線に気が付いた藤原貴子は慌てて目尻を拭った。

「べ、別に泣いてなんかいないわよ？」

「えっ？　けど今も目に涙が……」

「こ、これはちょっとゴミが入っただけよ」

どう考えても苦しい言い訳だった。

とは言え相手は先輩。指摘するべきか春乃が少し迷った時、くすりと上品な笑い声が左耳に届いた。顔を向けると、マネージャー達の引率教諭である高島礼が大人の女性らしい綺麗な笑みを浮かべていた。

「別に隠すことはないわよ藤原さん。あなただって三年間この瞬間を夢見てきた青道野球部の一員だもの」

「高島先生……」

「改めて言わせてもらうわね。甲子園出場おめでとう、今日までよく頑張ったわね」

「ありがとう……ござい…ます」

ぽろぽろと、こらえ切れなくなった涙が滴となって貴子の頬を伝っていく。何も努力してきたのは選手だけではない。裏方としてチームを支える彼女達マネージャーにもまた様々な苦労があり、そして努力があった。

これまでの全てが報われた瞬間。

両掌で顔を覆い、貴子は内から溢れる衝動に身を任せて嗚咽をこぼす。優れた容姿も相まって傍から見るその光景は非常に爽やかで、そして美しいものだった。いかにも高校野球らしい青春の一幕。そしてそんなシーンを遠くから捉える一台のテレビカメラがあった。

貴子は知らない。

アップになった自分の泣き顔が今関東中に放送されていることを、あまつさえそれが夜のスポーツニュースでも使われることなど今の時点では知る由もなかったのである。

◇

大会が始まる前、青道野球部監督である片岡鉄心は１００名を超える部員の中から夏を闘う20名を選抜し彼らに背番号を授けたが、当然のことながらその全員が

平等に出場機会に恵まれていたわけではなかった。

野球は主力と控えの扱いの差が大きいスポーツ。毎回当たり前のように試合に出るレギュラー陣に比べサブにまわったメンバーに与えられるチャンスは驚くほど少ない。

事実青道では明川戦以降、サブの中で試合に関わった人数はわずか5名。そしてこの決勝という大舞台では誰一人として使われることはなかった。サブに回っているとは言え彼らもまた今日までレギュラーに負けず劣らずの努力を行ってきた青道の戦士達。悔しくない筈がなかった、無念でない筈がなかった。しかしそれでも彼らはそんな個人の感情を呑みこみ、ただ一心不乱にチームの勝利を願ってベンチから叫び続けた、声援を送り続けた。

そして、遂にその時が訪れる。

稲実最後の打者となる成宮が打ち上げたフライをクリスが捕球した瞬間、ベンチにいた選手達は一斉に飛び出した。後に残されたのは随分と広くなったダグアウト。

その最前列で指揮を執り続けていた青道の指揮官は試合が終わってもすぐにはそ

の場から動かなかった。じっとグラウンドを、選手達が集まるマウンドを見つめたまま動かなかった。そしてサングラスの中の瞼をそっと閉じた時、野太い叫びが後方から聞こえた。

「う、うぉおおお！　や、やりましたよ片岡監督っ!?　甲子園、甲子園ですよっ!?」

「あぁ」

数えて6年振りとなる甲子園に太田の声は上擦っていた。テンパって学校に連絡しようと携帯を取り出す部長をしり目に、片岡はベンチに唯一残った選手へと顔を向ける。

内から溢れそうになる想いをこらえ、片岡は言葉を紡いだ。

「甲子園だ、丹波」

「……は…い…」

最終回、ベンチで誰よりも声を張り上げていた元エースの声は震えていた。顔はくしゃくしゃに歪み、目からは滂沱のごとく涙が零れている。端的に言って酷い顔だろう。

それでも丹波は決して下を向かなかった、前だけを見つめていた。
「甲子園では必ずお前の力が必要になる。これまでの借りはその時に返せばいい」
「は…い……」
「だから今はあいつらの所に行って来い」
「……はいっ！」
そうしてベンチに残っていた最後の選手もグラウンドへと駆けていく。遠ざかっていく背中を見送っていると、冷たい水滴が頬を伝った。
その正体が一体何なのかは考えなかった。
片岡は滲む視界で栄光を勝ち取った選手を見つめ、静かに顔を伏せた。

II

――実のところを言えばあまり実感はなかった。
ホームベースの向こう、バックネットの手前でウィニングボールの入ったミットが高々と掲げられる。同時に宣言されるゲームセットのコール、ラストバッターと

なった成宮が力なく崩れ落ちていく様子がやけにゆっくりと空の目には映った。耳に入ってくるのは勝者となったチームメイト達の歓喜の声と、敗者による悲痛な叫び。

わずか数秒の内に一変してしまった世界を空はどこか他人事のように感じていた。

……勝ったん…だよな？

思わず背後を振り返る。試合の状況を示す大きなスコアボードには確かに青道の勝利が示されていた。それを見てようやく、空は自分達が勝ったのだという事実を実感した。

「しゃあああぁ！」

雄叫びと共に右腕を天高く突き上げる。

今までになく苦しい闘いだった。

自分に足りないものを嫌となく見せつけられた試合だった。

これ以上ないくらい最高の勝負だった。

胸の奥底から湧き上がる様々な想い。それにゆっくりと浸る間もなく、大きな二本の腕が背後から空の身体を強く抱きしめた。

「よく投げてくれたな、山城」

「クリス先輩……」

頭上から聞こえてきたのは大好きな先輩の声、山城空という投手を生み出してくれた世界最高の捕手の優しい声。言いたいことはいくらでもあった。話したいことは山ほどあった。でもちゃんとした文章にしようとすると言葉にならなくて。

だから空は、全ての気持ちをたった一言に込めることにした。

「――――はいっ！」

目尻に浮かんだのは汗か、それとも涙か。穏やかな空気で勝利の余韻に浸る青道バッテリー。爽やか青春物語を繰り広げる二人の目には勢いよく向かってくる笑顔のチームメイトの姿が映っていた。どうやら手荒い祝福になりそうだとどちらともなく笑い合い、空とクリスはそのまま流れに身を任せた。

第89回全国高校野球選手権　西東京大会
優勝　青道高校

◇

場所は東京から遠く離れて北海道苫小牧。７月の末になってもまだどこか涼しさを残すその場所に彼はいた。じっと真剣な眼差しで見つめるはデスクに置かれたパソコンの画面。こっちに来る際に実家から持ち出してきた自慢のノートのパソコンには零れんばかりの笑みを浮かべる親友の姿があった。

「勝ったか……」

呟き、少年は自重を背もたれへと預けた。ぎしりと腰を下ろすパソコン椅子が悲鳴を上げるのと立てつけの悪い部屋の扉が音を鳴らすのは同じタイミングだった。少年は背後を振り返ることなく入ってきた人物の名を呼んだ。

「ランニングはもういいのか、降谷？」

「うん。監督に上がれって言われたし」

よいしょと、降谷と呼ばれた背の高い少年は自分のベッドの上に腰を下ろした。

どこかぼんやりとした目が見つめるのはルームメイトの机の上に置かれたモノ。
気になるかと少年が尋ねてみれば、降谷は素直に頷いた。
「大地がこの時間に自主練しないで部屋にいるって珍しいね。何見てるの？」
「青道と稲実による西東京大会の決勝だ。とはいっても、いましがた終わったがな」
「青道……確か御幸ってキャッチャーがいるとこだよね？」
「高校野球に疎いお前にしてはよく知っていたな」
「どっちが勝ったの？」
「青道だ」
そう言って液晶を指差すルームメイトの顔がどことなく緩んでいることに降谷は気が付いた。どこまでも生真面目な姿しか知らない彼にとって、それはちょっとした事件だった。
「なんかうれしそうだね」
「そうだな。信じてはいたが何が起きるかわからないのが高校野球だからな。実際に勝ったのを見て少しほっとしている」
「ふーん。そういえば大地は東京から来たんだっけ。青道に知り合いでもいるの？

「」
「親友とお世話になった先輩がいる」
「それって前に大地が言っていたシニアの二人？」
「あぁ。山城空と滝川・クリス・優。俺の知る限り最高の捕手と、最高の投手だ」
少年がそう断言した瞬間、それまでぼぉっとしていた降谷の目に火が灯る。いかにも投手らしい反応に少年は目を細めた。
「対抗意識を燃やすのはいいがまずはもっと体力をつけろ。今のままでは同じ土俵に上がることさえ出来はしないぞ」
「……もう少し走ってくる」
いっそ見事なまでに少年の言葉にのせられ降谷は部屋を後にした。また一人に戻った少年は再び画面に視線を戻すと、本当に小さく微笑んだ。
「甲子園で待っているぞ、山城」
南北海道大会通算打率7割5分。HR、打点を初めとしたありとあらゆるローカル記録を塗り替え南苫小牧優勝の原動力となった少年を、メディアはシニア時代の異名にならいこう呼んだ。

〝打の怪物〟
広橋大地。
かつて山城空と共に並び称された天才が甲子園という大舞台で旋風を巻き起こす時はもう間近に迫っていた。

Ⅲ

月の下を歩いていた。
昼間の猛暑の名残からようやく解放され鈴虫の音色を涼やかに楽しめるようになった午後11時、クリスと空の二人は未だ宴の続く寮を離れて昨夜と同じＡグラウンド外にある土手へと来ていた。再びこの場所を訪れた理由は特にない。
ただ二人とも気が付けば自然とこの場所に足が伸びていた。ゆらりゆらりと伸びた緑の芝が前後に動く。突然吹き始めた生暖かい風を空は全身で感じ取った。
「クリス先輩、寮にいなくていいんですか？　確か三年でゲーム大会やるって聞きましたけど」
「なんだか不穏な匂いを感じたからな。丹波と結城が揃って変な方向に盛り上がっ

ている時は大抵何かが起きる。巻き込まれる前に避難するのが最善だ。そういうお前はどうなんだ？　今日の試合のヒーローがこんな場所にいていいのか？」
「さすがに疲れたんで騒がしいのはもう勘弁です。ってか、ヒーローっていうならクリス先輩の方じゃないですか。確か山ほど取材受けてましたよね？」
「試合後 1 時間近く記者達に拘束されたお前ほどじゃない。お前を待っている間バスの中で沢村が怒っていたぞ？　『あいつばっかり目立っている』とな」
「悔しかったら早く上手くなれって後で言っときます」
「あぁ、それがいい」
顔を見合わせ互いに笑い合う、丁度そんな時だった。芝を踏みしめながら近づいてくる人物の存在に気が付いたのは。この辺りは閑静な住宅街だけあって 21 時を過ぎればめっきり出歩く人の数は減る。いったい誰だとバッテリー揃って人影に目を凝らし、その意外な意外な正体に目を瞬かせた。
「あら、二人ともここにいたの」
「貴子先輩……」
「藤原……」

暗闇から現れたのは青道野球部の3年生マネージャー、藤原貴子だった。彼女は呆気に取られた顔をする男子達にくすりと笑い、「ここ座るわね」と空の隣でそっと膝を折った。

どう反応すべきか迷うクリスと空だったが、結局彼らもまた貴子にならって芝に腰を下ろすことにした。人気の少ない夜間の土手に座るぶ3名の若い男女。これだけ聞けば邪推の一つや二つ浮かびそうなものだが、残念かな彼らの間にあるのは至極爽やかな関係だけだった。貴子は風に揺れる黒髪をおさえると、柔らかく二人に微笑んだ。

「そう言えば色々忙しくてまだちゃんと言えてなかったわね。甲子園出場おめでとう、二人とも。でも甲子園の立役者のバッテリーが両方こんな場所にいていいの？」

「その言葉、そっくり返しますよ貴子先輩。なんで先輩がこんなとこにいるんすか？」

「あぁ。マネージャー達は今頃スポーツニュースをチェックしている筈じゃなかったのか？　確か藤原が一番意気込んでいた気がするが」

「えっ？　あっ、その……そう！　急に風にあたりたくなったのよ」

明らかに納得していない様子で眉を潜めるバッテリーに貴子は自分が墓穴を掘ったことを悟った。二人は知らない、意気揚々と後輩マネ達と共にスポーツニュースを鑑賞していた貴子がテレビに映る自身の泣き顔にリモコンを持ったまま固まったことを。そして番組を変えても変えても自分の泣き顔が使われているという事実に耐えられなくなり、マネージャーとしての職務を放棄してこの場所に来たことを二人は知らなかったりする。寮に戻ったら自ずとバレることとは言え、今ぐらいは何とか隠しておきたい。

そんな意地らしい想いから貴子は慌てて話題を切り替えた。

「そ、そういえば二人とも夢ってあるのかしら？」

「夢？」

「また唐突だな。いったいどうしたんだ？」

「えっと、少し気になって。それよりどう？　やっぱり二人ともプロ志望？」

それは確かに唐突だったが、前々から貴子が一度聞いてみたいと思っていた質問だった。今日の決勝に勝ったことで最早全国でも知らない者などいなくなった青道

の黄金バッテリー、山城空と滝川・クリス・優。身内びいきを抜きにしても飛び抜けた才能を持つこの天才二人が一体どんな未来を思い描いているのか。野球ファンなら誰もが気になるであろう貴子の問いかけに対し、最初に答えたのはあと半年で高校を卒業するクリスだった。

「そうだな。俺は父さんと同じ様にプロの世界で生きていきたいと思っている」

「やっぱりクリス君はプロ志望か。じゃあ高校を卒業したらそのままプロに？」

「どうだろうな……父さんは大学に進学してからでも遅くないと言っていたが、俺個人としては叶うなら高卒でプロに行きたいと思う」

「それはどうして？」

「メジャーに挑戦するなら出来るだけ早い方がいいからな」

目を見開く貴子にクリスは苦笑した。

「父さんは日本に来る前は3Aの選手だったからメジャーに対する思い入れは昔からあった。それに一野球人としてもやはり世界中から最高の選手が集まるメジャーは魅力的だ」

恐らくは前々から心に決めていたのだろう。大して悩むことなくクリスは己の夢

を語った。同級生の壮大な想いに素直に感心した貴子は残るもう一人へと顔を向け、

「じゃあ山城君はどうかしら？」

「そうっすねぇ……やっぱ高校卒業したらプロに行きたいと思ってます。そこから先はまだ決まってないですけど」

「あら？　クリス君と同じ球団じゃなくていいの？」

「そりゃ出来るなら同じ球団に行きたいですけど今は逆指名できないし……まぁ最悪FA使って何とかしますよ」

「もしもクリス君がメジャーに行ったら？」

「追いかけますよ、そりゃ」

当たり前じゃないですかと不思議そうに首を傾げる後輩に貴子の顔は引き攣った。ちらりと捕手の方を伺えば空の言葉が嬉しかったのか随分と頬を緩ませている。

あぁ駄目だこのバッテリーと、貴子は思った。

「ふぅ。後輩が後輩なら先輩も先輩ということね」

「何の話ですか？」
「あなた達が似た者同士ってことよ」
「よくわからないですけど……そういや、貴子先輩の夢ってなんですか？」
「私？」
「そういえば藤原の夢は俺も聞いたことがないな」
「えっと……言わなきゃダメかしら？」
困ったように言葉を濁す貴子に空とクリスは首を捻る。この感じだとどうやら最近の若者にありがちな夢がないというわけではないらしい。別に空もクリスも無理やり貴子から聞き出そうとは思わないが、人に尋ねておいて自分だけ答えないというのは如何なものか。
貴子もそれがわかっているのだろう。はぁとため息をつき、二人の顔を見た。
「その、笑わないでね？」
「笑いませんって。それで何なんですか？」
「……専業主婦」
「ん？」

「だからっ！　結婚して家庭に入るのが私の夢なのよっ！」

半ばやけくそ気味に貴子は叫んだ。

それに対する空とクリスの反応は随分と優しいものだった。まるで微笑ましいものでも見たかのように目尻を緩める二人に、貴子は紅潮させた頬を小さく膨らませた。

「……だから言いたくなかったのよ」

「別にいいじゃないっすか専業主婦。うん、貴子先輩ならいい奥さんになれると思いますよ」

「あぁ。藤原ならいい母親になりそうだ」

それからしばらくの間三人は取り留めもない話に興じた。授業の話から先生の話、漫画や音楽、ファッション、スポーツなど。大会中はのんびりとこんな話をする暇もなかっただけに話題が尽きることはなかった。

そうしてそろそろ日付が変わろうとする頃にぽつりと、貴子は零した。

「次はいよいよ甲子園ね」

静かにバッテリーが頷く。確かに今日の勝利で青道は 6 年振りとなる甲子園の

出場を決めたが、高校野球はそれで終わりではない。
むしろ本当の夏はこれから始まると言ってもいい。
空がクリスと交わした『甲子園に連れて行く』という約束はもう叶った。
なら次は、
「優勝――しかないっすよね」
「あぁ。俺達なら出来る」
「えぇ、あなた達ならきっと」
新たな誓いを胸に抱いて三人は夜空を見上げる。
7月最後の夜に燦々と輝く無数の星々。
その中心に浮かぶ形の欠けた月がまるで見守るように彼らを見下ろしていた。

ジャイロボールに夢見て　完

最終回ということでみんなの要望通り、藤原貴子さんに出番を与えてみました。
これにて本編は完結です。長い間応援ありがとうございました。

主要キャラの簡易プロフィール

完結記念ということで。
以前と同じくCで大体甲子園出場選手の平均と思ってください。
あとこれはあくまでもネタなので、詳しい追及はなしで。

山城　空（1年）投手
176cm　72キロ　右投げ右打ち
球速154キロ　コントロール：A　スタミナ：B
球種：4シームジャイロ、2シームジャイロ、チェンジアップ
ノビ5、ジャイロボール、奪三振、人気者、クイック2、リリース〇
クリス先輩大好きな青道の若きエース。世界唯一といわれるジャイロボーラーであり、一年生ながらに見事エースとしての役割を果たし青道の6年振りとなる甲子園出場に大きく貢献した。全国のありとあらゆる名門の誘いを断って落ち目とい

われつつあった青道にシニア時代の先輩を追って入学した話は余りにも有名で、熱闘甲子園で紹介された際にはジャイロボーラーということもあって見事『なんJ』民の玩具となった模様。

なお初めての甲子園でいきなり完全試合を達成したり、決勝で広橋大地と球史に残る名勝負を繰り広げるなど色んな意味でネタを提供した。

備考：元々強かったのに薬師戦でレベルアップしたもんだから、決勝で稲実打線に点を取らせるのが大変でした。いやほんと、ノリで覚醒なんかさせたら駄目ですね。

滝川・クリス・優（高３）捕手
１８２センチ　80キロ　右投げ右打ち
ミートＡ　パワーＡ　走力Ｃ　肩Ｓ　守備Ａ　エラー回避Ｂ
特殊能力：チャンス５、満塁男、広角打法、安定度、キャッチャー◎、守備職人、送球４

この作品の正ヒロインにしてもう一人の主人公。かつて天才捕手と謳われた才能

は伊達ではなく、怪我から復帰後は青道の大きな柱として活躍した。西東京大会、および甲子園を通じて青道打線で最も数字が良かったのはこの人だったりする。何気に本編中はまだ少しブランクが残っている状態で、決勝の最後の打席でようやくかつての勘を完全に取り戻した。（上にあるステータスは甲子園決勝時のもの）

備考：甲子園編があったなら間違いなくクリス先輩の無双になっていました。

広橋　大地（高１）三塁手、外野手

１７８センチ　78キロ　右投げ左打ち

ミートS　パワーS　走力B　肩B　守備B　エラー回避B

特殊能力；チャンス4、ローポールヒッター、プルヒッター、アーチスト

設定だけ作ったものの結局まともには登場しなかった主人公のライバル。山城空という怪物投手に匹敵する打者ということでステータスがもう意味不明なことになっている。彼のことをわかりやすく表現するならば金属バットを持ったボンズ。最低でも成宮クラスでなければ最早勝負にすらならないという、轟雷一もびっくりなチートぶり。もしも空と共に青道に来ていたら何ら苦戦することなく甲子園を制

覇していました。

備考：投打の怪物による対決を見たかったような、見たくなかったような。

藤原　貴子（高3）マネージャー

みんな大好き美人マネージャー。当初は全く登場させる予定はなかったものの、感想欄での人気を受けて出番を獲得。しまいには恋愛ネタを書いてみたり、最終回にまで登場させるなど作者まで貴子先輩スキーになってしまった。いやほんと、どうしてこうなった。

原作では貴子先輩の出番は少なく詳しい性格などはわからなかったため、勝手に『マリみて』の某お姉さまを少し柔らかくした感じで書いていました。（同じ黒髪ストレートだし、貴子先輩もなんか育ちよさそうだし）

備考：将来の夢を『お嫁さん』って言わせるか、『専業主婦』って言わせるかでかなり悩みました。結局「お嫁さん」は余りにも言い方が子供っぽいということで没に。

ジャイロボールに夢見て

著者　神田瑞樹

発行日　2019 年 4 月 13 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
https://syosetu.org/novel/26667/

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。